仙台市文化財調査報告書第165集

土　手　内

―― 土手内遺跡・土手内窯跡・土手内横穴Ｂ地点発掘調査報告書 ――

１９９２

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第165集

土　手　内

―― 土手内遺跡・土手内窯跡・
土手内横穴Ｂ地点発掘調査報告書 ――

１９９２

仙台市教育委員会

序

日頃仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大の御協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては誠に感謝にたえません。

土手内地区は、仙台市南部の副都心と位置付けられる太白区長町、富沢地区に隣接する地区であり、近年急速に開発が進んでいる中で多くの緑が残っていたところであります。

この度の土手内遺跡、土手内窯跡、土手内横穴墓の調査は平成元年に大規模な宅地造成工事に先立って実施し、数々の貴重な成果が得られました。本報告書はその成果をまとめたものであります。

仙台市も政令指定都市となり3年が過ぎようとしている中で、先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承していくことは私達に課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに本報告書の刊行に際しましては多くの方々の御協力、御助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序と致します。

平成4年3月

仙台市教育委員会
教育長　東海林　恒　英

例　　言

1．本書は宅地造成に伴う土手内遺跡、土手内窯跡、土手内横穴墓群Ｂ地点の発掘調査報告書である。

2．出土遺物の整理と報告書作成は、熊谷幹男、主浜光朗が担当し、編集は主浜が行なった。尚、本文の執筆分担は次のとおりである。

主浜……Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ－１－〔２〕・〔３〕、Ⅳ－２、Ⅴ－〔１〕－１－(1)・(2)・２・〔３〕－２・〔４〕・〔５〕

熊谷……Ⅰ、Ⅳ－１－〔１〕・〔３〕

小川淳一…Ⅴ－〔１〕－１－(3)・〔２〕・〔３〕－１

3．本書の文章、実測図中の方位は磁北で統一してある。

4．本書中の土色については「新版標準土色帖」（小山、竹原：1975）を使用した。

5．本書使用の地形図は建設省国土地理院発行の５万分の１「仙台」を使用した。

6．本書中の遺構平面図中の焼面及び土師器の黒色処理についてはスクリントーンで示した。

7．調査及び整理作業に於いて以下の方々から多くの御指導、御助言を賜わった。記して感謝の意を表します。

渡辺泰伸、辻　秀人、藤沢　敦、菊地佳子、丹羽　茂、手塚　均、古川一明、村田晃一、蟹沢聡史、鈴木真一郎、石本　弘、斉藤義弘、木本元治、福島雅儀、菊地芳朗、柳沼賢治、北野博司、酒井清治、浅野晴樹、福田健司、服部敬史、次山　淳、佐川正敏、松崎俊郎、江浦　洋、定森秀夫、亀田修一、

8．本調査に於ける出土遺物、実測図、写真等の資料は、仙台市教育委員会で一括保管しているので活用されたい。

目　　次

序

例言

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1

Ⅱ．調査要項 …… 1

Ⅲ．遺跡の位置と環境 …… 3

Ⅳ．調査の成果 …… 6

1．土手内遺跡 …… 6

〔1〕 調査の方法と経過 …… 6

第1次調査 …… 6

第2次調査 …… 6

〔2〕 基本層位 …… 9

〔3〕 検出遺構と出土遺物 …… 10

(1) 竪穴住居跡 …… 13

(2) 土坑 …… 53

(3) その他の遺構 …… 64

2．土手内窯跡、土手内横穴墓群Ｂ地点 …… 84

〔1〕 調査の方法と経過 …… 84

〔2〕 基本層位 …… 84

〔3〕 検出遺構と出土遺物 …… 84

(1) 窯跡 …… 84

(2) 横穴墓 …… 104

(3) その他の遺構 …… 133

Ⅴ．ま　と　め …… 137

〔1〕 土手内遺跡 …… 137

〔2〕 土手内窯跡と出土遺物 …… 158

〔3〕 土手内横穴墓群Ｂ地点 …… 169

〔4〕 その他の遺構と遺物 …… 179

〔5〕 まとめ …… 180

写真図版 …… 185

I　調査に至る経過

昭和63年７月、鈴縫工業㈱が、仙台市（太白区）土手内一丁目17他において宅地造成計画を立て届出を仙台市に提出した。開発申請地は面積45.595m²に及び、地域内に周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として、土手内遺跡と土手内窯跡が含まれており、更に遺跡範囲が広がることが予想された。協議の結果、周知の遺跡の範囲外で試掘調査を行ない今後の判断資料とすることとした。試掘調査の結果、開発地域の北東部分に於て遺物包含層、土坑が確認され、土手内遺跡東部の既に土取りが為されていた地域を狭んで更に東に遺跡が広がっているものと判断された。この結果、周知の遺跡及び新たに遺跡範囲内と判断された部分について記録保存を目的とした事前の発掘調査を平成元年４月より実施することになった。

II　調査要項

遺跡の名称：土手内遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－107、宮城県遺跡登録番号01104）土手内窯跡、土手内横穴墓群Ｂ地点（仙台市文化財登録番号Ｃ－428、宮城県遺跡登録番号01307）

所　在　地：仙台市太白区土手内一丁目17他

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会社会教育部文化財課調査第二係

担当職員　１次調査　佐藤　　隆、宮崎　　明

２次調査　熊谷　幹男、主浜　光朗

調査期間：１次調査　自　1988年９月10日　至同９月22日

２次調査　自　1989年４月17日　至同11月13日

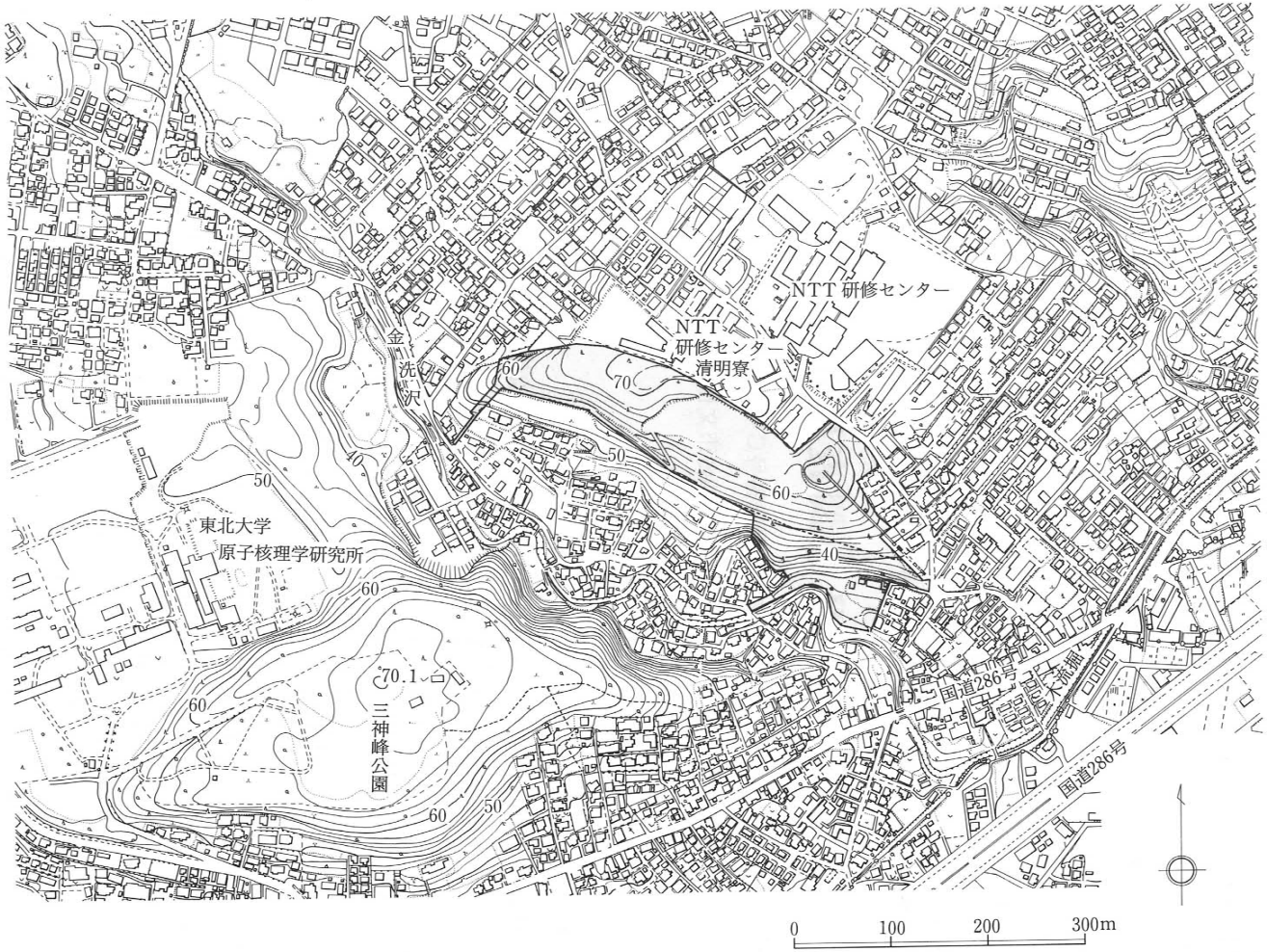
調査対象面積：約45,595m²（発掘面積：約11,000m²）

調査参加者：小林　国子、佐藤　洋子、津島　久子（以上整理を含む）

赤川　千広、浅野由喜子、阿部　いし、阿部清太郎、阿部美代寿、壱岐　豊子、板橋みつよ、板橋　　実、岩井レイ子、植野　邦男、遠藤いな子、小川　良子、小沼ちえ子、小野　辰夫、斉藤　慶子、笹川　光夫、佐藤　静子、佐野たみえ、島負　美代、鈴木つや子、高橋たづよ、高橋とみ子、武田きみ子、武田　　萬、幡　　勲知、早川　美鈴、早坂みつえ、早崎ミヨコ、細谷　清子、本郷　　正、三浦つよの、森　　金三

整理参加者：大宮富美子、小林　由美、小松　　愛、佐藤　幸子、原田由美子

調査協力：鈴縫工業株式会社、株式会社測量設計秋元、佐藤　暁祐、NTT東北研修センター



第１図　遺跡周辺地形図（中央太線内調査対象地区）

III　遺跡の位置と環境

地理的環境

土手内遺跡は、東北線長町駅より西方およそ２～2.5kmの地点、仙台市太白区土手内一丁目地内に所在する。本遺跡の南方約2.5kmには名取川が、東方約３kmには広瀬川が望めるところである。遺跡周辺の地形を概観すると、西側には南北に連なる奥羽山脈とその東麓から派生する陸前丘陵、さらに東側には宮城野海岸平野が広がっている。仙台市付近では陸前丘陵を名取川と広瀬川が東流しており、その河間段丘を青葉山丘陵(最高標高212m)、広瀬川以北を七北田丘陵（標高500m前後)、名取市以南を高館丘陵（標高200m前後）と呼んでいる。広瀬、名取両河川は中流域に下刻作用により４～５段の段丘地形を発達させている。それらは古い段階から青葉山段丘、台原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘と呼称されている。また、両河川は丘陵を貫流した後、沖積作用により宮城野海岸平野を形成している。この平野は地理的条件や成因、地質などから地形区分されており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流的付近から西側では、河間低地、広瀬川以北を霞ノ目低地、名取川以南は名取低地と呼称されている。郡山低地は北東縁と南縁を広瀬川と名取川によって画され、北東縁を長町－利府構造線で画されている。長町－利府構造線を介して郡山低地の北西には青葉山丘陵が続いている。長町－利府構造線の北西は幅１km、長さ10kmの隆起帯になっており、さらにこの隆起帯の北西縁には、大年寺断層群が走っている。また、この隆起帯の南東縁には、とう曲構造があり、急崖や急斜面をなして平野部に至っている。

土手内遺跡はこの隆起帯上に位置しており、窯跡及び横穴墓が分布する斜面は隆起帯南東縁にあたる。遺跡周辺一帯は、地表から１～２ｍの厚さに黄色火山灰層、段丘礫層があり、その下に基盤岩層が堆積している。基盤岩層の最上層は凝灰質シルト岩ないし、砂岩（大年寺層＝第三紀鮮新世末期、BP100～200万年以上）であり、その下には浮石細粒凝灰岩層（八木山層）がある。

土手内遺跡は最上層の黄色火山灰層面に形成され、窯跡及び横穴墓は大年寺層が地表近くに分布する部分に造られている。この大年寺層はクラックが多く、下層の八木山層が不透水層であることから湧水も多く、崩落が著しい。土手内横穴群は、金洗沢と呼ばれる沢を狭んで標高70m前後の三神峯丘陵の北斜面及び土手内丘陵の南斜面に位置しており、標高30m前後の斜面に分布している。

歴史的環境

土手内遺跡の立地する丘陵の南方及び東方に広がる郡山低地周辺には数多くの遺跡が分布している。近年の開発の進展に伴い、仙台市内でも遺跡の発掘調査が最も多く行なわれている地

域である。名取川が丘陵を開折し、扇状地状に広がる、山田・鈎取地区までの範囲について概観する。

旧石器時代では、台ノ原あるいは上町段丘に立地する山田上ノ台遺跡、北前遺跡、低地内の後背湿地に立地する富沢遺跡があり、段丘上の遺跡からは前期、後期旧石器時代の遺物が出土している。また、富沢遺跡から後期旧石器時代の自然環境を具体的に示す樹木や植物遺体、昆虫や動物の糞とともに石器や焚火跡が検出されており、既にこの時期に生活の場となっていたことが明らかになっている。

縄文時代の遺跡は丘陵地から沖積地まで数多く分布している。段丘上には、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、三神峰遺跡、上野遺跡等があり、早期末葉から中期末葉までの集落の様相が明らかになりつつある。沖積地では、自然堤防上に立地する下ノ内浦遺跡で早期前葉の遺構、遺物が検出され、六反田遺跡、下ノ内遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡、王ノ壇遺跡等では中期中葉から後期後葉までの居住域等が形成され、当該期の集落の様相が明らかになりつつある。この自然堤防上の地域は居住域として後世に連続している。

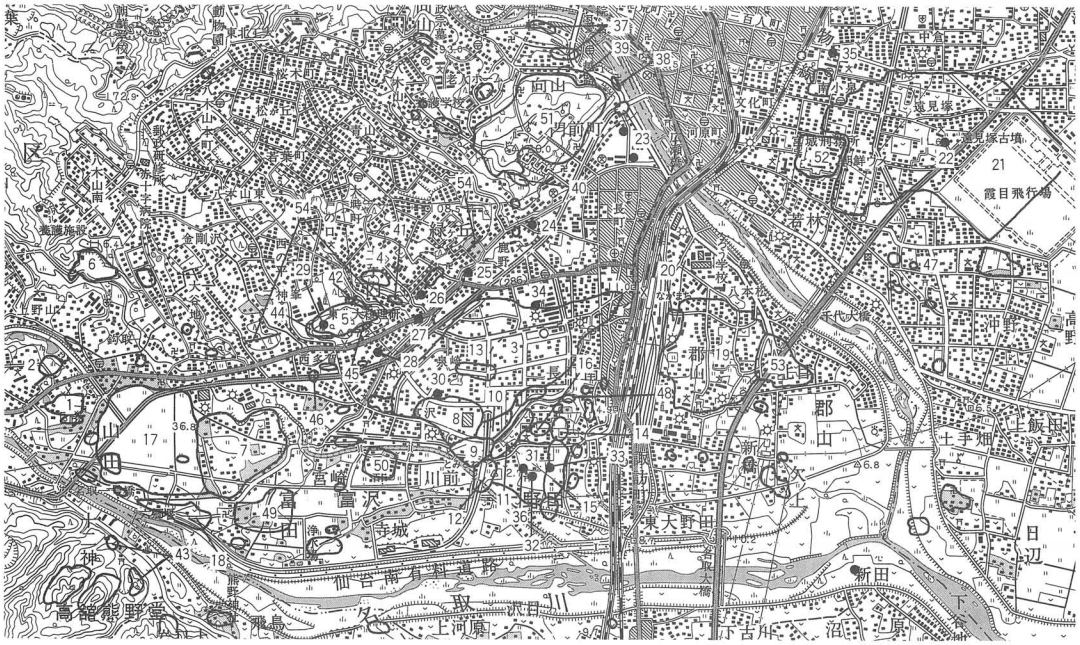
弥生時代の遺跡は低地内の後背湿地に立地する富沢遺跡、自然堤防上に立地する船渡前遺跡、下ノ内浦遺跡、西台畑遺跡等がある。水田跡が富沢遺跡の各地点から検出されている他、自然堤防上では遺物包含層が検出され、更に西台畑遺跡では中期の甕棺墓、下ノ内浦遺跡では後期の土廣墓や竪穴遺構が検出されている。これらに伴う集落跡は不明であるが、後背湿地周辺の自然堤防上や段丘沿辺部に存在すると考えられている。

古墳時代になると遺跡は沖積地へ拡大し、遺跡数も増加する。前期では、伊古田遺跡、六反田遺跡等があり、住居跡が検出されている。この時期の墳墓は方形周溝墓が名取川右岸の名取低地で安久東遺跡、戸ノ内遺跡から検出されている。古墳は広瀬川左岸の霞ノ目低地に前方後円墳の遠見塚古墳がある。郡山低地内ではこれまでこの時期の方形周溝墓、古墳は検出されていない。

中期には富沢遺跡、下ノ内遺跡、泉崎浦遺跡がある。富沢遺跡では水田跡、下ノ内遺跡、泉崎浦遺跡では住居跡が検出されている。古墳は中期から後期のものが多く存在している。兜塚古墳、砂押古墳、金洗沢古墳が長町－利府線に沿って並んでおり、既に削平された一塚古墳、二塚古墳、裏町古墳を含めた6基が並んで存在していた。これらの長町－利府線沿いに立地する古墳の他に、段丘上に立地する円墳2基から成る三神峯古墳群の地、平野部に立地する古墳がある。教塚古墳、金岡八幡古墳などがあり、その他にも埴輪の採集される遺跡があり、削平された古墳はさらに多数存在していたものと考えられる。大野田古墳群は春日社古墳、さらにその東に王ノ壇古墳が存在していたが1976年から行なわれた六反田遺跡の発掘調査を契機として、五反田古墳、五反田石棺墓、五反田木棺墓が検出され、その南東に鳥居塚古墳、大野田1～4号墳が検出された。その後さらに東に大野田5～9号墳が検出されている。その範囲につ

いては東、西に接する長町清水遺跡、伊古田遺跡から埴輪が採集されることを考えると両遺跡間の東西約800m程の広がりが考えられる。以上の古墳については、大野田古墳群が群集している他は、散在するものがほとんどである。この時期の窯跡には埴輪窯の富沢窯跡と須恵器窯の金山窯跡がある。富沢窯跡で焼かれた埴輪は周辺の古墳に供給されたものと考えられる。

後期の遺跡は富沢遺跡で水田跡が検出されたが、これに伴う集落は不明である。古墳時代後期から奈良時代にかけては横穴墓の造営が盛んに行わなわれるようになる。土手内横穴の所在



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	山田上ノ台遺跡	段丘	集落跡	旧石器、縄文、平安近世	28	裏町古墳	段丘	前方後円墳	古墳
2	北前遺跡	段丘	集落跡	旧石器、縄文古墳、平安近世	29	三神峯古墳群	段丘	円墳	古墳
3	富沢遺跡	後背湿地	包含地	旧石器～近代	30	教塚古墳	後背湿地	円墳	古墳
4	土手内遺跡	段丘	集落跡	縄文、奈良、平安	31	春日社古墳	自然堤防	円墳	古墳
5	三神峯遺跡	段丘	集落跡	縄文	32	鳥居塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
6	御堂平遺跡	丘陵段丘	集落跡	縄文、平安	33	王ノ壇古墳	自然堤防	円墳	古墳
7	上野遺跡	段丘	集落跡	縄文(中)、奈良、平安	34	金岡八幡古墳	後背湿地	円墳	古墳
8	山口遺跡	自然堤防、後背湿地	集落跡	縄文、弥生、古墳、平安	35	法領塚古墳	自然堤防	円墳	古墳
9	下ノ内遺跡	自然堤防	集落跡	縄文、弥生、奈良、平安	36	大野田古墳群	自然堤防	円墳、包含地	古墳
10	下ノ内浦遺跡	自然堤防	包含地	縄文、弥生、奈良、平安	37	愛宕山横穴群	丘陵	横穴墓	古墳、奈良
11	六反田遺跡	自然堤防	集落跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	38	宗禅寺横穴群	段丘	横穴墓	古墳末～奈良
12	伊古田遺跡	自然堤防	包含地	縄文、古墳、奈良、平安	39	大年寺横穴群	丘陵斜面	横穴	古墳、奈良
13	泉崎浦遺跡	自然堤防、後背湿地	包含地	縄文、古墳、平安	40	茂ケ崎横穴群	丘陵	横穴墓	古墳
14	大野田遺跡	自然堤防、後背湿地	包含地	縄文、弥生	41	土手内窯跡、横穴群	丘陵	窯跡	古墳、奈良
15	王ノ壇遺跡	自然堤防	円墳	古墳	42	土手内横穴群	段丘	横穴墓	古墳
16	袋前遺跡	自然堤防	包含地	縄文、古墳、奈良、平安	43	熊野堂横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳、奈良
17	山田条理遺跡	段丘	条理遺構	縄文、平安、近世	44	富沢窯跡	段丘	窯跡	古墳、奈良、平安
18	船渡前遺跡	自然堤防	包含地	縄文、弥生、平安	45	金山窯跡	段丘	窯跡	古墳
19	郡山遺跡	自然堤防、後背湿地	官衛寺院跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	46	西台窯跡	段丘	窯跡	奈良、平安
20	西台畑遺跡	後背湿地	包含地	弥生、古墳	47	神棚遺跡	自然堤防	包含地	縄文、弥生、古墳、奈良
21	南小泉遺跡	自然堤防、後背湿地	集落跡	古墳	48	元袋Ⅲ遺跡	自然堤防	包含地	奈良、平安
22	遠見塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳	49	南ノ東遺跡	自然堤防、後背湿地	包含地	弥生、平安
23	兜塚古墳	自然堤防	前方後円墳	古墳	50	富沢館跡	自然堤防、後背湿地	城館	中世
24	一塚古墳	段丘	円墳	古墳	51	茂ケ崎城跡	丘陵	城館	中世、近世
25	二塚古墳	段丘	前方後円墳	古墳	52	若林城跡	自然堤防	城館	戦国～江戸
26	砂押古墳	段丘	円墳	古墳	53	北目城跡	自然堤防	城館	中世、近世
27	金洗沢古墳	段丘	古墳	古墳	54	杉土手	段丘	シシ垣	近世

第2図　遺跡分布図

する長町－利府線に沿う青葉山丘陵の山裾崖面には、愛宕山、大年寺山、宗禅寺、茂ヶ崎、二ツ沢、土手内の各横穴群があり、土手内横穴群が南西端にあたる。一方これら横穴群の造営とほぼ同時期にあたる多賀城造営以前の官衛跡である郡山遺跡とその付属寺院が名取川と広瀬川の合流点の西側で検出されている。

奈良、平安時代の遺跡も数多く分布しており、丘陵上で集落跡、低地で水田跡とともに集落跡が検出されている。また、富沢遺跡では中、近世まで水田が営まれており、中世から近世には自然堤防上や丘陵上に館跡や城跡が作られるようになる。

江戸時代には「杉土手」と呼称される鹿除土手が向山から山田地区までの約6.4km にわたって設けられている。土手内地内にもかつての長町字鹿除土手の一部が含まれており、現在の土手内の地名にその名残りを留めているところである。以上のように本遺跡周辺地域には、旧石器時代から現代に至るまで連綿と人間の生活の痕跡が残されている。

Ⅳ　調査の成果

1　土手内遺跡

〔1〕 調査の方法と経過

第1次調査（第3図）

遺跡内における遺構の広がりおよび遺物の出土状況を把握する目的で行った試掘調査である。当該遺跡内は、中央部分が既に土取りされていたが、原地形を保っている範囲を対象として、合計11ヶ所に地形に合わせて任意に発掘区を設定した。

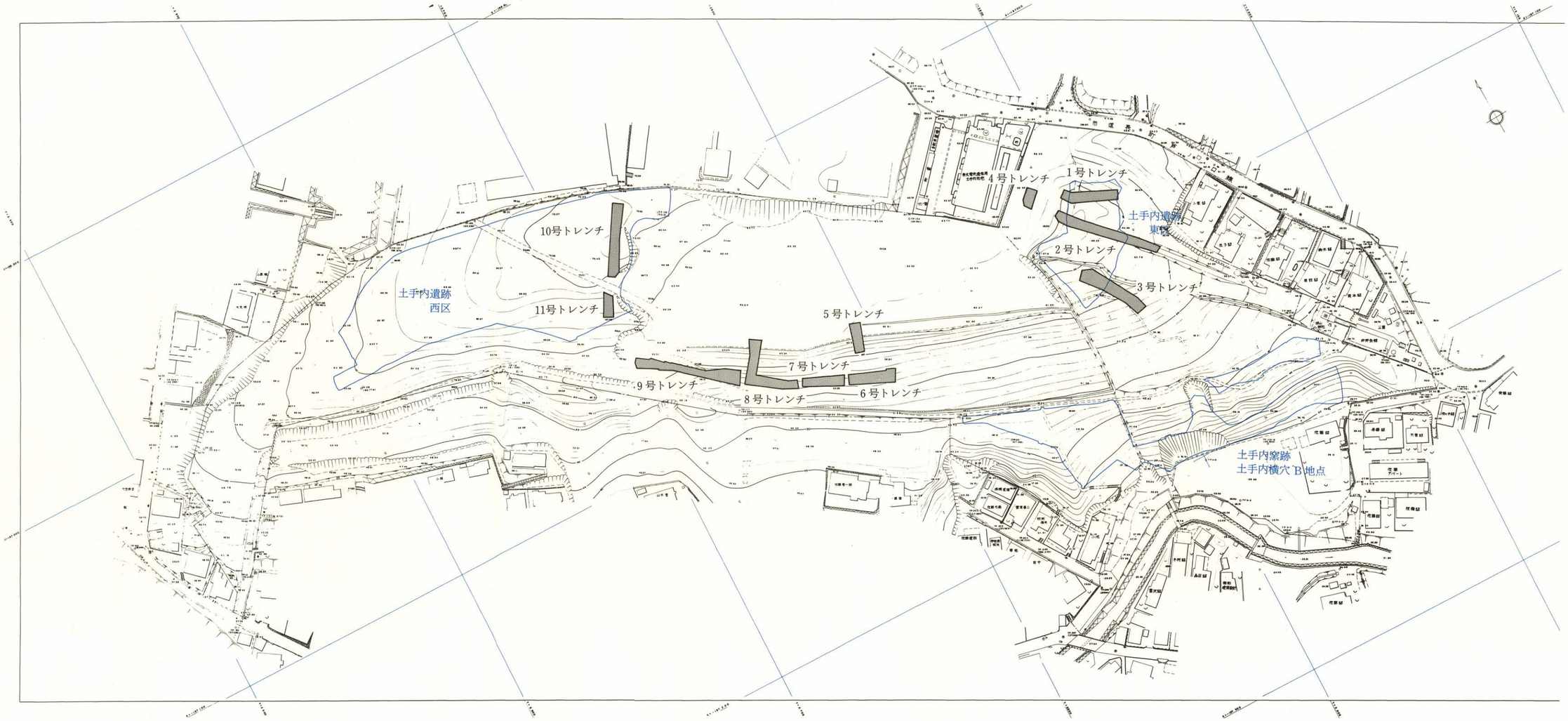
遺跡の東端（以下「東区」と称す）には、4本の発掘区を設けたが、その中から土坑1基が検出され、少量ではあるが縄文土器片および剝片が採集された。南側の斜面には、既に土手内窯跡の存在が周知されていたことから、窯跡の広がりを確認する目的で5本の発掘区を設定した。遺構および遺物は検出されなかった。

西側の平坦地（以下「西区」と称す。）には、2本の発掘区を設けた。その結果、竪穴住居跡が検出され、集落跡として広がることが想定されたため、発掘区の拡張を行わず竪穴住居跡の調査に努めることとした。

今回の調査は、昭和63年9月6日に開始し、9月22日までの10日間を費やし、合計1,167m²を精査した。実測図については、1/100の平板実測により平面図を残し、遺構については簡易遣り方を用いて1/20の平面図および断面図を作成した。

第2次調査

前年度の試掘調査をうけて、遺構の検出が確実となった東区および西区を対象として行った。東区については、平坦地を中心に任意に発掘区を拡張した。その結果、土坑3基が検出され、



第３図　遺跡位置及び調査区設定図

縄文土器および剝片石器等が出土した。

実測図については、平板測量により1/100の平面図を作成し、各遺構は簡易遣り方を用い1/20の平面図と断面図を作成した。

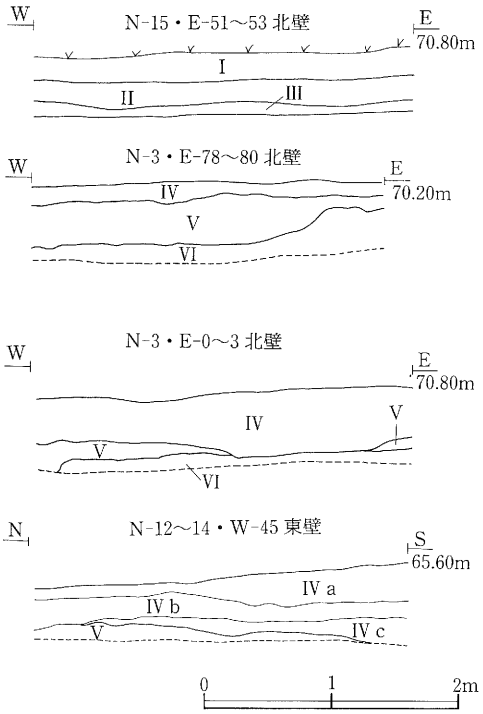
西区は、平坦地の全域と南側に傾斜する緩斜面を対象とした。発掘区の設定に当っては、国家座標X＝－197,000、Y＝2,600を基点とし、国家座標の方向を軸線とした。基点から東西南北方向それぞれを３ｍ四方を一単位とする小グリッドで表し、北側をN、南側をS、東側をE、西側をWとして位置を表示することとした。竪穴住居跡12軒、竪穴遺構４基、土坑38基等の遺構の外、縄文土器、弥生土器、土師器、剝片石器等が出土した。

実測図は、全域を航空写真測量によって1/100の平面図を残したほか、各遺構は遣り方を設定し1/20の平面図、断面図を残した。旧石器確認のための発掘区については、平板測量により1/200の平面図を作成した。調査は、平成元年４月17日に開始し、９月27日まで90日間を費やし、６月12日に仙台市立鹿野小学校、13日に同芦ノ口小学校、14日に同西多賀小学校の６年生全員を対象として遺跡見学会を実施した。

東区1,150m²、西区7,760m²に達した。旧石器確認のために設定した発掘区は合計400m²に達した。

〔２〕 基本層位

東区では基本層位は、表土から礫層まで４層確認された。II層は黒褐色シルト層で一部は遺



層No	色　調	土　性	備　考
I	褐　(10YR 4/4)	シルト	表土
II	黒　褐 (10YR 3/2)	シルト	炭化物粒、遺物含む
III	褐　(10YR 4/6)	シルト	

層No	色　調	土　性	備　考
IV	黄　褐 (10YR 5/8)	シルト	上面及び層中に川崎スコリア層を含む
V	黄　褐 (2.5Y 5/6)	シルト質粘土	
VI	にぶい黄 (2.5Y 6/4)	シルト質粘土	部分的に明褐(7.5YR 5/8) シルト質粘土に変色している所有り

層No	色　調	土　性	備　考
IV	黄　褐 (10YR 5/8)	シルト	いく分粘性有り
V	明黄褐 (10YR 6/6)	シルト	
VI	明黄褐 (10YR 7/6)	シルト質粘土	マンガン粒をゴマ塩状に含む。極めて固い

層No	色　調	土　性	備　考
IVa	オリーブ褐 (2.5Y 4/4)	粘土質シルト	
IVb	オリーブ褐 (2.5Y 4/4)	粘土質シルト	礫を含む
IVc	オリーブ褐 (2.5Y 4/4)	粘土質シルト	砂をわずかに含む
V	明　褐 (7.5YR 5/6) 明黄褐 (10YR 7/6)	粘土質シルト 砂（軽石か）	

第４図　土手内遺跡西区基本層位

物包含層となっており、土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器及び石器類が出土している。南斜面では、弥生土器と若干の縄文土器、石器が出土している。III層は砂礫混じりの粘土質シルト層である。斜面上部では、表土下あるいはII層直下で4層の礫層が検出される部分が多い。遺構はII層、IV層上面で確認された。

西区では、表土からローム層まで4層確認された。II層は黒褐色シルト層で、南側の斜面では一部遺物包含層となっている。III層は褐色シルト層でローム漸移層である。IV層がローム層で、この層の上面が遺構確認面である。

IV層以下の状況については、旧石器時代の文化層の確認のための調査区の土層観察より、調査区の東部ではIV層は黄褐色シルト層で粘性が強い。V層は黄褐色シルト質粘土層、VI層はにぶい黄色のシルト質粘土層で極めて堅く締っていた。調査区の中央部では、IV層は東部と同様の状況を呈するが、層厚が東部の2～2.5倍と厚くなっており、上面及び層中に川崎スコリア層が散在した状況で確認された。V層は明黄褐色シルト層である。VI層は明黄褐色シルト質粘土層でマンガン粒をゴマ塩状、あるいは斑に含んでいる。極めて堅く締っており、人力での掘り下げは困難な程であった。西部では、IV層は褐色粘土質シルト層で、礫あるいは砂粒の混入量から細分される。V層は明褐色の粘土質シルトと明黄褐色の軽石かと思われる砂から成る層である。以上よりIV層以下の状況は調査区東部から中央部までは、IV層が対応する層で中央部付近が厚くなり、西部では見られなくなる。中央部のVI層及び西部のV層は、土色、土性に共通性がみられることから確認された層中の最下層に位置するものと考えられる。また西側で標高69m前後、西側で65m前後以下の部分では表土直下で礫を含む粘土質シルト層が検出される。

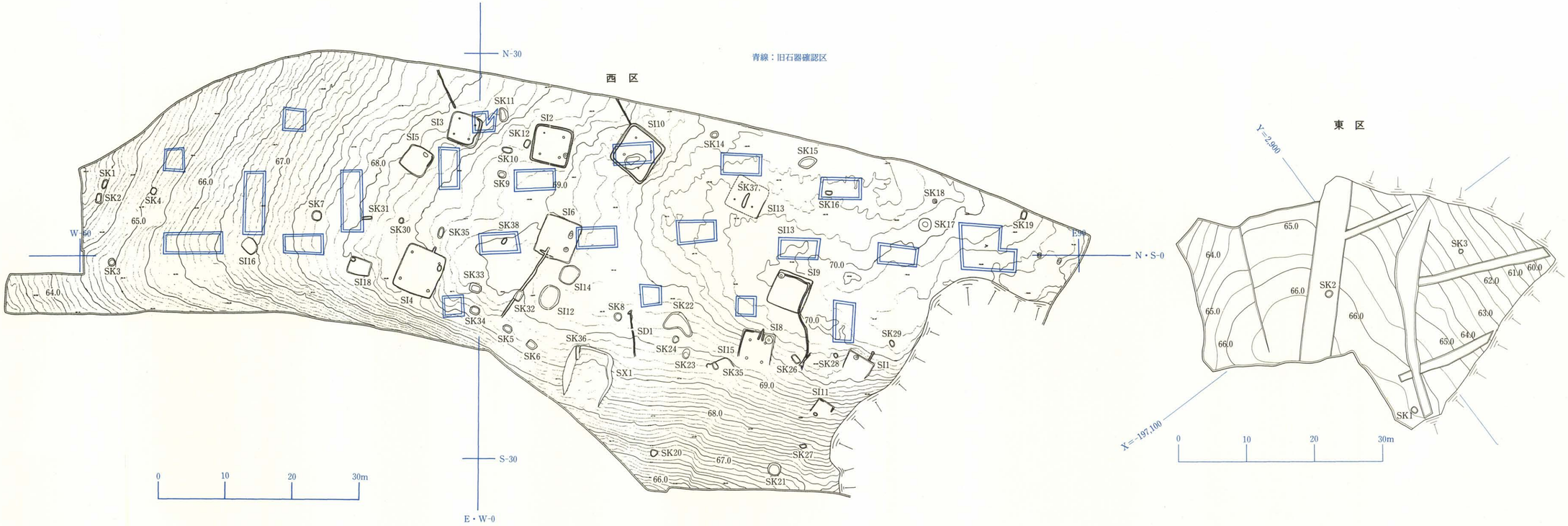
〔3〕 検出遺構と出土遺物

今回の調査は、既に削平されている部分を挟んで調査区を分け、西側・東側をそれぞれ西区、東区とした。

西区では、西側に張り出す尾根上の平坦面から西及び南斜面にかけて、竪穴住居跡12軒、竪穴遺構4基、それらの周囲、やや広い範囲の斜面中腹部にかけて土坑38基、南側斜面の中腹部で、沢状の落ち込み1ヶ所、溝跡1条が検出された。なお、遺構精査の段階で遺構ではなく、自然地形の窪みであることが判明したため、欠番とした遺構は、SI7住居跡、SI17竪穴遺構、SK13土坑であり、記述から除いてある。

東区では、南東側斜面の削平を免れた部分のうち、南斜面の頂上部から中腹にかけて、土坑3基と遺物包含層が検出された。

遺物は、整理用平箱（テンバコ32）にして30箱程の出土量である。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品などがある。


西　区
東　区
青線：旧石器確認区
N-30
S-30
E・W-0
W-60
N・S-0
E-90
Y=2,900
X=-197,100
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SI1
SI2
SI3
SI4
SI5
SI6
SI8
SI9
SI10
SI11
SI12
SI13
SI14
SI15
SI16
SI18
SD1
SX1
64.0
65.0
66.0
67.0
68.0
69.0
70.0
0
10
20
30m

第５図　遺構配置図

(1) 竪穴住居跡

ＳＩ－１住居跡

［遺構の確認］本住居跡は１次調査で調査されたもので、堆積土についての記録については残っておらず不明である。調査区の東端部、Ｓ－15～18、Ｅ－51～57に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

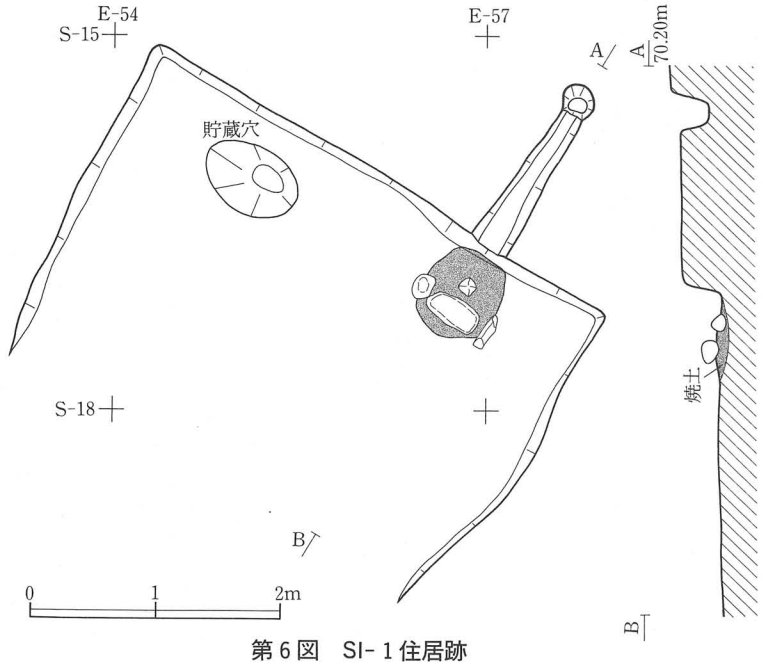
［平面形・規模］北東壁および、南東壁、北西壁の一部が検出されたが、その他の部分は削平のため検出されなかった。平面形は残存部から判断して、一辺4.2m の方形を基調としたものであると考えられる。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い北西隅で37cm である。床面からの立ち上がりは急角度である。

［床面］Ⅳ層を直接床面としている。細かい凸凹がある。床面レベルは北西隅が最も高く東側へ向かって徐々に低くなる。

［柱穴］ピットは検出されなかった。

［カマド］北東壁に付設され、煙出しピット、煙道部、燃焼部が検出された。煙出しピットは径27cm、確認面からの深さは30cm である。煙道部は煙出しピットを含めた長さ153cm、幅33cm、深さは先端部分で10cm である。底面は先端に向かって徐々に高くなっている。燃焼部は奥行き58cm、幅77cm である。燃焼部の両側面には自然石が立っており、中央には凝灰岩が横たわっている。燃焼部内部は奥行き70cm、幅50cm の焼け面が認められ、奥壁も火熱を受けて赤変している。両側面の石はカマド袖部の補強材に用いられたものであり凝灰石は天井材に用いられたものであると考えられる。また凝灰岩のやや奥壁寄りに支脚と考えられる礫が検出された。

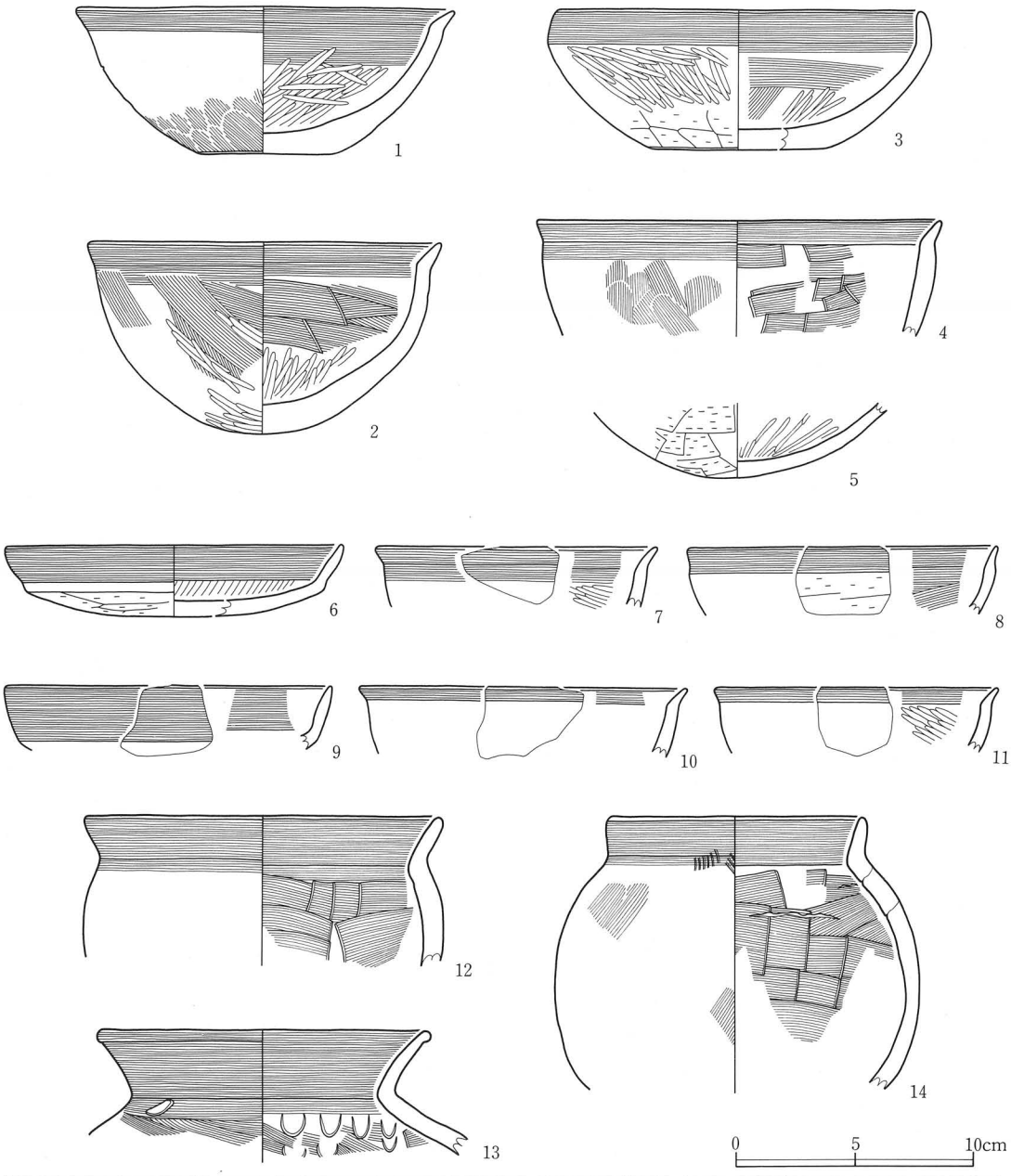


第６図　SI-１住居跡

［周溝］認められなかった。

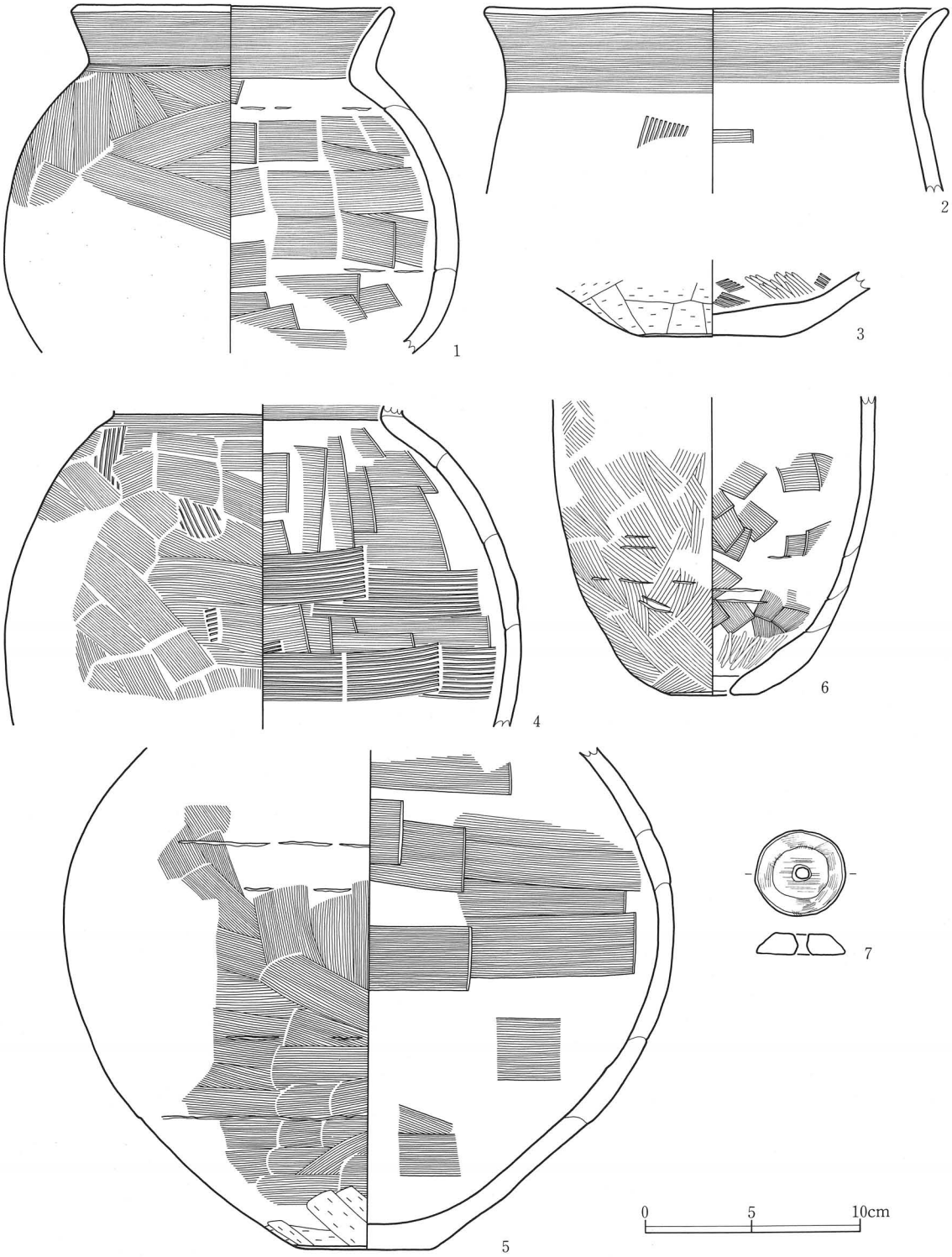
［貯蔵穴状ピット］１個検出された。北西隅付近に位置し、平面形は長軸80cm、短軸55cm、深さ15cm、円形である。

［出土遺物］堆積土及び床面、カマドを中心に土師器等が出土している。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考	
1	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ	ナデ	BⅡ類	図版48-2
2	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ	ミガキ	BⅡ類	図版48-3
3	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ、ミガキ	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	ケズリ	CⅠ類	
4	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		BⅡ類	
5	堆積土	土師器	杯	ケズリ	ミガキ	ケズリ		
6	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ	ケズリ	FⅡ類	
7	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ		BⅡ類	
8	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ		BⅡ類	
9	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ	ヨコナデ		FⅡ類	
10	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、体部はマメツ	ヨコナデ、体部はマメツ		BⅡ類	
11	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、体部はマメツ	ヨコナデ、ミガキ		BⅡ類	
12	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ			
13	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、頸部に指の跡	ヨコナデ、ヘラナデ、指の跡多数			図版49-1
14	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ハケメ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		小型	図版49-2

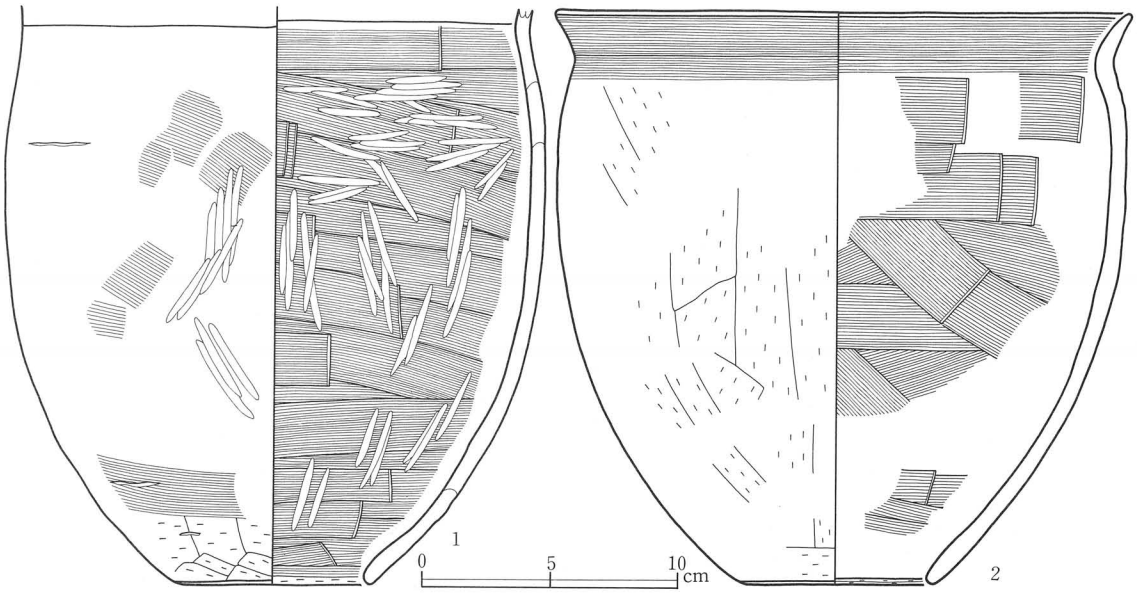
第７図　SI－１住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		中A類　図版49-3
2	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ハケメ、大部分マメツ	ヨコナデ、ヘラナデ、大部分マメツ		中E類
3	堆積土	土師器	甕	ケズリ	ハケメ、ミガキ	ケズリ	
4	堆積土	土師器	甕	ハケメ、ナデ	ヘラナデ、ハケメ、ヨコナデ		
5	堆積土	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ヘラナデ、下半部は大部分マメツ	ケズリ	大C類　図版49-4
6	堆積土	土師器	甑	ナデ	ヘラナデ、ナデ、ミガキ		単孔式

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
7	堆積土	紡錘車	4.0×4.1×1.0	28.0	滑石	図版52-1

第8図　SI-1 住居跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甑	ナデ、ミガキ、ケズリ、マメツ部分多い	ヘラナデ、ミガキ、底部にケズリ		(A類)
2	堆積土	土師器	甑	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		A類　図版50-11

第９図　SI－１住居跡出土遺物(3)

ＳＩ－２住居跡

［遺構の確認］調査区の中央やや北寄り、Ｎ－12～18、Ｅ－６～13に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］長軸6.0cm、短軸5.9cm、ほぼ正方形である。

［堆積土］４層に分けられる。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い東壁で38cm である。床面から急角度で立ち上がる。

［床面］Ⅳ層を床面としており、ほぼ平坦である。床面レベルは南東隅付近が最も高く北西隅に向かって徐々に低くなる。全体的に堅く締っているが中央部から西壁中央部にかけての部分が特に堅い。

［柱穴］６個のピットが検出された。規模、配置からピット１、２、３、４が柱穴であると考えられる。またピット５も同様の規模であり、柱穴である可能性がある。

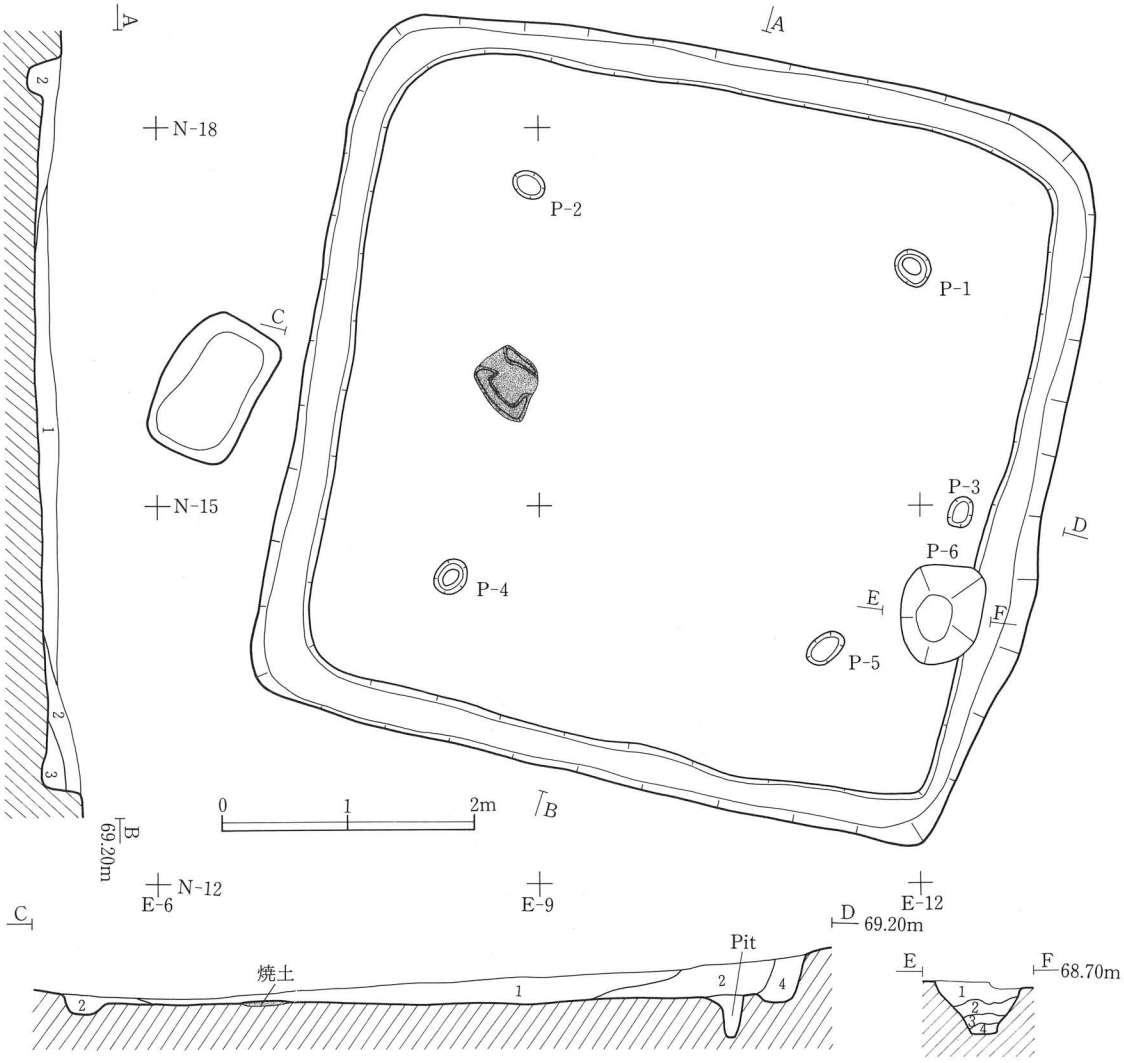
［炉］中央部からやや西寄りの位置に床面と同一レベルで検出された。長軸53cm、短軸43cm の不整形な焼け面からなる地床炉である。南辺及び北辺は粘土を盛り上げ壁としている。火熱により赤変している。

［周溝］壁沿いに一周する。幅50cm～28cm、深さ４～８ cm 断面形は浅い「U」字形である。

底面レベルは南東隅付近が最も高く北西隅に向かって徐々に低くなっている。

［貯蔵穴状ピット］ピット６が貯蔵穴状ピットであると考えられる。南東寄りに位置し、長軸80cm、短軸65cm、深さ45cm、不整な楕円形である。

［出土遺物］堆積土中から土師器、弥生土器、土製品（紡錘車）等が混在して出土しており、床面から土師器が出土している。



SI-２住居跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	黒褐（10YR 2/3）	シルト	
2	暗褐（10YR 3/4）	シルト	褐(10YR 4/6)シルトを粉状に多量に含む
3	暗褐（7.5YR 3/3）	シルト	褐(10YR 4/6)シルトを粉状に含む
4	暗褐（7.5YR 3/3）	シルト	褐(10YR 4/6)シルトを粉状に含む。層No.3より多い。極めてシルト

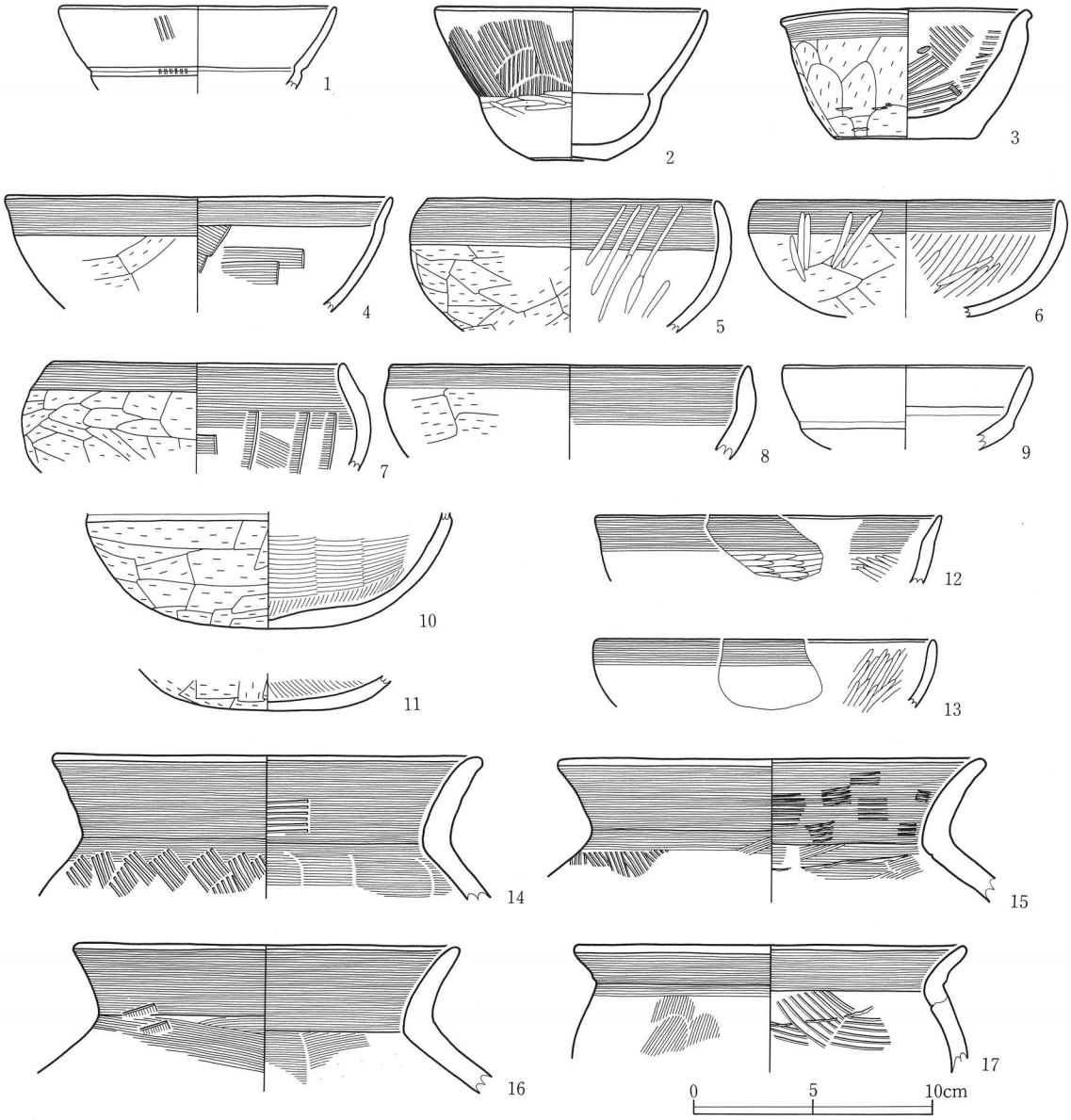
SI－２住居跡 Pit-6 土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	暗褐（7.5YR 3/4）	粘土質シルト	褐(7.5YR 4/6)粘土を含む
2	暗褐（7.5YR 3/4）	シルト	褐(7.5YR 4/6)粘土を含む・焼土粒
3	暗褐（7.5YR 3/3）	粘土	
4	褐　(10YR 4/6)	粘土	

ピット表（cm）

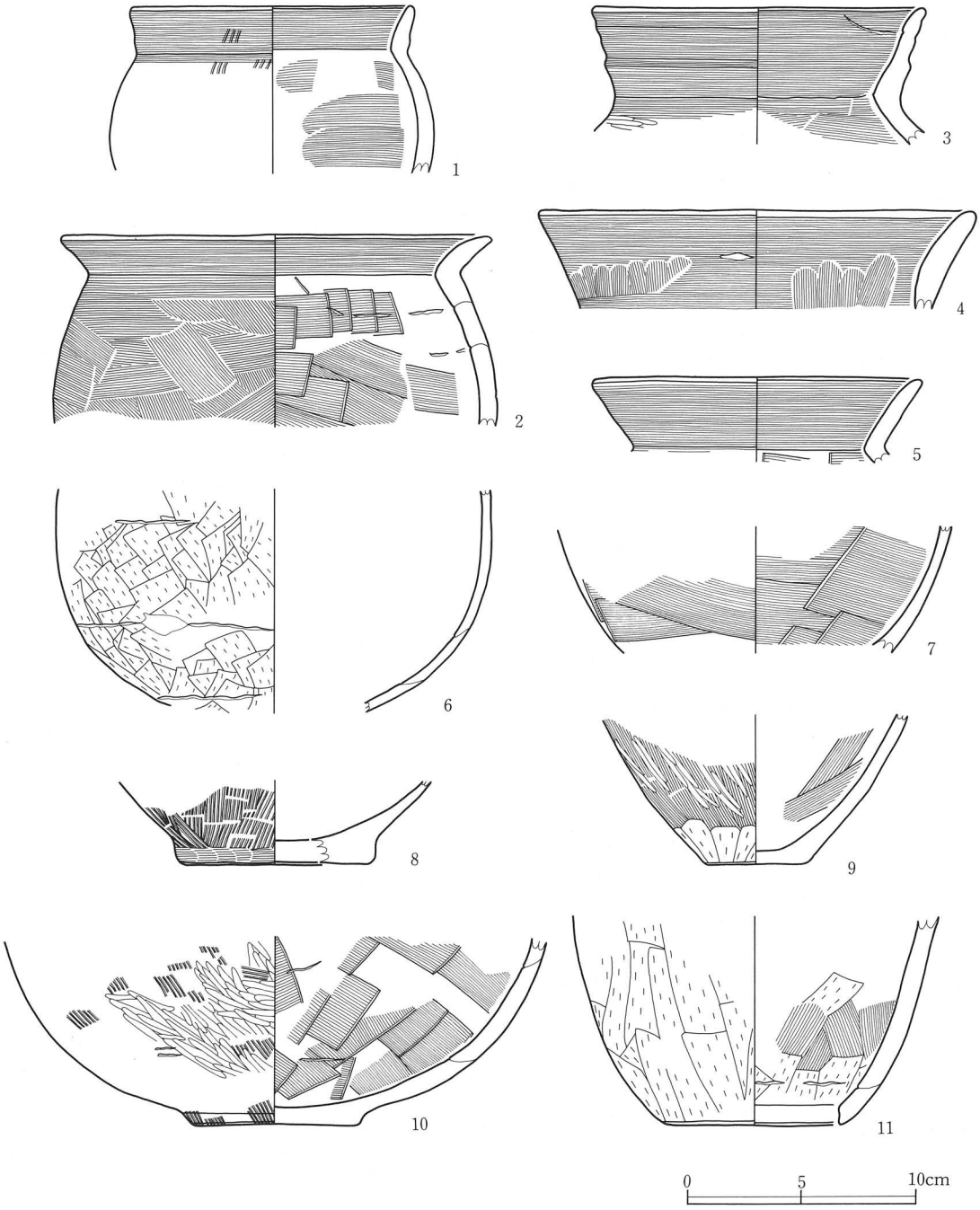
No.	1	2	3	4	5
深さ	36	57	23	43	25

第10図　SI－２住居跡



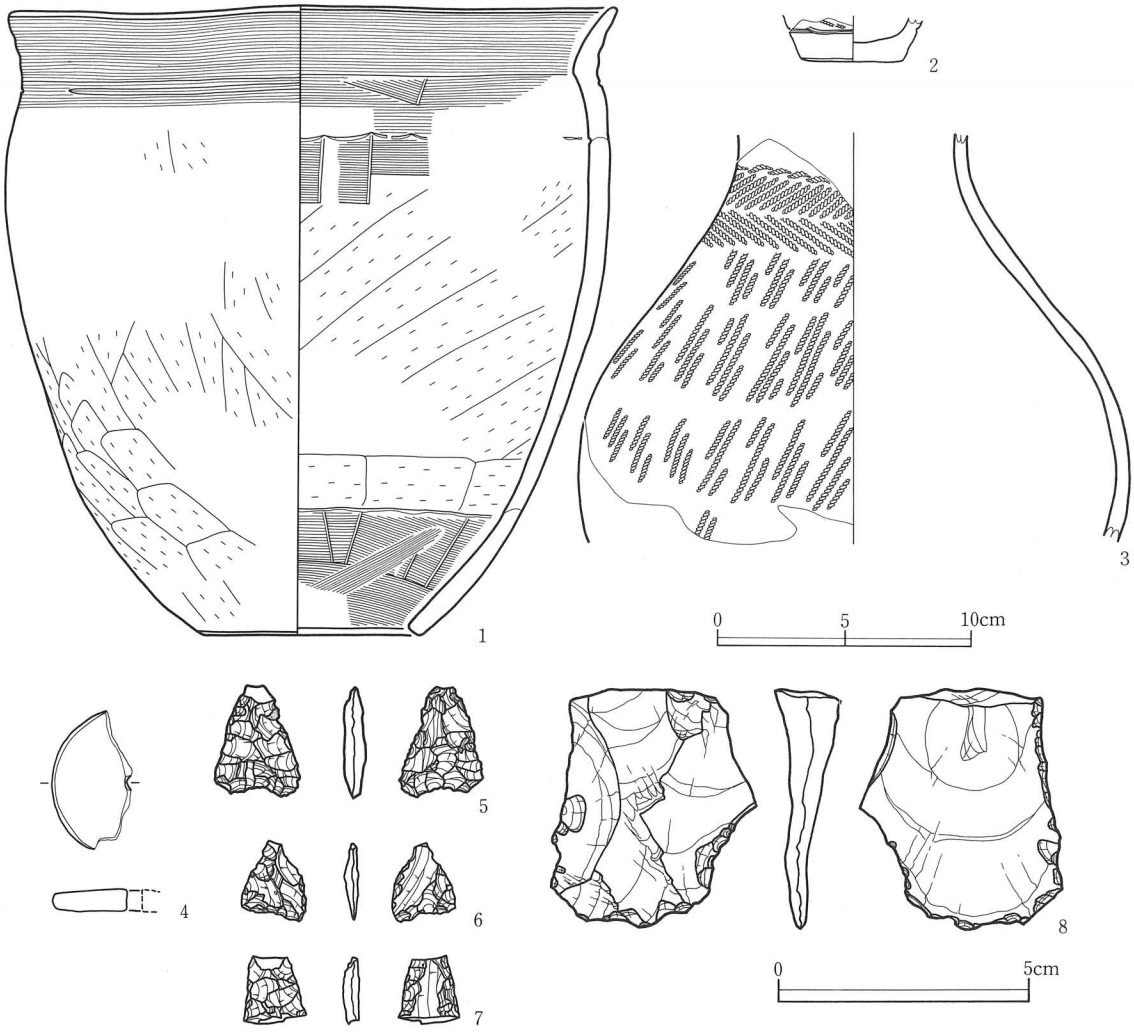
No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	小型丸底鉢	ハケメ、大部分マメツ	大部分マメツ		
2	堆積土	土師器	小型丸底鉢	ハケメ 下半部は大部分マメツ	大部分マメツ	マメツ	図版48-4
3	堆積土	土師器	鉢	ケズリ、ヨコナデ	ハケメ	ケズリ	小ＢＩ類　内面にモミ圧痕が見られる。 図版48-5
4	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		ＢII類
5	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ		ＤII類　図版48-6
6	検出面	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		ＣII類
7	検出面	土師器	杯	ケズリ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ		ＤＩ類　図版48-7
8	検出面	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ		ＣII類
9	堆積土	土師器	杯	マメツ	マメツ		ＦＩ類
10	堆積土	土師器	杯	ケズリ	ミガキ	ケズリ	
11	検出面	土師器	杯	ケズリ	ミガキ	ケズリ	
12	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		ＢII類
13	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、体部はマメツ	ミガキ		Ｅ類
14	堆積土	土師器	甕	ハケメ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ、ナデ		図版49-5
15	堆積土	土師器	甕	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ、ナデ		
16	堆積土	土師器	甕	ヘラナデ、ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ		
17	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハケメ		

第11図　SI－２住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ナデ		小型
2	検出面	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		中C類
3	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ナデ		
4	検出面	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ		
5	検出面	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		
6	堆積土	土師器	甕	ケズリ	マメツ		
7	検出面	土師器	甕	ヘラナデ	ヘラナデ		
8	検出面	土師器	甕	ハケメ、ナデ	マメツ	ナデ	
9	堆積土	土師器	甕	ナデ、ミガキ、ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
10	堆積土	土師器	甕	ハケメ、ミガキ	ヘラナデ	マメツ	
11	堆積土	土師器	甑	ケズリ	ナデ、ケズリ		

第12図　SI－2住居跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甑	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ケズリ、ヘラナデ、ナデ		A類　図版50-12
2	周溝	弥生土器	深鉢	縄文LR、沈線	ナデ	木葉痕	
3	堆積土	弥生土器	壺	縄文RL、縄文LR、付加条文	ナデ		図版51-8

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
4	周溝	紡錘車	5.5×3.2×0.9	12.6	図版52-2

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
5	ピット4	石鏃	3.2×1.6×0.5	1.1	石英安山岩	図版52-9
6	堆積土	石鏃	1.6×1.3×0.3	0.3	珪質頁岩	図版52-10
7	堆積土	石鏃	1.3×1.3×0.3	0.5	珪質頁岩	
8	堆積土	二次加工	4.7×4.0×1.1	13.8	珪質頁岩	

第13図　SI－2住居跡出土遺物(3)

ＳＩ－３住居跡

［遺構の確認］調査区の北東寄りＮ－15～27、Ｗ－０～５に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］長軸4.8m、短軸4.65m、隅

SI－３住居跡土層註記表

層No	色調	土性	備考
1a	暗褐 (10YR 3/3)	シルト	焼土・木炭を多量に含む
1b	暗褐 (7.5YR 3/3)	シルト	
2	暗褐 (7.5YR 3/3)	シルト	
3	黒 (5YR 1.7/1)	粘土質シルト	木炭を多量に含む
4	黒褐 (10YR 2/3)	シルト質粘土	褐(10YR 4/6)粘土をわずかに含む。壁の崩土
5	にぶい黄褐 (10YR 4/3)	シルト	
6	褐 (10YR 4/4)	粘土質シルト	ピット埋土

丸の正方形である。

［堆積土］ 6層に分けられる。

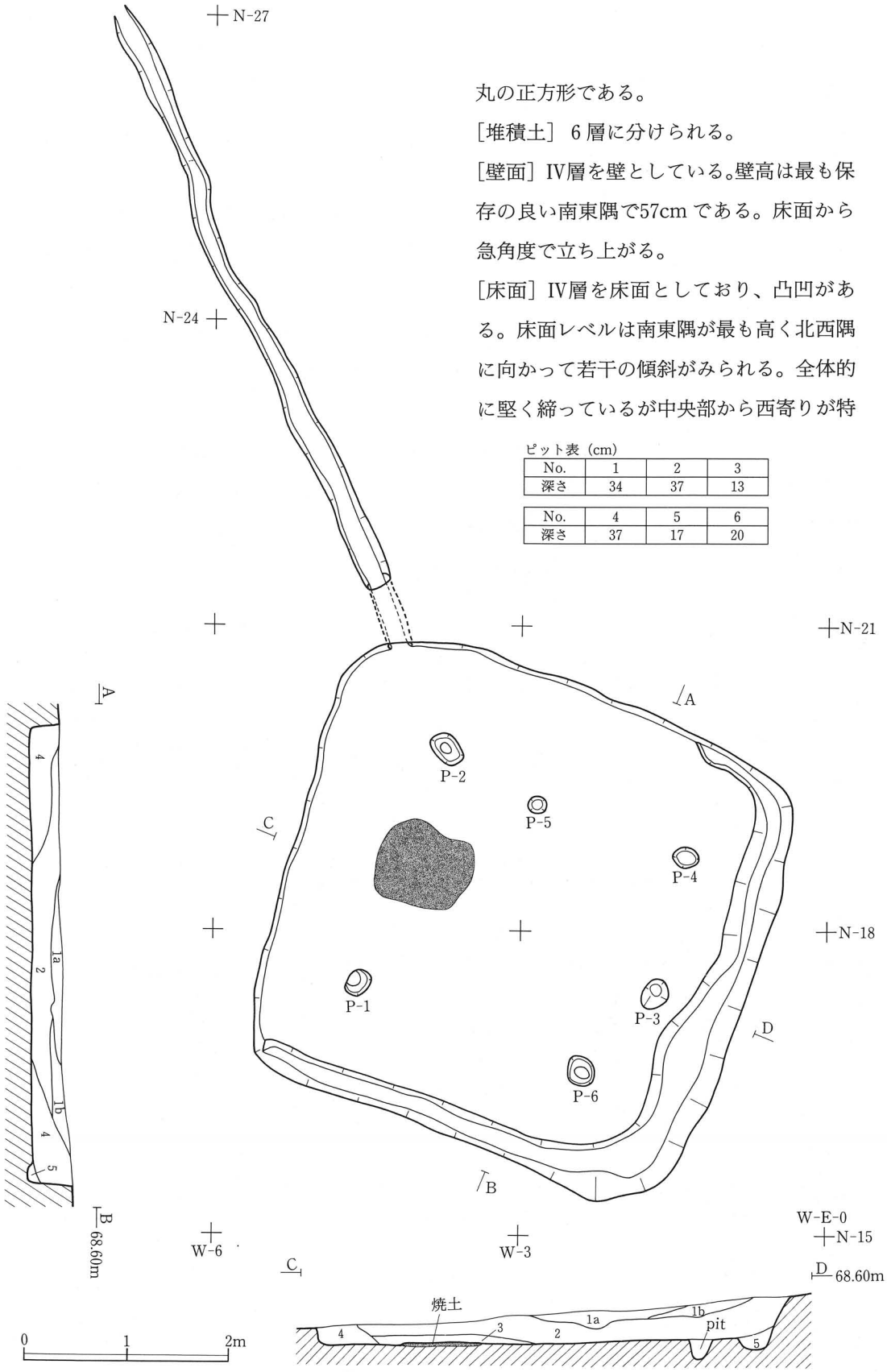
［壁面］ Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い南東隅で57cmである。床面から急角度で立ち上がる。

［床面］ Ⅳ層を床面としており、凸凹がある。床面レベルは南東隅が最も高く北西隅に向かって若干の傾斜がみられる。全体的に堅く締っているが中央部から西寄りが特

ピット表（cm）

No.	1	2	3
深さ	34	37	13

No.	4	5	6
深さ	37	17	20



第14図　SI－3住居跡

に堅い。

［柱穴］ 6個のピットが検出された。ピットの規模、配置からピット1、2、4、6が柱穴と考えられる。また、ピット3も同様の規模であり柱穴の可能性がある。

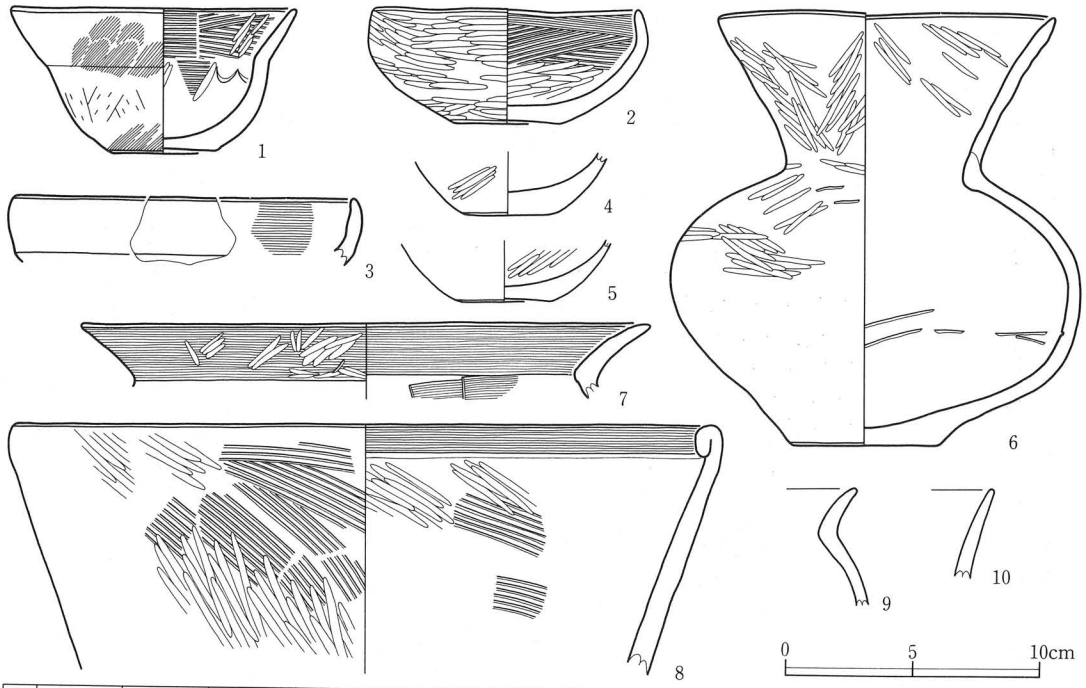
［炉］ 中央部からやや西寄りの位置に床面と同一レベルで検出された。長軸95cm、短軸82cmの不整形な焼け面による地床炉である。多量の炭化物及び焼土が付着しており、火熱により赤変している。

［周溝］ 北壁東部から南西隅にかけて検出された。幅68～18cm、深さ5～13cm、断面形は「U」字形である。底面レベルは北東隅が最も高く南東から南西隅方向へ徐々に近くなっている。

［貯蔵穴状ピット］ 検出されなかった。

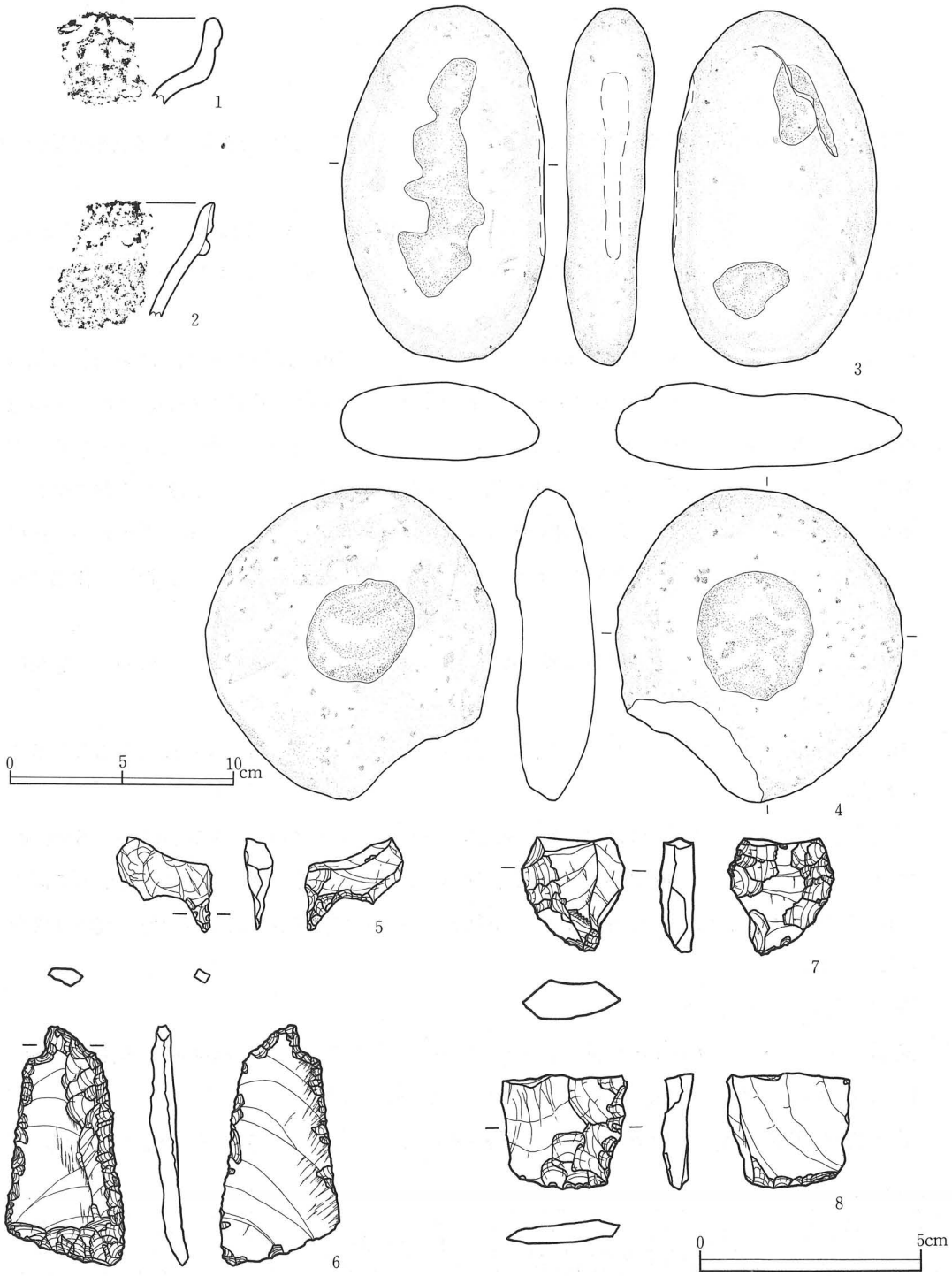
［外延溝］ 住居の北西隅から住居外の北西斜面に向かって延びている。北西隅から0.6mのところまでは崩落せずトンネル状に残存していた。長さ6.85m、トンネル部分の幅0.26m、断面形は楕円形である。底面レベルは斜面の傾斜に対応して、住居から離れるにつれて低くなっている。

［出土遺物］ 主に床面から土師器等が出土している。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	底面	土師器	鉢	ナデ、ケズリ	ハケメ、ミガキ、オサエメ	ナデ、ケズリ	小A類 体部上部に指の跡が見られる 図版48-8
2	堆積土	土師器	杯	ミガキ	ハケメ、ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	CⅠ類 図版48-9
3	外延溝	土師器	杯	マメツ	ヨコナデ		DⅡ類
4	堆積土	土師器	杯	ミガキ、大部分マメツ	大部分マメツ	マメツ	
5	堆積土	土師器	杯	大部分マメツ	ミガキ、大部分マメツ	マメツ	
6	底面	土師器	壺	ミガキ、下半部は大部分マメツ	ミガキ	マメツ	図版50-6
7	周溝	土師器	甕	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ		
8	堆積土	土師器	鉢	ハケメ、ミガキ	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ		大A類
9	堆積土	土師器		マメツ	マメツ		
10	堆積土	土師器		マメツ	マメツ		

第15図　SI－3住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	堆積土	弥生土器		隆線、沈線、刺穴、刻目	ナデ		
2	堆積土	弥生土器		縄文LR、隆線、刻目	ナデ		図版51-9

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
3	堆積土	礫石器	16.0×9.2×3.4	801.0	石英安山岩	
4	堆積土	礫石器	14.1×12.8×3.9	796.0	石英安山岩質凝灰岩	
5	堆積土	石錐	2.2×2.1×0.6	1.5	珪質頁岩	図版52-29
6	堆積土	石匙	5.4×2.6×0.6	6.9	珪質頁岩	図版52-34
7	堆積土	スクレーパー	2.5×2.3×0.8	4.9	珪質頁岩	
8	堆積土	スクレーパー	2.9×2.5×0.6	5.0	珪質頁岩	

第16図　SI－3住居跡出土遺物(2)

ＳＩ－４住居跡

［遺構の確認］調査区中央部南西寄りＮ－１～Ｓ－７、Ｗ－５～14に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］長軸7.16m、短軸6.53m、北東隅及び北西隅がやや丸味がかった長方形である。

［堆積土］３層に分けられる。下層には炭化物、焼土が多量に混入しており、礫が混入している部分もある。

［床面］大部分はⅥ層を床面とするが壁沿いには幅1.1～0.7m、深さ10～31m の周溝状の掘り方が認められた。この部分では掘り方埋土上面を床面としている。凸凹が多い。床面レベルは東隅付近が最も高く、西隅に向かって徐々に低くなっている。全体的に堅くしまっている。床面には多量の炭化材が散乱しており、炭化物、焼土粒が検出され、カマド以外で火熱を受けて赤変した部分もみられることから本住居跡は火災に遇ったものと考えられる。このため、床面上でカマド以外の施設が検出できず、ピット１～６はいずれも最終精査（ダメ押）で検出されたものである。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い東隅付近で41cm である。床面から急角度で立ち上がる。

［柱穴］５個のピットが検出された。規模、配置からピット１、２、３、４が柱穴であると考えられる。

［カマド］北壁のやや東寄りに付設され、煙道部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ75cm、幅38cm、深さは燃焼部との境で23cm であり、軽い段を伴っている。底面は先端に向かって高くなる。燃焼部は奥行き124cm、幅104cm の不整形の焼け面が検出されたのみで他の施設は残存しなかった。

［周溝］認められなかった。

［貯蔵穴状ピット］ピット５が貯蔵穴状ピットであると考えられる。南東隅寄りに位置し、平面形は長軸100cm、短軸60cm、床面よりの深さ76cm、楕円形である。

［出土遺物］床面を中心に堆積土、掘り方埋土中から、土師器及び石製品等が出土している。

SI－４住居跡土層註記表

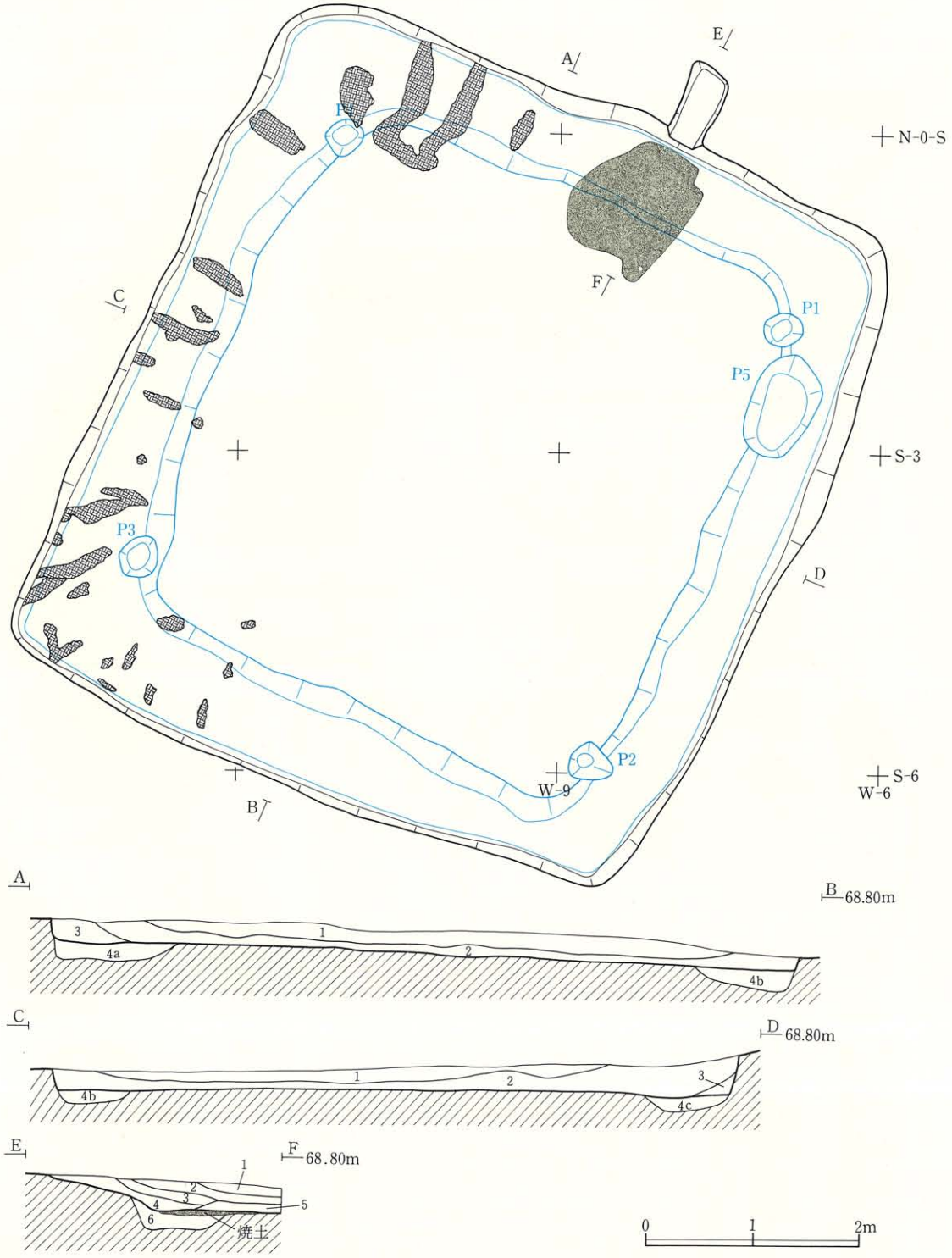
層No	色　調	土　性	備　考
1	黒褐(7.5YR 2/2)	シルト	
2	褐 (7.5YR 4/6)	シルト質粘土	基盤の崩土である。木炭・焼土を多量に含む。火災住居の堆積土か
3	暗褐(7.5YR 3/4)	シルト質粘土	黒褐(7.5YR 2/2)シルト木炭・焼土をわずかに含み、わずかに礫も含む
4a	暗褐(10YR 3/4)	シルト	焼土・木炭を多量に含む。掘り方埋め土
4b	暗褐(10YR 3/4)	シルト	木炭をわずかに含む。掘り方埋め土
4c	暗褐(10YR 3/3)	シルト	底面に焼土を含む。遺物出土。掘り方埋め土

SI－４住居跡カマド土層註記表

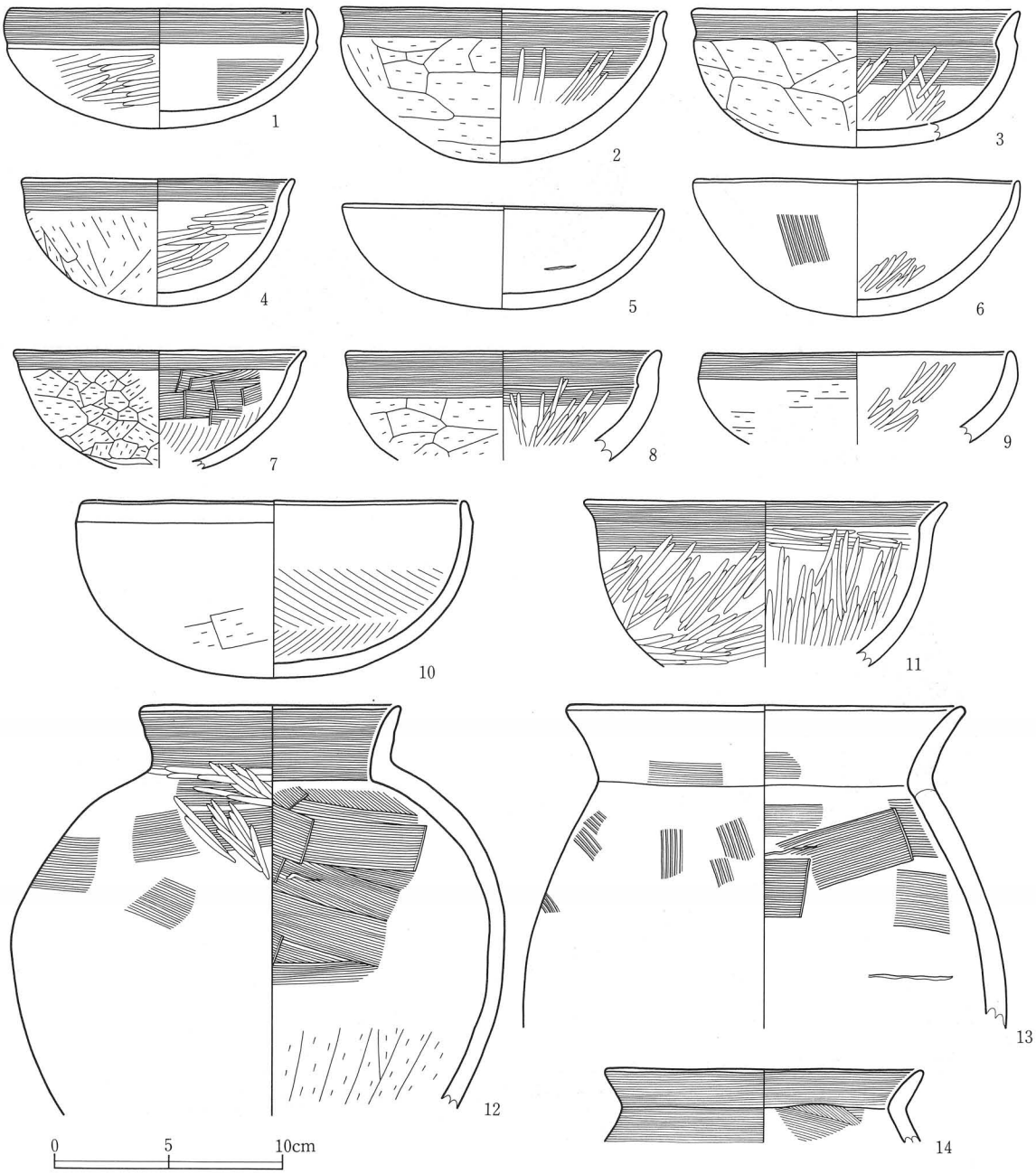
層No	色　調	土　性	備　考
1	黒褐(7.5YR 2/2)	シルト	
2	褐 (7.5YR 4/6)	シルト	
3	褐 (7.5YR 4/6)	シルト質粘土	
4	黒 (10YR 2/1)	シルト	木炭を多量に含む
5	暗赤褐(5YR 3/6)	シルト質粘土	焼土・木炭をわずかに含む
6	黄褐(10YR 5/6)	シルト	木炭・焼土をわずかに含む。掘り方埋土

ピット表（cm）

No.	1	2	3	4
深さ	74	68	66	57

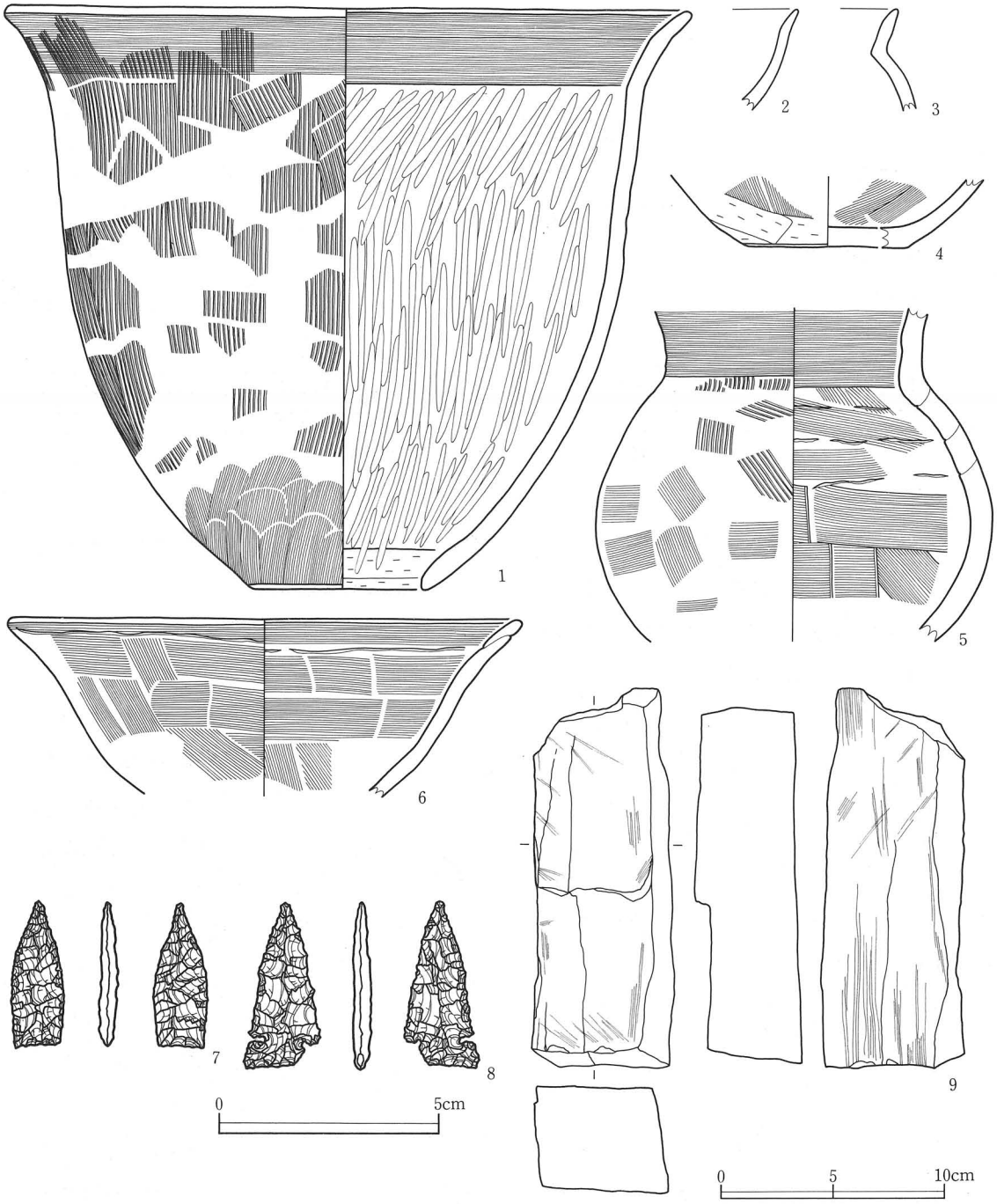

A
E
N-0-S
P4
F
C
P1
P5
S-3
P3
D
P2
W-9
S-6
W-6
B
A
B 68.80m
3
1
4a
2
4b
C
D 68.80m
1
2
3
4b
4c
E
F 68.80m
1
2
3
4
5
6
焼土
0
1
2m

第17図　SI－4住居跡



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考	
1	底面	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ナデ、大部分マメツ	マメツ	G類	図版48-10
2	掘り方	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ、下半部は大部分マメツ	ケズリ	BⅢ類	図版48-11
3	底面	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ		BⅠ類	図版48-12
4	3層	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ	ケズリ	BⅢ類	図版48-13
5	堆積土	土師器	杯	大部分マメツ	大部分マメツ	マメツ	F類	図版48-14
6	堆積土	土師器	杯	ハケメ、大部分マメツ	ミガキ、大部分マメツ	マメツ	E類	図版48-15
7	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ		BⅡ類	
8	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ		BⅠ類	
9	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ミガキ		CⅡ類	
10	堆積土	土師器	杯	ケズリ、大部分マメツ	ミガキ、大部分マメツ	マメツ	CⅡ類	図版48-16
11	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		BⅡ類	
12	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ		大C類	図版49-6
13	カマド	土師器	甕	ハケメ、ヨコナデ、大部分マメツ	ナデ、ヘラナデ		大EⅠ類	
14	掘り方	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ			

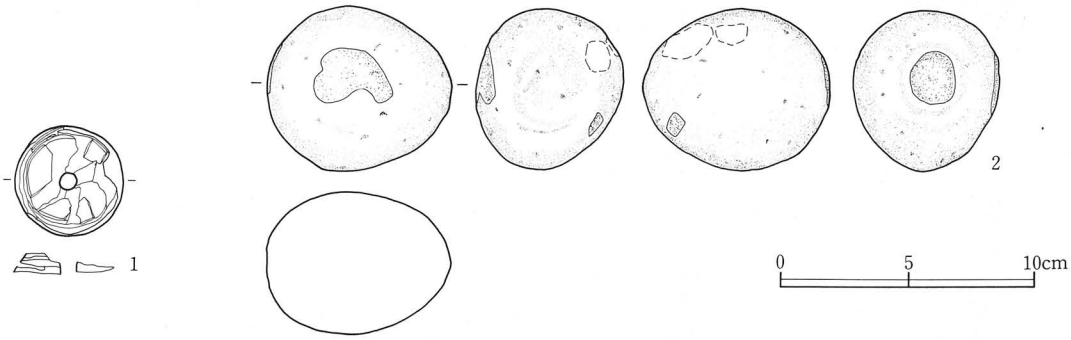
第18図　SI－4住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	底面	土師器	甑	ヨコナデ、ハケメ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ、ケズリ		BⅠ類　図版50-13
2	堆積土	土師器	杯	マメツ	マメツ		BⅡ類
3	堆積土	土師器		マメツ	マメツ		
4	堆積土	土師器	甕	ナデ、ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
5	底面	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ、ハケメ	ヨコナデ、ナデ		中A類
6	堆積土	土師器	鉢	ナデ、大部分マメツ	ナデ、ヨコナデ		大B類

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
7	検出面	石鏃	3.3×1.2×0.4	1.5	珪質頁岩	図版52-11
8	堆積土	石鏃	3.8×1.7×0.4	0.4	珪質頁岩	図版52-12
9	堆積土	礫石器	17.1×6.4×4.7	971.0	安山岩 or 玄武岩	

第19図　SI－4住居跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	床面	紡錘車	4.3×4.1×		滑石	
2	検出面	礫石器	7.3×6.5×5.0	355.0	石英安山岩	

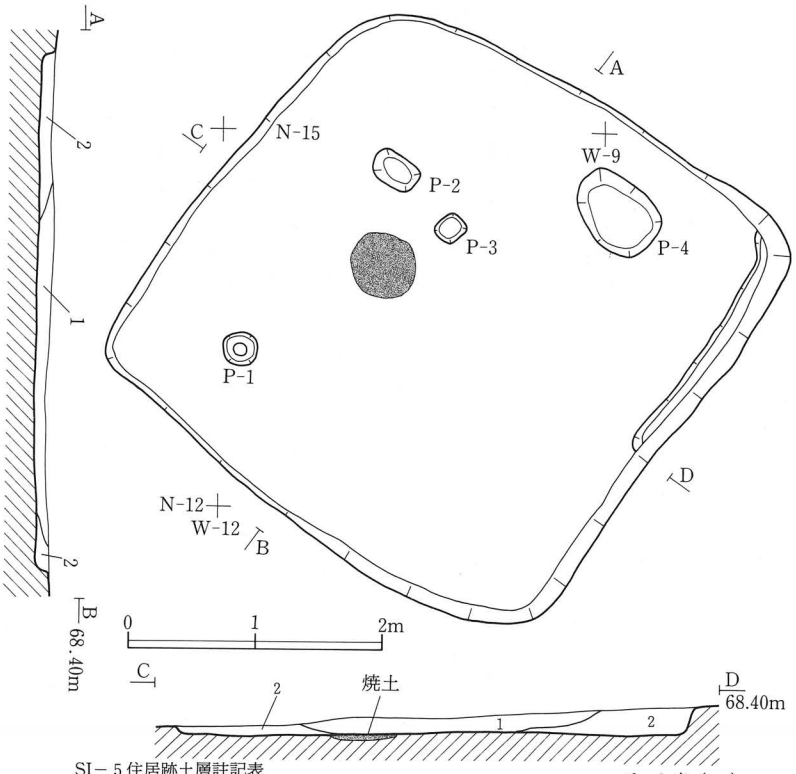
第20図　SI－４住居跡出土遺物(3)

ＳＩ－５住居跡

［遺構の確認］調査区の北東寄り、Ｎ－11～15、Ｗ－７～12に位置し、Ⅳ層上面で確認された。ＳＫ－39土坑と重複関係にあり、本遺構がＳＫ－39を切っている。

［平面形・規模］一辺4.15m、やや隅丸気味の正方形である。

［堆積土］２層に分けられる。



［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い南東壁で23cmである。床面から急角度で立ち上がる。

［床面］Ⅳ層を床面としており、平坦である。床面ラベルは南東側が最も高く、北西側に徐々に低くなっている。全体的に堅いが中央部からやや西寄り部分が特に堅い。

［柱穴］５個のピットが検出された。規模・配置からピット１、２

SI－５住居跡土層註記表

層No	色調	土性	備考
1	暗褐(10YR 3/4)	シルト	木炭をわずかに含む
2	暗オリーブ褐(2.5Y 3/3)	シルト	褐（10YR 4/6）シルトを小さいブロック状に含む

ピット表（cm）

No.	1	2	3	4
深さ	9	56	9	23

第21図　SI－５住居跡

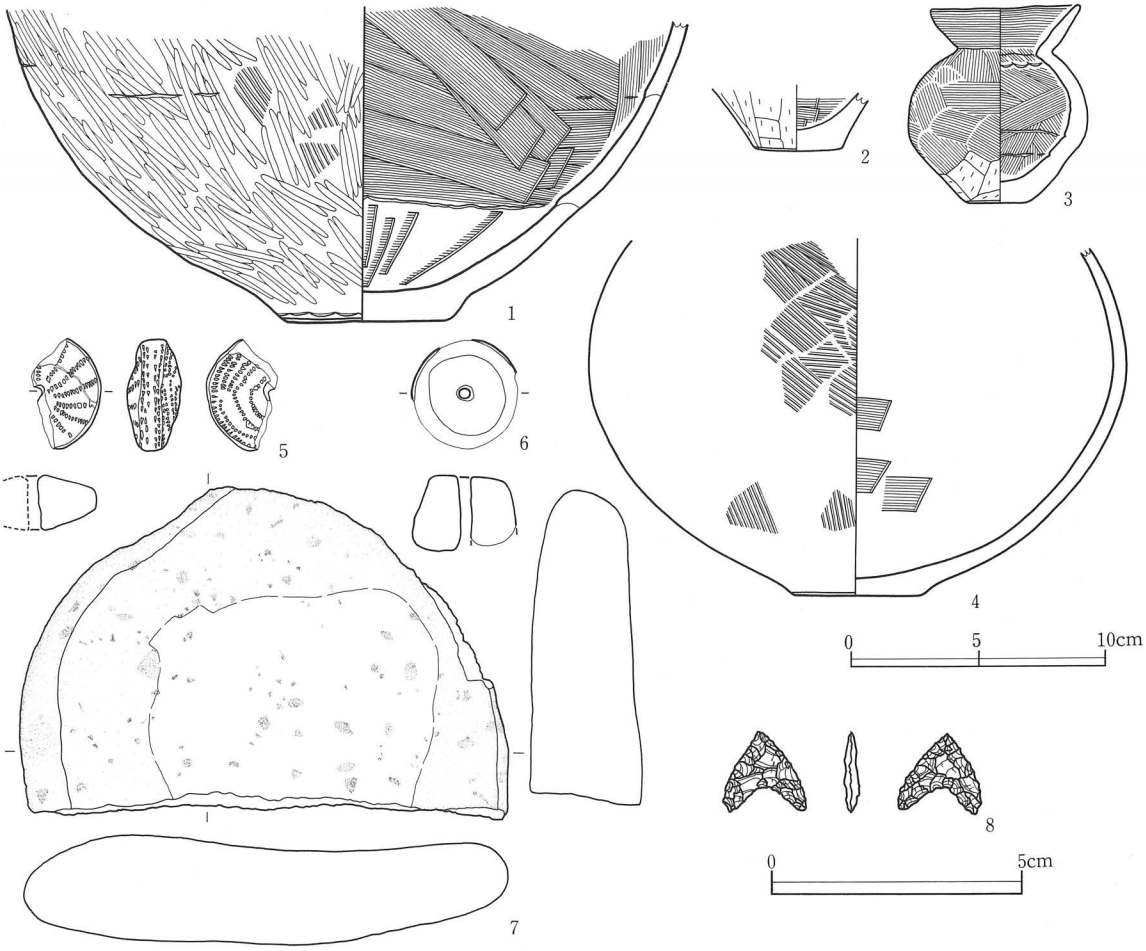
は柱穴と考えられる。また、ピット５も同様の規模であり柱穴である可能性がある。

［炉］中央部からやや西寄りの位置に床面と同一のレベルで検出された。長軸55cm の不整形な焼け面からなる地床炉である。炉周辺の床面には炭化物が付着している。

［周溝］南東壁の北半部分にのみ検出された。長さ205cm、幅20～30cm、深さ３～５ cm、断面形は浅い「U」字形である。

［貯蔵穴状ピット］ピット４が貯蔵穴状ピットであると考えられる。北東壁寄りに位置し、長軸72cm、短軸52cm、不整な楕円形である。

［出土遺物］床面から土師器の一括土器及び堆土積土中から土師器等が出土している。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	床面	土師器	甕	ミガキ、ハケメ	ヘラナデ	ナデ	大C類　図版50-4
2	堆積土	土師器	壺	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	
3	堆積土	土師器	ミニチュア壺	ナデ、ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	ナデ	内面体部上端に指の跡が見られる。図版50-7
4	床面	土師器	壺	ハケメ、大部分マメツ	ヘラナデ、大部分マメツ	マメツ	図版50-8

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
5	堆積土	紡錘車	4.4×2.8×2.2	18.4	図版52-3
6	堆積土	紡錘車	4.3×4.2×3.0	58.5	図版52-4

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
7	床面	礫石器	13.2×19.3×4.3	1499.0	石英安山岩	図版52-61
8	検出面	石鏃	1.6×1.6×0.2	0.5	珪質頁岩	図版52-13

第22図　SI－５住居跡出土遺物

ＳＩ－６住居跡

［遺構の確認］調査区の中央部Ｎ－５～Ｓ－10、Ｅ－２～14に位置し、Ⅳ層上面で確認された。本住居跡外延溝とＳＫ－32土坑が重複関係にあり、ＳＫ－32土坑が外延溝を切っている。

［平面形・規模］長軸6.33m、短軸5.75m、隅がやや丸味を帯びる正方形である。

［堆積土］３層に分けられる。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い南壁中央部付近で15cm である。床面から急角度で立ち上がる。

［床面］Ⅳ層を床面としている。凸凹が著しい。床面レベルは南東部分が最も高く、北西部分に向かって徐々に低くなっている。

［柱穴］２個のピットが検出された。柱穴であるかどうかは不明である。

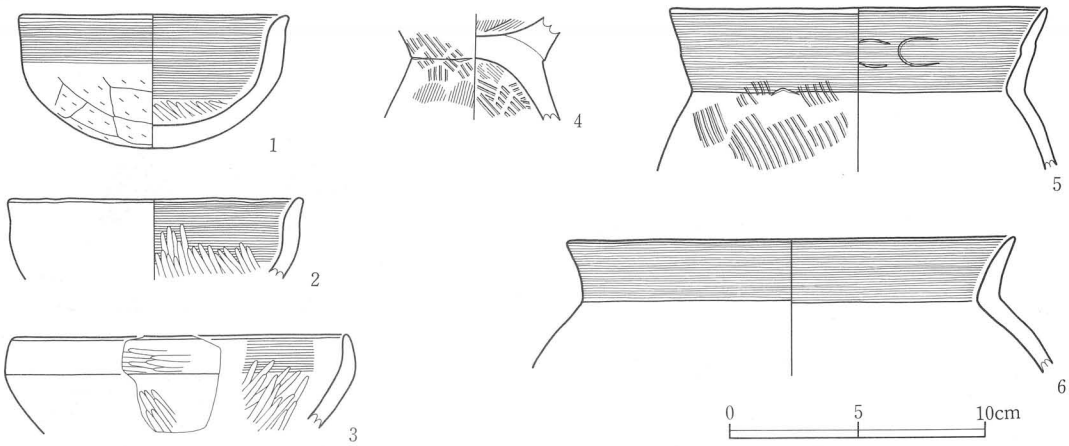
［炉・カマド］検出されなかった。

［周溝］南壁中央部から西寄りに長さ260cm にわたって検出された。南壁下端との間に10～30 cm の間隔がある。幅は26cm、深さは２～７ cm であり、底面レベルは東、西端が最も高く、最も低くなったところで外延溝に接続している。外延溝以東は周溝北壁は検出されなかった。断面形は「Ｕ」字形である。

［貯蔵穴状ピット］検出されなかった。

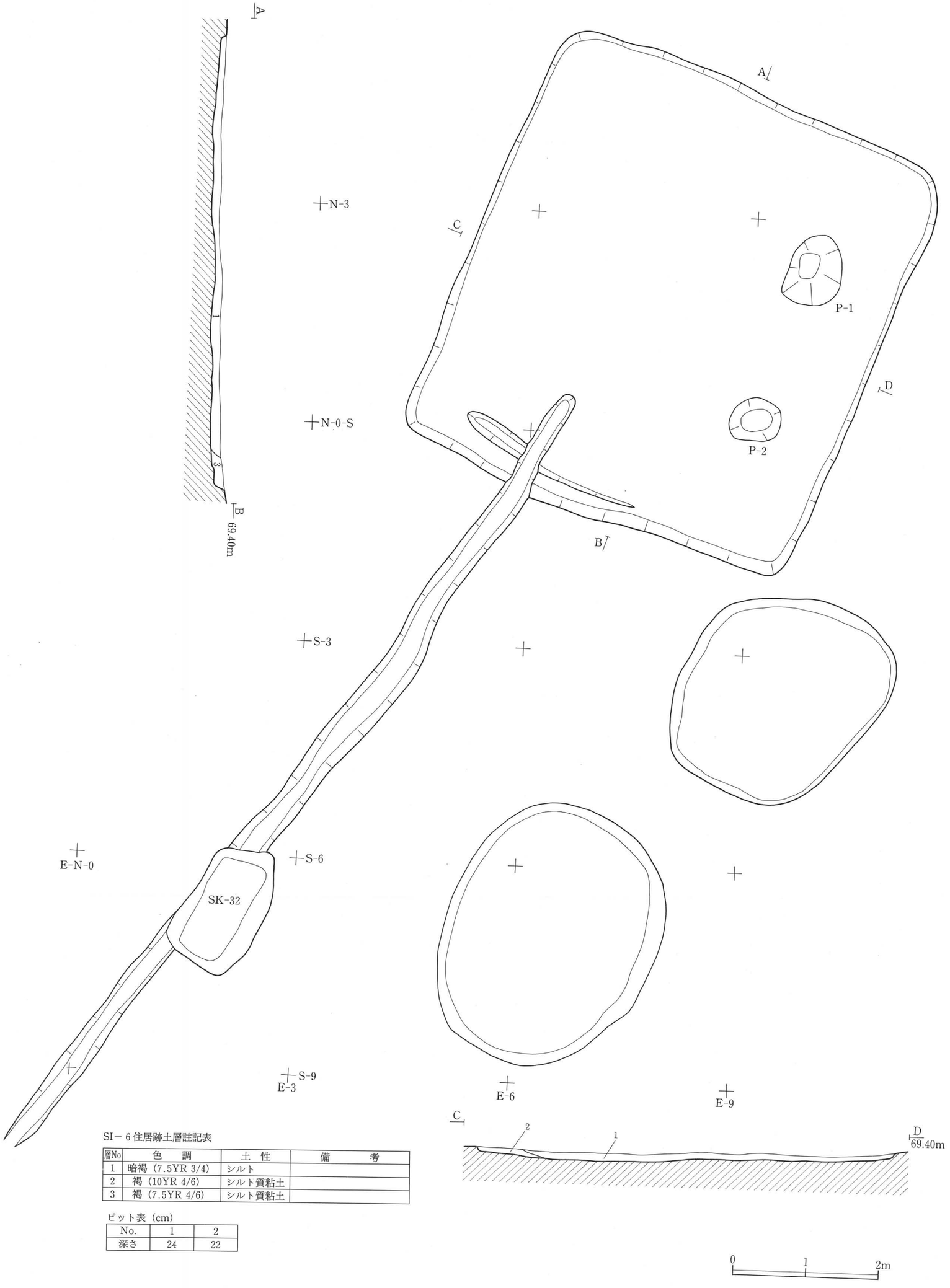
［外延溝］住居の南壁近くから住居外の南西斜面に向かって延びている。住居内での長さ1.47 m、住居外の長さ11.4m、幅30～46cm、断面形は「Ｕ」字形である。斜面の傾斜に対応して住居から離れるにつれて底面レベルは低くなる。

［出土遺物］底面及び堆積土中から土師器及び石製品等が出土している。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ	ケズリ	図版48-17
2	堆積土	土師器	杯	マメツ	ヨコナデ、ミガキ		
3	堆積土	土師器	杯	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		
4	堆積土	土師器	台付甕	ハケメ、ナデ	〈甕〉ヘラナデ、〈台〉ハケメ、ナデ		
5	掘り方	土師器	甕	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ		
6	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ		

第23図　SI－６住居跡出土遺物(1)



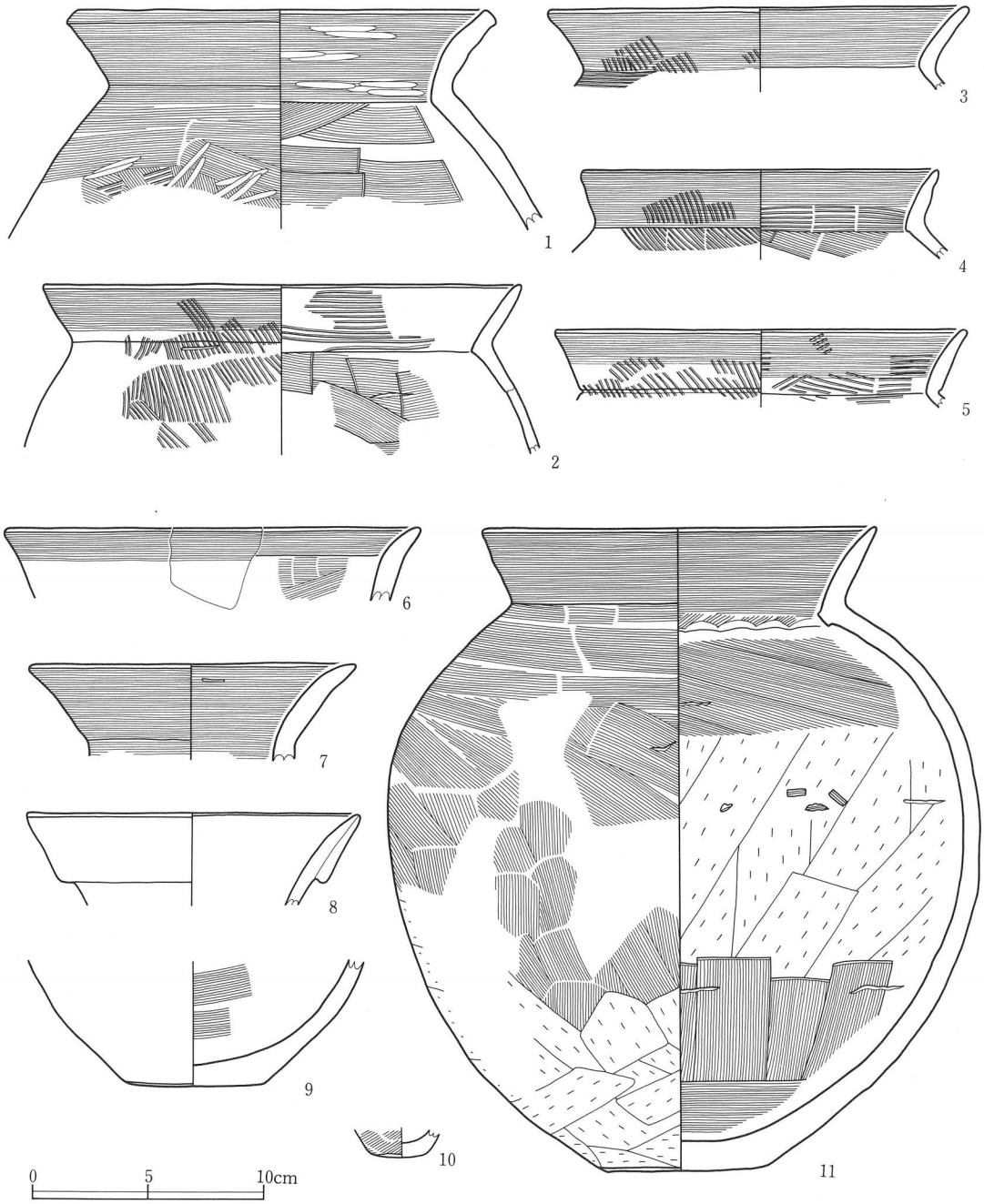
SI－６住居跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	暗褐（7.5YR 3/4）	シルト	
2	褐（10YR 4/6）	シルト質粘土	
3	褐（7.5YR 4/6）	シルト質粘土	

ピット表（cm）

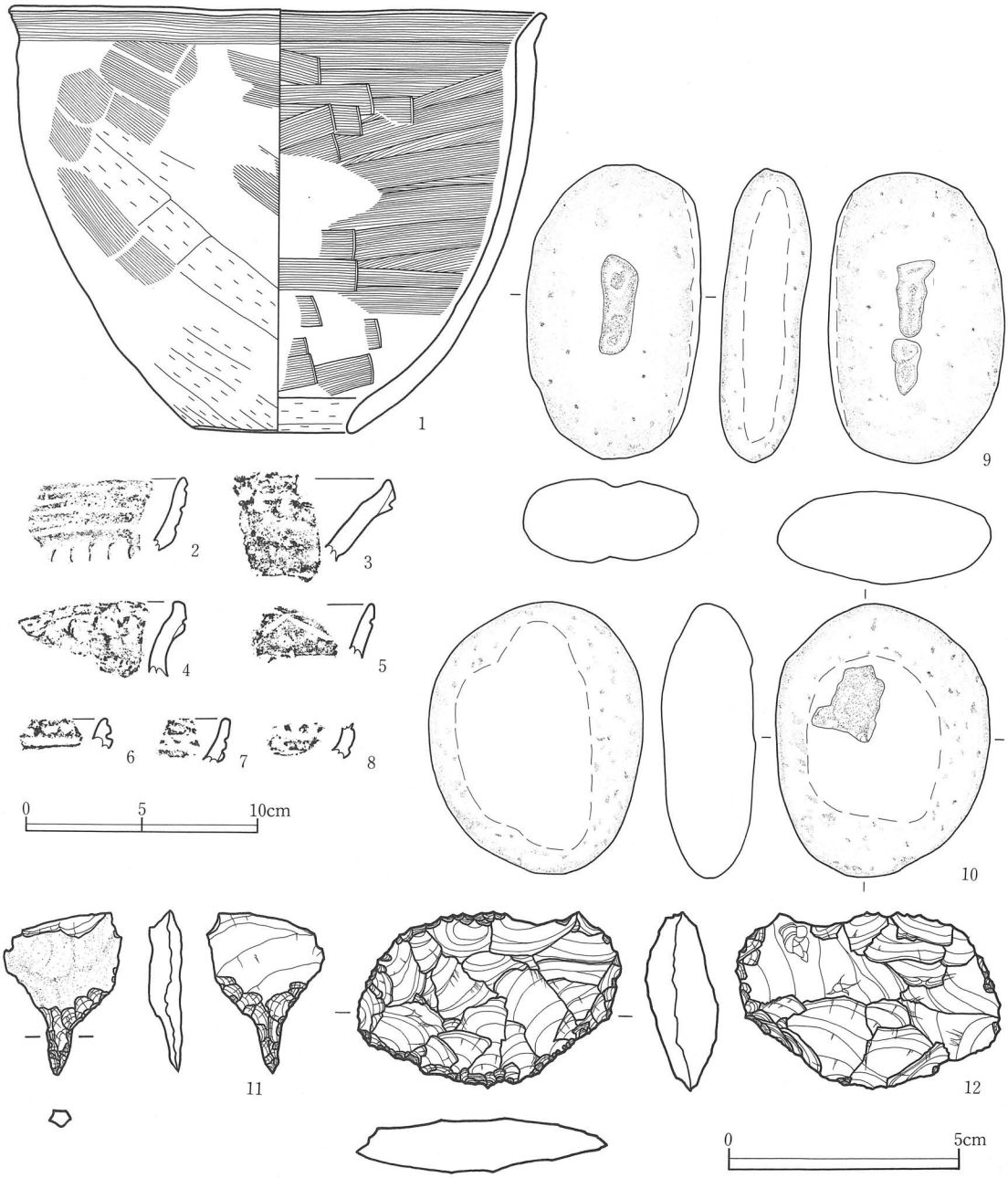
No.	1	2
深さ	24	22

第24図　SI－６住居跡



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甕	ハケメ、ナデ、ヨコナデ、ミガキ	ヘラナデ、ヨコナデ、ミガキ		大EII類
2	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ハケメ	ハケメ、ヘラナデ		
3	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ		
4	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ、ヘラナデ		
5	堆積土	土師器	甕	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ		
6	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、体部マメツ	ヨコナデ、ナデ		
7	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ		
8	堆積土	土師器	甕	マメツ	マメツ		
9	堆積土	土師器	甕	大部分マメツ	ナデ、大部分マメツ	マメツ	胎土中に大粒の砂が多い
10	堆積土	土師器	手捏土器	ナデ	ナデ	ナデ	
11	堆積土	土師器	壺	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ケズリ	大A類　図版50-9

第25図　SI－6住居跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甑	ナデ、ケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ		BⅡ類　図版50-14
2	堆積土	弥生土器		押圧、沈線	ナデ		
3	堆積土	弥生土器		隆線、沈線、刻目	ナデ		図版51-10
4	堆積土	弥生土器		隆線、沈線、刻目	ナデ		口唇部に刻目
5	堆積土	弥生土器		沈線	ナデ		
6	堆積土	弥生土器		沈線、刺突	マメツ		
7	堆積土	弥生土器		沈線、刺突	ナデ		
8	堆積土	弥生土器		沈線、刺突	ナデ		

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
9	床面	礫石器	12.7×7.6×3.4	520.0	石英安山岩質凝灰岩	図版52-62
10	堆積土	礫石器	11.9×9.2×3.9	523.0	石英安山岩	図版52-63
11	堆積土	石錐	3.5×2.5×0.7	4.2	珪質頁岩	図版52-30
12	堆積土	スクレーパー	3.3×5.6×1.4	29.4	碧玉と珪質頁岩の間	

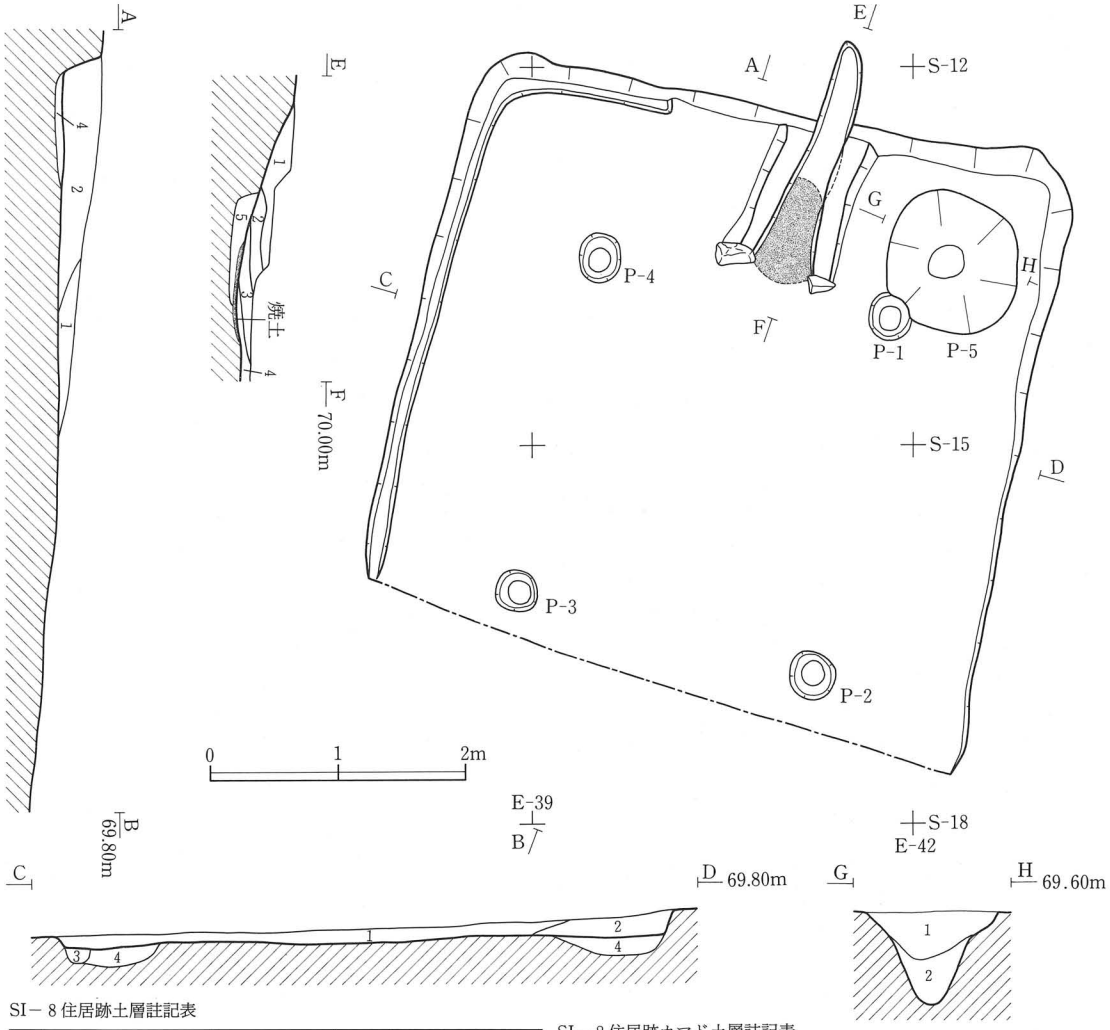
第26図　SI－6住居跡出土遺物(3)

ＳＩ－８住居跡

［遺構の確認］調査区南東寄り、Ｓ－11～17、Ｅ－37～43に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］北壁及び東壁、西壁の一部が検出されたが、その他の部分は削平のため検出されなかった。平面形は残存部から判断して、長軸4.90m 以上、短軸4.85m の方形を基調としたものであると考えられる。

［堆積土］２層に分けられる。



SI－８住居跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	黒褐（10YR 2/3）	シルト	褐色（10YR 4/6）シルト質粘土を粉状に含む
2	黒褐（10YR 3/1）	シルト	粗砂をわずかに含む
3	黒褐（10YR 3/4）	シルト	基盤の礫を含む。周溝埋土
4	黒褐（10YR 3/4）	シルト	礫をわずかに含む。掘り方埋土

SI－８住居跡 Pit-5 土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	暗褐（10YR 3/3） 黄褐（10YR 5/6）	シルト	木炭を含む
2	黄褐（10YR 5/6）	シルト質粘土	

SI－８住居跡カマド土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	褐（7.5YR 4/6）	シルト	底面に焼土をわずかに含む
2	褐（7.5YR 4/6）	シルト質粘土	天井部の崩土か
3	褐（10YR 4/6）	シルト質粘土	焼土を多量に含む
4	にぶい赤褐(5YR 4/4)	シルト	焼面
5	暗赤褐（5YR 3/4）	シルト	木炭・焼土を多量に含む

ピット表（cm）

No.	1	2	3	4
深さ	63	36	78	42

第27図　SI－８住居跡

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い北東隅で42cm である。床面から急角度で立ち上がる。

［床面］大部分はⅣ層を床面としているが、壁沿いには幅0.75～1.05m、深さ５～15cm の周溝状の掘り方が認められた。この部分では掘り方埋土上面を床面としている。凸凹しているが、全体的に堅く締っている。床面レベルは北東隅が最も高く、南西側に向かって徐々に低くなっている。

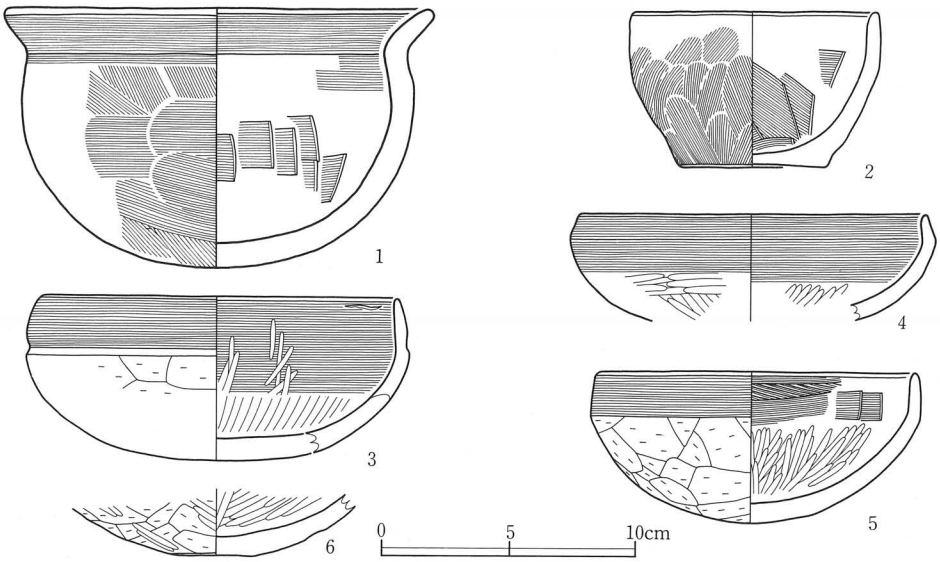
［柱穴］５個のピットが検出された。規模、配置からピット１、２、３、４が柱穴であると考えられる。

［カマド］北壁に付設され、煙道部、燃焼部が検出された。煙道部は長さ60cm、幅25cm、底面は先端に向かって徐々に高くなっている。削平のため煙出しピットは検出されなかった。燃焼部は奥行き140cm、幅98cm、煙道部との境は明瞭ではない。燃焼部の底面、奥壁、側壁内面は火燃により赤変している。燃焼部側壁前面に礫が検出されており、赤変していることからカマド袖部の補強に用いられたものであると考えられる。

［周溝］北壁西半部から西壁沿いに検出された。幅34～13cm、深さ３～８ cm、断面形は浅い「U」字形である。底面レベルは周溝東端部が最も高く南西部に向かって徐々に低くなる。

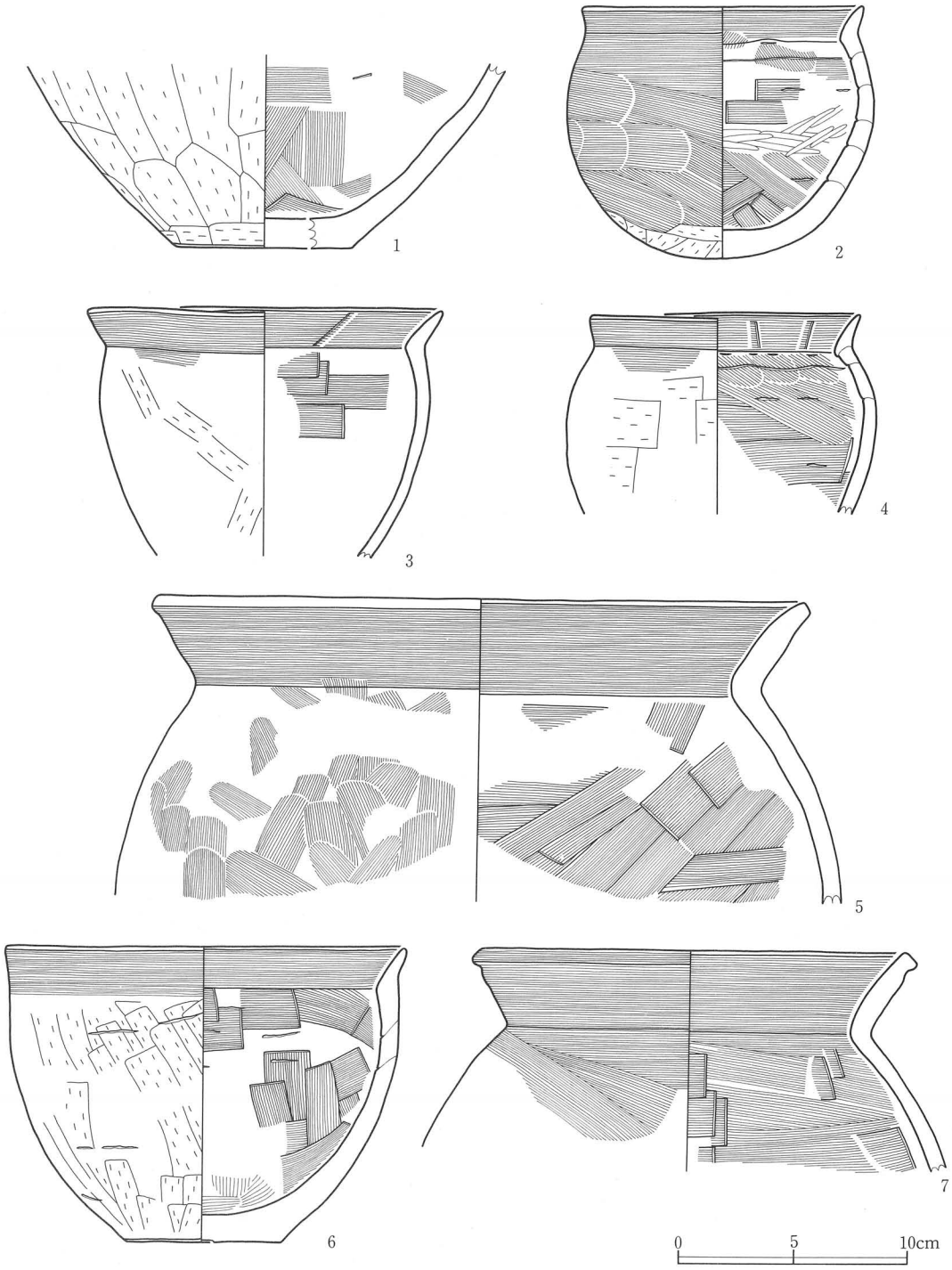
［貯蔵穴状ピット］ピット５が貯蔵穴状ピットであると考えられる。カマド東脇に位置し、長軸118cm、短軸110cm、深さ77cm、不整な円形である。

［出土遺物］床面及び貯蔵穴状ピット、堆積土より土師器が出土している。特にカマド西脇に一括遺物が集中して出土している。



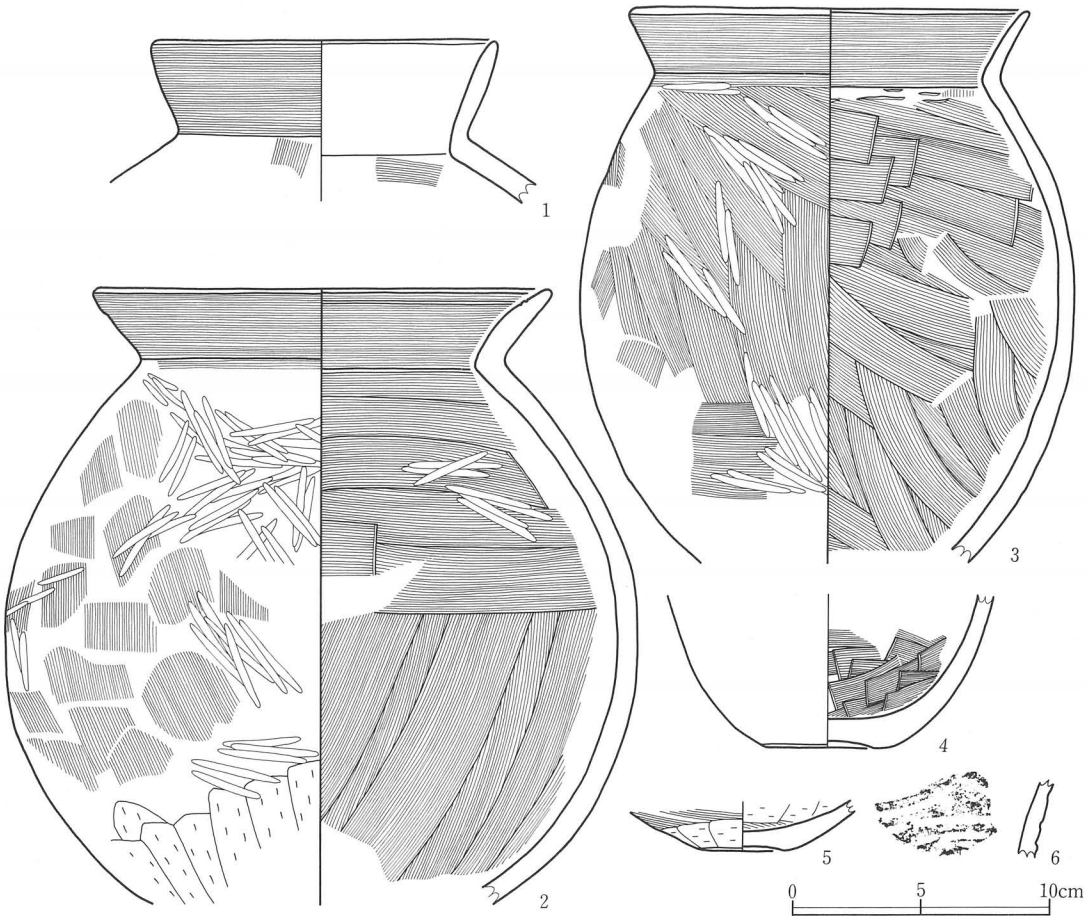
No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考	
1	カマド	土師器	鉢	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ	中Ａ類	図版48-18
2	貯蔵穴	土師器	鉢	ナデ	ヘラナデ、上半部はマメツ	ケズリ	小ＢⅡ類	図版48-19
3	貯蔵穴	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ、下半部はマメツ	ヨコナデ、ミガキ		Ｇ類	図版48-20
4	貯蔵穴	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		ＣⅠ類	
5	堆積土	土師器	杯	ケズリ、ヨコナデ	ハケメ、ヘラナデ、ミガキ	ケズリ	ＣⅠ類	図版48-21
6	堆積土	土師器	杯	ケズリ、ミガキ	ミガキ	ケズリ		

第28図　SI－８住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	カマド	土師器	甕	ケズリ	ナデ、ヘラナデ	ケズリ	胎土中に砂粒を多く含む
2	貯蔵穴	土師器	鉢	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ、ミガキ	ケズリ	中CⅠ類　図版49-7
3	貯蔵穴	土師器	鉢	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		中CⅡ類　図版49-8
4	貯蔵穴	土師器	鉢	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ、ヘラナデ		中CⅠ類　図版49-9
5	貯蔵穴	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		大EⅡ類
6	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ	ナデ、ケズリ	中CⅡ類　図版49-10
7	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ		中DⅡ類　図版49-11

第29図　SI－8住居跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ	ナデ		
2	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ、ケズリ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ		大B類　図版49-12
3	堆積土	土師器	甕	ナデ、ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		大C類　図版49-13
4	堆積土	土師器	甕 or 壺	マメツ	ヘラナデ	マメツ	
5	堆積土	土師器	甕 or 壺	ナデ、ケズリ	ナデ、ケズリ	ナデ	
6	カマド	弥生土器		沈線	マメツ		

第30図　SI－8住居跡出土遺物(3)

ＳＩ－９住居跡

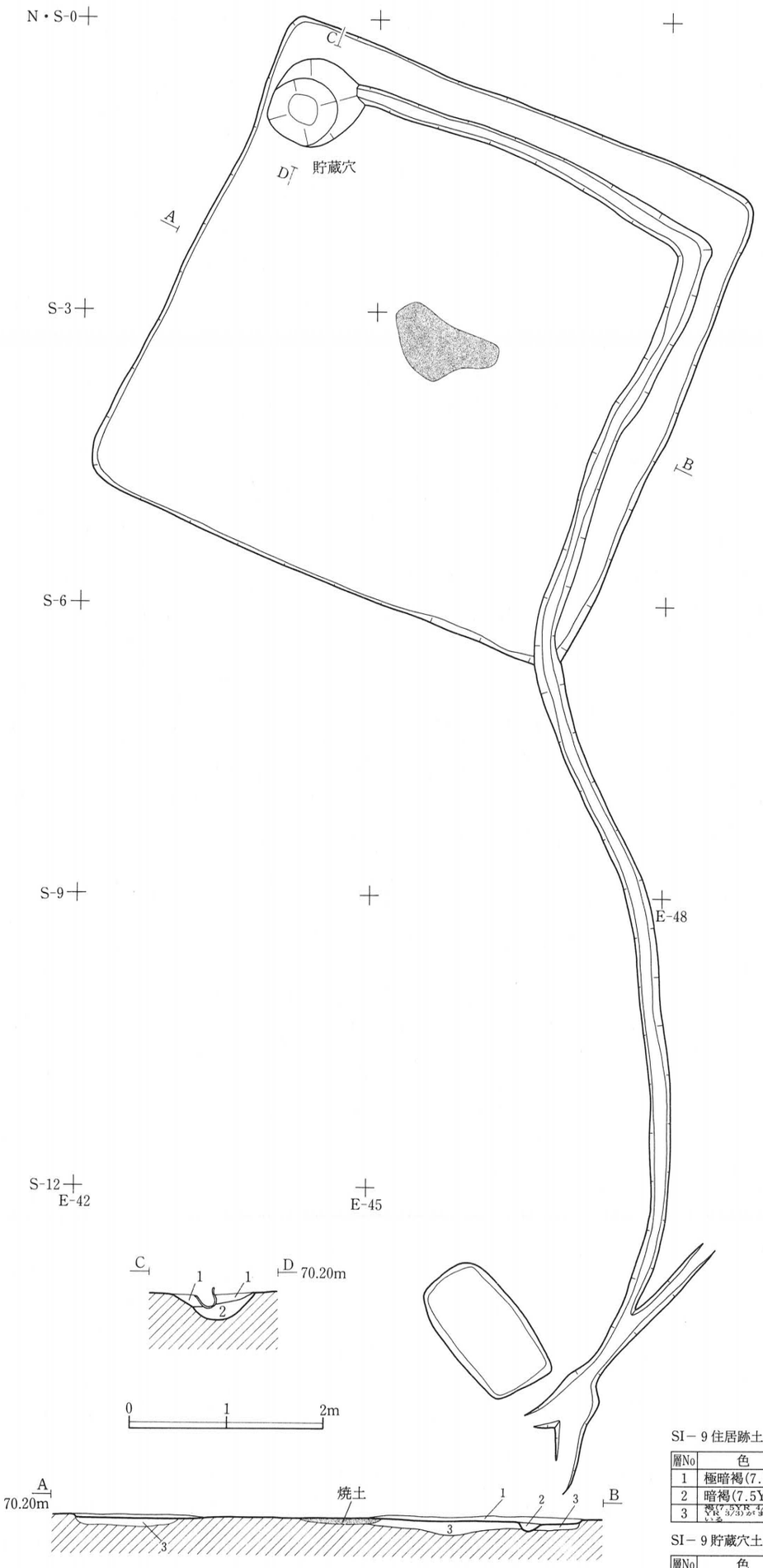
［遺構の確認］調査区の東寄り、Ｓ－２～18、Ｅ－42～48に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］一辺5.20m、ほぼ正方形である。

［堆積土］削平のため壁沿いにのみ残存していた。１層である。住居跡中央部は表土を除去した段階で既に床面が露出し、焼面がみられた。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い東隅で11cm である。床面から急角度で立ち上がる。

［床面］Ⅳ層を床としているが、南西壁際を除く壁際に幅110cm～220cm、深さ５～13cm の掘り



SI－9住居跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	極暗褐(7.5YR 2/3)	シルト	
2	暗褐(7.5YR 3/4)	シルト	褐(10YR 4/6)シルトをブロック状に含む。周溝埋土
3	褐(7.5YR 4/4)と暗褐(10YR 3/3)がまじりあっている	シルト	掘り方埋土

SI－9貯蔵穴土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	暗褐(10YR 3/3)	シルト	木炭・焼土を含む
2	黄褐(10YR 5/6)	シルト質粘土	遺物含む

第31図　SI－9住居跡

方が認められた。この部分は掘り方埋土上面を床面としている。凸凹しており、全体的に堅く締っている。中央部は特に堅い。床面レベルは中央部付近が最も高く、壁に向かって徐々に低くなっている。

［柱穴］ピットは検出されなかった。

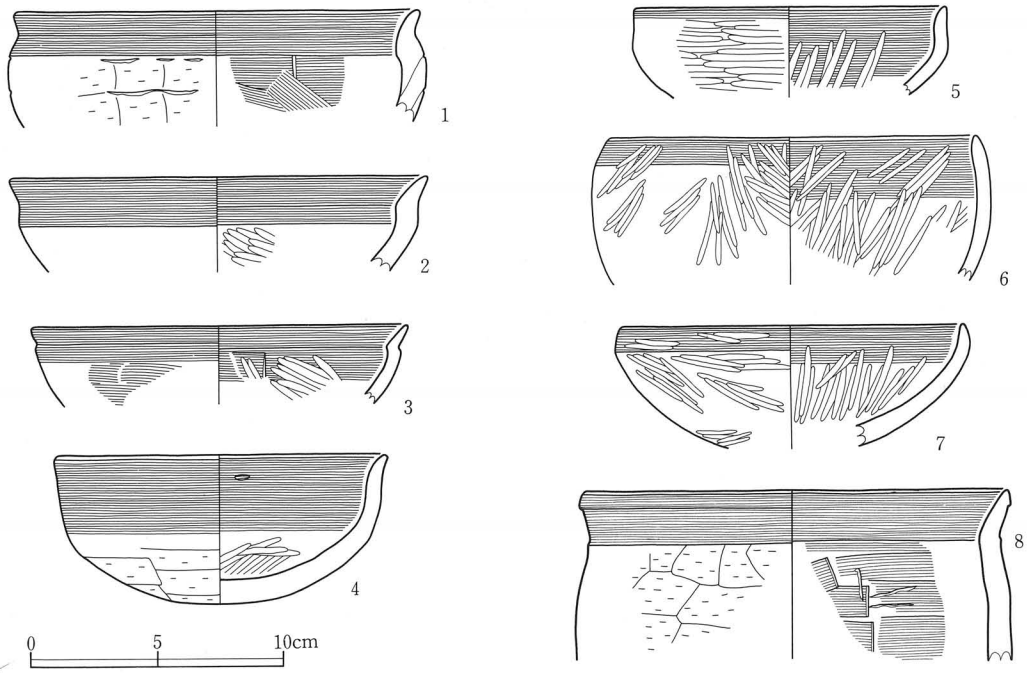
［炉］中央部分に位置し、床面と同一レベルで検出された。長軸110cm、短軸63cm の不整形な焼け面からなる地床炉である。

［周溝］北隅の貯蔵穴から北東壁、南東壁近くをめぐり、南隅で外延溝に接続する。壁下端からの距離は、50～33cm である。幅は28～16cm、深さ14～ 5 cm、断面形は「U」字形である。底面レベルは北側が高く南側に向かって徐々に低くなっている。

［貯蔵穴状ピット］１個検出された。北隅に位置し、長軸90cm、短軸85cm、深さ43cm、ほぼ円形である。東壁で周溝と接している。

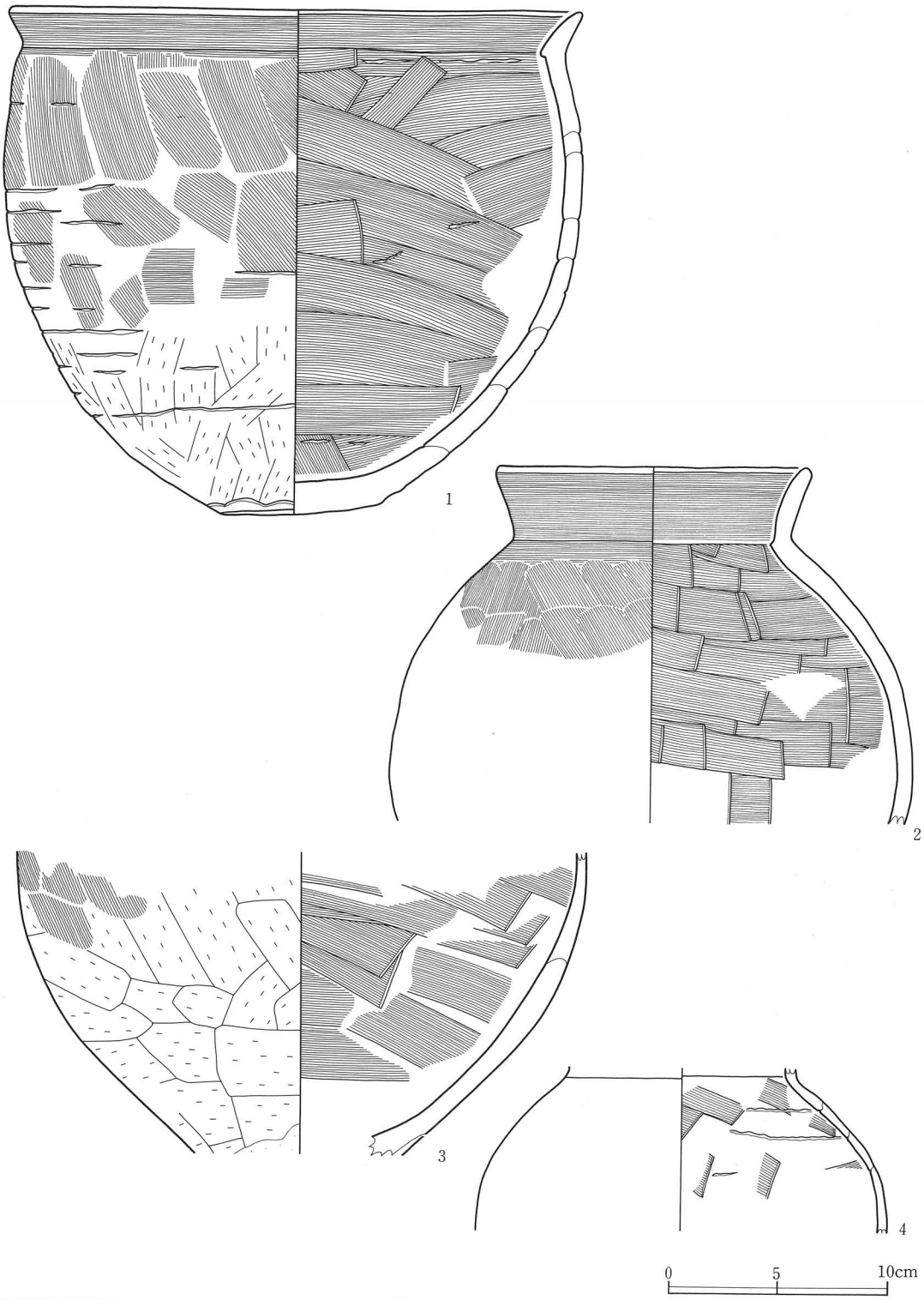
［外延溝］住居の南隅から住居外の南斜面に向かってゆるやかに変曲しながら延びている。長さは約8.9m、幅30～16cm、断面形は「U」字形である。底面レベルは斜面の傾斜に対応して、住居から離れるにつれて低くなる。先端近くで長さ2.55m、幅28～17cm、断面形「U」字形の溝と交差している。

［出土遺物］貯蔵穴、床面から土師器、須恵器片、土製品（紡錘車）等が出土している。



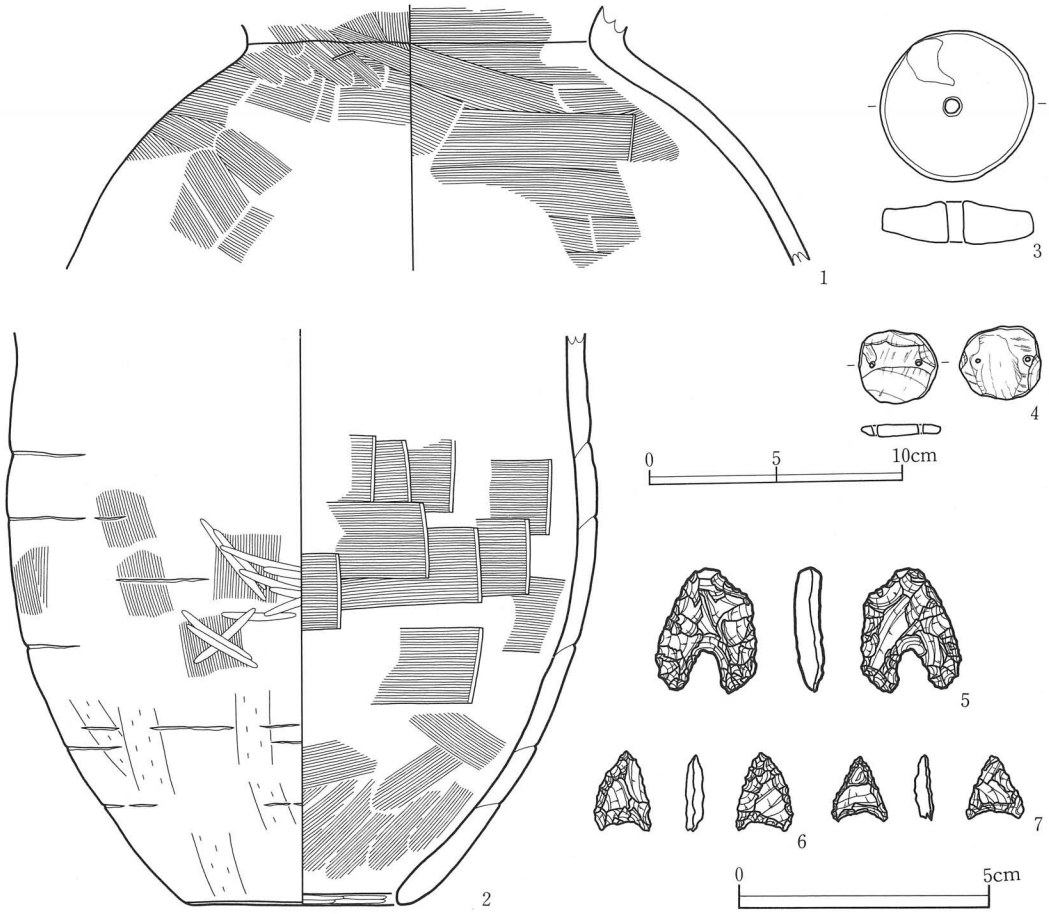
No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	床面	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ		ＢⅠ類
2	床面	土師器	杯	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ		ＢⅠ類
3	貯蔵穴	土師器	杯	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ、ミガキ		ＢⅠ類
4	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ	ケズリ	A類　内面にスス状炭化物
5	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		A類　図版48-22
6	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		DⅡ類
7	堆積土	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ		CⅡ類
8	堆積土	土師器	鉢	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ		中B類

第32図　SI－９住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	貯蔵穴	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	ケズリ	大D類　図版49-14
2	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		大C類　図版49-15
3	堆積土	土師器	甕	ケズリ、ナデ	ヘラナデ		胎土中に砂粒多く含む
4	貯蔵穴	土師器	壺	マメツ	ヘラナデ		

第33図　SI－9住居跡出土遺物(2)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甕	ナデ	ヨコナデ、ヘラナデ		
2	堆積土	土師器	甑	ナデ、ケズリ、ミガキ	ミガキ様のナデ、ヘラナデ		(A類)

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
3	床面	紡錘車	6.0×6.0×1.6	52.5	図版52-5

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
4	北東ピット	石製模造品	2.9×3.1×0.5	4.9	頁岩	図版52-67
5	周溝	石鏃	2.5×2.0×0.5	1.9	珪質頁岩	図版52-14
6	9住北側	石鏃	1.5×1.1×0.4	0.5	珪質頁岩	図版52-15
7	9住北側	石鏃	1.3×1.1×0.3	0.3	珪質頁岩	図版52-16

第34図　SI－9住居跡出土遺物(3)

ＳＩ－10住居跡

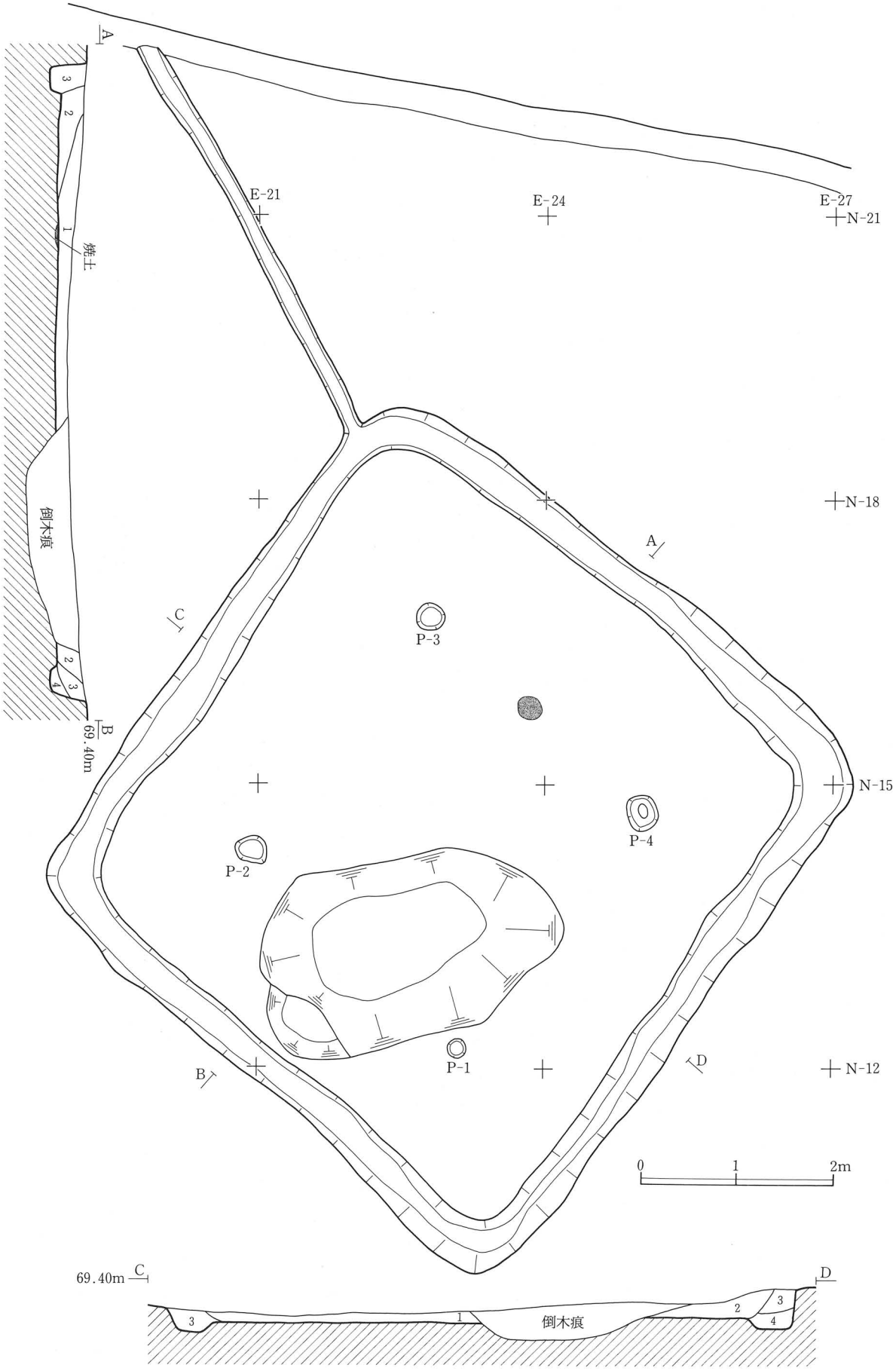
[遺構の確認] 調査区の北寄り、Ｎ－９～22、Ｅ－18～27に位置し、Ⅳ層上面で確認された。住居中央部よりやや南寄りに倒木による撹乱を受けている。

[平面形・規模] 長軸6.90m、短軸6.58m、ほぼ正方形である。

[堆積土] ４層に分けられる。

[壁面] Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い南隅で55cm である。床面から急角度で立ち上がる。

[床面] Ⅳ層を床としている。凸凹がある。床面レベルは東隅が最も高く、北隅が低くなってい



第35図　SI－10 住居跡

SI－10 住居跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	暗褐（10YR 3/4）	シルト	黒褐(10YR 2/3)シルトをブロック状に含む
2	暗褐（10YR 3/4）	シルト	褐(10YR 4/6)シルトを粉状に含む
3	にぶい黄褐（10YR 4/3）	シルト	暗褐(10YR 3/4)シルトを粉状に含む
4	黒褐（10YR 2/3）	シルト	

ピット表（cm）

No.	1	2	3	4
深さ	27	22	28	36

る。中央部から北東寄りにかけての部分が堅く締っている。

［柱穴］ 4個のピットが検出された。その規模、配置からピット1、2、3、4は柱穴であると考えられる。

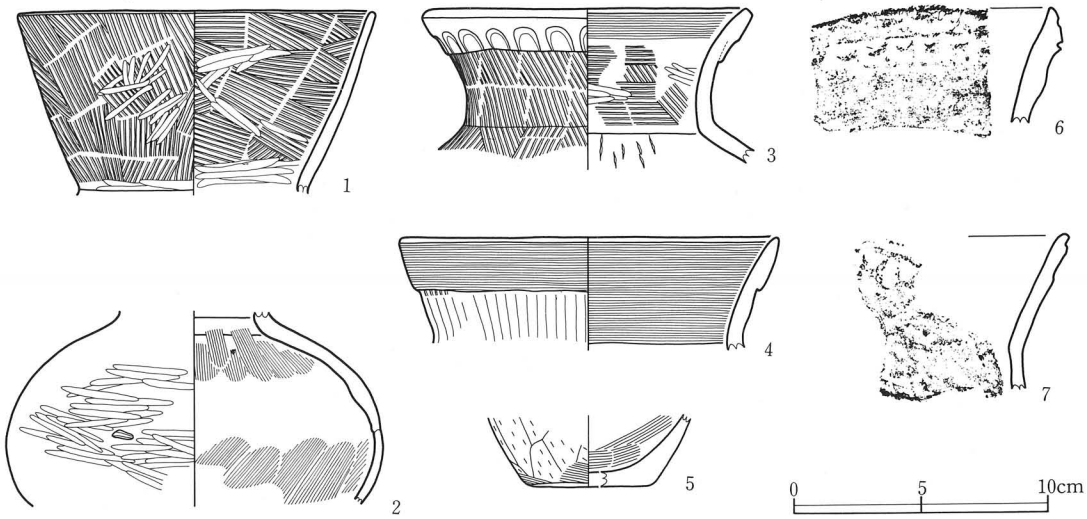
［炉］ 中央部より北東寄りの位置に床面と同一レベルで検出された。直径約25cm のほぼ円形の焼け面からなる地床炉である。

［周溝］ 壁沿いに一周する。幅59～28cm、深さ11～4 cm、断面形は「U」字形である。底面レベルは東隅が最も高く北東部の北寄り部分が最も低い。

［貯蔵穴状ピット］ 確認されなかった。

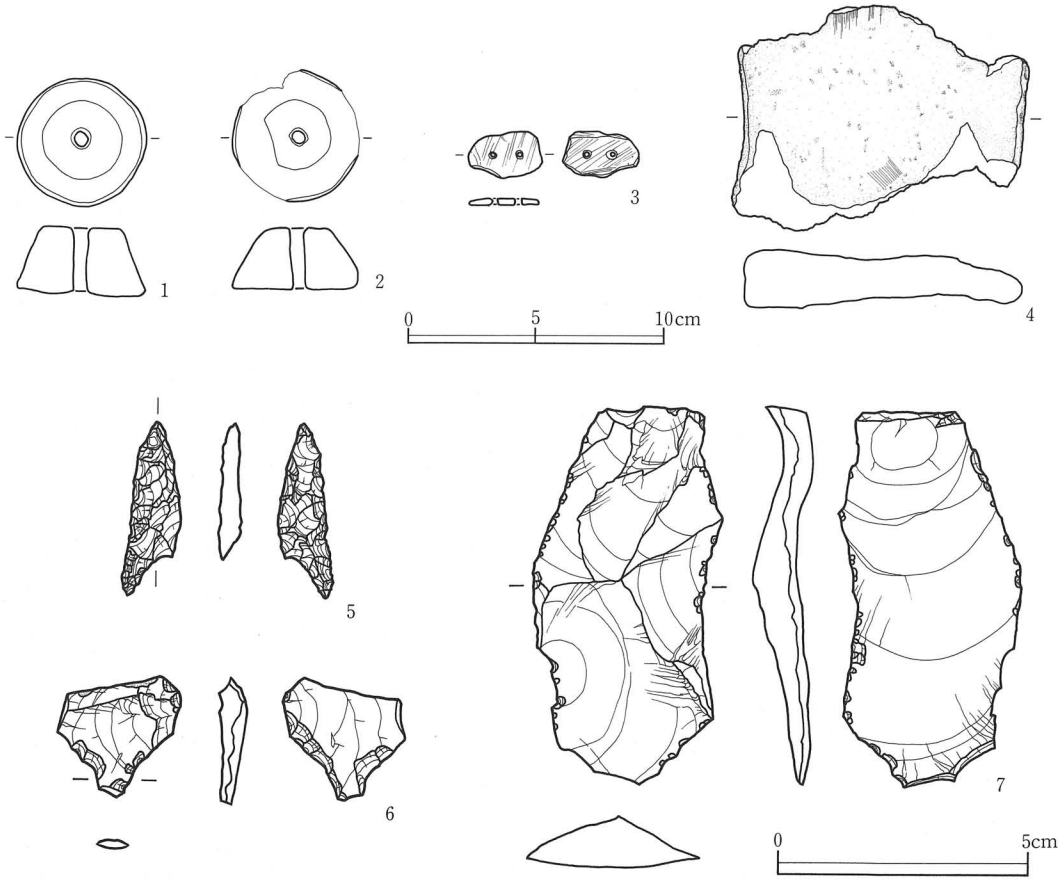
［外延溝］ 住居北隅近くから住居外の北西斜面に向かって延びる。先端部近くは北側の調査区外へ延びており、今回検出されたのはその一部であると考えられる。全体の規模は不明であるが、調査区内では長さ4.60m、幅27～16cm、断面形は「U」字形である。底面レベルは斜面の傾斜に対応して住居から離れるにつれて低くなる。

［出土遺物］ 床面、周溝内及び堆積土中から、弥生土器、土師器、土製品（紡錘車）等が出土している。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	堆積土	土師器	壺	ハケメ、ミガキ	ハケメ、ミガキ		中型　図版48-1
2	周溝	土師器	壺	ミガキ	ナデ		小型
3	検出面	土師器	壺	オサエメ、ハケメ	ヨコナデ、ハケメ、ミガキ		大型　図版50-10
4	検出面	土師器	壺	ヨコナデ、ミガキ、ハケメ少々	ヨコナデ		大型
5	検出面	土師器	甕	ケズリ、ナデ	ナデ	ナデ	
6	周溝	弥生土器		隆線、沈線、刺突	ナデ		図版51-11
7	堆積土	弥生土器		隆線、沈線、刻目	ナデ		

第36図　SI－10 住居跡出土遺物(1)



No.	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重 量(g)	備 考
1	周溝	紡錘車	5.0×5.1×2.7	70.0	図版52-6
2	周溝	紡錘車	5.2×5.0×2.5	53.5	図版52-7

No.	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
3	堆積土	石製模造品	1.9×2.9×0.5	2.1	珪質頁岩	図版52-68
4	堆積土	礫石器	9.0×11.6×2.2	250.0	石英安山岩	
5	堆積土	石鏃	3.5×1.2×0.4	1.3	珪質頁岩	図版52-17
6	堆積土	石錐	2.5×2.4×0.4	2.2	石英安山岩	図版52-31
7	検出面	スクレーパー	7.5×3.4×0.9	20.0	珪質頁岩	

第37図　SI－10 住居跡出土遺物(2)

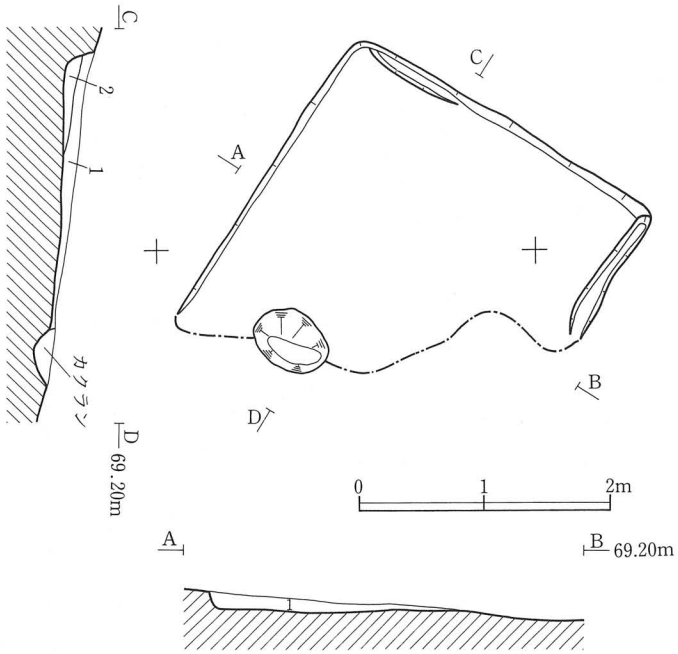
ＳＩ－11住居跡

［遺構の確認］調査区の南東端Ｓ－22～24、Ｅ－48-51に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］北東壁及び南東壁、北西壁の一部が検出されたがその他の部分は削平のため検出されなかった。平面形は残存部から判断し、長軸2.95m 以上、短軸2.73m の長方形を基調としたものであると考えられる。

［堆積土］２層に分けられる。

［床面］Ⅳ層を床面としている。凸凹がある。床面レベルは北東壁際が最も高く南側に向かって徐々に低くなる。中央部からやや北西寄りの部分が堅く締っている。



SI－11 住居跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	黒褐（10YR 3/3）	シルト質砂	固く締っている。基盤のスコリア状の小礫をわずかに含む
2	にぶい黄褐(10YR 4/3)	シルト質粘土	スコリア状の小礫をわずかに含む

第38図　SI－11 住居跡

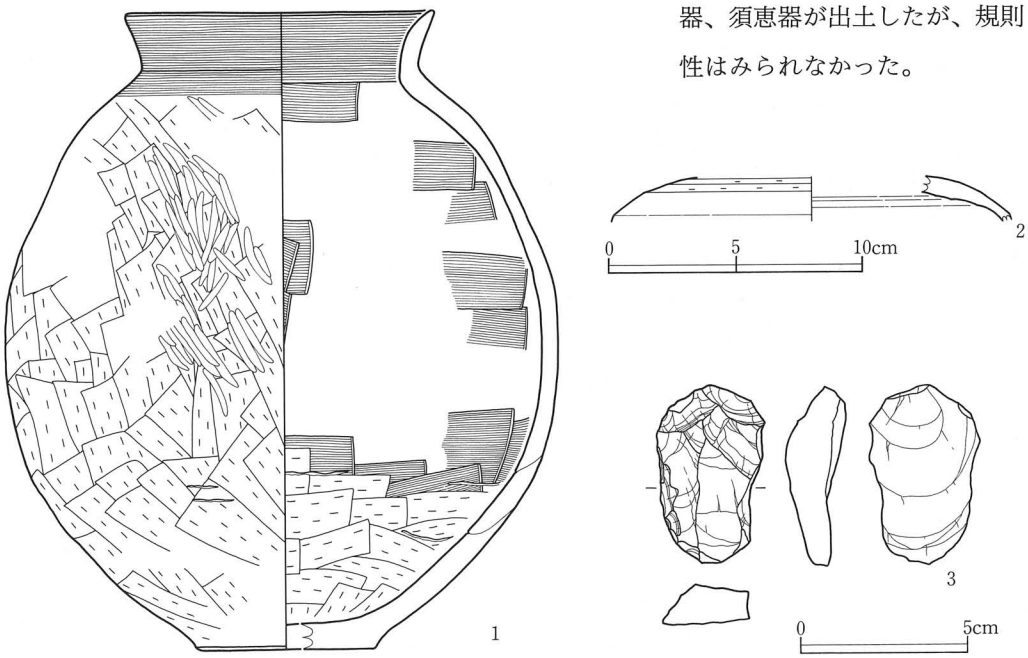
［壁面］Ⅳを壁としている。壁高は最も保存の良い北隅で31cmである。床面から急角度で立ち上がる。

［柱穴］ピットは検出されなかった。

［周溝］北東壁沿いに0.86m、南東壁沿いに1.06mの長さで検出された。幅は18～13cm、深さ6～3 cm、断面形は「U」字形である。底面レベルは南側に向かって徐々に低くなっている。

［貯蔵穴状ピット］確認されなかった。

［出土遺物］堆積土中より土師器、須恵器が出土したが、規則性はみられなかった。



No.	層位	種別	器形	外　面	内　面	底　面	分類・備考
1	堆積土	土師器	甕	ヨコナデ、ケズリ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ	ケズリ	中B類　図版50-1
2	堆積土	須恵器	蓋	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整		

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重　量(g)	石　材	備　考
3	堆積土	二次加工	5.3×3.2×1.5	20.6	石英安山岩	

第39図　SI－11 住居跡出土遺物

ＳＩ－12住居跡

［遺構の確認］調査区中央部のやや南寄り、Ｓ－５～８、Ｅ－５～９に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］長軸3.67m、短軸2.80m、楕円形である。

［堆積土］２層に分けられる。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い北側で24cm である。床面から緩やかな角度で立ち上がる。

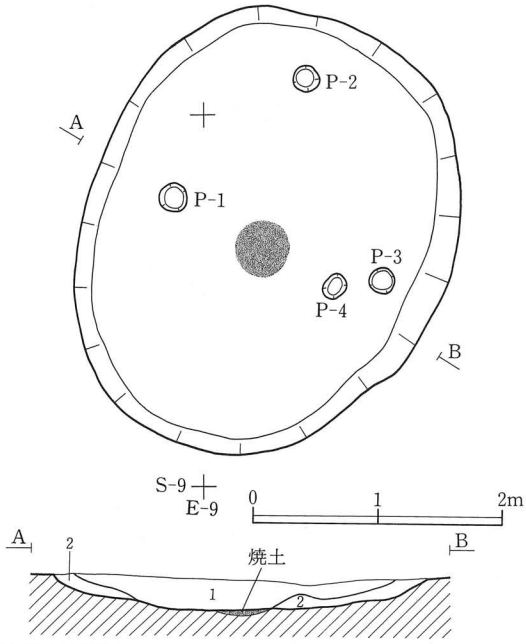
［床面］Ⅳ層を壁としている。凸凹はないが、床面レベルは中央部が最も低く、壁に向かって徐々に高くなる皿状になっている。中央部分が最も堅く締っており、壁沿いの部分は比較的柔らかい。

［柱穴］４個のピットが検出された。規模、配置からピット１、２、３が、柱穴と考えられる。

［炉］中央部に位置し、床面と同一レベルで検出された。直径約45cm の不整な円形の焼け面からなる地床炉である。

［周溝］確認されなかった。

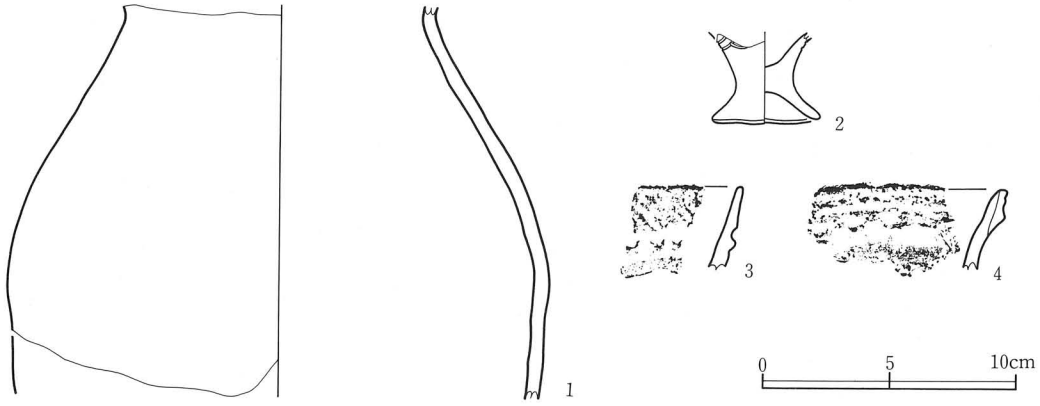
［出土遺物］床面及び堆積土中から弥生土器等が出土した。



SI－12 住居跡土層註記表

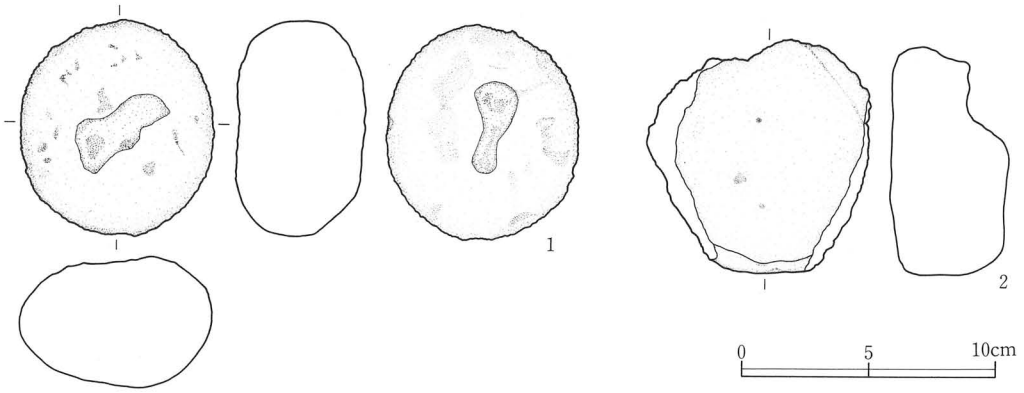
層No	色　調	土　性	備　考
1	暗褐（7.5YR 3/4）	シルト	炭粒含む
2	褐（10YR 4/4）	シルト	黄褐（10YR 5/6）シルト質粘土をブロック状に含む

第40図　SI－12 住居跡



No.	層位	種別	器形	外　面	内　面	底　面	備　考
1	床面	弥生土器	壺	ナデ、ミガキ	ナデ		図版51-15
2	堆積土	弥生土器	ミニチュア土器	沈線、マメツ	マメツ	マメツ	図版51-12
3	堆積土	弥生土器		縄文 RL、隆線、沈線、刻目	ナデ		図版51-13
4	床面	弥生土器		隆線、沈線、押圧、擦条圧痕	ナデ		図版51-14

第41図　SI－12 住居跡出土遺物(1)



No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	堆積土	礫石器	7.6×8.6×5.1	435.5	ガラス質石英安山岩(ピッチストーン)松脂岩	図版52-65
2	堆積土	礫石器	9.3×8.7×4.5	429.0	石英安山岩質凝灰岩	

第42図　SI－12 住居跡出土遺物(2)

ＳＩ－13住居跡

［遺構の確認］調査区の北東寄り、Ｎ－４～11、Ｅ－35～42に位置し、Ⅳ層上面で確認された。SK37 土坑と重複しており、本遺構が SK37 土坑を切っている。

［平面形・規模］南東壁の一部及び南隅が検出された。その他の部分は削平されていたが、床面の残存部及び床面下の土の締りの違いから平面形は一辺約5.8m の方形を基調としたものであると考えられる。

［堆積土］床面の残存部分に僅かに１層確認された。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。南隅で僅かに高さ５ cm のみ残存する。

［床面］Ⅳ面を床面としており、南東部分に残存するのみである。平坦でほぼ同一レベルである。

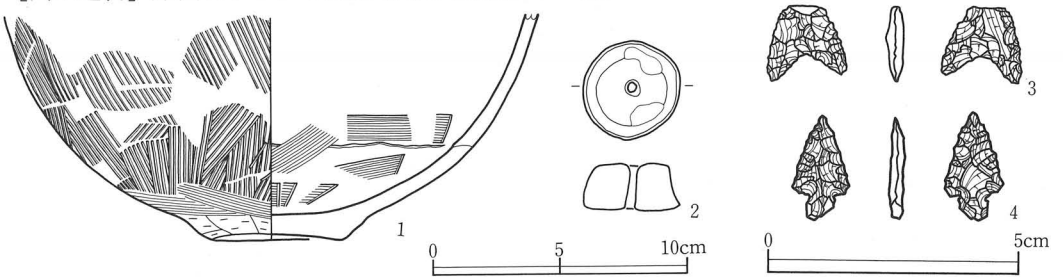
［柱穴］６個のピットが検出された。ピットの規模、配置からピット１、２、５、６が柱穴と考えられる。その他は柱穴とは考えられない。

［炉・カマド］検出されなかった。

［周溝］検出されなかった。

［貯蔵穴状ピット］検出されなかった。

［出土遺物］床面ピットから土師器等が出土している。

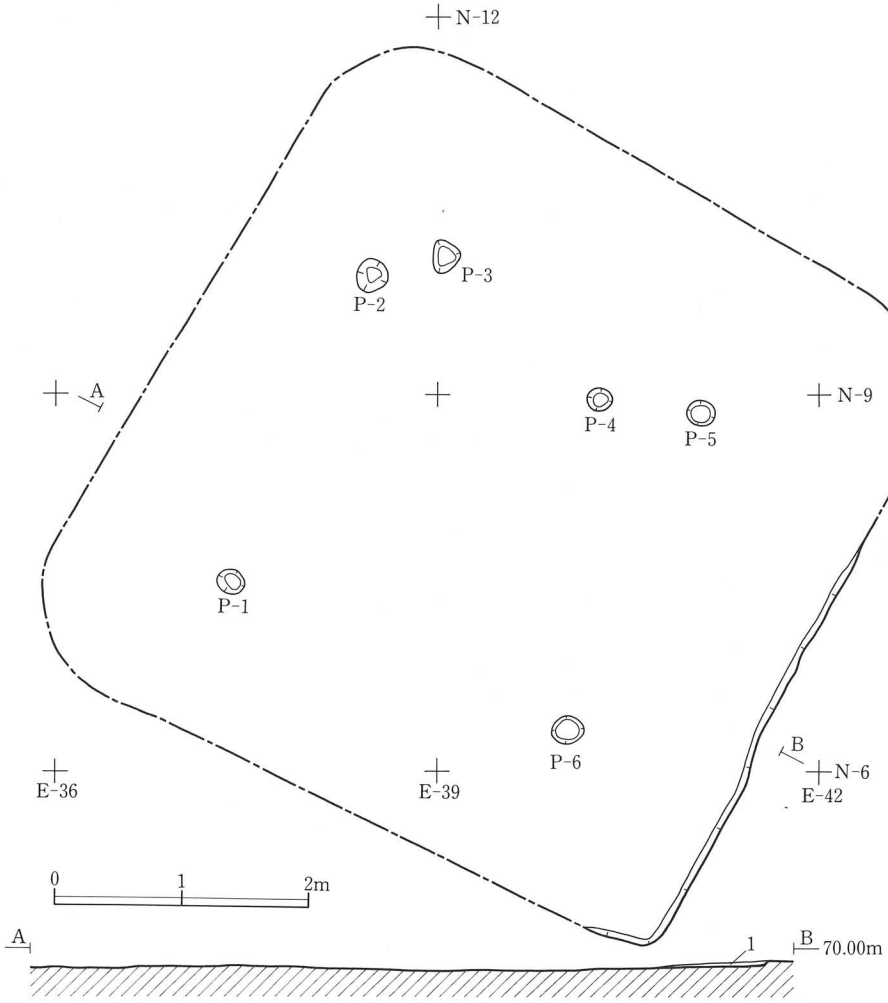


No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	ピット6	土師器	壺	ハケメ、ナデ、ケズリ	ヘラナデ、ナデ	ケズリ	

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
2	ピット6	紡錘車	3.9×3.8×1.9	29.2	図版52-8

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
3	堆積土	石鏃	1.5×1.6×0.3	0.5	珪質頁岩	図版52-18
4	貼床中	石鏃	2.1×1.1×0.3	0.5	珪質頁岩	図版52-19

第43図　SI－13 住居跡出土遺物



SI－13 住居跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	褐（7.5YR 4/6）	シルト	

ピット表（cm）

No.	1	2	3	4	5	6
深さ	48	36	9	22	43	45

第44図　SI－13 住居跡

ＳＩ－14竪穴遺構

［遺構の確認］調査区中央部のやや南寄り、Ｓ－２～５、Ｅ11～14に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］長軸3.34m、短軸2.62m、丸味を帯びた不整な長方形である。

［堆積土］２層に分けられる。１層中には焼土が多量に混入する部分がある。

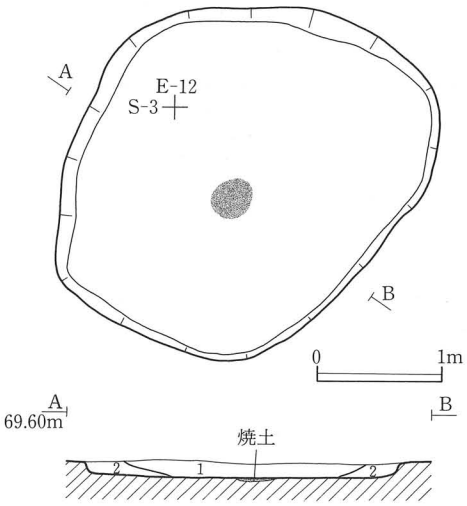
［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い北側で14cm である。底面から緩やかな角度で立ち上がる。

［底面］Ⅳ層を底面としている。凸凹はないが、底面レベルは中央部が最も低く壁に向かって

徐々に高くなっている。中央部分は堅く締っているが壁沿いの部分は比較的柔らかい。

［底面の施設］中央部に底面と同一レベルで、長軸36cm、短軸30cmの楕円形の焼け面が検出された。その他にピット、周溝等の施設は検出されなかった。

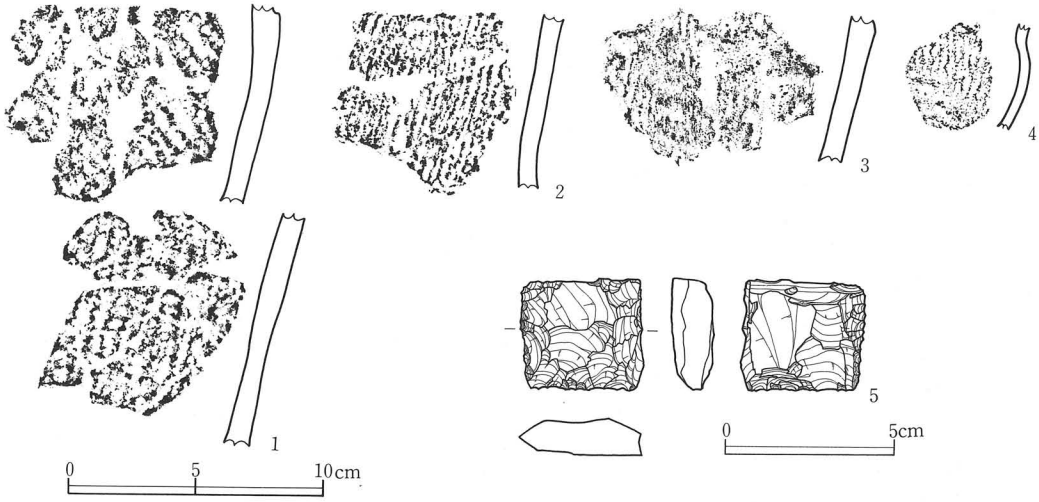
［出土遺物］底面及び堆積土から縄文土器等が出土した。



SI－14 竪穴遺構土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	にぶい黄褐（10YR 4/3）	粘土質シルト	
2	にぶい黄褐（10YR 4/3）	粘土質シルト	より明るい。いくぶん粘性有り

第45図　SI－14 竪穴遺構



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	底面	縄文土器		縄文 RL	ナデ		胎土中に植物繊維混入。 図版51-1
2	底面	縄文土器		縄文 R	ナデ		胎土中に植物繊維混入。3と同一個体。図版51-2
3	底面	縄文土器		撚糸 R	ナデ		
4	堆積土	縄文土器		撚糸 RL	ナデ		

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
5	堆積土	スクレーパー	3.6×3.3×1.1	19.4	珪質頁岩	

第46図　SI－14 竪穴遺構出土遺物

ＳＩ－15堅穴遺構

［遺構の確認］調査区の南東寄り、Ｓ－16～18、Ｅ－33～37に位置し、Ⅳ層上面で確認された。ＳＫ－35土坑と重複関係にあるが新旧関係は不明である。また、西端部は木根による撹乱を受けている。

［平面形・規模］北に面する壁及び東に面する壁の一部が検出されたが、その他の壁は削平と撹

乱のため検出されなかった。残存部から判断して一辺2.5m以上の隅丸方形を基調としたものであると考えられる。

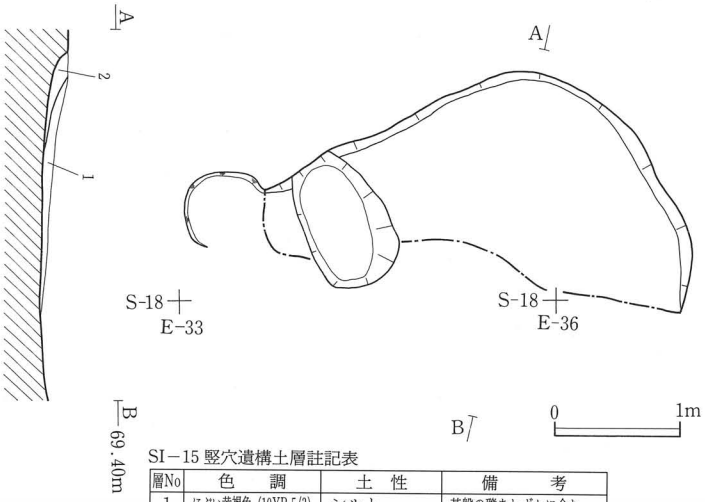
［堆積土］北半部にのみ残存する。2層に分けられる。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い北隅付近で14cmである。底面からの立ち上がりは一部を除いて急角度である。

［底面］Ⅳ層を床としている。細かい凸凹がある。底面レベルは北側が高く、南側に向かって徐々に低くなる。

［底面の施設］底面でピット、周溝等の施設は検出されなかった。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。



SI－15 竪穴遺構土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	シルト	基盤の礫をわずかに含む
2	褐 (10YR 4/4)	シルト	いくぶん粘性有り

第47図　SI－15 竪穴遺構

ＳＩ－16竪穴遺構

［遺構の確認］調査区の西寄り、S－0～N－2、W－34～36に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

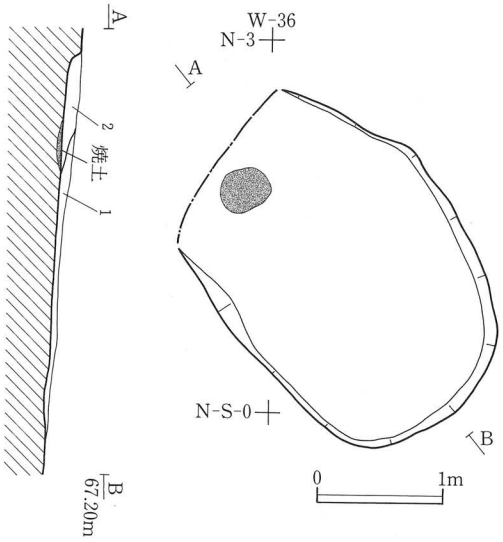
［平面形・規模］南東壁及び北東壁、南西壁の一部が検出されたがその他の壁は削平のため検出されなかった。平面形は残存部から判断して長軸2.82cm以上、短軸2.02mの楕円形あるいは隅丸の長方形を基調としたものであると考えられる。

［堆積土］2層に分けられる。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い東隅付近で16cmである。底面から緩やかな角度で立ち上がる。

［底面］Ⅳ層からなり、平坦である。底面レベルは東隅付近が最も高く南西側へ向かって徐々に低くなる。全体的に堅く締っている。

［底面の施設］北西部寄りに底面と同一



SI－16 竪穴遺構土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	にぶい黄褐 (10YR 4/3)	シルト	いくぶん粘性有り。底面付近に木炭を含む
2	オリーブ褐 (2.5Y 4/4)	シルト	

第48図　SI－16 竪穴遺構

レベルで、長軸43cm、短軸33cm の不整な楕円形の焼け面が検出された。その他にピット、周溝等の施設は検出されなかった。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

ＳＩ－18竪穴遺構

［遺物の確認］調査区のやや西寄り、Ｓ－10～３、Ｗ－17～20に位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［平面形・規模］長軸3.38m、短軸2.58m、やや不整な長方形である。

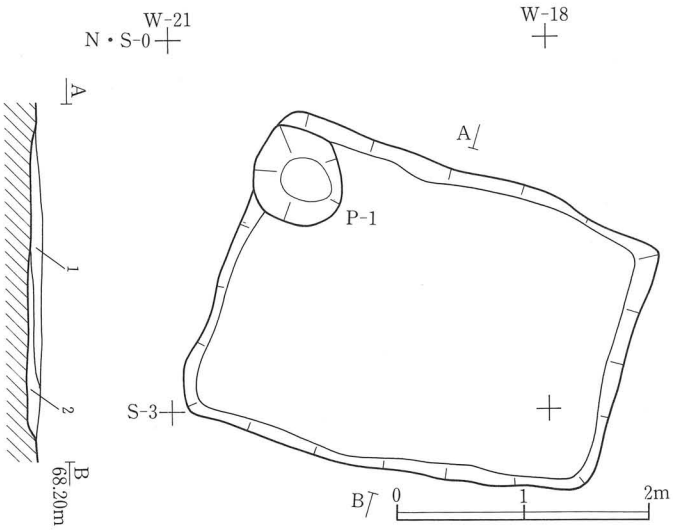
［堆積土］２層に分けられる。

［壁面］Ⅳ層を壁としている。壁高は最も保存の良い北東隅近くで18cm である。底面から緩やかに立ち上がる。

［底面］Ⅳ層からなり、凸凹が激しい。底面レベルは、北東隅が最も高く、南西隅に向かって徐々に低くなる。全体的に堅く締っている。

［底面の施設］北西隅に長軸78cm、短軸70cm、底面からの深さ31cm、不整円形のピットが検出された。竪穴堆積土１層が堆積している。その他に周溝、焼け面等の施設は検出されなかった。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。



SI－18 竪穴遺構土層註記表

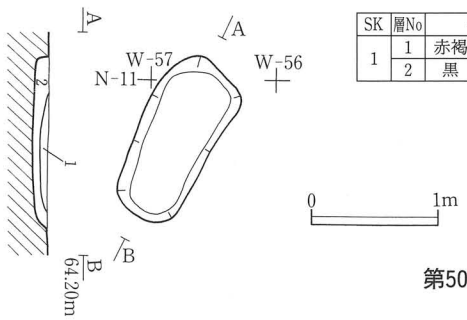
層No	色　調	土　性	備　考
1	褐　(10YR 4/4)	砂質シルト	基盤の礫をわずかに含む。木炭少しあり
2	黄褐 (10YR 5/6)	粘土質シルト	基盤の礫をわずかに含む。木炭少しあり

第49図　SI－18 竪穴遺構

(2)　土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺 物・備 考
1	隅丸長方形	1.4×0.7	西壁18、緩傾斜	平坦、同一レベル	西壁～底面焼面。底全面炭化物付着	

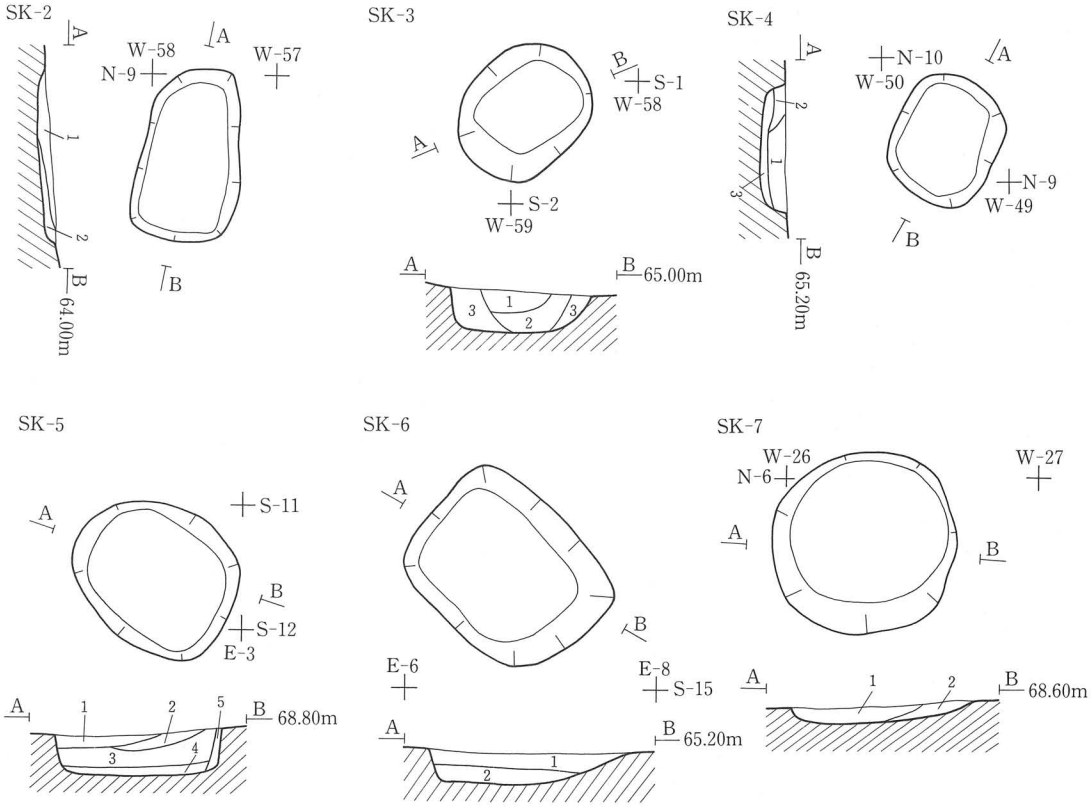
SK-1



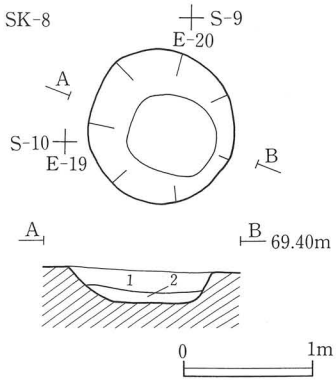
SK	層No	色　調	土　性	備　考
1	1	赤褐 (5YR 4/6)	砂質シルト	焼土がブロック化している。黒(5YR 1.7/1)をわずかに含む
	2	黒　(5YR 1.7/1)	砂質シルト	木炭を多量に含む

第50図　SK-1 土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺 物・備 考
2	不整長方形	1.42×0.75	南東隅12、急角度	平坦、北側高い	東～南壁焼面。底中央～南炭化物付着	
3	楕円形	1.15×0.93	南東壁31、急角度	平坦、中央低い	壁面焼面。底中央炭化物付着	
4	隅丸長方形	1.0×0.83	北東壁22、急角度	平坦、中央低い	一部壁～底面焼面。底全面炭化物付着	
5	隅丸長方形	1.4×1.17	北東壁39、急角度	平坦、中央低い	底面西側焼面。底面西半炭化物付着	
6	隅丸長方形	1.55×1.22	北側30、南以外急角度	小凸凹、南東側高い		土師器摩小片
7	不整円形	1.55×1.45	北東壁10、北壁急角度	平坦、中央低い		弥生土器、土師器摩小片
8	ほぼ円形	1.25×1.15	北壁28、緩傾斜	平坦、北西側高い		

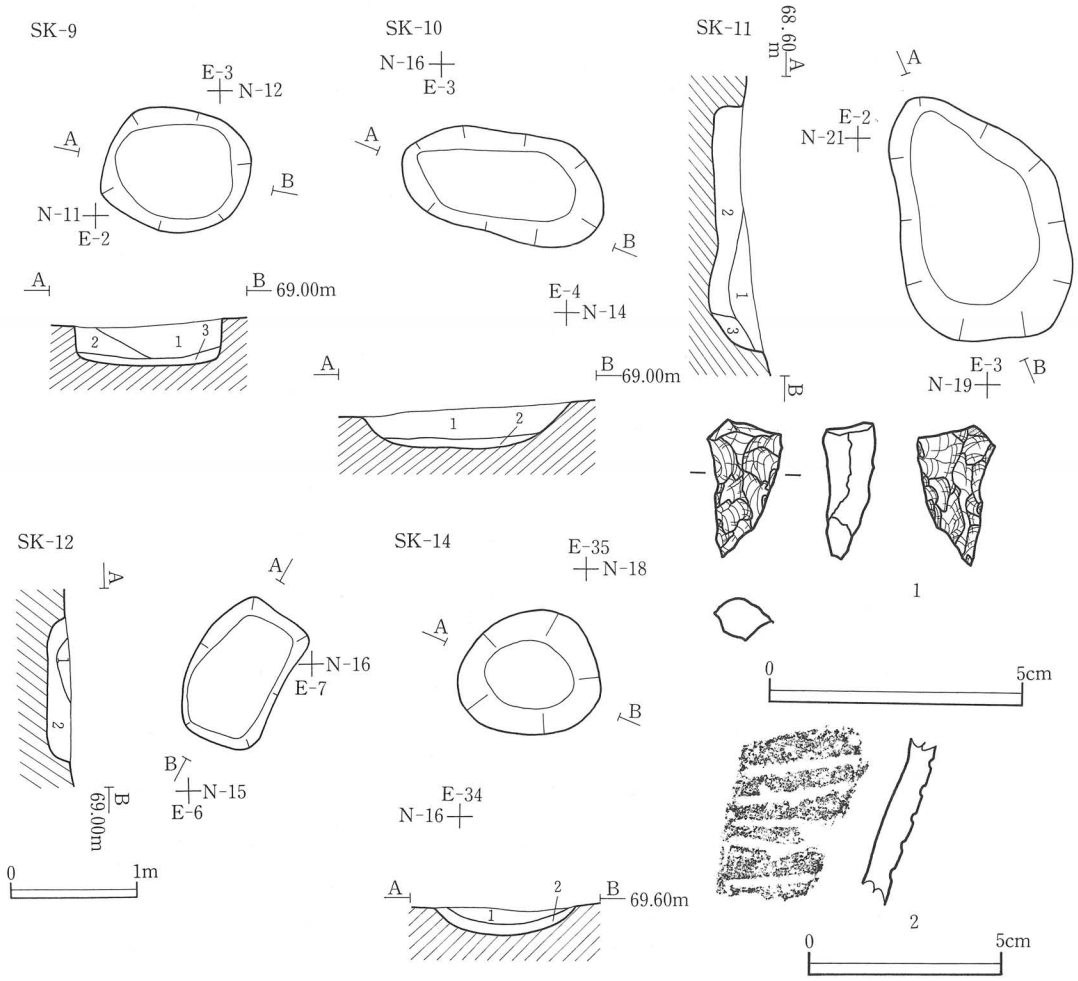


SK	層No	色　調	土　性	備　考
2	1	褐　(10YR 4/6)	砂質シルト	木炭をわずかに含む
	2	黒　(5YR 1.7/1)	砂質シルト	
3	1	黒　褐(10YR 3/2)	シルト	木炭を含む。ソフト
	2	黒　褐(10YR 2/2)	シルト	木炭を含む。ソフト
	3	にぶい黄褐(10YR 4/3)	シルト	木炭、焼土を含む
4	1	赤　褐(5YR 4/6)	砂質シルト	焼土層
	2	褐　(10YR 4/4)	シルト	赤褐 (5YR 4/4)、黒 (5YR 1.7/1) シルトをわずかに含む
	3	黒　(5YR 1.7/1)	砂質シルト	炭化物を多量に含む
5	1	黒　褐(10YR 3/2)	シルト	
	2	黒　褐(10YR 2/2)	シルト	木炭をわずかに含む
	3	暗　褐(10YR 3/3)	砂質シルト	木炭をわずかに含む
	4	黒　褐(10YR 2/2)	シルト	焼土を含む
	5	明　褐(7.5YR 5/6)	シルト質砂	
6	1	黒　褐(10YR 3/2)	シルト	基盤小礫を含む
	2	黒　褐(10YR 2/2)	シルト	木炭を含む
7	1	にぶい黄褐(10YR 4/3)	シルト	サラサラしている
	2	褐　(10YR 4/6)	シルト	やや砂っぽい
8	1	褐　(10YR 4/4)	シルト	
	2	黄　褐(10YR 5/6)	シルト	ロームブロック粒



第51図 SK-2・3・4・5・6・7・8土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺　物・備　考
9	楕円形	1.25×1.0	南壁32、急角度	平坦、中央低い	底面中央～東焼面。中央～西炭化物付着	
10	楕円形	1.67×0.8	北・南壁31、北・南急角度	凸凹、中央高い	底面西半焼面。炭化物付着	縄文・弥生土器摩小片
11	不整楕円形	2.15×1.42	南壁42、南壁緩傾斜	凸凹、中央高い		縄文土器摩小片
12	長方形	1.18×0.77	西壁19、急角度	凸凹、中央低い	北～東壁焼面。底全面炭化物付着	
14	楕円形	1.15×1.0	東壁19、緩傾斜	平坦、中央低い	北壁焼面。北壁～底面炭化物付着	



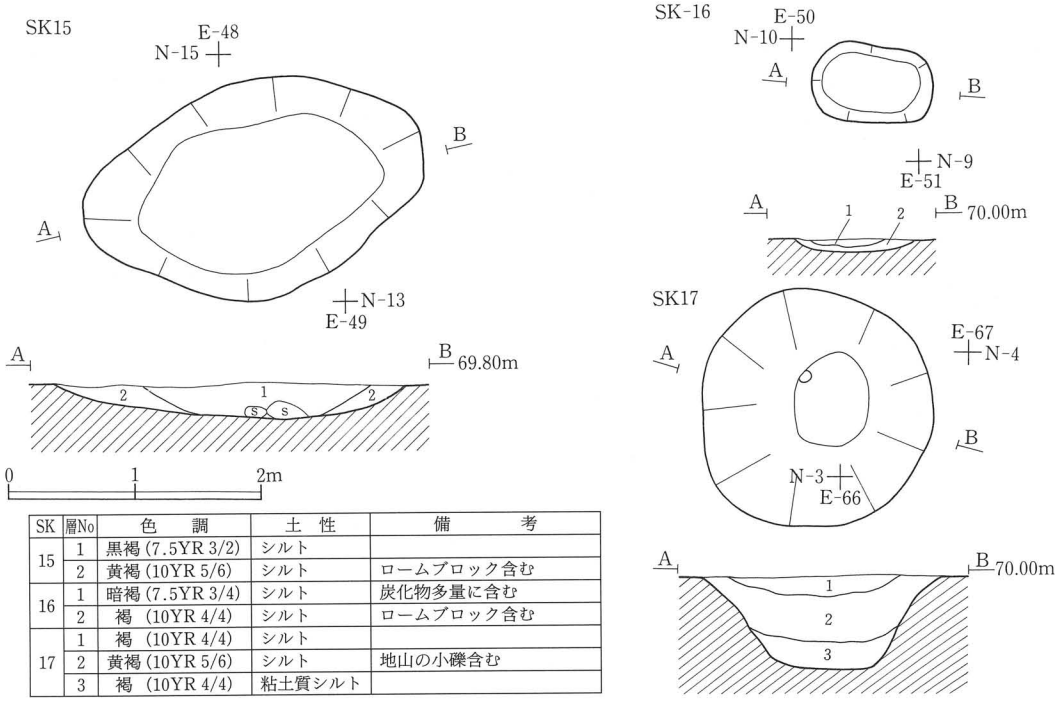
No.	遺　構	層　位	種　別	長×幅×厚(cm)	重　量(g)	石　材	備　考
1	SK-10	堆積土	石錐	2.7×1.5×1.0	3.6	玉髄	図版52-32

No.	遺　構	層　位	種　別	器　形	外　面	内　面	底　面	備　考
2	SK-11	堆積土	弥生土器		沈線	ナデ		

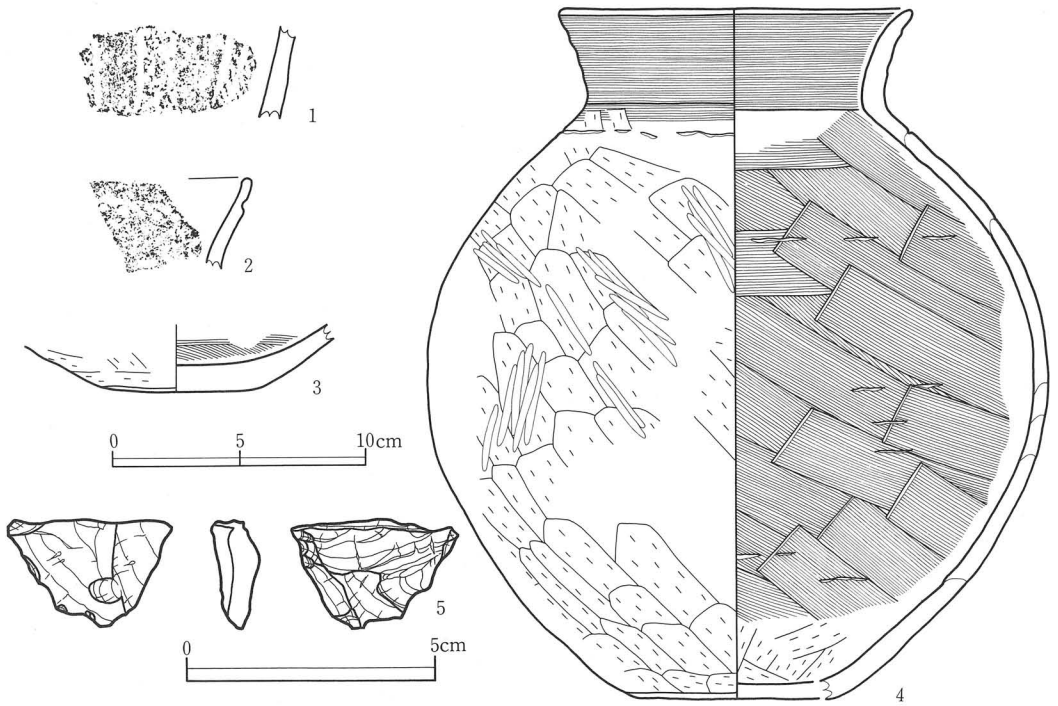
SK	層No	色　調	土　性	備　考
9	1	にぶい黄褐(10YR 4/3)	シルト質粘土	木炭をわずかに含む
	2	褐　(10YR 4/4)	シルト質粘土	にぶい黄褐（10YR 4/3）よりわずかに明るい。木炭をわずかに含む
	3	にぶい黄褐(10YR 4/3)	シルト質粘土	木炭を1、2より多く含む。SK－12、10よりは少ない
10	1	黒　褐(10YR 2/3)	シルト	
	2	黒　(10YR 1.7/1)	シルト	焼土をわずかに含む
11	1	にぶい黄褐(10YR 4/3)	シルト質粘土	
	2	にぶい黄褐(10YR 4/3)	シルト質粘土	底面に粘土質シルトをブロック状に含む
	3	褐　(10YR 4/6)	粘土質シルト	
12	1	黒　褐(10YR 2/3)	シルト	木炭をわずかに含む
	2	黒　(10YR 1.7/1)	シルト	木炭を多量に含む。木炭層に近い
14	1	暗　褐(7.5YR 3/3)	シルト	木炭、焼土粒を含む
	2	褐　(10YR 4/6)	粘土質シルト	

第52図 SK-9・10・11・12・14 土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺 物・備 考
15	楕円形	2.8×1.65	南壁22、緩傾斜	平坦、中央低い		縄文土器、土師器小片、石器
16	隅丸長方形	0.97×0.6	南壁８、緩傾斜	平坦、中央低い	南壁～底面焼面。南壁～底全面炭化物付着	
17	不整円形	1.9×1.9	77、急角度	平坦、北半高い		縄文土器片、土師器



SK	層No	色　調	土　性	備　考
15	1	黒褐 (7.5YR 3/2)	シルト	
	2	黄褐 (10YR 5/6)	シルト	ロームブロック含む
16	1	暗褐 (7.5YR 3/4)	シルト	炭化物多量に含む
	2	褐 (10YR 4/4)	シルト	ロームブロック含む
17	1	褐 (10YR 4/4)	シルト	
	2	黄褐 (10YR 5/6)	シルト	地山の小礫含む
	3	褐 (10YR 4/4)	粘土質シルト	

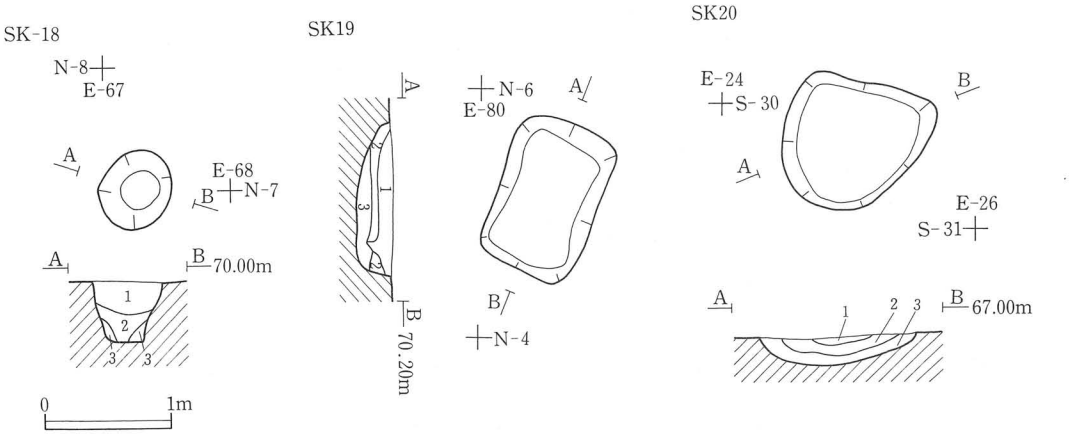


No.	遺 構	層 位	種 別	器 形	外　面	内　面	底　面	分 類・備 考
1	SK-15	堆積土	縄文土器		縄文 RL、沈線	マメツ		
2	SK-15	堆積土	弥生土器		刺突	マメツ		
3	SK-17	堆積土	土師器	甕 or 壺	ケズリ、大部分マメツ	ナデ	ケズリ	
4	SK-17	3 層上面	土師器	甕	ヨコナデ、ケズリ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラナデ、ケズリ		大C類　　図版50-2

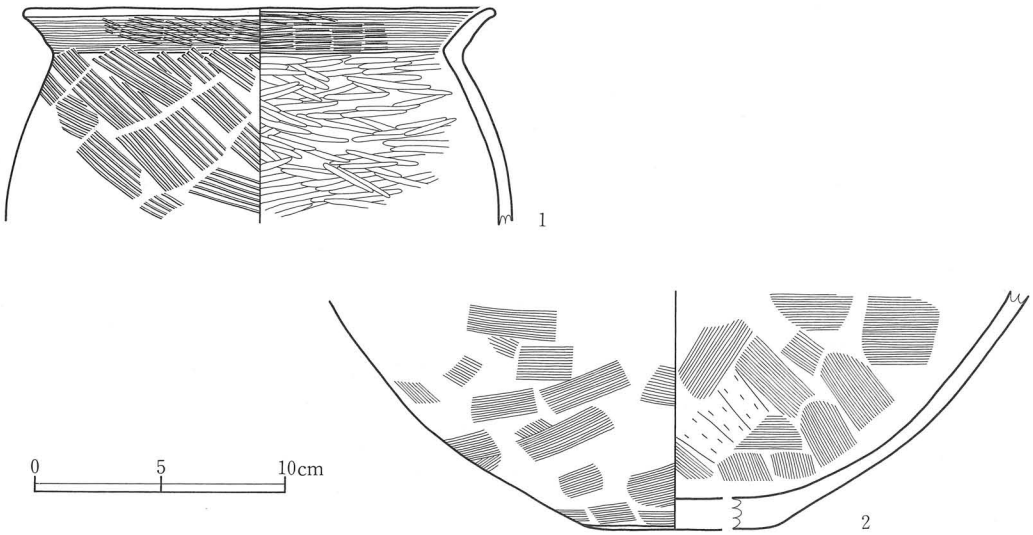
No.	遺 構	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重　量(g)	石　材	備　考
5	SK-17	堆積土	剝片	3.3×2.1×0.9	3.9	石英安山岩質凝灰岩(石英・斜長石)	

第53図　SK-15・16・17 土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺 物・備 考
18	楕円形	0.67×0.55	西壁52、急角度	平坦、北側高い		土師器
19	隅丸長方形	1.25×0.8	南壁27、北以外急角度	平坦、北側高い	南～東壁焼面。南・東壁～底全面炭化物付着	縄文土器摩小片
20	不整正方形	1.1×1.05	北壁17、北急角度	平坦、中央低い	底全面炭化物付着	



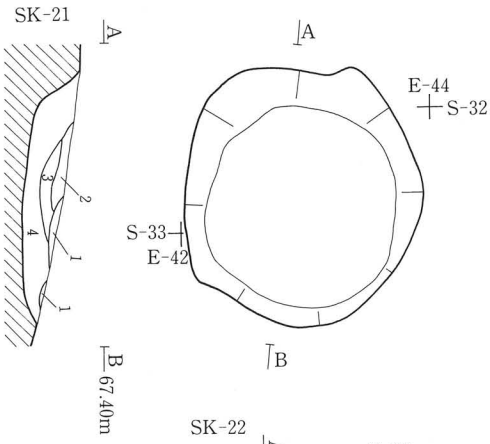
SK	層No	色　調	土　性	備　　考
18	1	暗褐(7.5YR3/3)	シルト	
	2	明褐(7.5YR5/6)	シルト	
	3	黄褐(10YR5/6)	粘土質シルト	
19	1	褐 (7.5YR4/4)	シルト	炭化物粒含む
	2	褐 (7.5YR4/6)	シルト	炭化物、焼土粒含む
	3	暗褐(10YR3/4) 黄褐(10YR6/5)	シルト 粘土質シルト	
20	1	黒褐(10YR3/2)	粘土質シルト	炭粒含む
	2	暗褐(7.5YR3/3)	シルト	炭焼土含む
	3	暗褐(10YR3/4)	シルト	粘性やや有り。炭粒多量に含む。ローム含む



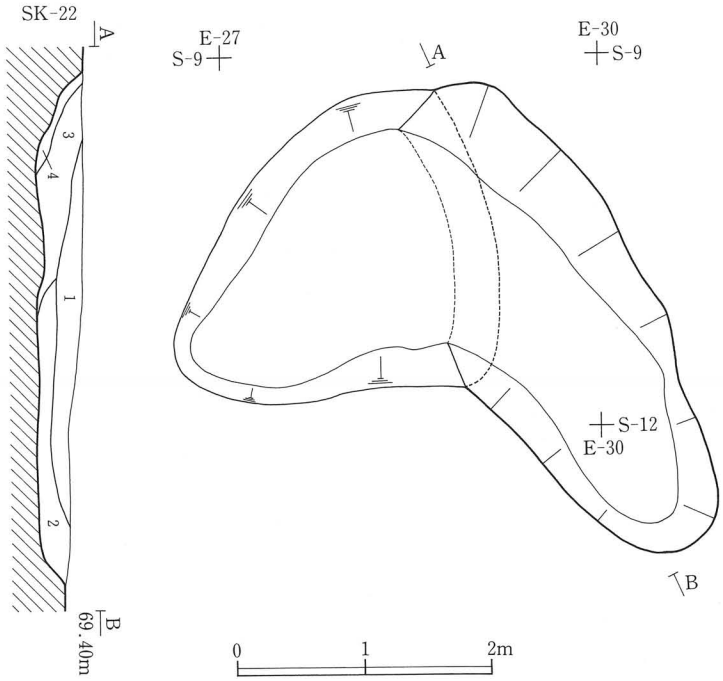
No.	遺構	層 位	種 別	器 形	外　面	内　面	底 面	備 考
1	SK-18	3層上面	土師器	甕	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ、ミガキ		
2	SK-18	床面	土師器	甕or壺	ナデ	ナデ、ケズリ	ナデ	図版50-3

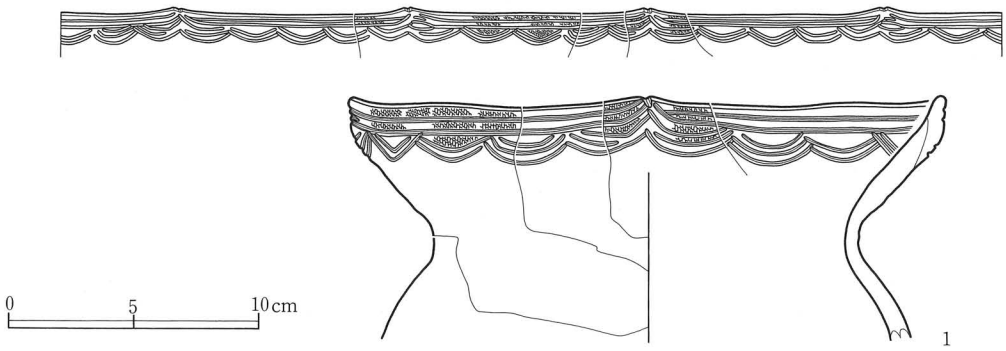
第54図　SK-18・19・20 土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺 物・備 考
21	不整円形	2.1×1.9	北東壁43、緩傾斜	平坦、北側高い		
22	不整楕円形	4.2×1.7	北壁34、緩傾斜	緩凸凹、中央低い		弥生土器、石器



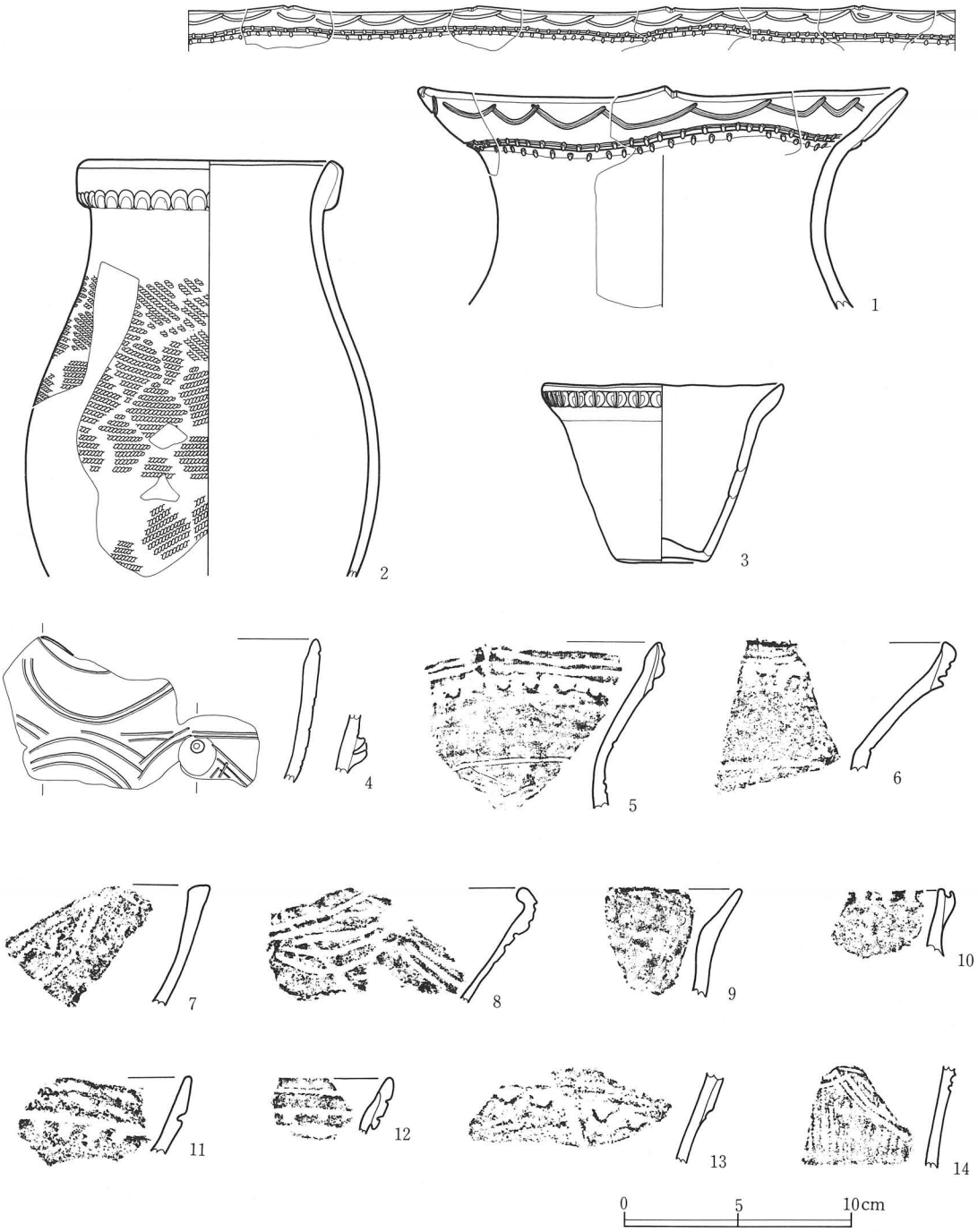
SK	層No	色　調	土　性	備　考
21	1	褐 (7.5YR4/4)	シルト	
	2	褐 (10YR4/6)	シルト	
	3	褐 (10YR4/6)	粘土質シルト	黄褐(10YR5/8)粘土を斑状に含む
	4	褐 (10YR4/4)	シルト	
22	1	黒褐(7.5YR2/2)	シルト	炭化物含む
	2	暗褐(7.5YR3/3)	シルト	炭化物、ローム粒含む
	3	暗褐(7.5YR3/4)	シルト	炭化物含む
	4	暗褐(10YR3/4)	シルト	ローム粒含む





No.	遺 構	層 位	種 別	器 形	外　面	内　面	底　面	備　考
1	SK-22	堆積土	弥生土器	甕	縄文 RL、沈線	ナデ		図版51-16

第55図　SK-21・22 土坑　SK-22 土坑出土遺物(1)



No.	遺構	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	SK-22	堆積土	弥生土器	甕	沈線、刺突	ナデ		図版51-17
2	SK-22	堆積土	弥生土器	壺	縄文 LR、押圧	ナデ		図版51-18
3	SK-22	堆積土	弥生土器	深鉢	押圧	ナデ	マメツ	図版51-19
4	SK-22	堆積土	弥生土器		縄文 RL、沈線、貼付、刺突	ナデ		図版51-20
5	SK-22	堆積土	弥生土器		隆線、沈線、刻目	ナデ		図版51-21
6	SK-22	堆積土	弥生土器		隆線、沈線、刻目	マメツ		図版51-22
7	SK-22	堆積土	弥生土器		沈線	ナデ		
8	SK-22	堆積土	弥生土器		沈線	ナデ		図版51-23
9	SK-22	堆積土	弥生土器		ナデ	ナデ		
10	SK-22	堆積土	弥生土器		隆線、沈線、刻目	ナデ		
11	SK-22	堆積土	弥生土器		R 撚糸圧痕、沈線、刻目	ナデ		図版51-24
12	SK-22	堆積土	弥生土器		沈線	ナデ		
13	SK-22	堆積土	弥生土器		隆線、刻目	マメツ		
14	SK-22	堆積土	弥生土器		縄文 RL、沈線	ナデ		

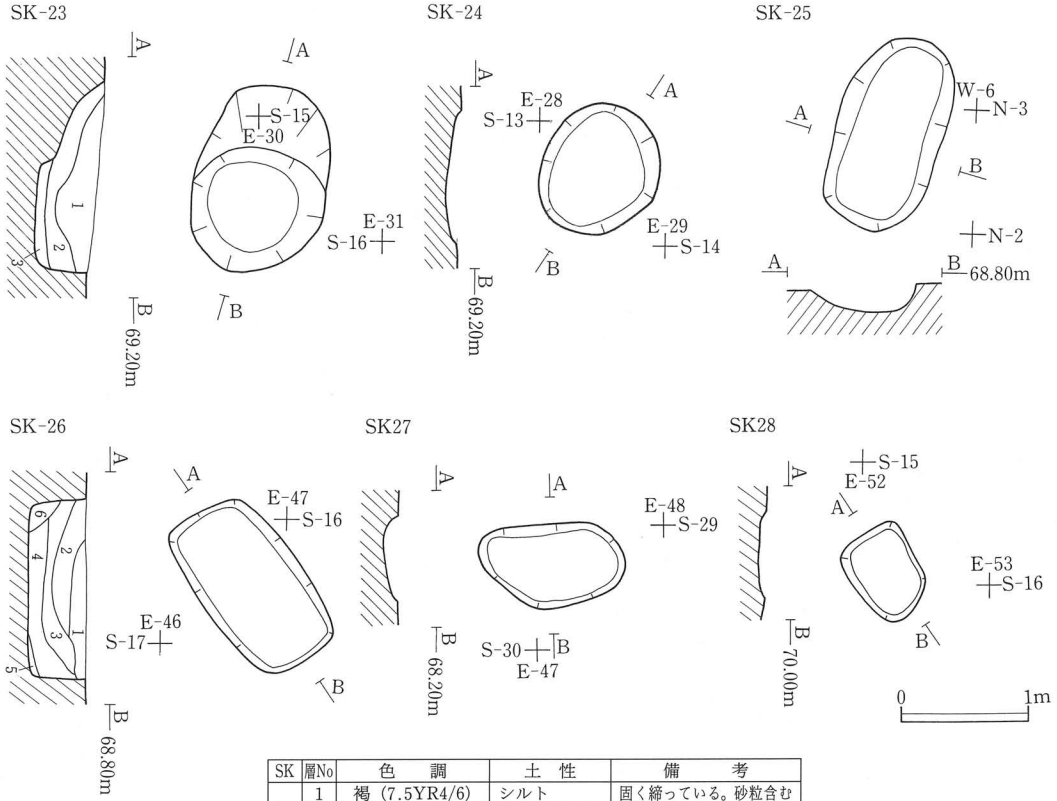
第56図　SK-22 土坑出土遺物(2)

No.	遺構	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	SK-22	堆積土	弥生土器		沈線	ナデ		
2	SK-22	堆積土	弥生土器		縄文 RL、沈線	ナデ		
3	SK-22	堆積土	弥生土器		縄文 LR、沈線	マメツ		
4	SK-22	堆積土	弥生土器		不明縄文、沈線	ナデ		
5	SK-22	堆積土	弥生土器	壺	縄文 RL、沈線	マメツ		図版51-25
6	SK-22	堆積土	弥生土器		沈線	ナデ		
7	SK-22	堆積土	弥生土器		縄文 RL、沈線	マメツ		図版51-26
8	SK-22	堆積土	弥生土器	脚付土器	縄文 LR	ナデ	ナデ	図版51-27
9	SK-22	堆積土	弥生土器	壺	縄文 RL	マメツ	マメツ	
10	SK-22	堆積土	弥生土器	深鉢	縄文 RL	ナデ	ナデ	
11	SK-22	堆積土	弥生土器		縄文 LR	ナデ	ナデ	

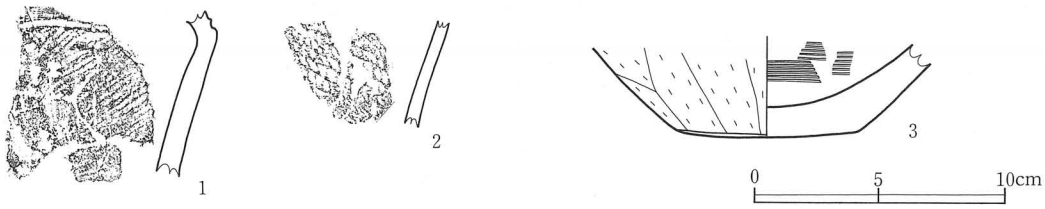
No.	遺構	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
12	SK-22	堆積土	石錐	3.6×0.9×0.5	1.7	珪質頁岩	図版52-33
13	SK-22	堆積土	スクレーパー	4.4×2.3×0.8	8.1	珪質頁岩	
14	SK-22	堆積土	スクレーパー	1.8×2.2×0.3	1.7	珪質頁岩	

第57図　SK-22 土坑出土遺物(3)

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺 物・備 考
33	隅丸長方形	1.67×1.17	北壁41、急角度	平坦、中央低い	壁全面～底一部焼面。底全面炭化物付着	壁上部崩落
34	不整隅丸長方形	1.42×1.2	北壁31、急角度	平坦、南北隅低い	壁下部焼面。壁下部～底全面炭化物付着	南東隅木根痕。壁上部崩落
35	不整隅丸長方形	1.1×0.7	北壁18、急角度	凸凹、北側高い		弥生土器片。SI15と重複関係不明
36	隅丸長方形	2.03×0.65	北壁51、急角度	平坦、北側高い		須恵器。SX1を切る
37	長楕円形	2.27×0.51	北東壁11、急角度	平坦、中央低い		石器。単層。暗褐(7.5YR3/3)シルト



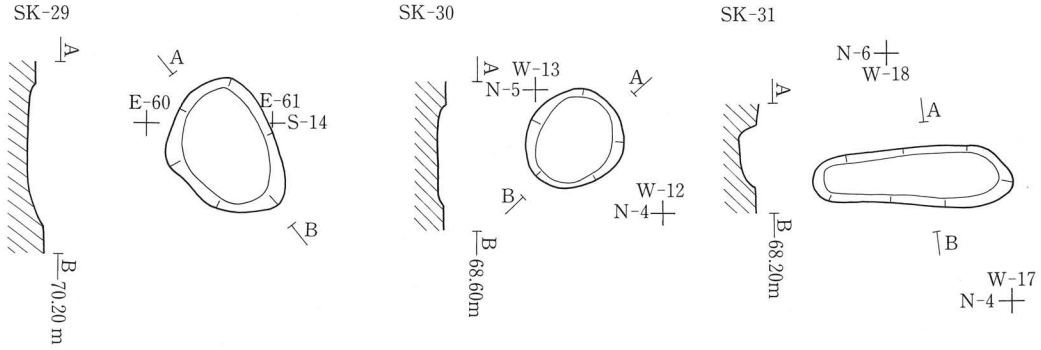
SK	層No	色　調	土　性	備　考
23	1	褐 (7.5YR4/6)	シルト	固く締っている。砂粒含む
	2	明褐(7.5YR5/6)	シルト	砂粒含む
	3	褐 (10YR4/6)	粘土質シルト	ローム粒含む
26	1	暗褐(10YR3/3)	シルト	焼土粒含む
	2	暗褐(10YR3/4)	シルト	炭粒多い
	3	褐 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭多い
	4	褐 (7.5YR4/4)	シルト	焼土塊に含む
	5	暗褐(7.5YR3/4)	粘土質シルト	焼土粒多い
	6	褐 (10YR4/6)	粘土質シルト	

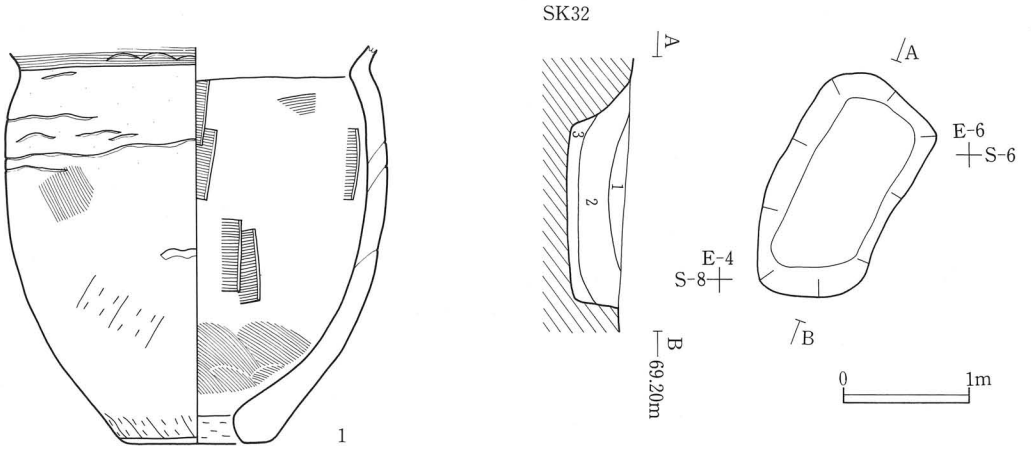


No.	遺 構	層 位	種 別	器 形	外　面	内　面	底　面	備　考
1	SK-23	堆積土	縄文土器		不明撚糸、沈線	ナデ		
2	SK-23	堆積土	縄文土器		縄文RL	ナデ		胎土中に植物繊維混入
3	SK-26	堆積土	土師器	甕	ケズリ	ハケメ	ケズリ	

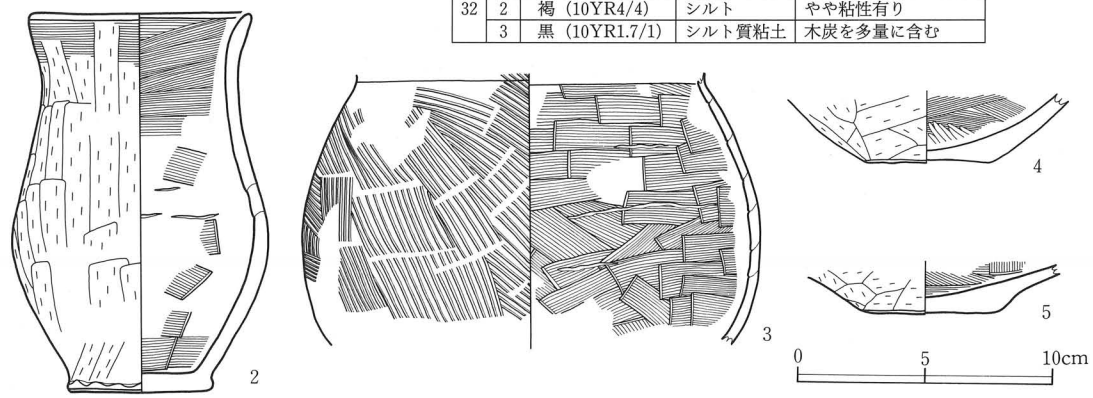
第58図　S-23・24・25・26・27・28 土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺　物・備　考
29	不整楕円形	1.15×0.8	東壁13、緩傾斜	平坦、中央低い	壁～底全面炭化物付着	土師器。単層。暗褐(10YR3/4)シルト。炭、焼土混入
30	不整円形	0.83×0.75	東壁６、緩傾斜	平坦、東側高い	壁一部、底面南半炭化物付着	単層。黒褐(10YR2/3)シルト。炭混入
31	長楕円形	1.6×0.5	北壁14、急角度	平坦、中央低い		単層。暗褐(10YR3/3)粘土質シルト
32	不整隅丸長方形	1.92×1.02	北壁57、急角度	平坦、中央～西側低い	北壁～底面の一部焼面。炭化物付着	縄文土器摩小片、土師器。SI6 外延溝を切る





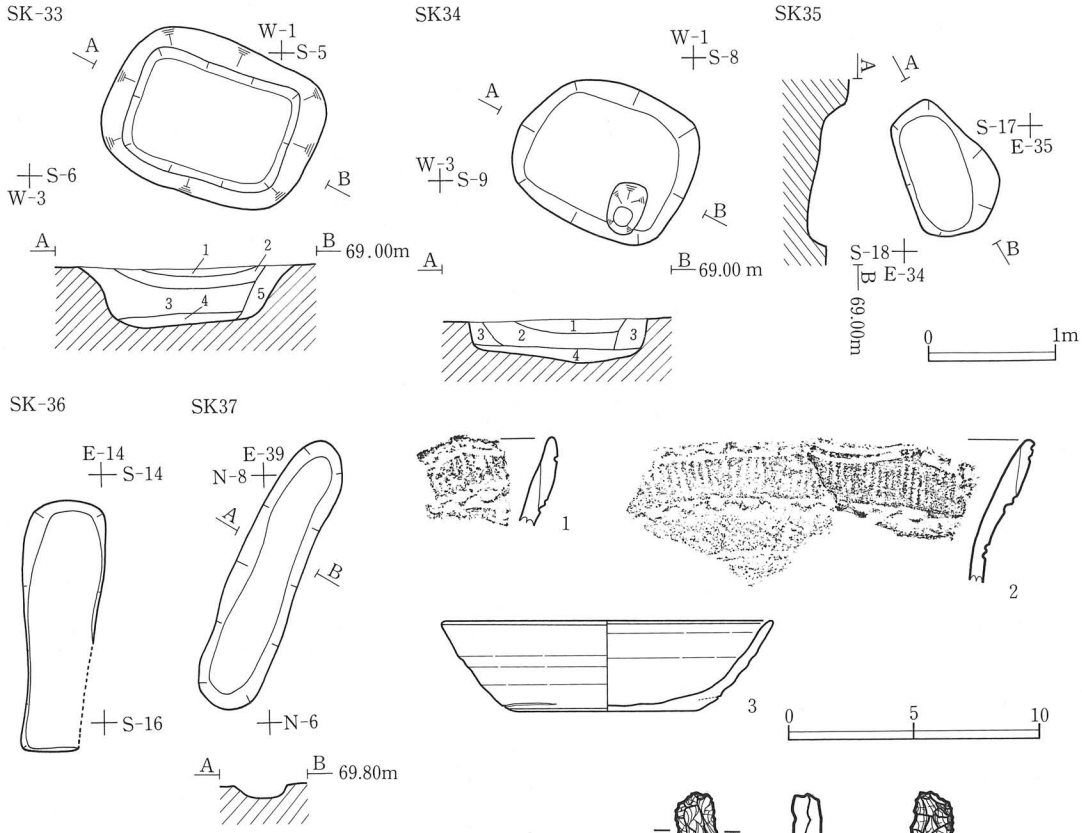
SK	層No	色　調	土　性	備　考
32	1	暗褐(10YR3/4)	シルト	やや粘性有り
	2	褐 (10YR4/4)	シルト	やや粘性有り
	3	黒 (10YR1.7/1)	シルト質粘土	木炭を多量に含む



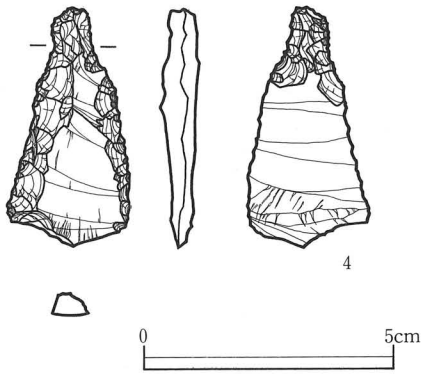
No.	遺構	層位	種別	器形	外　面	内　面	底　面	備　考
1	SK-29	堆積土	土師器	甑	ヨコナデ、ナデ、ケズリ、大部分マメツ	ヘラナデ、ナデ、ケズリ		図版50-15
2	SK-32	堆積土	土師器？	甕	ヨコナデ、ケズリ	ナデ、ヘラナデ	ケズリ	図版50-5
3	SK-32	堆積土	土師器	甕	ハケメ	ヘラナデ		
4	SK-32	堆積土	土師器	甕	ケズリ	ナデ、ミガキ	ケズリ	
5	SK-32	堆積土	土師器	甕	ケズリ	ヘラナデ	ケズリ	

第59図　SK-29・30・31・32 土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺物・備考
33	隅丸長方形	1.67×1.17	北壁41、急角度	平坦、中央低い	壁全面～底一部焼面。底全面炭化物付着	壁上部崩落
34	不整隅丸長方形	1.42×1.2	北壁31、急角度	平坦、南北隅低い	壁下部焼面。壁下部～底全面炭化物付着	南東隅木根痕。壁上部崩落
35	不整隅丸長方形	1.1×0.7	北壁18、急角度	凸凹、北側高い		弥生土器片。SI15と重複関係不明
36	隅丸長方形	2.03×0.65	北壁51、急角度	平坦、北側高い		須恵器。SX1を切る
37	長楕円形	2.27×0.51	北東壁11、急角度	平坦、中央低い		石器。単層。暗褐(7.5YR3/3)シルト



SK	層No	色　調	土　性	備　考
33	1	黒褐(7.5YR2/2)	シルト	
	2	褐 (7.5YR4/4)	シルト	
	3	黒褐(7.5YR3/2)	粘土質シルト	木炭、焼土粒含む
	4	暗褐(7.5YR3/3)	粘土質シルト	多量の木炭含む
	5	暗褐(7.5YR3/4)	シルト	黄褐(10YR5/6)粘土含む
34	1	褐 (10YR4/6)	シルト	
	2	暗褐(10YR3/3)	シルト	木炭、焼土粒含む
	3	褐 (7.5YR4/4)	シルト	焼土粒含む
	4	明褐(7.5YR5/8)	粘土質シルト	多量の木炭、焼土含む



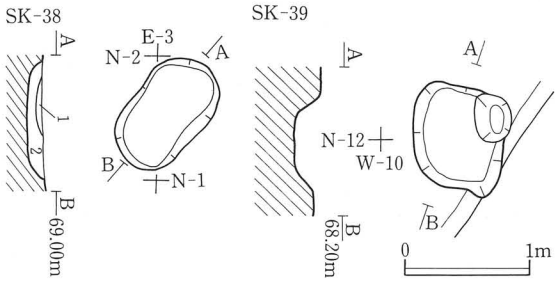
No.	遺構	層位	種別	器形	外　面	内　面	底　面	備　考
1	SK-35	堆積土	弥生土器		縄文RL、隆線、沈線、刺突	ナデ		
2	SK-35	堆積土	弥生土器		縄文RL、隆線、沈線、刺突	マメツ		図版51-28
3	SK-36	堆積土	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転ヘラ切り	図版50-16

No.	遺構	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重　量(g)	石　材	備　考
4	SK-37	堆積土	石匙	4.8×2.4×0.8	5.3	珪質頁岩	図版52-35

第60図　SK-33・34・35・36・37 土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺 物・備 考
38	不整楕円形	0.98×0.63	東壁12、急角度	平坦、中央低い	壁全面～底一部焼面。壁～底全面炭化物付着	
39	不整隅丸長方形	0.8×0.7	南東隅38、急角度	平坦、中央高い		縄文土器片。単層。褐(10YR4/4)粘土質シルト

SK	層No	色　調	土　性	備　考
38	1	暗褐(7.5YR3/4)	シルト	木炭、焼土をわずかに含む
	2	黒褐(7.5YR2/2)	シルト	木炭、焼土を多量に含む



第61図　SK-38・39土坑

(3)　その他の遺構

ＳＤ－１溝状遺構

［遺構の確認］調査区の中央部やや南寄りに位置し、Ⅳ層上面で確認された。

［規模］南斜面に位置し、Ｓ－８、Ｅ－21からＳ－15、Ｅ－８まで約７ｍの長さで検出された。最大幅は0.38mで北端部では「Ｙ」字状になっている。

［堆積土］単層、褐色（10YR4/4）シルトである。

［壁面］Ⅳ層からなり15～５cmの深さで残存している。断面形は「Ｕ」字形である。

［底面］Ⅳ層からなり、やや凸凹がある。底面レベルは斜面の傾斜に対応して北端部が高く南端部が低くなっている。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

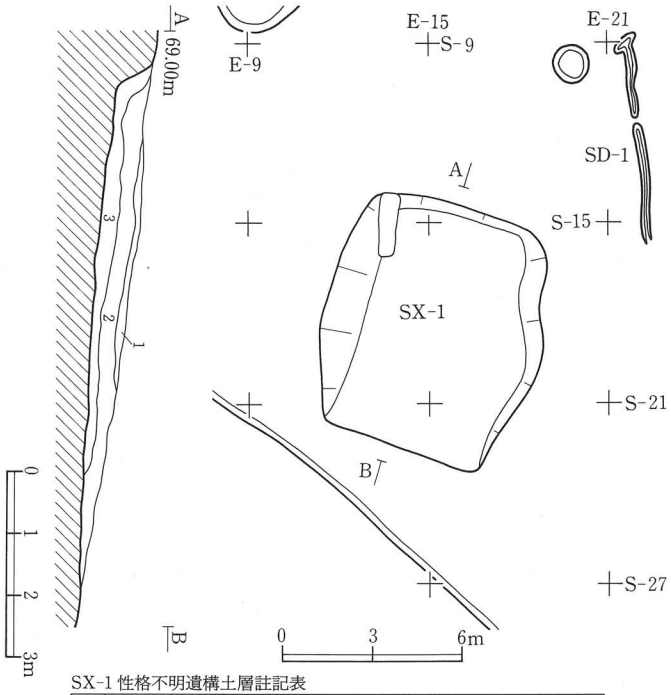
ＳＸ－１性格不明遺構

［遺構の確認］調査区南端部、丘陵南斜面の中腹、Ｓ－13～23、Ｅ－11～８に位置し、Ⅳ層上面で確認された。北西隅でＳＫ－36土坑と重複関係にあり、本遺構が切られている。当初沢状の凹地として考えていたものであるが、性格不明遺構とした。

［平面形・規模］北壁及び東壁、西壁が検出されたが、斜面裾部に近い南側は検出されなかった。東西の長さ7.45～6.0m、南北の長さ8.2～7.65mである。

［堆積土］３層に分けられる。斜面上部から流入しており、堆積状況からは南壁が存在していたかどうかは不明である。

［壁面］Ⅳ層、Ⅴ層からなり、壁



SX-1 性格不明遺構土層註記表

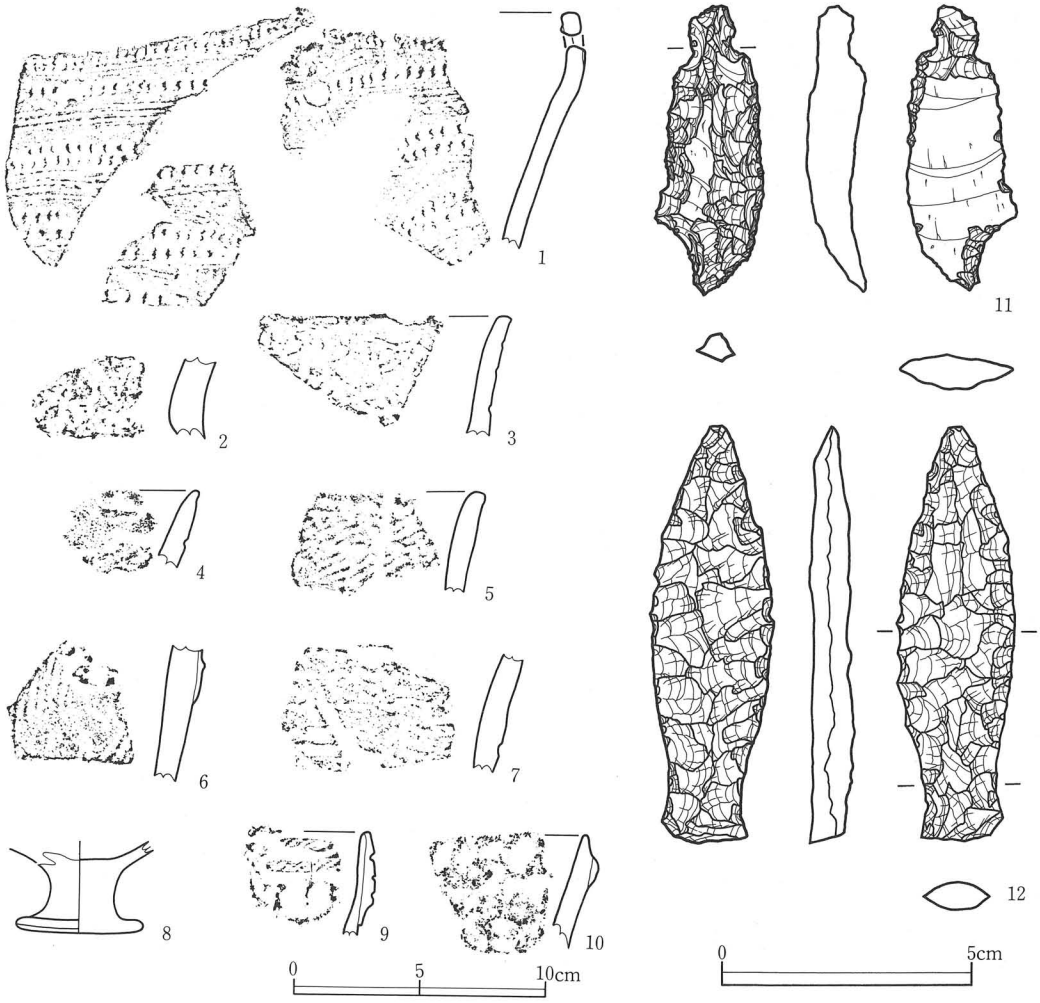
層No	色　調	土　性	備　考
1	暗　褐(10YR3/4)	シルト	
2	オリーブ黒(7.5YR2/2)	シルト	砂粒多い
3	褐　(10YR4/4)	粘土質シルト	砂粒・炭化物含む

第62図　SX-1 性格不明遺構

高は北壁で64cm である。底面から急角度で立ち上がる。

［底面］Ⅴ層からなり凸凹している。底面レベルは北壁際が最も高く、南側へ向かって徐々に低くなっている。

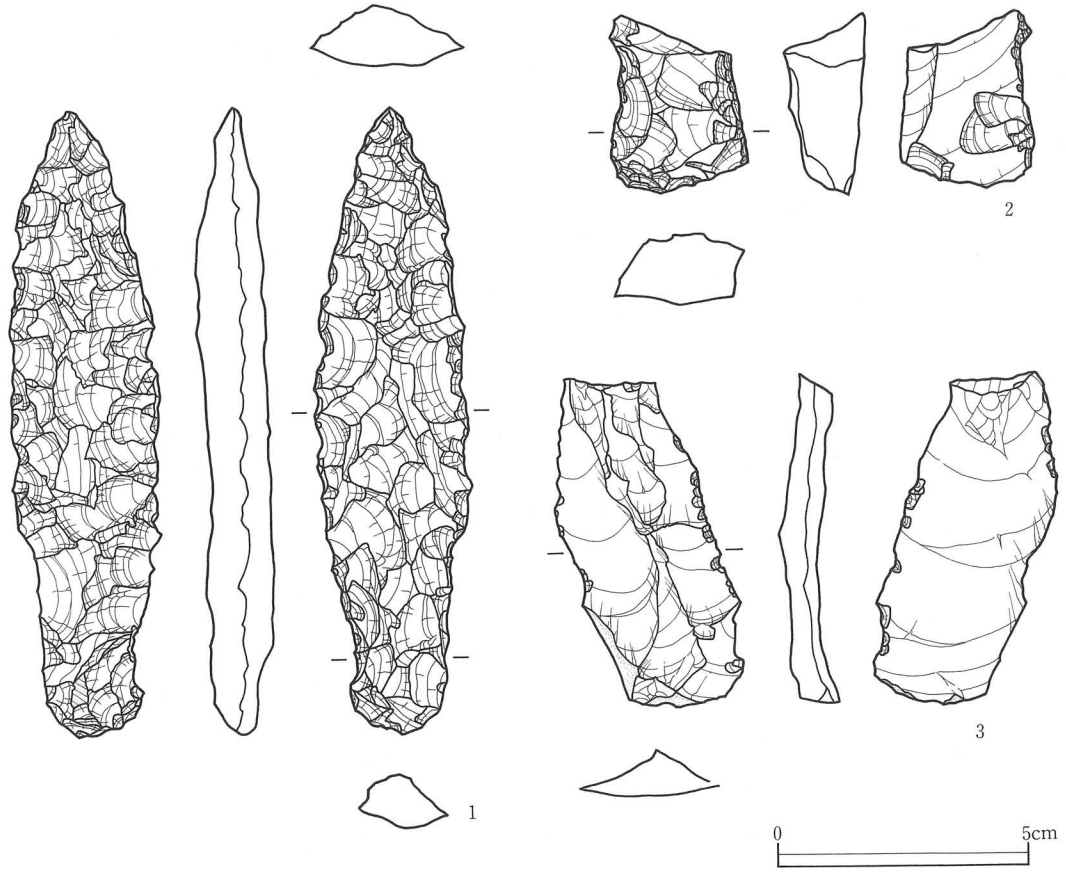
［出土遺物］堆積土１、２層中から縄文土器、弥生土器、石器が出土しており、３層及び底面から縄文土器、石器が出土している。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	底面	縄文土器	深鉢	沈線、半截竹管文	ナデ		内面に炭化物付着。図版51-3
2	底面	縄文土器		L 撚糸文	ナデ		胎土中に植物繊維混入
3	３層	縄文土器		L 撚糸文	ナデ、ミガキ		胎土中に植物繊維混入。 図版51-4
4	３層	縄文土器		沈線	マメツ		胎土中に植物繊維混入
5	２、３層	縄文土器		縄文 RL（ループ文）	ナデ		胎土中に植物繊維混入。 図版51-5
6	３層	縄文土器		縄文 LR、隆線、刺突	ナデ		図版51-6
7	１、２層	縄文土器		L 撚糸文、沈線	マメツ		胎土中に植物繊維混入
8	１、２層	縄文土器	ミニチュア土器	ナデ	ナデ	ナデ	内、外面丹塗り。 図版51-7
9	１、２層	弥生土器		縄文LR、隆線、沈線、押圧	ナデ		
10	１、２層	弥生土器		隆線、刺突	マメツ		

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
11	堆積土	石匙	5.7×2.1×0.8	8.7	珪質頁岩	図版52-36
12	１、２層	尖頭器	8.3×2.4×0.8	16.8	珪質頁岩	図版52-49

第63図　SX-1 性格不明遺構出土遺物(1)

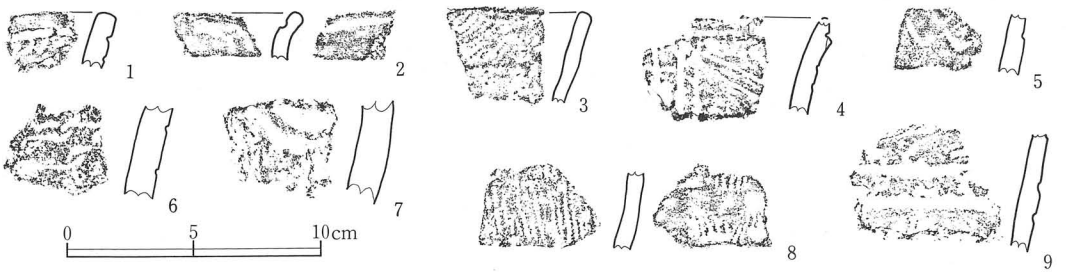


No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	1、2層	尖頭器	12.5×3.2×1.3	49.4	珪質頁岩	図版52-48
2	3層	篦状石器	3.6×2.7×1.6	15.8	珪質頁岩	図版52-53
3	3層	スクレーパー	6.5×3.7×0.8	18.4	珪質頁岩	

第64図　SX-1 性格不明遺構出土遺物(2)

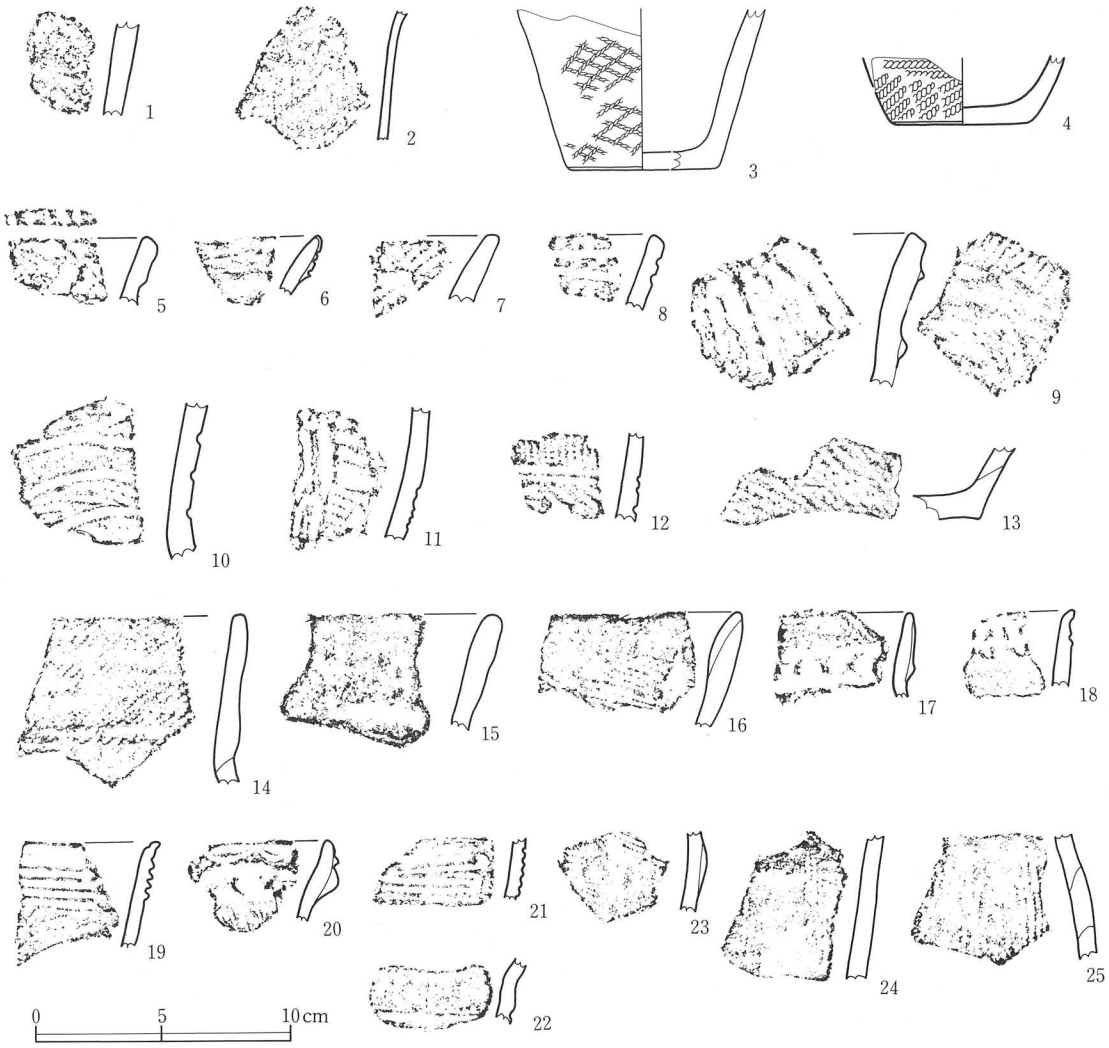
遺構外出土遺物

西区出土遺物のうち、遺構以外から出土した遺物を取り上げる。表土除去及び遺構検出中に出土した遺物と表採遺物を区別して掲載する。



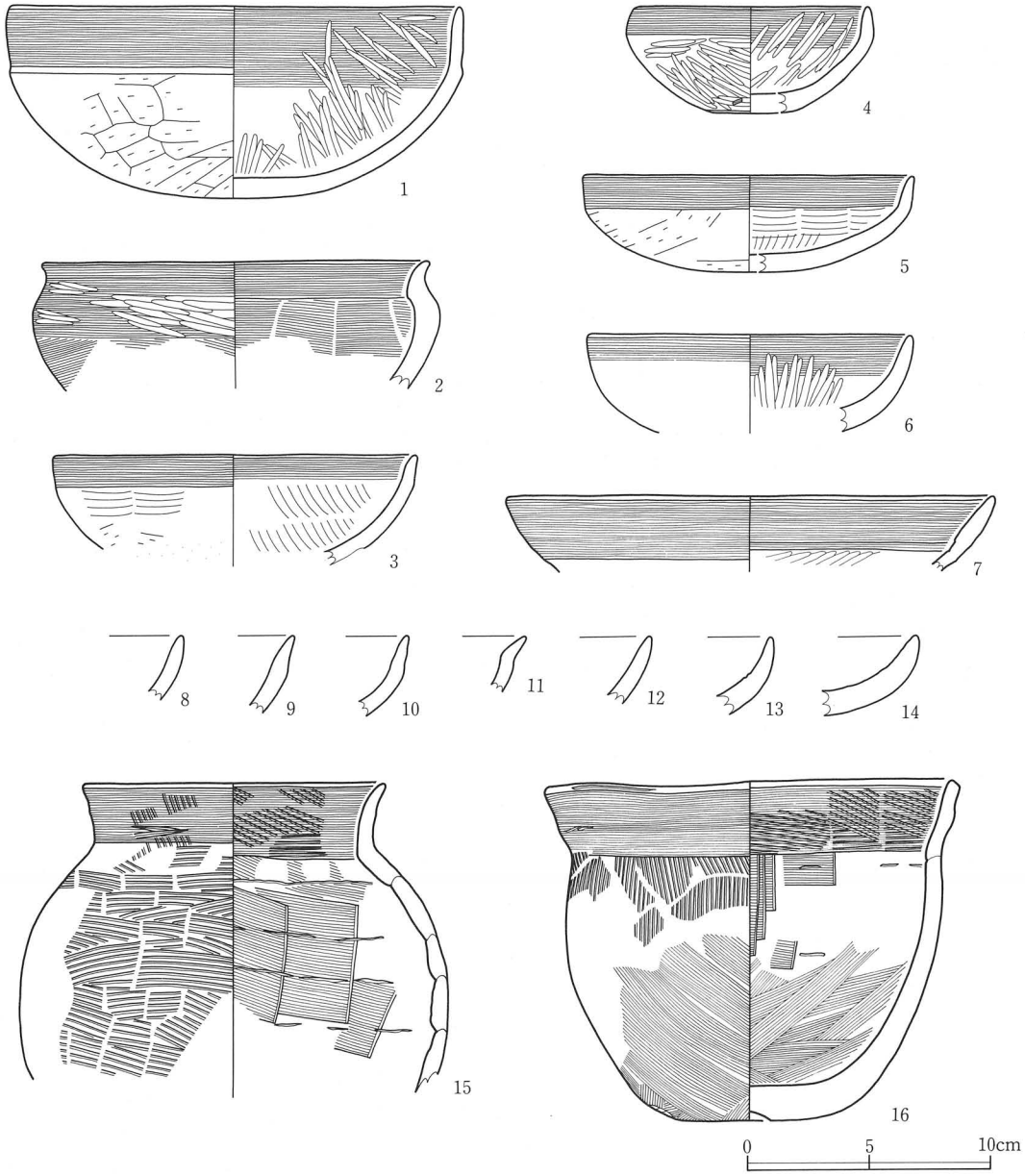
No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	表土	縄文土器		刺突	ナデ		
2	表土	縄文土器		口唇部刻目	ナデ、沈線		
3	表土	縄文土器		縄文 LR	ナデ		
4	表土	縄文土器		隆線、沈線、刺突	マメツ		胎土中に植物繊維混入。図版51-29
5	表土	縄文土器		沈線	マメツ		胎土中に植物繊維混入
6	表土	縄文土器		L 撚糸文	マメツ		胎土中に植物繊維混入
7	表土	縄文土器		沈線	マメツ		胎土中に植物繊維混入。図版51-30
8	表土	縄文土器		縄文 RL	縄文 RL		
9	表土	縄文土器		沈線	ナデ		

第65図　遺構外出土遺物(1)



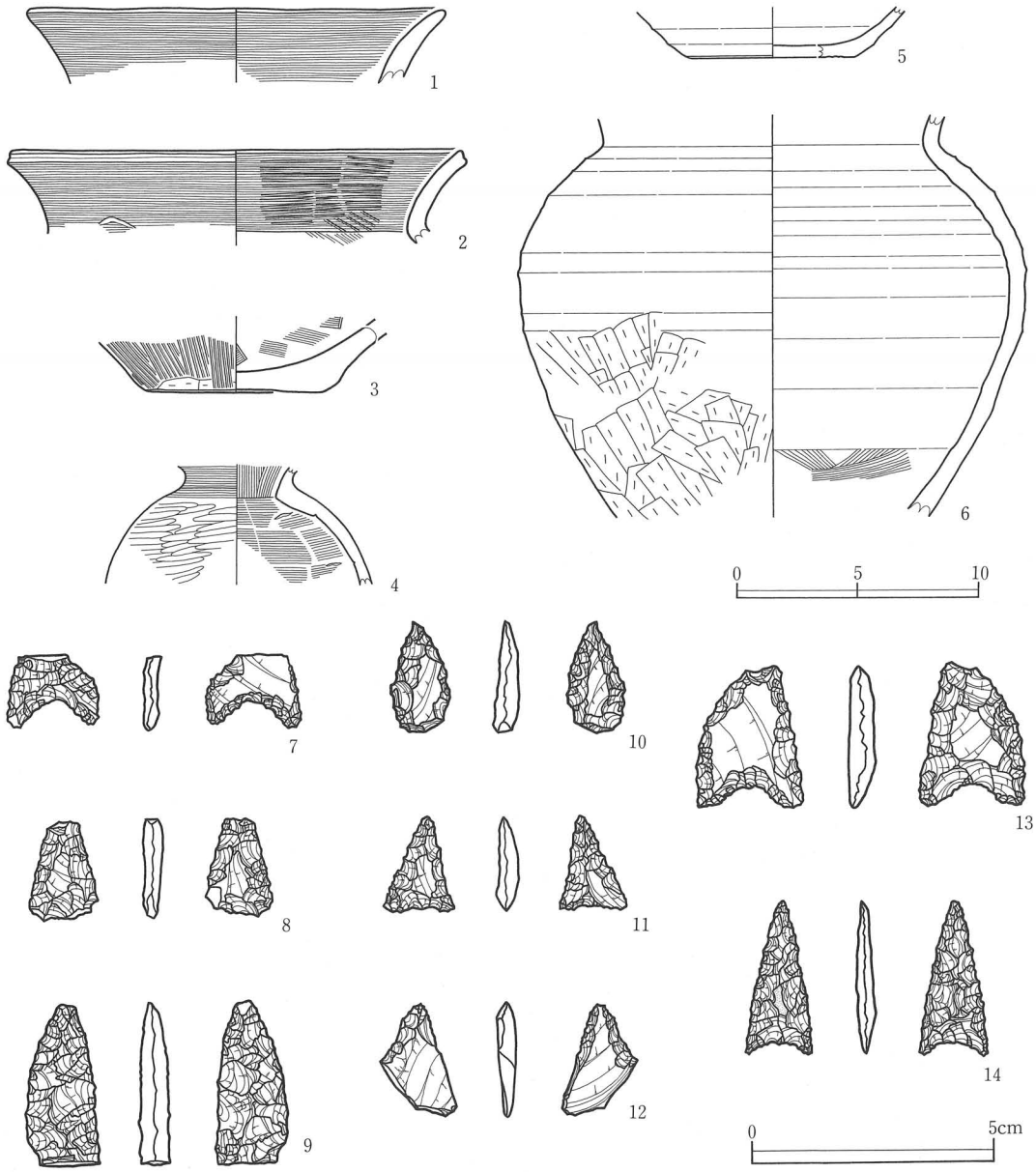
No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	表土	縄文土器		縄文 RL	マメツ		
2	表土	縄文土器		結節縄文 RL	ナデ		
3	表土	縄文土器	深鉢	網目状撚糸文 R	マメツ	マメツ	胎土中に植物繊維混入。図版51-31
4	表土	縄文土器	深鉢	縄文 LR	ナデ	ナデ	
5	表採	縄文土器		沈線、マメツ	ナデ		口唇部に刻目
6	表採	縄文土器		沈線	ナデ		
7	表採	縄文土器		縄文LR、RL（ループ文）	ナデ		胎土中に植物繊維混入
8	表採	縄文土器		縄文 LR、沈線	マメツ		口唇部に刺突。 図版51-32
9	表採	縄文土器		隆線	縄文 LR		胎土中に植物繊維混入。図版51-33
10	表採	縄文土器		撚糸圧痕、沈線	マメツ		図版51-34
11	表採	縄文土器		沈線	マメツ		図版51-35
12	表採	縄文土器		沈線	ナデ、ミガキ		図版51-36
13	表採	縄文土器		縄文 RL	ナデ	縄文 RL	胎土中に植物繊維混入
14	表土	弥生土器		縄文 LR	ナデ		図版51-37
15	表土	弥生土器		ナデ	ナデ		外面に炭化物付着
16	表土	弥生土器		撚糸文 R	ナデ		図版51-38
17	表土	弥生土器		縄文 RL、隆線、押圧	ナデ		
18	表土	弥生土器		沈線、刺突	ナデ		図版51-39
19	表土	弥生土器		縄文RL、隆線、沈線、押圧	ナデ		図版51-41
20	表土	弥生土器		沈線	マメツ		図版51-40
21	表土	弥生土器		沈線	ナデ		
22	表土	弥生土器		沈線	ナデ		
23	表土	弥生土器		縄文 RL	ナデ		
24	表土	弥生土器		縄文 RL	ナデ		
25	表土	弥生土器		縄文 RL	ナデ		

第66図　遺構外出土遺物(2)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	分類・備考
1	表土	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ		G類
2	表土	土師器	杯	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	ナデ、ヨコナデ		BⅠ類
3	表土	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ		CⅡ類
4	表土	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	CⅠ類
5	表土	土師器	杯	ケズリ、ヨコナデ	ミガキ、ヨコナデ	ケズリ	CⅠ類
6	表土	土師器	杯	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ		E類
7	表土	土師器	杯	ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ		FⅡ類
8	表土	土師器	杯	マメツ	マメツ		
9	表土	土師器	杯	ヨコナデ、体部はマメツ	ヨコナデ、ナデ		
10	表土	土師器	杯	ヨコナデ、ナデ	マメツ		
11	表土	土師器	杯	ヨコナデ、体部はマメツ	ヨコナデ、ミガキ		
12	表土	土師器	杯	ヨコナデ、体部はマメツ	ミガキ		
13	表土	土師器	杯	ヨコナデ、体部はマメツ	ヨコナデ、ミガキ		
14	表土	土師器	杯	マメツ	ナデ		
15	表土	土師器	甕	ハケメ、ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ、ヘラナデ、ナデ		
16	表土	土師器	甕	ナデ、ケズリ、ハケメ、ヨコナデ	ナデ、ヘラナデ、ハケメ、ヨコナデ	ナデ、ケズリ	

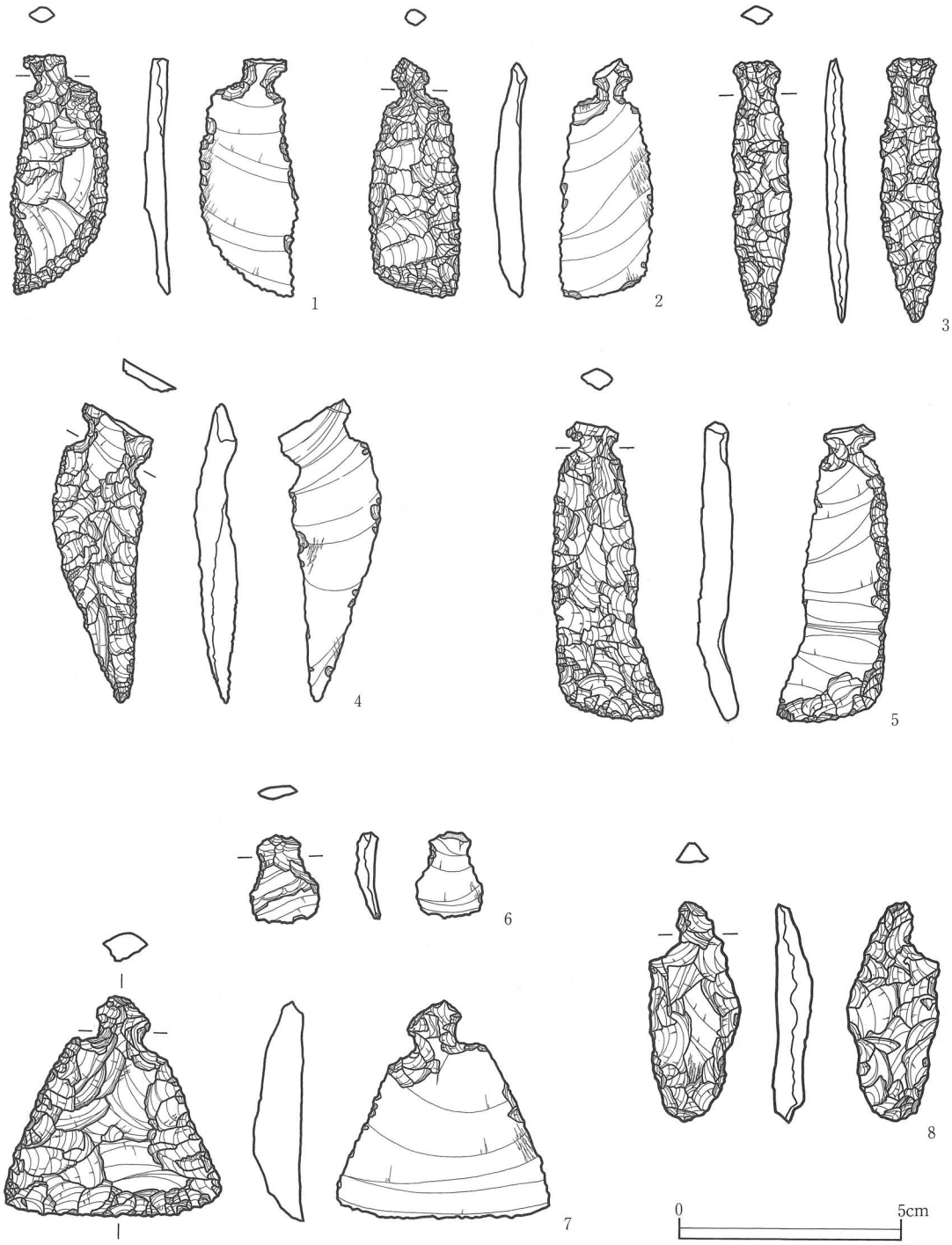
第67図　遺構外出土遺物(3)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	表土	土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ		
2	表土	土師器	甕	ヨコナデ	ハケメ、ヨコナデ、ナデ		
3	表土	土師器	甕	ケズリ、ハケメ	ヘラナデ、ナデ	ケズリ、ナデ	
4	表土	土師器	壺	ヨコナデ、ミガキ	ナデ		
5	表土	須恵器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り	
6	表土	須恵器	甕	ロクロ調整、ケズリ	ロクロ調整、底部にナデ		

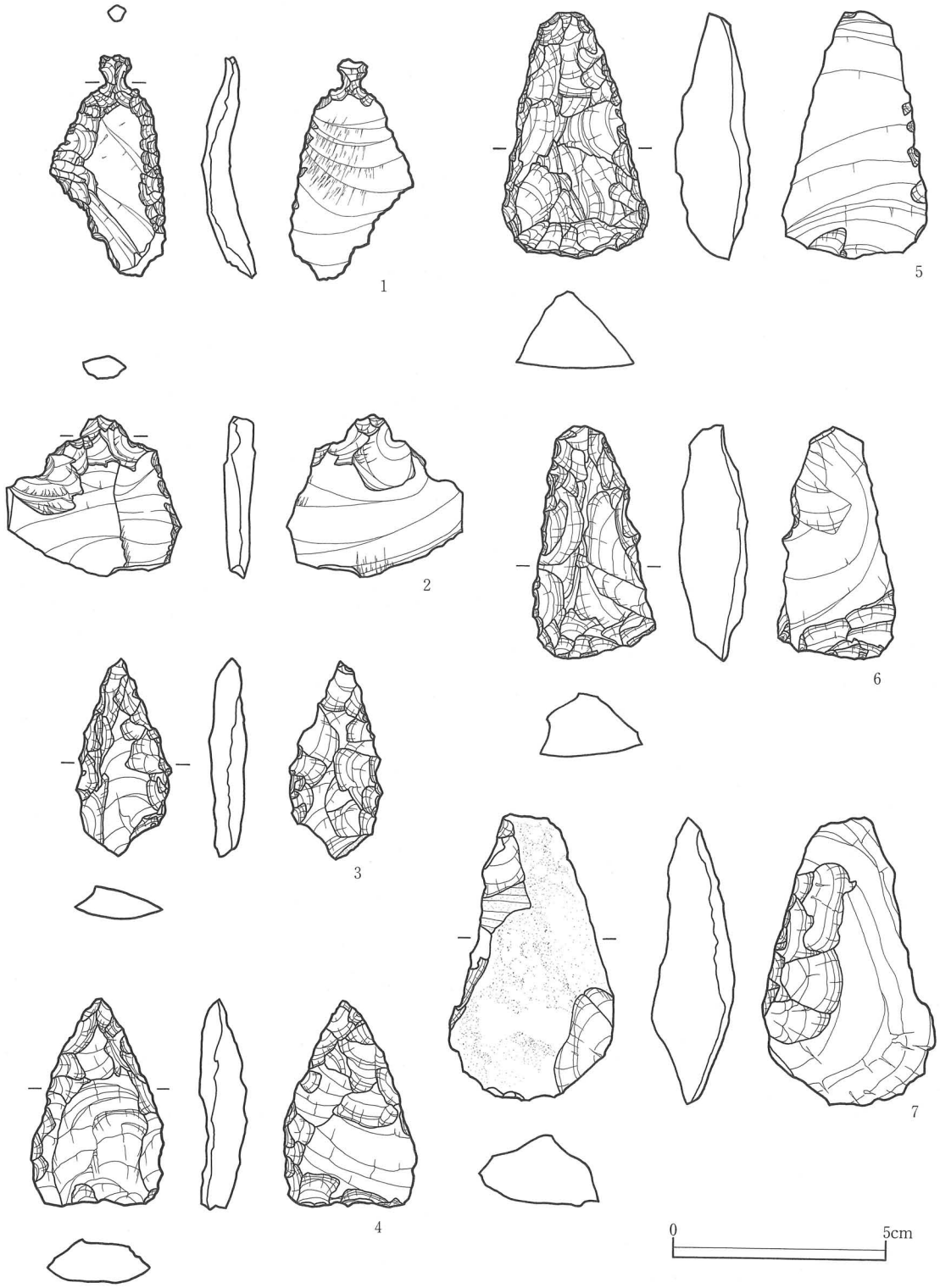
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
7	表土	石鏃	1.5×1.9×0.3	0.8	珪質頁岩	珪化が進んでいる。図版52-28
8	表土	石鏃	2.0×1.4×0.3	0.9	石英安山岩質凝灰岩	図版52-20
9	表土	石鏃	3.3×1.5×0.6	2.9	珪質頁岩	図版52-21
10	表採	石鏃	2.3×1.2×0.4	1.1	珪質頁岩	図版52-22
11	表採	石鏃	1.9×1.4×0.4	0.6	珪質頁岩	図版52-23
12	表採	石鏃	2.3×1.5×0.4	1.2	珪質頁岩	
13	表採	石鏃	2.9×2.1×0.5	3.9	珪質頁岩	図版52-24
14	表採	石鏃	3.2×1.3×0.4	1.3	珪質頁岩	図版52-25

第68図　遺構外出土遺物(4)



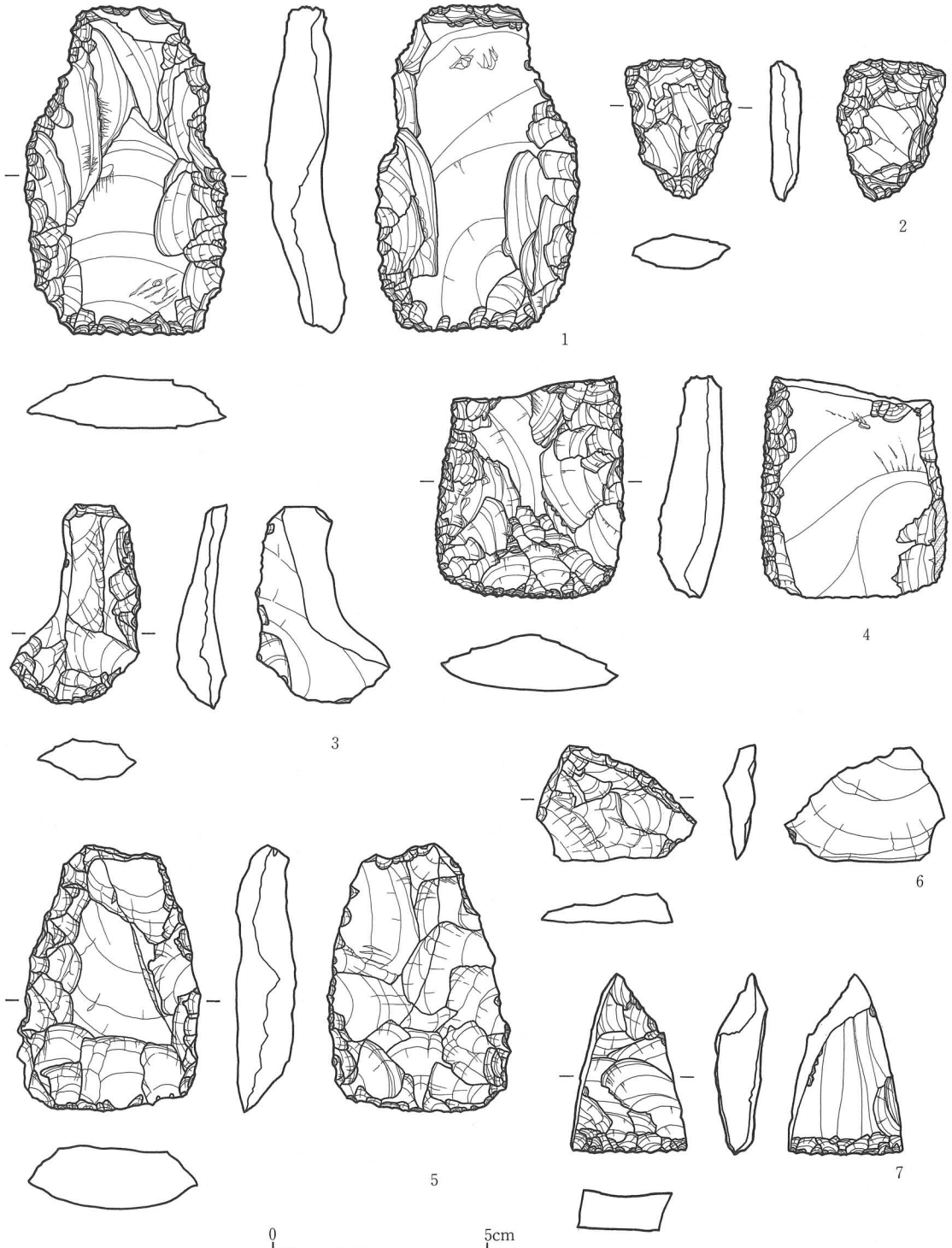
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	表土	石匙	5.4×2.1×0.5	6.1	珪質頁岩	図版52-37
2	表土	石匙	5.4×2.0×0.6	6.9	珪質頁岩	図版52-38
3	表土	石匙	6.0×1.3×0.4	3.9	珪質頁岩	図版52-39
4	表土	石匙	6.8×2.3×0.6	8.1	珪質頁岩	図版52-40
5	表土	石匙	6.8×2.5×0.6	9.8	珪質頁岩	図版52-41
6	表土	石匙	1.9×1.5×0.3	0.7	珪質頁岩	
7	13トレンチ	石匙	5.0×4.7×1.0	18.0	珪質頁岩	図版52-42
8	表採	石匙	5.0×2.0×0.8	7.2	珪質頁岩	図版52-43

第69図　遺構外出土遺物(5)



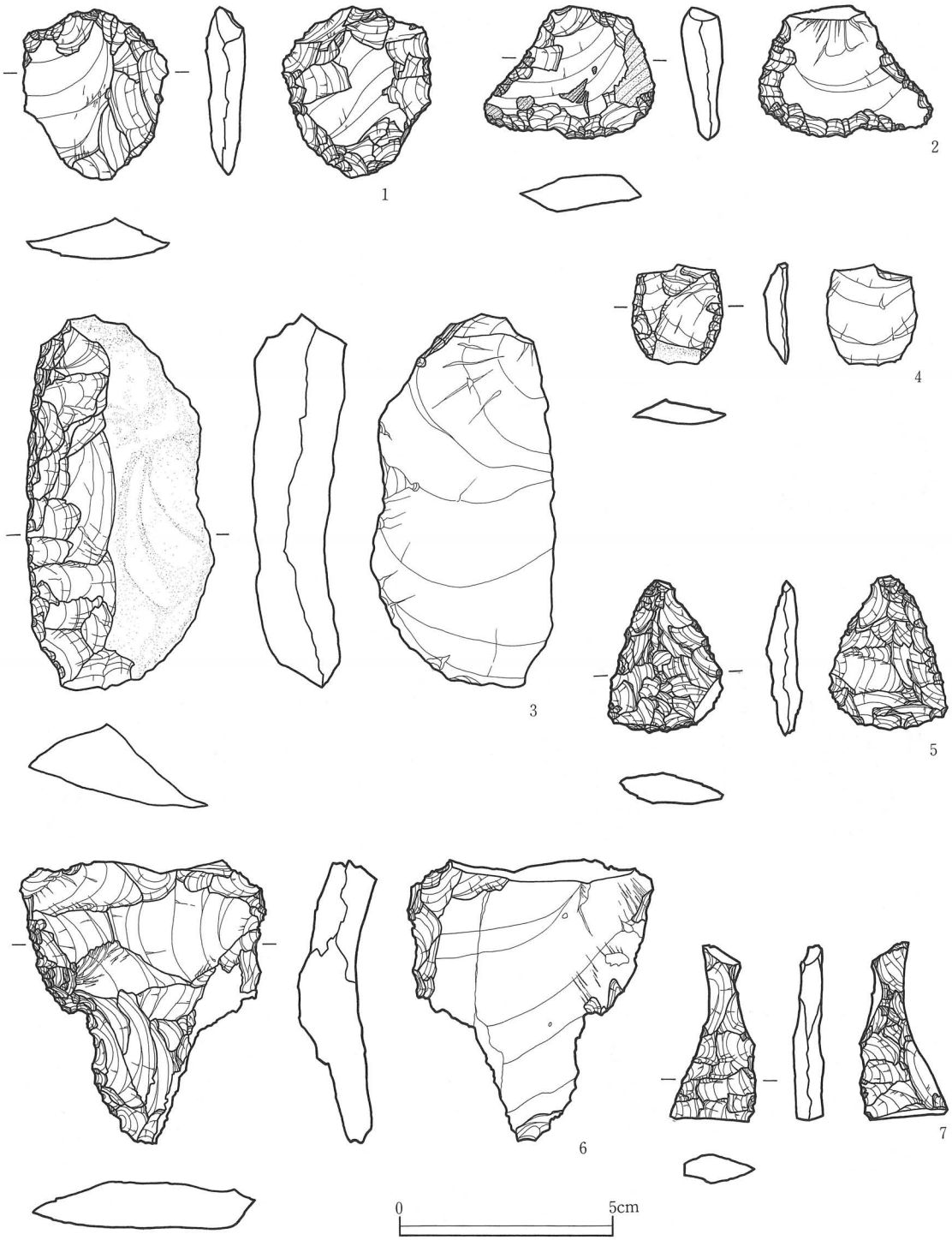
No.	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
1	表採	石匙	5.6×2.7×0.6	7.3	珪質頁岩	図版52-44
2	表採	石匙	3.7×4.1×0.7	8.7	珪質頁岩	珪化進 or 風化
3	表採	尖頭器	4.6×2.3×0.8	6.3	細粒石英安山岩質凝灰岩	図版52-50
4	表採	尖頭器	4.3×3.1×0.9	12.2	細粒石英安山岩質凝灰岩	図版52-51
5	表土	篦状石器	5.8×3.5×1.7	28.4	珪質頁岩	図版52-54
6	表採	篦状石器	5.5×2.9×1.6	23.8	珪質頁岩	図版52-55
7	表採	篦状石器	6.7×3.9×1.8	37.8	石英安山岩	図版52-56

第70図　遺構外出土遺物(6)



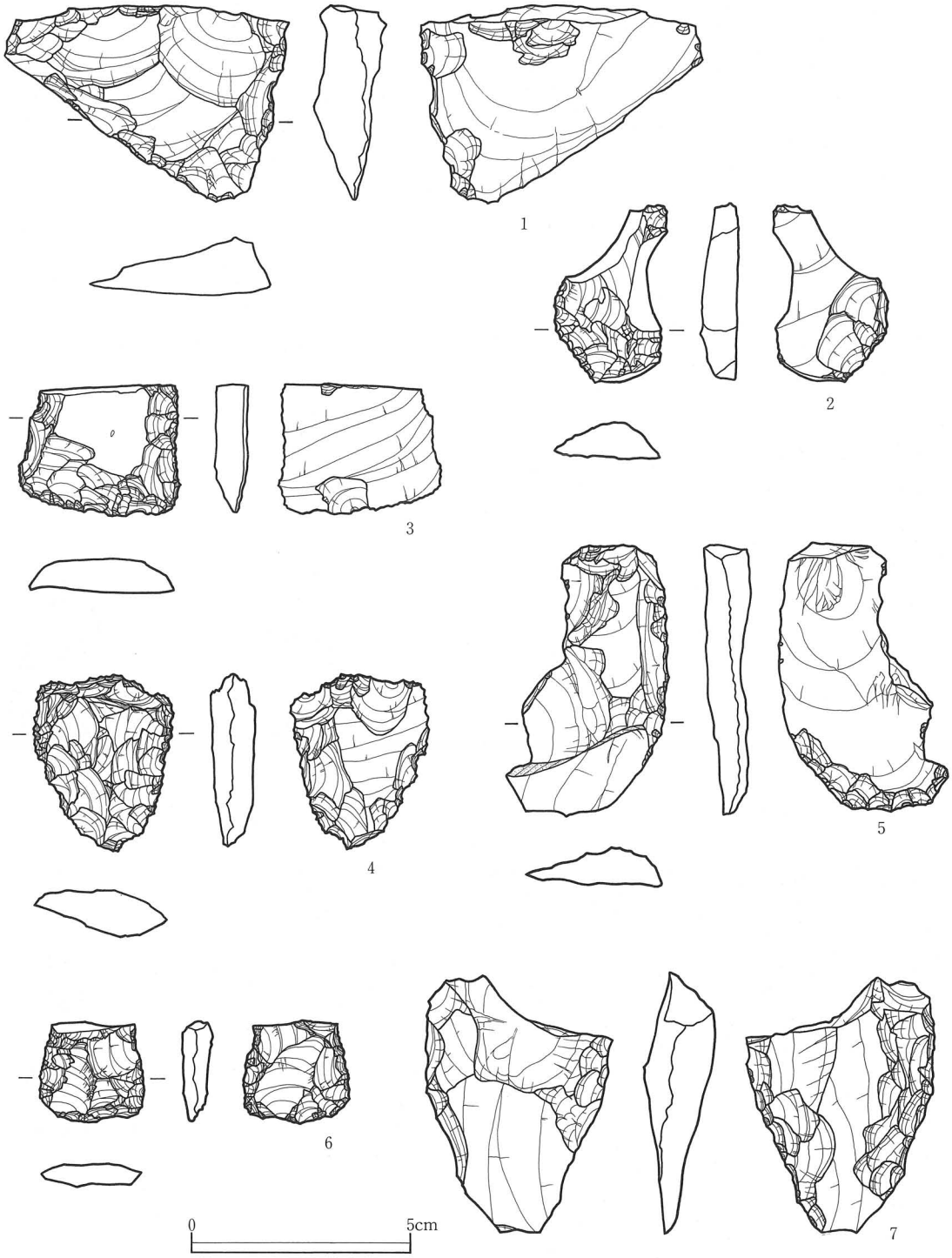
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	表土	スクレーパー	7.6×4.6×1.2	49.6	珪質頁岩、石英の粒やや粗粒	
2	表土	スクレーパー	3.3×2.4×0.7	6.4	珪質頁岩、石英の粒やや粗粒	
3	表土	スクレーパー	4.7×3.0×1.0	10.0	珪質頁岩	
4	表土	スクレーパー	5.2×4.3×1.2	36.6	珪質頁岩	
5	表土	スクレーパー	6.2×4.3×1.4	44.0	珪質頁岩	
6	表土	スクレーパー	2.7×3.7×0.7	5.8	玉髄	
7	表土	スクレーパー	4.2×2.7×1.1	11.8	珪質頁岩	

第71図　遺構外出土遺物(7)



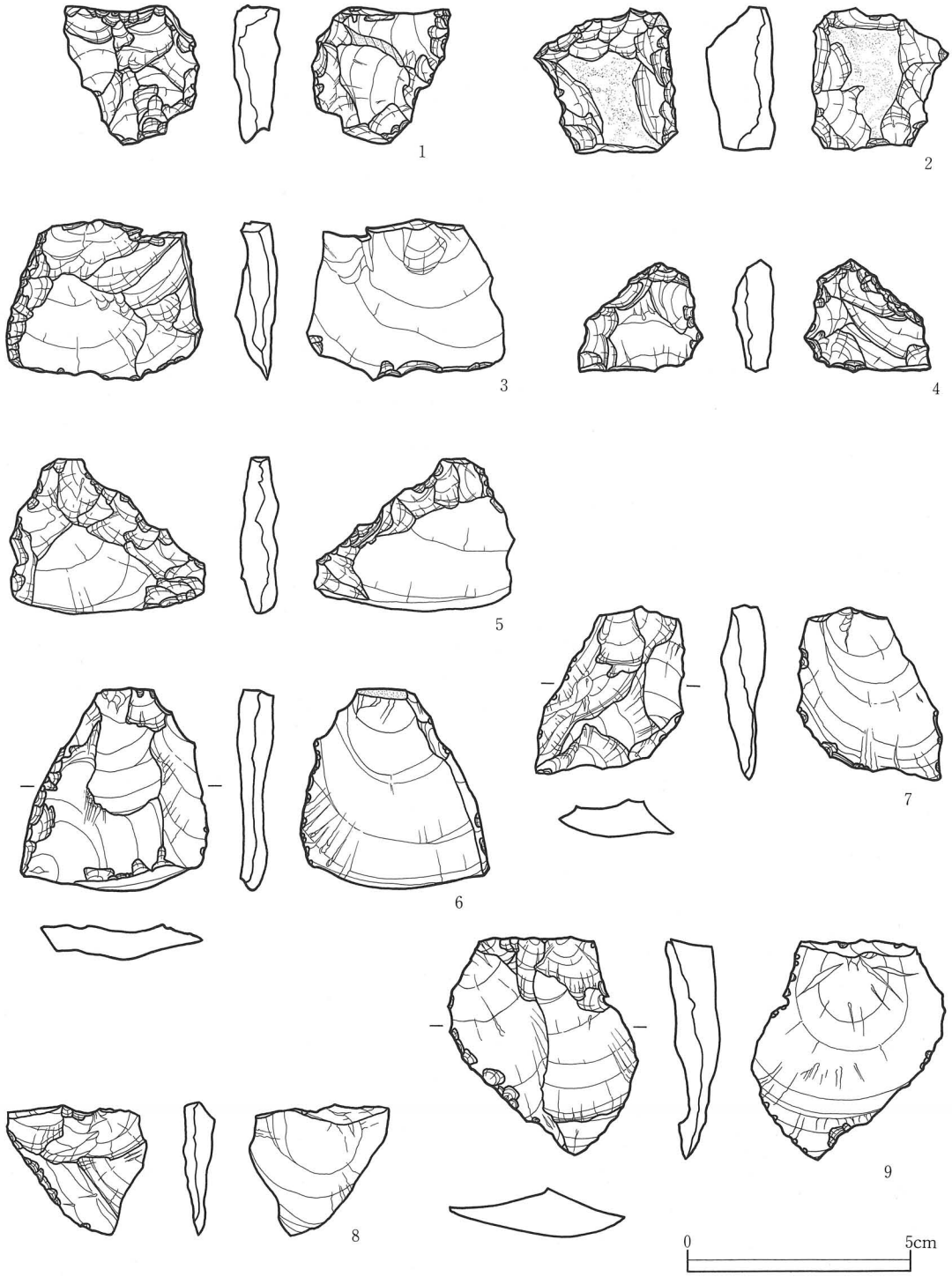
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	表土	スクレーパー	4.0×3.3×1.1	11.2	珪質頁岩	
2	表土	スクレーパー	3.9×3.0×1.1	9.0	珪質頁岩	
3	表土	スクレーパー	8.2×4.1×2.0	75.0	珪質頁岩	
4	表土	スクレーパー	2.3×2.1×0.6	2.6	珪質頁岩	
5	表採	スクレーパー	3.5×2.6×0.7	4.9	珪質頁岩	
6	表採	スクレーパー	6.6×5.7×1.3	41.2	頁岩	
7	表採	スクレーパー	4.1×2.0×0.7	4.1	珪質頁岩	

第72図　遺構外出土遺物(8)



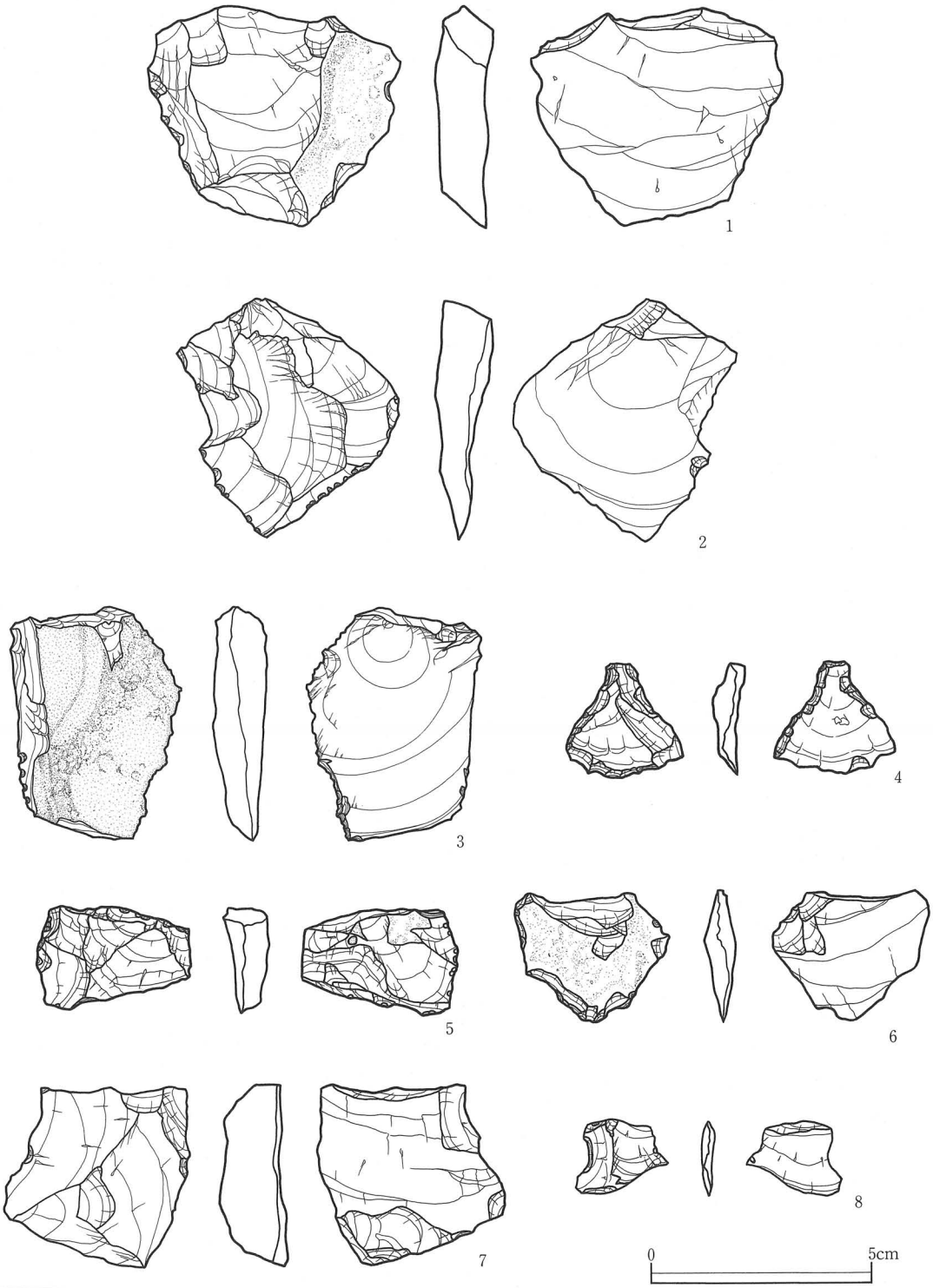
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	表採	スクレーパー	4.4×6.2×1.5	32.2	珪質頁岩、石英の粒やや粗粒	
2	表採	スクレーパー	4.1×2.4×0.8	6.9	珪質頁岩	
3	表採	スクレーパー	3.0×3.6×0.6	11.8	珪質頁岩、石英の粒やや粗粒	
4	表採	スクレーパー	4.0×3.1×1.1	11.4	頁岩 or 凝灰岩	
5	表採	スクレーパー	6.1×3.5×1.2	19.8	珪質頁岩	
6	表採	スクレーパー	2.3×2.4×0.6	4.2	珪質頁岩	
7	表土下	二次加工	5.9×4.3×1.5	35.0	石英安山岩やや粗粒	

第73図　遺構外出土遺物(9)



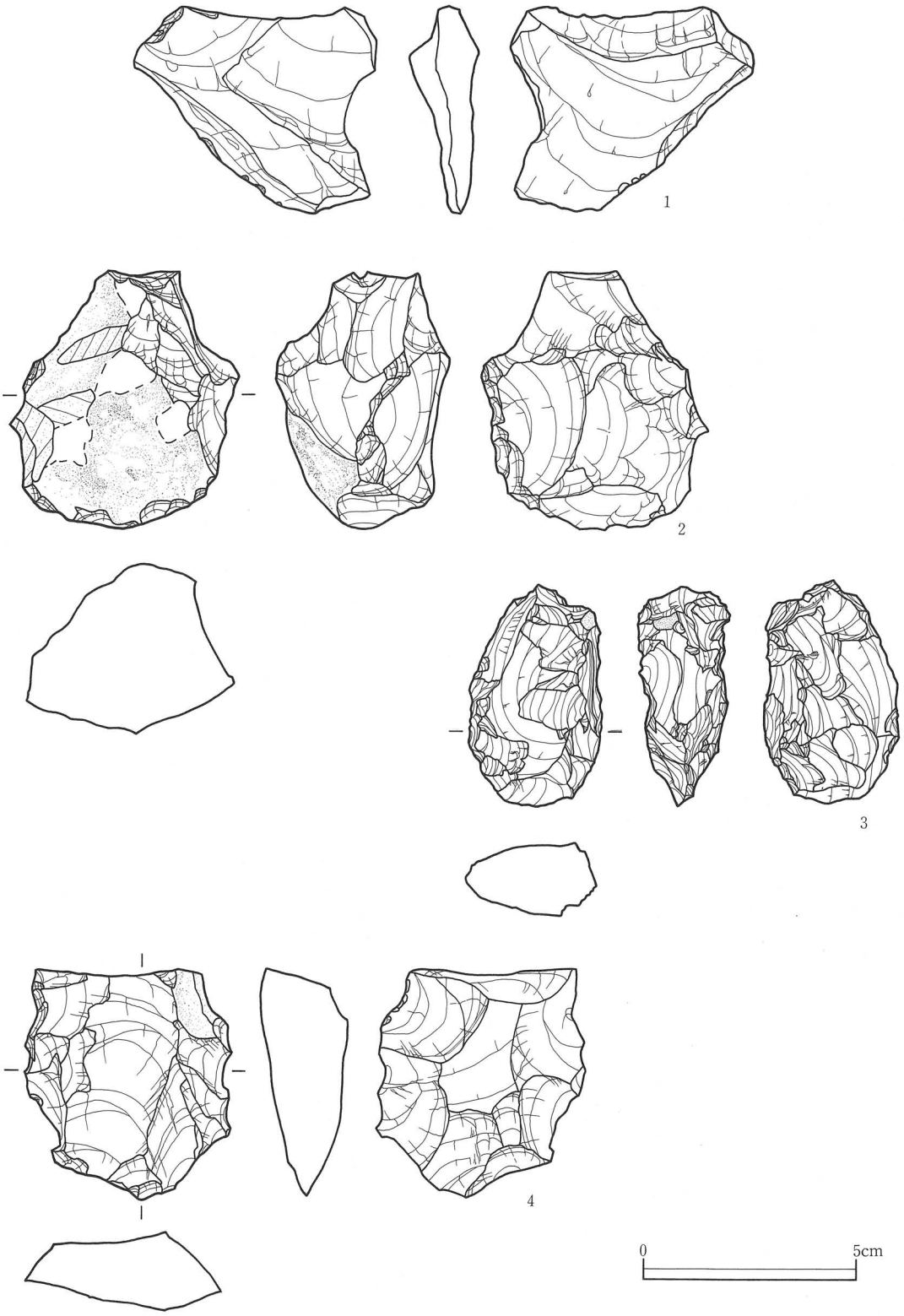
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	表土	二次加工	3.1×3.1×1.1	9.8	珪質頁岩	
2	表土下	二次加工	3.2×3.1×1.4	16.6	碧玉(鉄石英)	
3	表採	二次加工	3.5×4.4×0.8	13.4	玉髄	
4	表採	二次加工	2.5×2.8×0.8	5.1	玉髄	
5	表採	二次加工	3.5×4.4×0.9	11.6	珪質頁岩	
6	表土	微細剥離	4.6×4.2×0.9	16.2	珪質頁岩	
7	表土	微細剥離	3.9×3.4×0.7	8.8	珪質頁岩	
8	表土下	微細剥離	3.0×3.2×0.7	4.6	珪質頁岩	
9	表土下	微細剥離	5.0×4.0×1.1	14.8	珪質頁岩	

第74図　遺構外出土遺物⑽



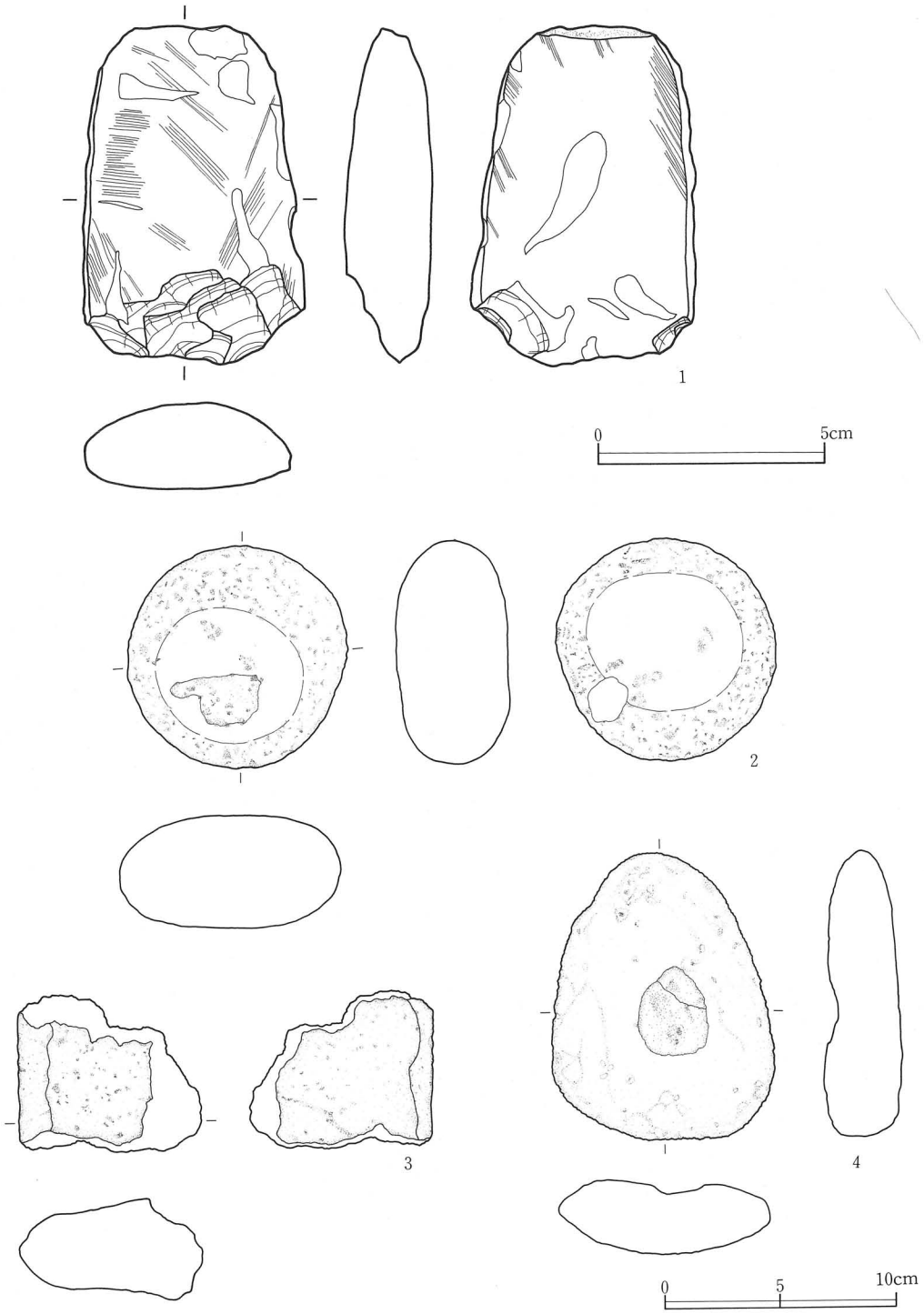
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	表採	微細剥離	5.2×5.8×1.3	22.0	珪質頁岩	
2	表採	微細剥離	5.5×4.8×1.5	29.6	珪質頁岩	
3	表土	剥片	5.4×3.9×1.1	24.2	珪質頁岩	
4	表土	剥片	3.0×2.7×0.7	3.3	石英安山岩質凝灰岩（石英斜長石）	
5	表採	剥片	2.4×3.6×1.0	8.0	珪質頁岩	
6	表採	剥片	2.9×3.6×0.7	6.1	石英安山岩（石英斜長石）	
7	表採	剥片	4.2×4.1×1.4	20.4	石英安山岩	
8	表採	剥片	1.7×2.1×0.3	0.9	珪質頁岩	

第75図　遺構外出土遺物(11)



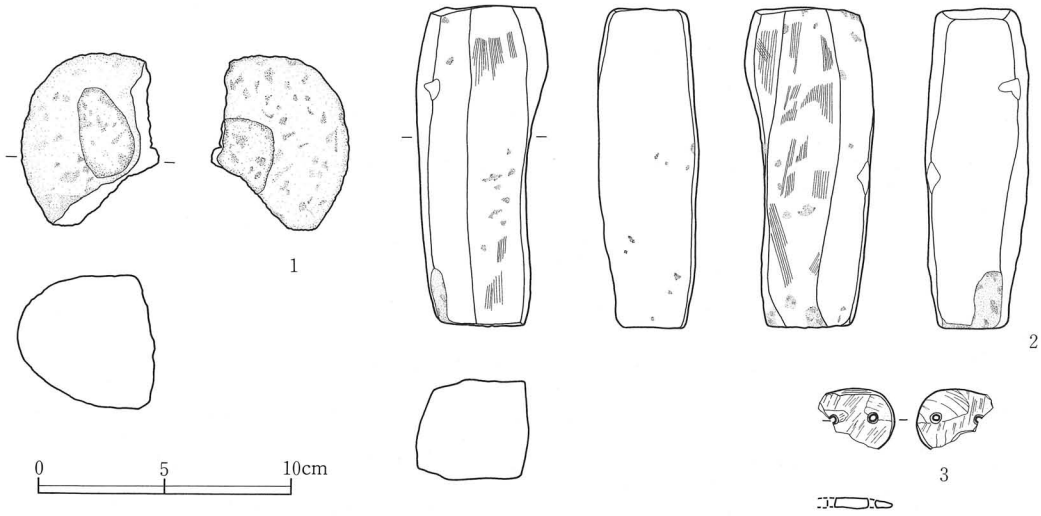
No.	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
1	表採	剝片	4.9×5.8×1.2	23.6	石英安山岩	
2	表採	核	6.0×5.1×4.0	105.0	珪質頁岩	
3	表土下	核	5.2×3.0×1.7	34.8	珪質頁岩	
4	表土	核	5.3×4.7×1.9	49.6	珪質頁岩、石英の粒やや粗粒	

第76図　遺構外出土遺物⑫



No.	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
1	表土	磨製石斧	7.4×5.0×2.0	97.5	石英安山岩質凝灰岩	図版52-58
2	表土	礫石器	9.6×9.8×4.7	530.5	石英安山岩	図版52-66
3	表土	礫石器	6.9×8.0×4.2	289.0	石英安山岩	
4	表土	礫石器	12.6×9.7×3.2	514.5	安山岩	図版52-64

第77図　遺構外出土遺物(13)



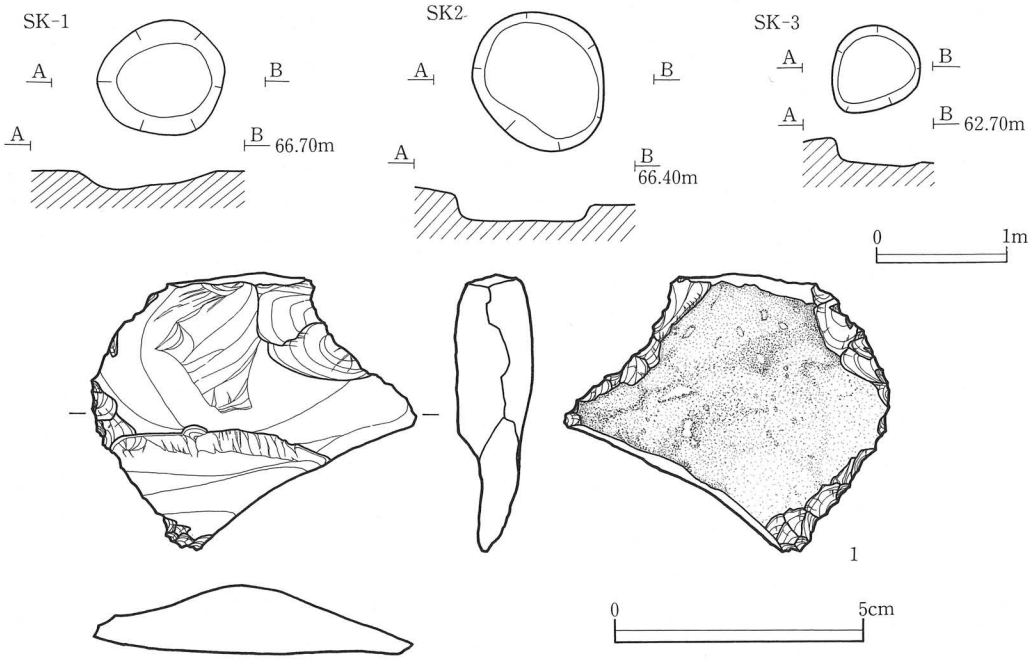
No.	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
1	表土	礫石器	6.9×5.4×5.2	213.0	石英安山岩質凝灰岩	
2	表採	砥石	12.8×5.1×3.8	400.0	頁岩	
3	表土下	石製模造品	2.4×3.0×0.5	3.0	珪質頁岩	図版52-69

第78図　遺構外出土遺物(14)

東　区

土坑３基と遺物包合層が検出された。遺物包合層出土遺物と表採遺物を同時に掲載し、観察表で区別した。

SK	平面形	規模(m)	壁 面(cm)	底 面	焼 面、炭 化 物	遺 物・備 考
1	不整円形	1.03×0.92	北壁16、緩傾斜	平坦、中央低い	底面一部炭化物付着	土師器摩小片。単層。黒褐(10YR3/2)シルト
2	不整楕円形	1.17×1.03	西壁21、急角度	平坦、北側高い	壁一部～底全面炭化物付着	単層。暗褐(10YR3/4)シルト
3	不整円形	0.77×0.67	北壁18、急角度	凸凹、北側高い	壁～底全面炭化物付着	単層。暗褐(10YR3/4)シルト

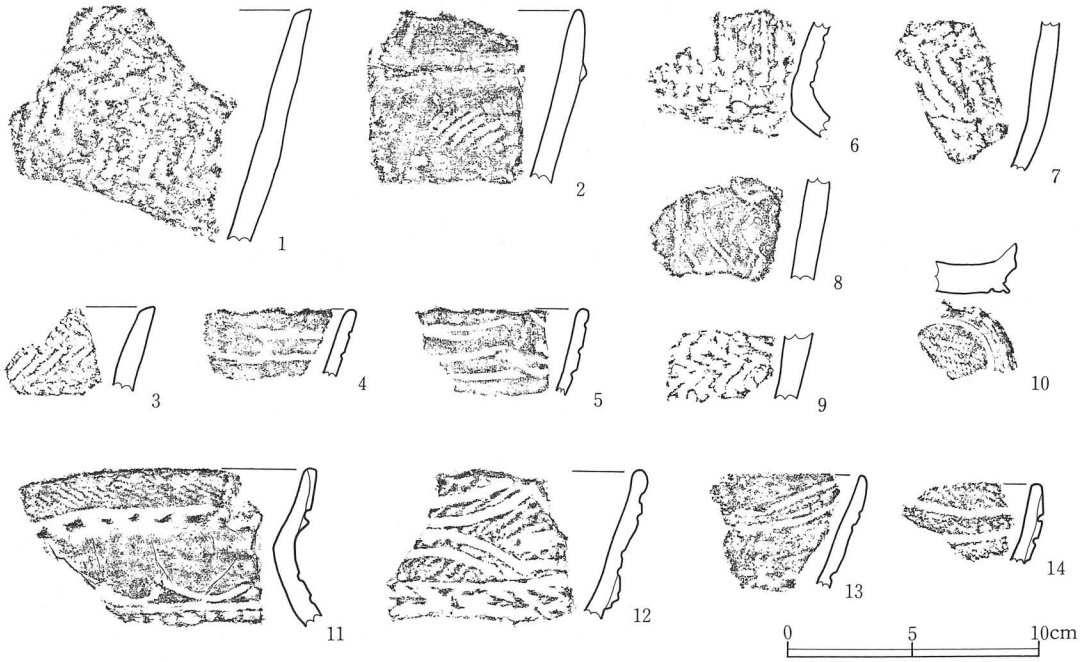


No.	遺 構	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重 量(g)	石 材
1	SK-2	堆積土	スクレーパー	5.5×6.4×1.5	38.4	石英安山岩質細粒凝灰岩

第79図　東区 SK-1・2・3土坑

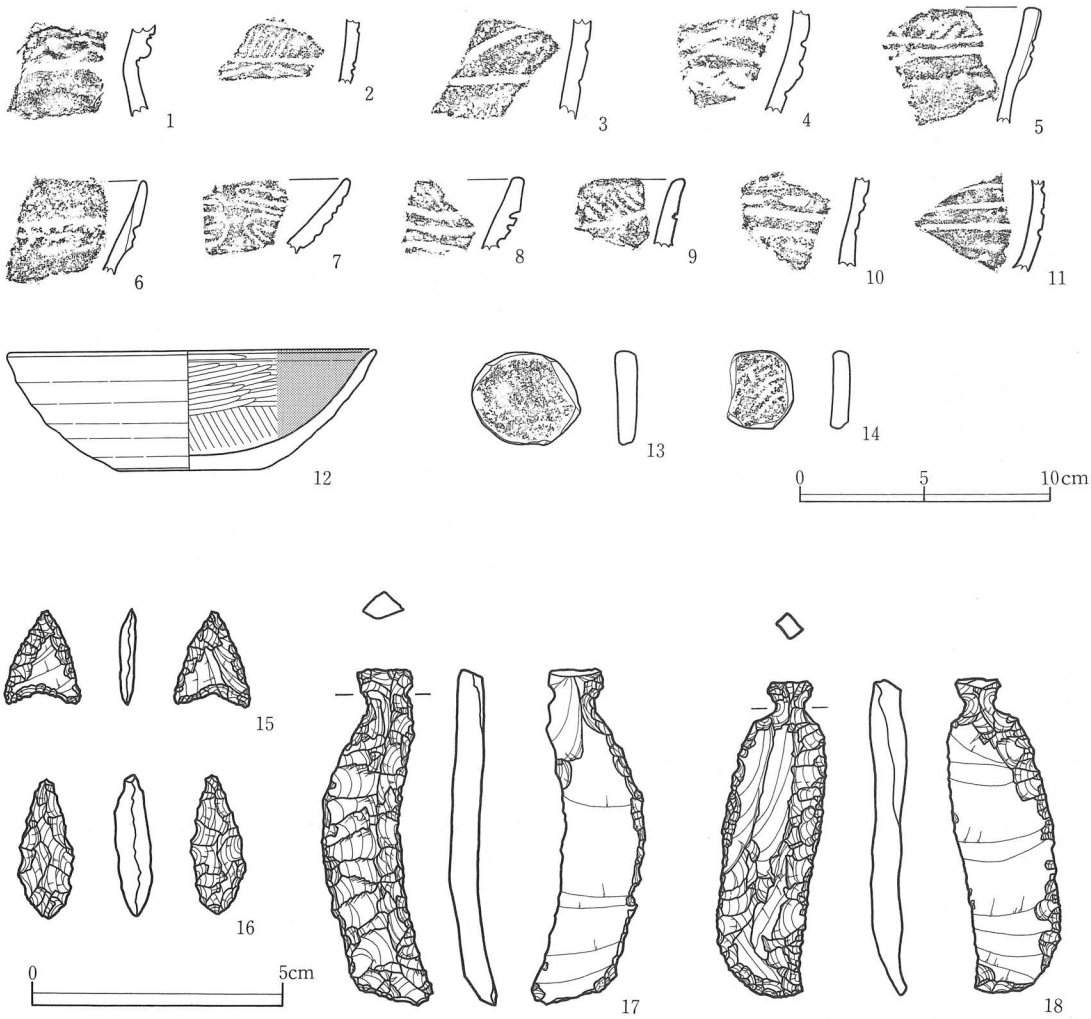
遺物包含層

東区に分布する基本層２層のうち南西から南側にかけて斜面の中腹付近に周辺より遺物の出土量の多い部分が認められ、遺物包含層と考えられた。そのため、層の状況及び遺物の包含状況を把握するための試掘調査区を設定して掘り下げた。その結果土色、土性ともに他の部分の２層と区別することはできず、遺物包含層としての範囲を把握することはできなかった。遺物は層上部からは主に土師器が出土し、中部から下部にかけては主に弥生土器、縄文土器、石器が混在して出土している。これらの出土状況には一定のまとまりや規則性は認められず、遺物を包含した層の二次的な堆積層あるいは自然堆積層であると考えられ、一次的な堆積状況を示す謂所遺物包含層ではないと考えられる。ここでは便宜的に遺物包含層出土遺物として取り上げた遺物を示した。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	包含層	縄文土器		縄文 LR	ナデ		胎土中に植物繊維混入
2	包含層	縄文土器		縄文 L、隆線、沈線	ナデ		胎土中に植物繊維混入。図版51-42
3	包含層	縄文土器		結束縄文	ナデ		胎土中に植物繊維混入
4	包含層	縄文土器		沈線	ナデ		胎土中に植物繊維混入
5	包含層	縄文土器		沈線	ナデ、ミガキ		胎土中に植物繊維混入。図版51-43
6	包含層	縄文土器		刺突	ナデ、ミガキ		図版51-44
7	包含層	縄文土器		結束縄文	ナデ、ミガキ		
8	包含層	縄文土器		沈線	ナデ		
9	包含層	縄文土器		結束縄文	ナデ		胎土中に植物繊維混入
10	包含層	縄文土器		刺突	ミガキ	縄文 RL、沈線、刺突	図版51-45
11	包含層	弥生土器		縄文RL、隆線、沈線、刺突	ナデ		図版51-46
12	包含層	弥生土器		縄文LR、隆線、沈線、刺突	ナデ		図版51-47
13	包含層	弥生土器		縄文 LR、隆線、刺突	ナデ		外面に炭化物付着
14	包含層	弥生土器		縄文 RL、沈線	ナデ		

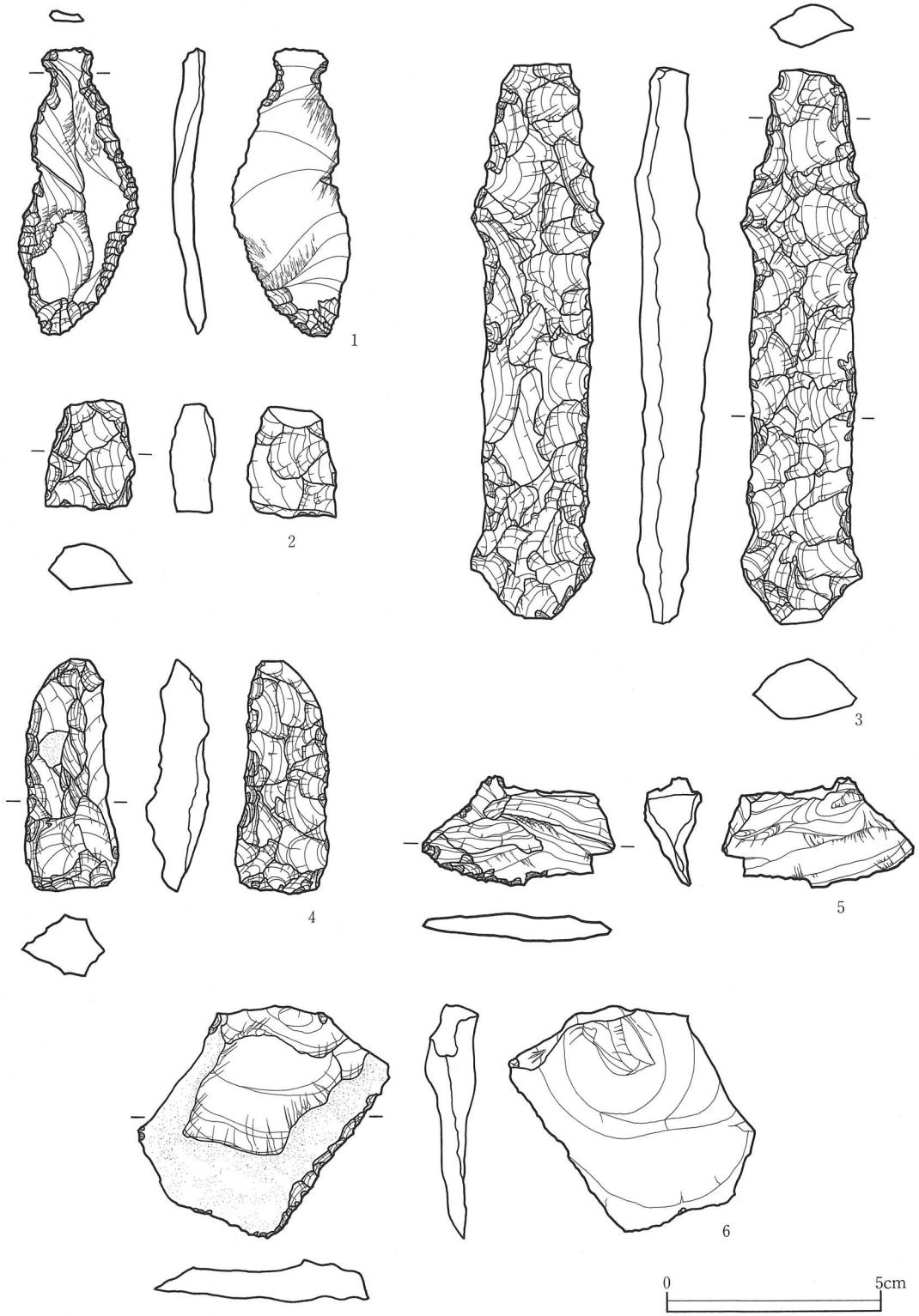
第80図　東区出土遺物(1)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	包含層	弥生土器		隆線、沈線、刺突	ナデ		
2	包含層	弥生土器		縄文 RL、沈線	ナデ		図版51-48
3	包含層	弥生土器		縄文 LR、沈線	マメツ		
4	包含層	弥生土器		不明縄文,隆線,沈線,刺突	ナデ		図版51-49
5	表採	弥生土器		縄文 LR、沈線	ナデ		
6	表採	弥生土器		縄文RL,隆線,沈線,刺突	ナデ		図版51-50
7	表採	弥生土器		縄文 RL、沈線	ナデ		図版51-51
8	表採	弥生土器		縄文 RL、沈線	ナデ		
9	表採	弥生土器		縄文 RL、沈線	ナデ		
10	表採	弥生土器		縄文 RL、沈線	ナデ		
11	表採	弥生土器		沈線	ナデ		
12	包合層	土師器	杯	ロクロ調整	ミガキ、黒色処理	回転糸切り	

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
13	包合層	土製円板	3.8×4.2×0.9	14.4		
14	包合層	土製円板	3.2×(2.6)×0.7	7.1		
15	包合層	石鏃	1.9×1.5×0.3	0.6	珪質頁岩	図版52-26
16	包合層	石鏃	2.3×1.1×0.7	1.3	石英安山岩質凝灰岩	図版52-27
17	包合層	石匙	6.7×2.2×0.6	7.4	珪質頁岩	図版52-45
18	表採	石匙	6.3×2.2×0.7	7.7	珪質頁岩	図版52-46

第81図　東区出土遺物(2)



No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	包合層	石匙	6.6×2.7×0.4	6.9	珪質頁岩	図版52-47
2	包合層	尖頭器	2.5×2.2×0.9	6.4	珪質頁岩	
3	表採	尖頭器	12.7×3.0×1.6	54.0	珪質頁岩	図版52-52
4	包合層	篦状石器	5.4×2.2×1.3	13.6	珪質頁岩	図版52-57
5	包合層	スクレーパー	2.5×4.4×1.2	9.3	珪質頁岩	一部玉髄化
6	包合層	スクレーパー	5.3×5.2×0.9	22.2	頁岩 or 凝灰岩	

第82図　東区出土遺物(3)

No.	層 位	種 別	長×幅×厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
1	包合層	スクレーパー	4.1×2.4×0.7	5.4	珪質頁岩	
2	包合層	微細剥離	5.5×4.8×1.5	29.6	珪質頁岩	
3	包合層	磨製石斧	8.1×5.6×2.6	175.1	石英安山岩質凝灰岩	図版52-59
4	包合層	磨製石斧	11.5×4.0×2.7	103.0	石英安山岩質凝灰岩	図版52-60

第83図　東区出土遺物(4)

2．土手内窯跡、土手内横穴墓群Ｂ地点

〔1〕 調査の方法と経過

土手内遺跡は、斜面が削平され、カッテイング面に少なくとも３基の窯跡が確認されていた。今回の造成工事では、斜面全域について、一部の盛土部分を除いて削平される予定になっていたため、窯跡が確認されていたレベルで南側の斜面に調査区を設定した。また、西側の緩斜面及び東側北部の平坦部を対象として調査区を設定した。発掘区の設定にあたって地形的な制約から、南側斜面では国家座標第Ｘ系 X＝－197.200kmY＝2,900km を基点とし、南側緩斜面では X＝－197.161km、Y＝2,843km 東側北部平坦部では X＝－197.176kmY＝2,930km を基点とし、国家座標の方向を軸線とした。位置の表示方法は土手内遺跡と同様である。南側の斜面において、表土を剝離した段階で沢状の窪みが５ヶ所検出され、さらにその堆積土を除いた段階で４ヶ所は横穴墓であることが確認された。最終的には、窯跡３基、横穴墓８基が検出され須恵器・土師器等が出土した。また、西側の緩斜面及び東側北部の平坦面では、土坑１基、焼土遺構９基、溝跡１条の遺構の外、縄文土器、土師器、礫石器等が出土した。実測図は全域を航空写真測量によって1/200の平面図を作成したほか、各遺構は簡易遣り方を用いて1/20の平面図と断面図を作成した。さらに35mm 版モノクロ及びカラーリバーサル写真を撮影した。

調査は平成元年６月２日より開始し、11月13日まで延84日間を費やし、11月６日には報道発表を実施した。発掘面積は4,750m²に達した。

〔2〕 基本層位

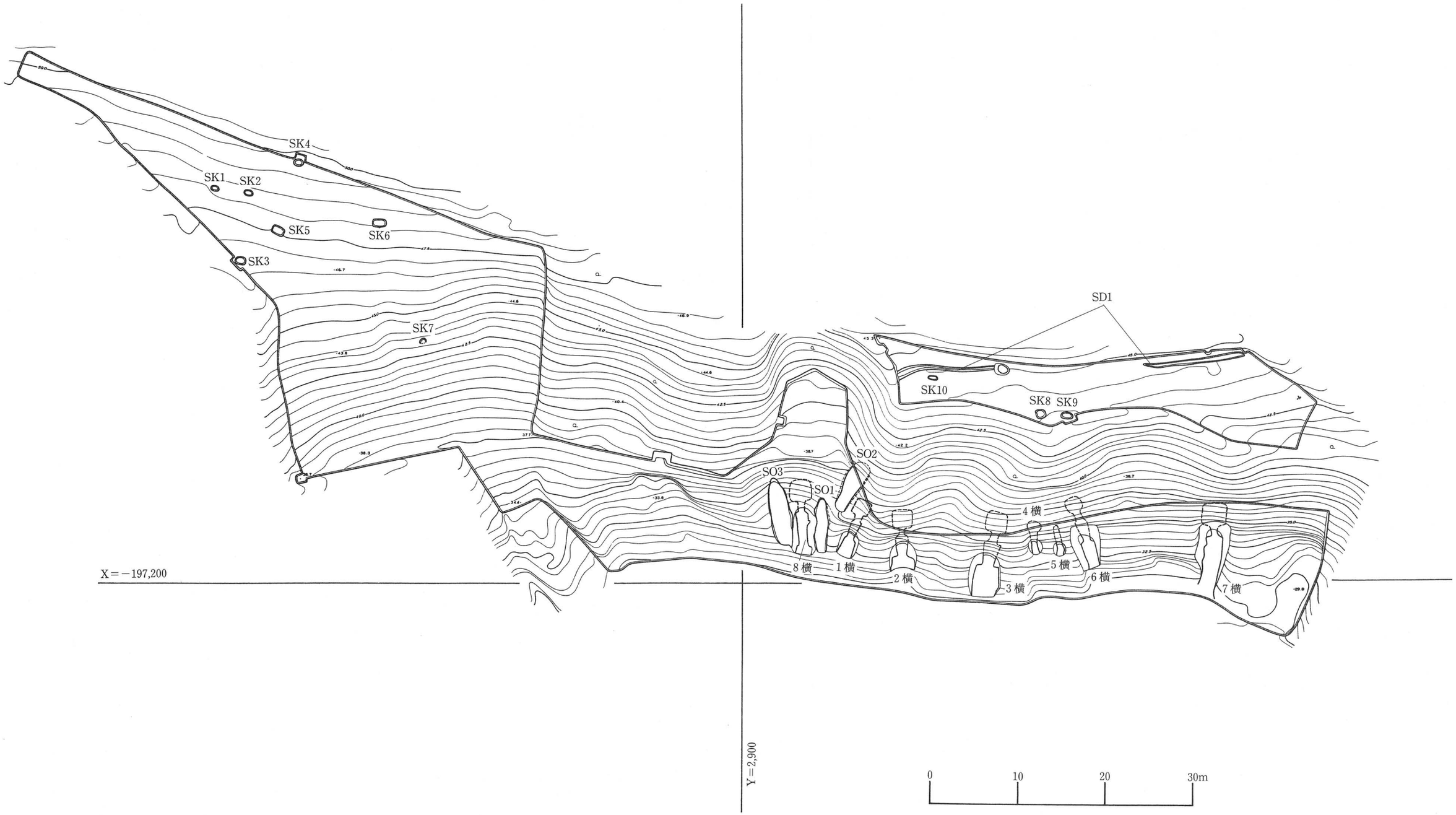
窯跡周辺の南斜面では、削平を受けていない部分については表土直下で遺構検出面となり、全面に斜面上方から崩落したと考えられる土砂が認められる。また、１、３号窯跡及び８号横穴の上部は大きく崩れ現状で凹地状の地形を呈していた。西側の緩斜面及び東側北部の平坦部では、ほぼ同様の層位を示し、１層表土から礫層まで４層確認された。２層は暗褐色シルト層で一部に礫が混入している。３層は明褐色砂質シルト層で遺構検出面となっている。４層は基盤の礫層である。更にその下部に基盤岩層が認められ、その岩層を穿って窯及び横穴が築造されている。

〔3〕 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、南側斜面西部の中腹に窯跡が３基、同じ南側斜面の中腹から裾部にかけて一列に横穴墓が８基検出された。西側の緩斜面では土坑７基、東側北部の平坦部で土坑３基と溝跡１条が検出された。

遺物は整理用平箱（テンバコ32）にして47箱程の出土量である。縄文土器、須恵器、陶磁器土製品、石製品、鉄製品などがある。

(1) 窯跡



第84図　土手内窯跡・横穴墓群遺構配置図

1号窯跡（SO－1）

南斜面西部の中腹に位置している。地下式窖窯である。焚き口から燃焼室の一部まではすでに削平されて残存しない。8号横穴墓と重複しており、本遺構の西側床面から側壁の一部が横穴墓構築時に削平された状況であることから、本遺構は8号横穴墓より古いものである。また、位置的に2号窯跡との重複が考えられるが削平のため確認できなかった。灰原はすでに削平されており、存在しない。

［煙出し部、焼成部］煙出し部から焼成室上部にかけて床面が失なわれており、煙出し部と焼成部の境は明瞭ではない。煙出し部は先端部の残存状況から円形あるいは隅丸の方形と考えられ、焼成室奥壁からの立ち上がりは壁の崩落のために不明であるがかなり急角度であると考えられる。焼成部の平面形は西側が横穴により撹乱されており正確には不明であるが、やや胴張り形を呈するものと思われる。側壁は中央部から煙道寄りは内弯しながら立ち上がりオーバーハングしており、燃焼室寄りではほぼ垂直に立ち上がる。断面形は半円形になるものと思われる。表面は還元され硬化しており中央部から燃焼室寄りでは著しく融解している。床面は表面が剝がれた部分があり、操業時に掻き出しをした際の痕跡の可能性も考えられる。床面はほぼ平坦で、約10°～30°の角度で傾斜しており、煙出し部に向かって徐々に傾斜がきつくなっている。床面には青灰色の還元面が残っており更に外側には橙色に硬く焼け締っている部分もみられる。

［燃焼部］削平のため焼成部との境付近しか残存していないが、その境は明瞭ではない。平面形は左側壁が奥に向かって広がる台形状を呈するものと思われる。床面は削平のために焼成部との境付近のみしか残存しない。還元されて硬化している。他の部分は、橙色に焼け締っている部分、赤変している部分がみられる。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、還元されて硬化している。

［堆積土］堆積土は4層に分けられた。1層は自然流入土、2、3層は天井部、壁の崩落土、4層は壁の崩落土、炭化物が多量に混入している。

［中軸線の方向］N－2°－E

［窯体の規模］全体－残存長6.3m（7.0m）残存最大幅1.55m 確認面からの深さ0.95m

煙出し部、焼成部－長さ5.9m（6.65m）残存最大幅1.55　残存高0.7m

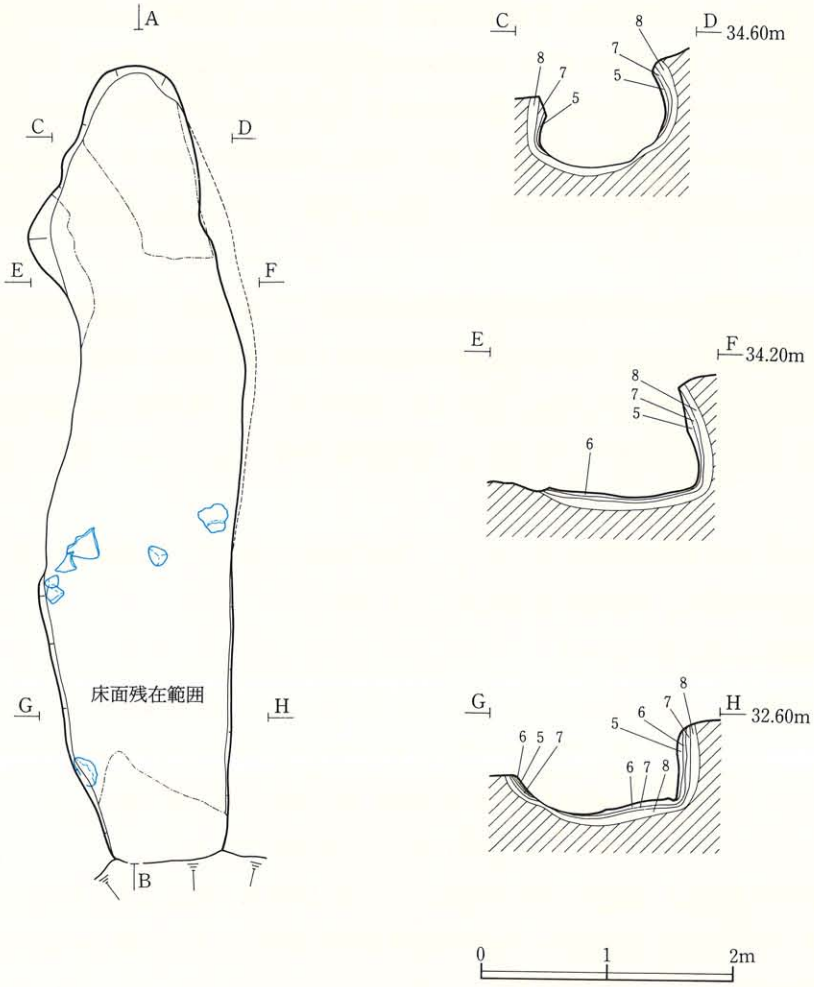
燃焼部－残存長0.4m（0.45m）幅1.0m　残存高0.3m

長さの（　）内の数値は斜面上の実測長である。

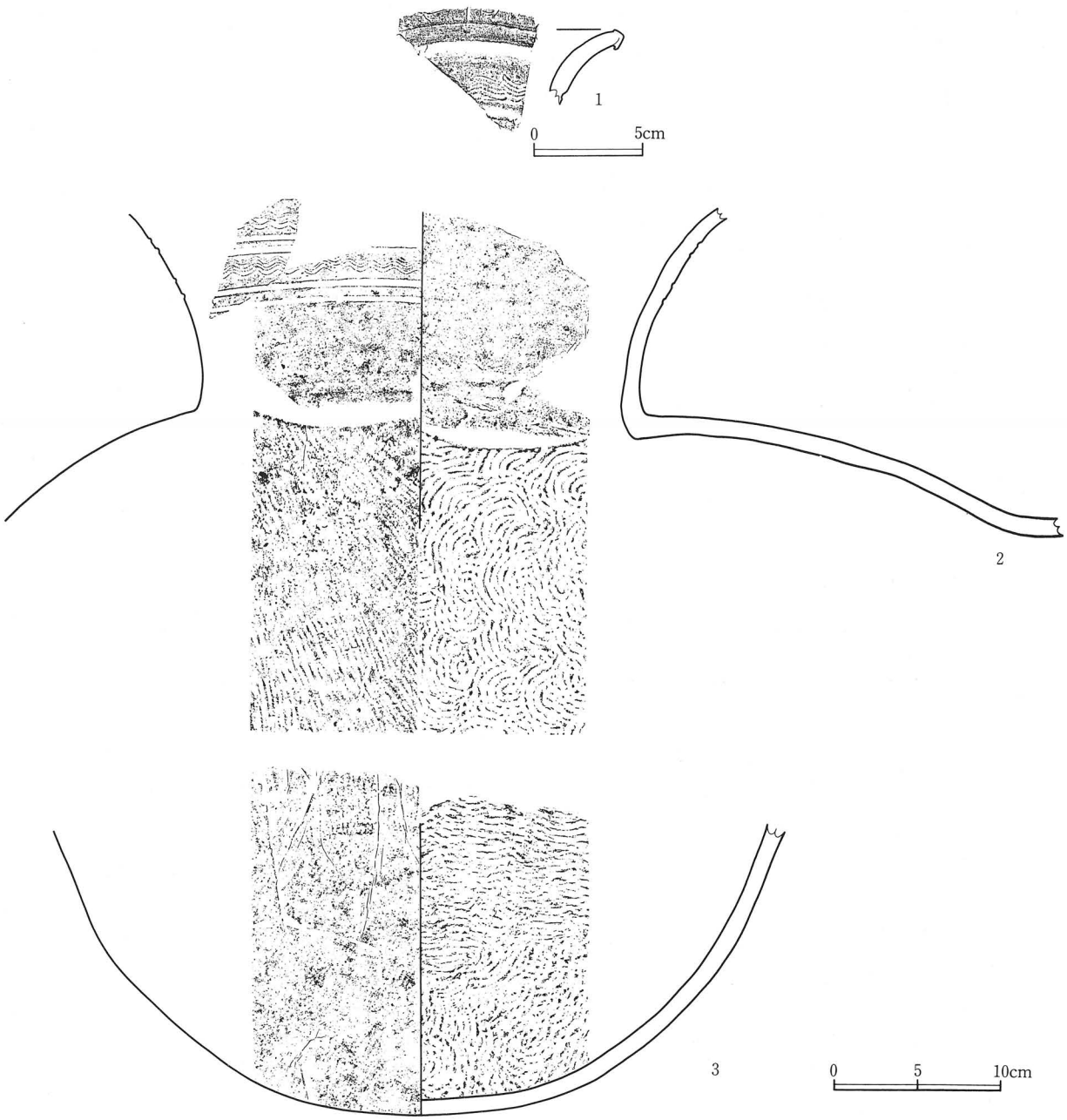
［遺物の出土状況］堆積土4層及び床面上より須恵器片及び焼台に用いられたと考えられる礫がある。中には焼台として用いられた礫の表面に自然釉とともに付着した破片もみられる。甕以外の須恵器の破片はみられない。

SO-1 窯跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	褐(10YR4/6)	粘度質シルト	径1～数cmの礫含む
2	黄褐(10YR5/6)	シルト	天井、壁の崩落土。褐(10YR4/4)粘土ブロック含む
3	明黄褐(2.5Y6/6)	シルト質砂	天井、壁の崩落土含む
4	オリーブ(5Y5/6)	シルト質砂	炭化物、焼土、壁の崩落土含む
5			窯壁
6	灰オリーブ(7.5Y5/2)	砂	締りなし
7	黄褐(2.5Y5/4)	砂	締っている
8	赤褐(2.5YR4/8) 黄褐(2.5Y5/4)	砂	酸化



第85図　SO-1 窯跡



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	床面	須恵器	甕	沈線、波状文	ロクロナデ		図版107-1
2	床面	須恵器	甕	沈線、波状文、叩目	ロクロナデ、当具痕		SO-3の1～3床面。図版107-2
3	床面	須恵器	甕	叩目	当具痕	叩目	SO-1、3の3次床面

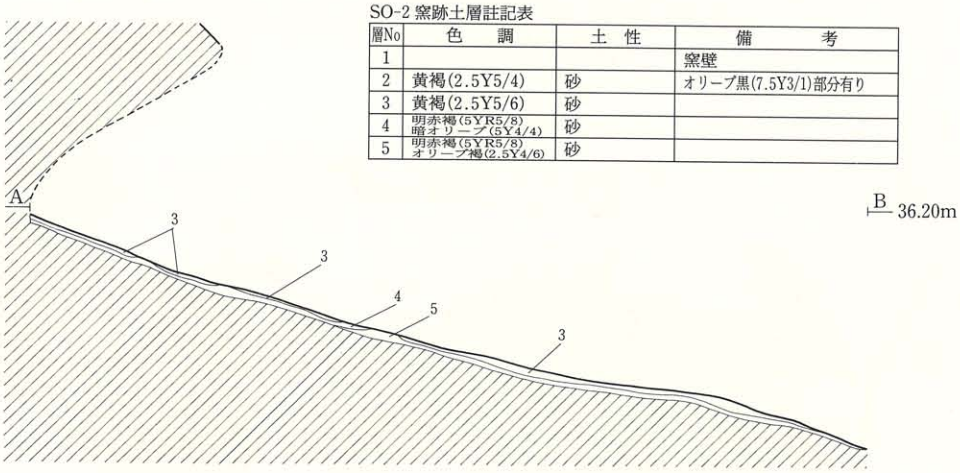
第86図　SO-1窯跡出土遺物

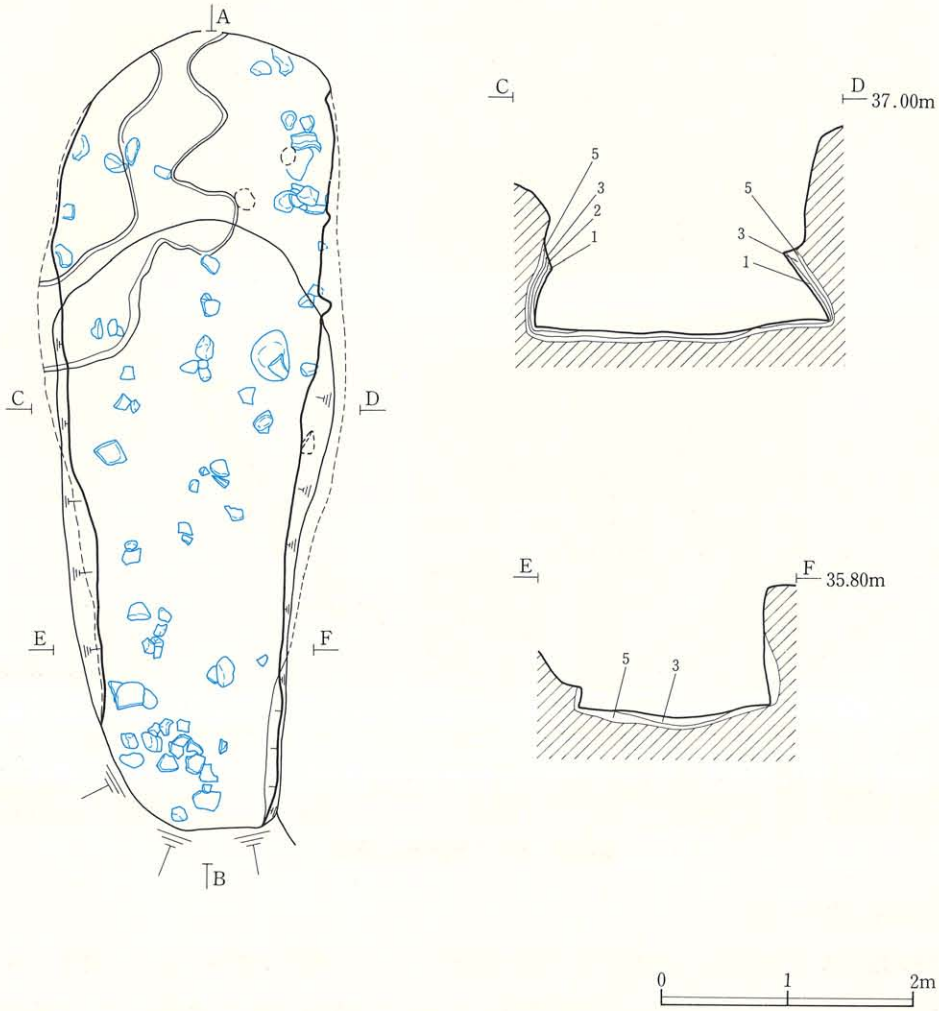
2号窯跡（SO－2）

南斜面西部の1号窯跡、1号横穴の上段に位置している。地下式窖窯である。焚き口から燃焼部の一部まではすでに削平されており残存しない。1号窯跡の項でも触れたが、1号窯跡と

SO-2 窯跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1			窯壁
2	黄褐(2.5Y5/4)	砂	オリーブ黒(7.5Y3/1)部分有り
3	黄褐(2.5Y5/6)	砂	
4	明赤褐(5YR5/8) 暗オリーブ(5Y4/4)	砂	
5	明赤褐(5YR5/8) オリーブ褐(2.5Y4/6)	砂	





第87図　SO-2 窯跡

の重複が考えられる位置にあるが斜面の削平のために確認できなかった。また、灰原についても残存しない。調査は工事による掘削の深度が及ばないという点と、期間の関係で焼成部の上半部付近まで行い、上部から煙道部については行なわれなかった。

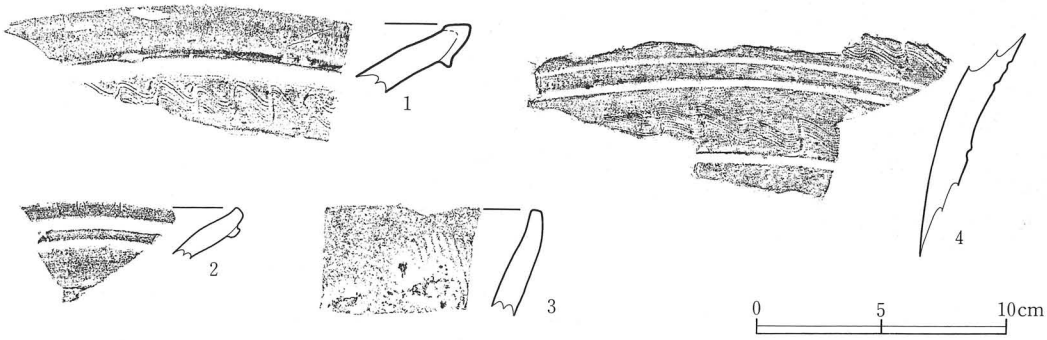
［焼成部］上半部が未調査のため正確な規模、形態は不明であるが、中央部より上寄りが膨らむ非対称の胴張り形を呈するものと考えられる。壁は内傾して立ち上がり、オーバーハングしている。燃焼室寄りではやや角度が大きくなっている。断面形は半円形になるものと考えられる。表面は還元され、硬化しており、全面が著しく融解している。床面は表面が剝がれた部分があり、操業時の掻き出しの痕跡の可能性も考えられる。ほぼ平坦であるが上半部に浅く凹む部分があり、約20°の角度で傾斜している。また、還元面は特に壁の近くが残存状況が良く、中央部では橙色に焼け締った部分が表面に表われている部分もある。所々に還元されて青灰色化した砂が盛り上げられている部分がみられ、砂を盛り上げて焼台とした部分の痕跡の可能性がある。

［燃焼部］燃成部との境付近しか残存しないが、その境は明確ではない。平面図は長方形を呈するものと思われる。床面は平坦で焼成部より約5°程傾斜が緩くなっている。還元されているがそれほど硬くはない。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、還元されて硬化している。表面は著しく融解がみられる。

［中軸線の方向］N－31°－E

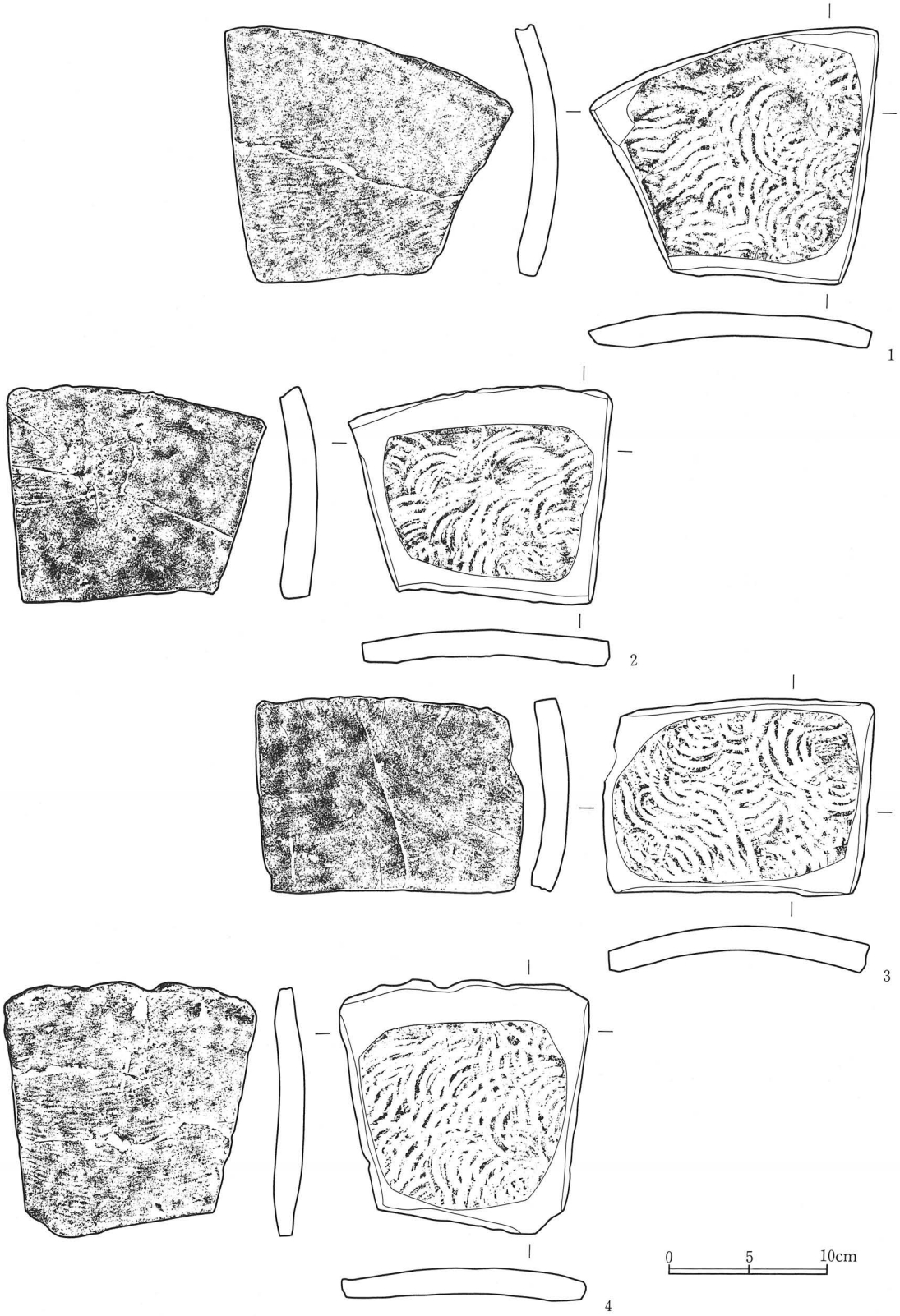
［窯体の規模］全体調査した長さ6.5m（6.9m）最大幅（2.4m）確認面からの深さ1.5m
燃成部－調査した長さ6.0m（6.23m）幅2.4m　残存高0.65m
燃焼部－残存長0.5m（0.65m）　　幅1.3m　残存高0.2m
長さの（　）内の数値は斜面上の実測長である。

［遺物の出土状況］床面上より須恵器片及び焼台に用いられたと考えられる礫・須恵器甕の体部を用いて製作された焼台がある。中には焼台として用いられた礫の表面に自然釉とともに付着した破片もみられる。



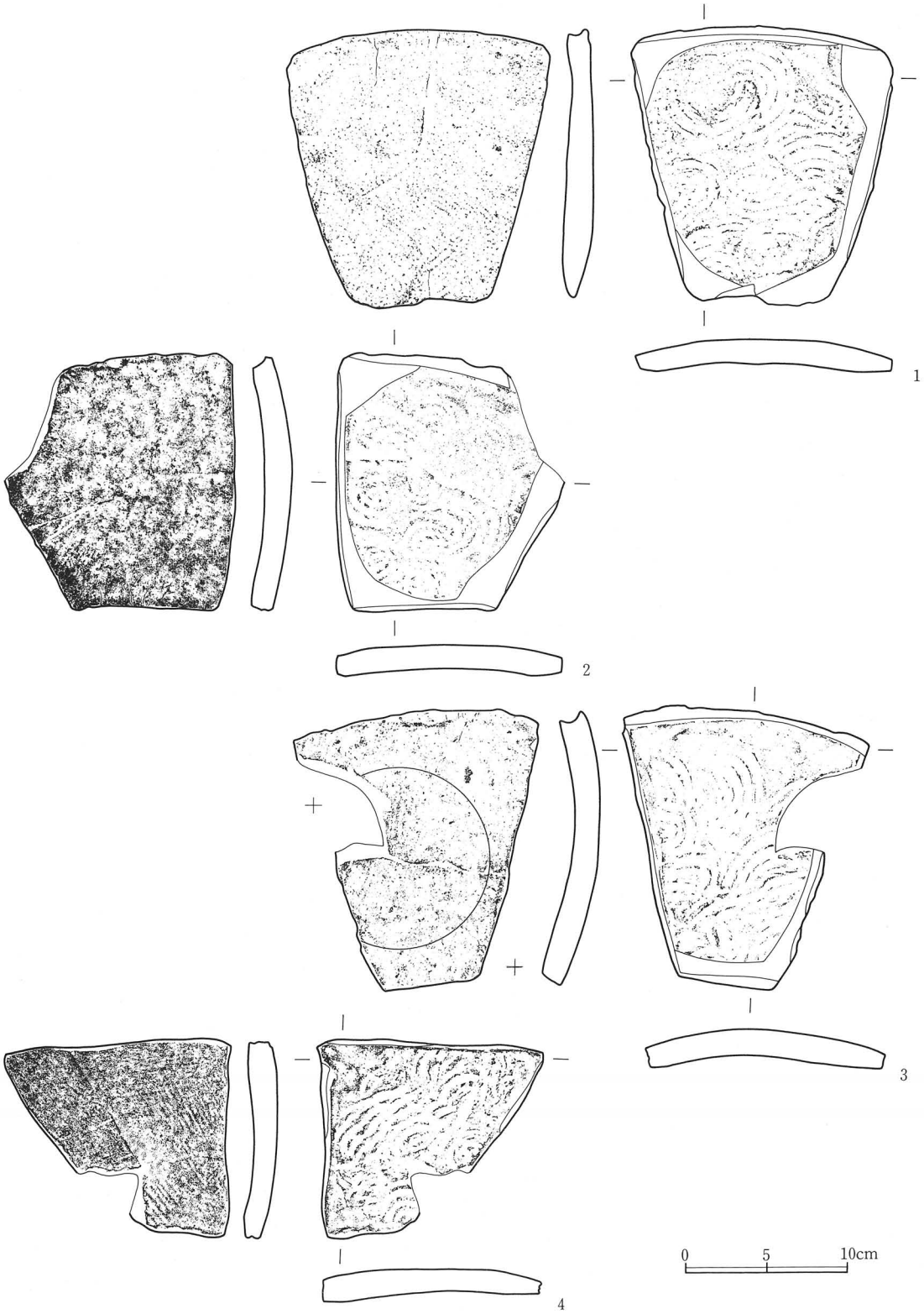
No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	床面	須恵器	甕	隆線、波状文	ロクロナデ		図版107-4
2	床面	須恵器	甕	隆線	ロクロナデ		図版107-5
3	床面	須恵器	甕	叩目	ロクロナデ		SO-2,3の3次床面。第96図の4と同一。図版107-6
4	床面	須恵器	甕	沈線、波状文	ロクロナデ		

第88図　SO-2 窯跡出土遺物(1)



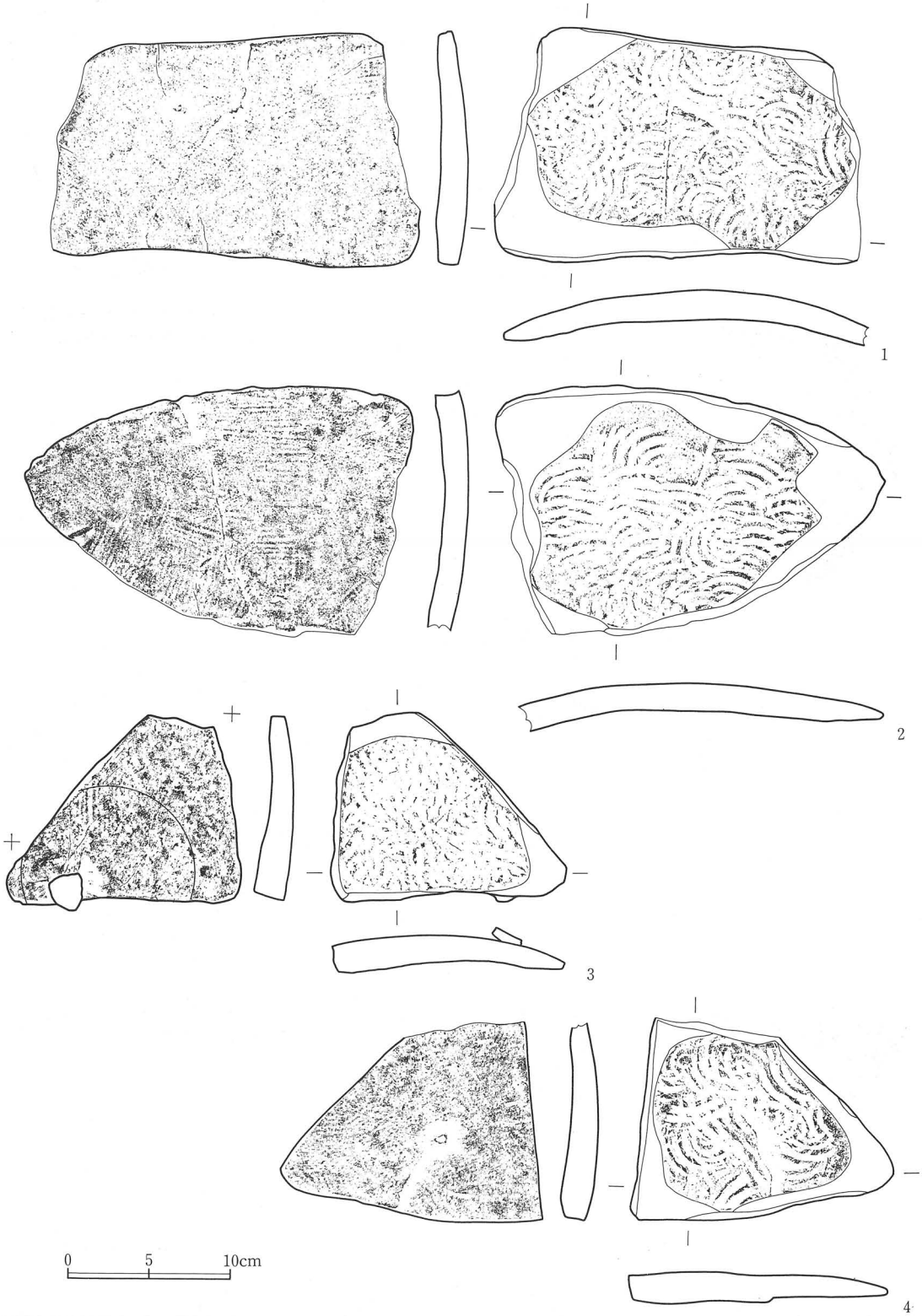
No.	層位	種別	器形	外面	内面	備考
1	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
2	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	図版107-10
3	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
4	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	

第89図　SO-2 窯跡出土遺物(2)



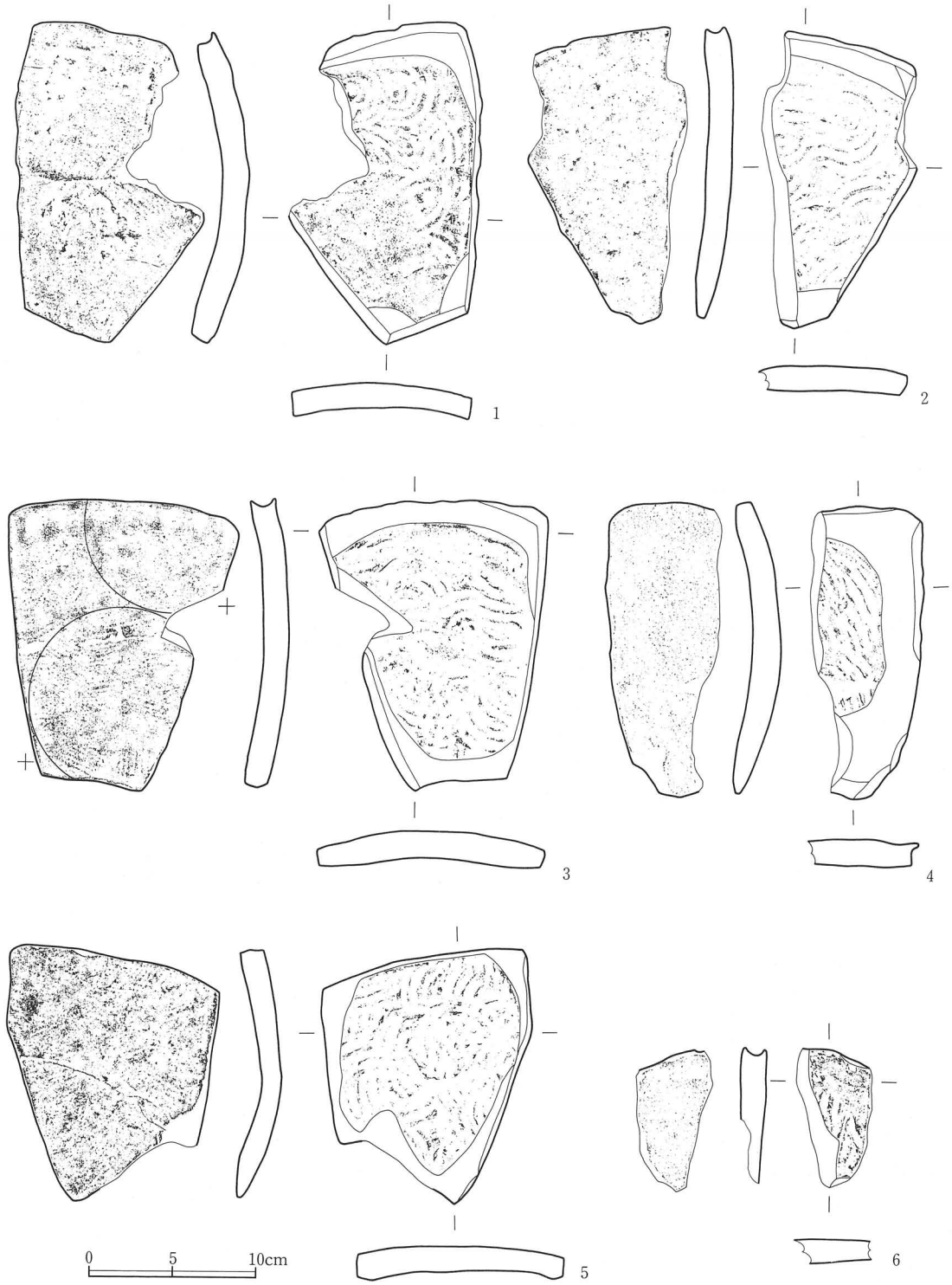
No.	層位	種別	器形	外面	内面	備考
1	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	SO-2、3の床面
2	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
3	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	円形痕跡11.2cm。 図版107-10、13
4	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	

第90図　SO-2 窯跡出土遺物(3)



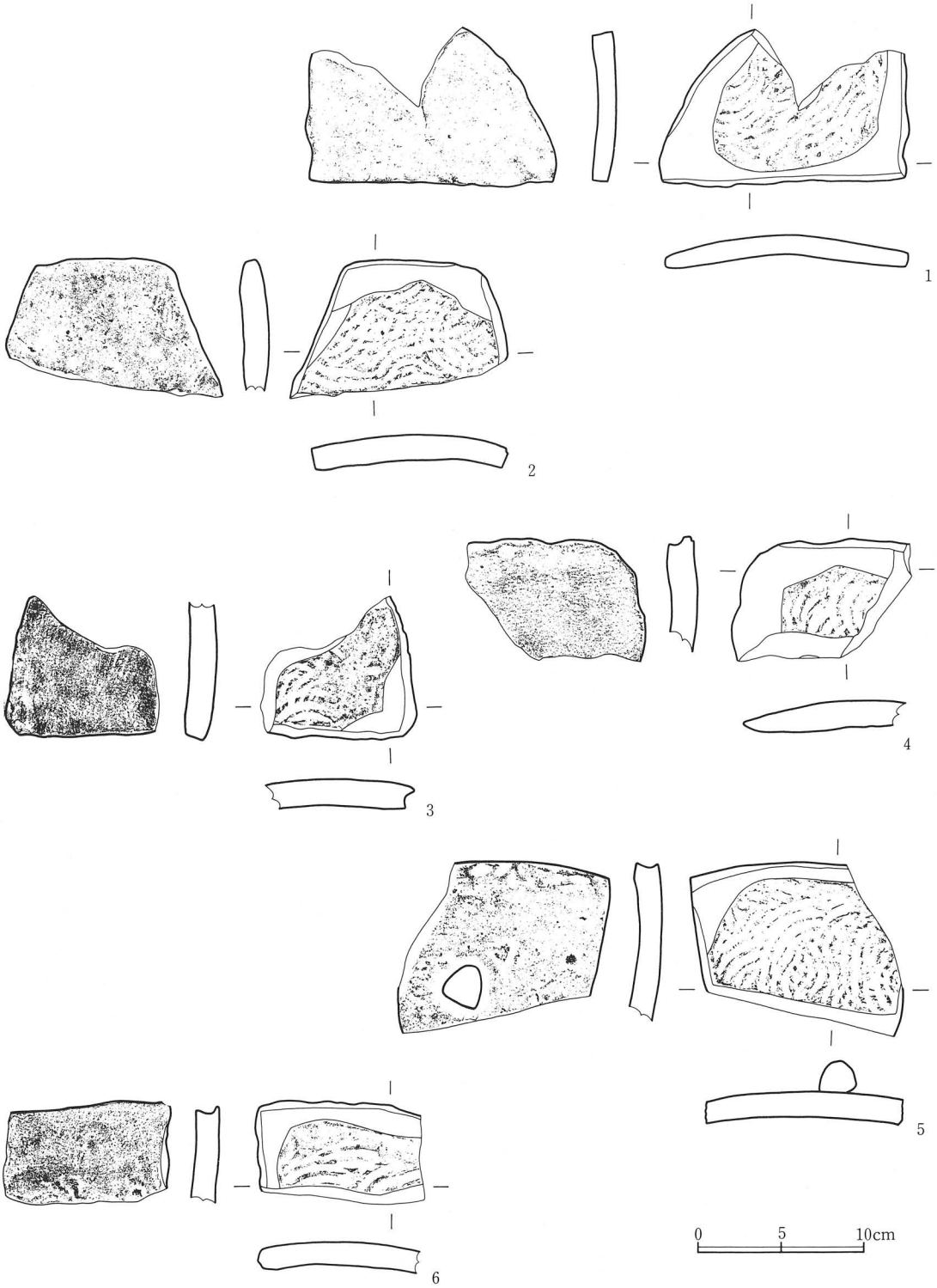
No.	層位	種別	器形	外面	内面	備考
1	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	図版107-10、12
2	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	図版107-10
3	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	円形痕跡10.6cm。 図版107-10
4	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	

第91図　SO-2 窯跡出土遺物(4)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	備考
1	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
2	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
3	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	円形痕跡10.8cm、11cm
4	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
5	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
6	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	

第92図　SO-2 窯跡出土遺物(5)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	備考
1	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
2	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
3	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
4	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
5	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	小石付着
6	床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	

第93図　SO-2 窯跡出土遺物(6)

3号窯跡（SO－3）

南斜面西部の中腹に位置しており、西端の遺構である。地下式窖窯である。焚き口から燃焼部の一部まではすでに削平されており残存しない。8号横穴墓と重複関係にあり、本遺構の焼成部の一部と燃焼部の側壁に8号横穴墓構築の際に削平された状況がみられることから、本遺構は8号横穴墓より古いものである。また、灰原についても残存していない。

［煙出し部・焼成部］平面的には煙出し部と焼成部の境は明瞭ではない。煙出し部は上部が削平されており平面形は不明であるが、焼成室奥壁からほぼ垂直に立ち上がる。表面は還元され硬化している。焼成部の平面形は左右対称の胴張り形で奥壁は丸くおさまっている。側壁の床面近くに段が認められ、壁の崩れを補修せずにそのままくり返して使用したものと思われる。内弯しながら立ち上がり、オーバーハングしている。垂直に立ち上がる部分もあるが、断面形は半円形になるものと思われる。表面は還元されて硬化しており、奥壁近くを除く広い範囲が融解してガラス状になっている。床面は3面認められる。第一次床面は窯跡掘り方底面である。還元されて硬化している。平坦で約15°から30°の角度で傾斜しており、煙出し部に向かって徐々に傾斜がきつくなっている。第二次床面は先端から約2mのところまで床面を作り変えている。平坦で一次床面より約5°程傾斜がゆるくなっている。還元されて硬化している。三次床面は先端から約1.6mのところまで床面を作り変えている。平坦で二次床面より若干傾斜がゆるくなっている。還元は一、二次床面程ではないがしまっていて硬い。

［燃焼部］平面形は左側壁が奥に向かって広がる台形状を呈している。焼成室との境は明瞭ではない。床面は3面認められる。一次床面は窯跡掘り方底面である。平坦でほぼ水平であるが焼成部に向かって傾斜がきつくなり、焼成部との境に傾斜度換線が認められる。表面は還元され、硬化している。第二次床面は焼成部の第二次床面に伴う床面である。ほぼ平坦で約10°～15°の角度で傾斜している。第三次床面は焼成部の第三次床面に伴う床面である。第二次床面使用時の灰や焼土の上に粘土を貼り付けている。ほぼ平坦で約10°の角度で傾斜している。焼成室の第三次床面同様還元はさほどではないがしまっていて硬い。側壁は焼成室同様に床面近くに段が認められ、特に中央部の右壁には二段認められることから壁の崩れを補修せずにそのままくり返して使用したものと思われる。床面との境に丸味をもちながら内弯して立ち上がる。還元されて硬化しており、表面は融解してガラス状になっている。

［焚き口］燃焼部との境付近しか残存しない。燃焼部の第一次から二次までの床面に対応する2面の床面が残存している。燃焼部との境には傾斜変換線が認められる。平坦で約30°の角度で傾斜している。特に施設等はみられない。

［堆積土］20層に細分された。1～3層は天井部崩落土であり、3層は天井部の還元面で下面はガラス状に融解している。4～9層は天井部、壁の崩落土、炭化物、焼土が多量に混入して

いる。12～14層は三次、20層は二次の貼床である。また、15層についても、還元され、上面が特に硬化しており、焼成室の第三次床面に伴う燃焼部の貼床の一枚である可能性がある。

［中軸線の方向］N－11°－W

［窯体の規模］全体－残存長7.8m（8.4m）最大幅2.35m　確認面からの深さ1.1m

煙出し部、焼成部－長さ5.8m（6.3m）幅－三次床2.35m　残存高0.7m

一、二次床2.2m

燃焼部－長さ1.5m（1.6m）幅－三次床2.15m　残存高0.4m

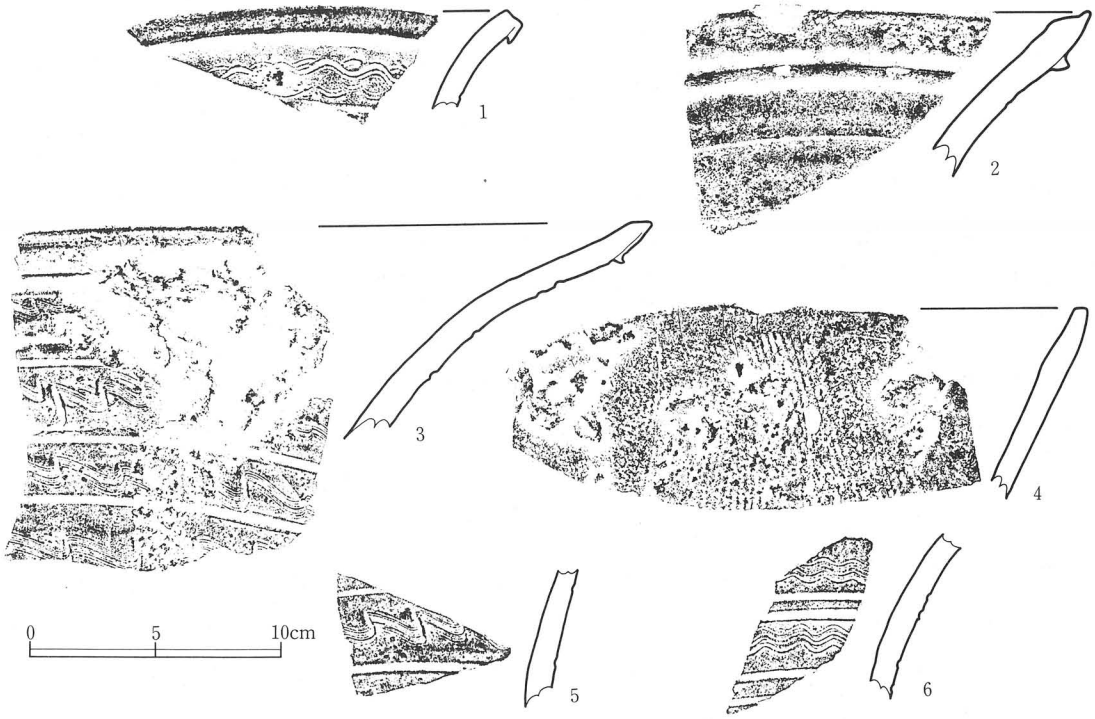
一、二次床1.95m

焚き口－長さ0.5m　残存最大幅－三次床　1.5m　残存高0.2m

一、二次床1.3m

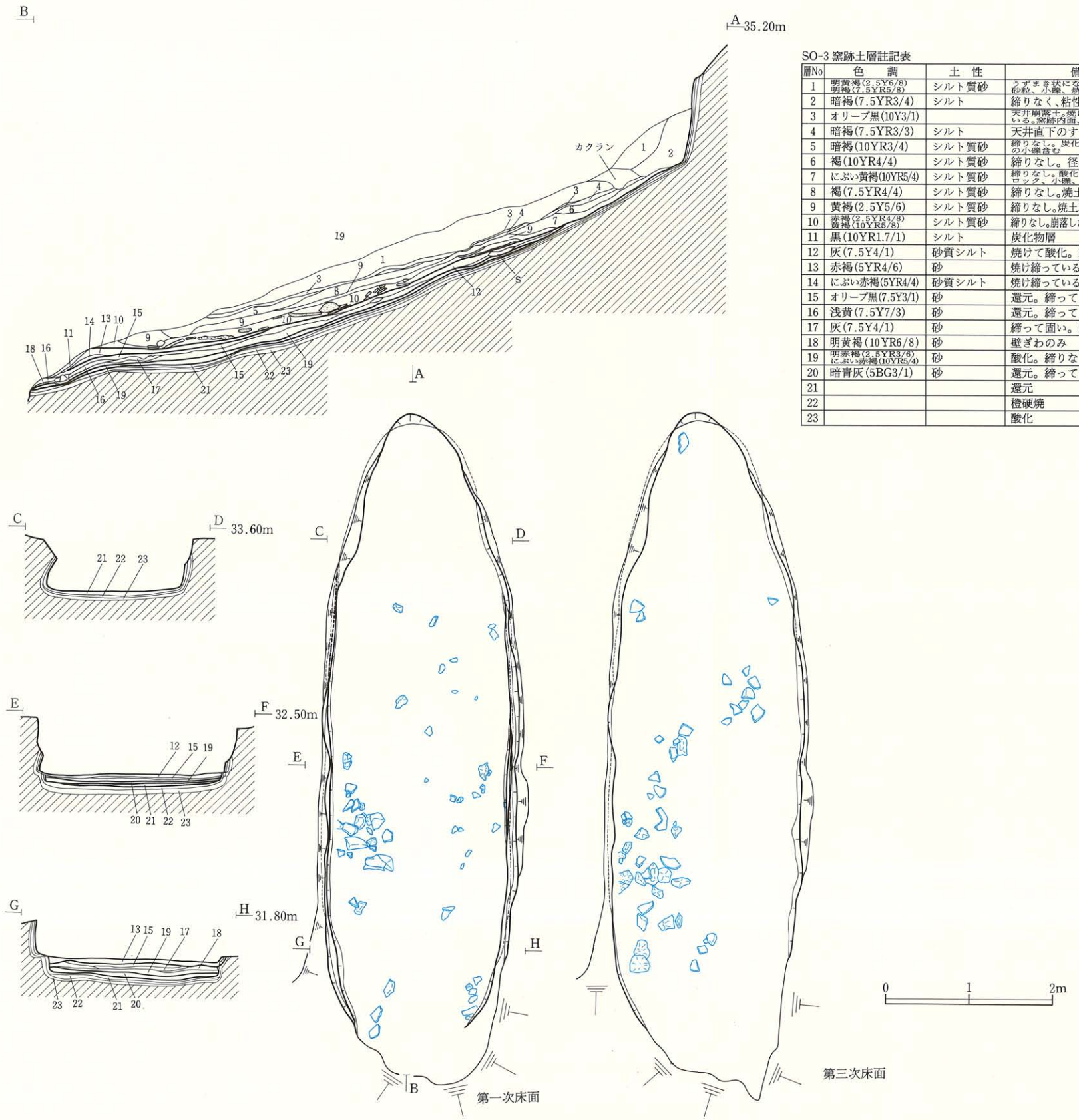
長さの（　）内の数値は斜面上の実測長である。

［遺物の出土状況］遺物は第一次、二次、三次床面上及び堆積土５～10層を中心に出土している。13、14層中からの遺物の出土はない。遺物は須恵器及び焼台に用いられたと考えられる礫



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	1次床面	須恵器	甕	沈線、波状文	ロクロナデ		図版107-7
2	2次床面	須恵器	甕	ロクロナデ、隆線	ロクロナデ		
3	3次床面	須恵器	甕	沈線、波状文	ロクロナデ		
4	3次床面	須恵器	甕	叩目	ロクロナデ		SO-2、3の3次床面。第88図の3と同一
5	中部	須恵器	甕	沈線、波状文	ロクロナデ		
6	1次床面	須恵器	甕	沈線、波状文	ロクロナデ		第86図の2と同一

第94図　SO-3 窯跡出土遺物(1)

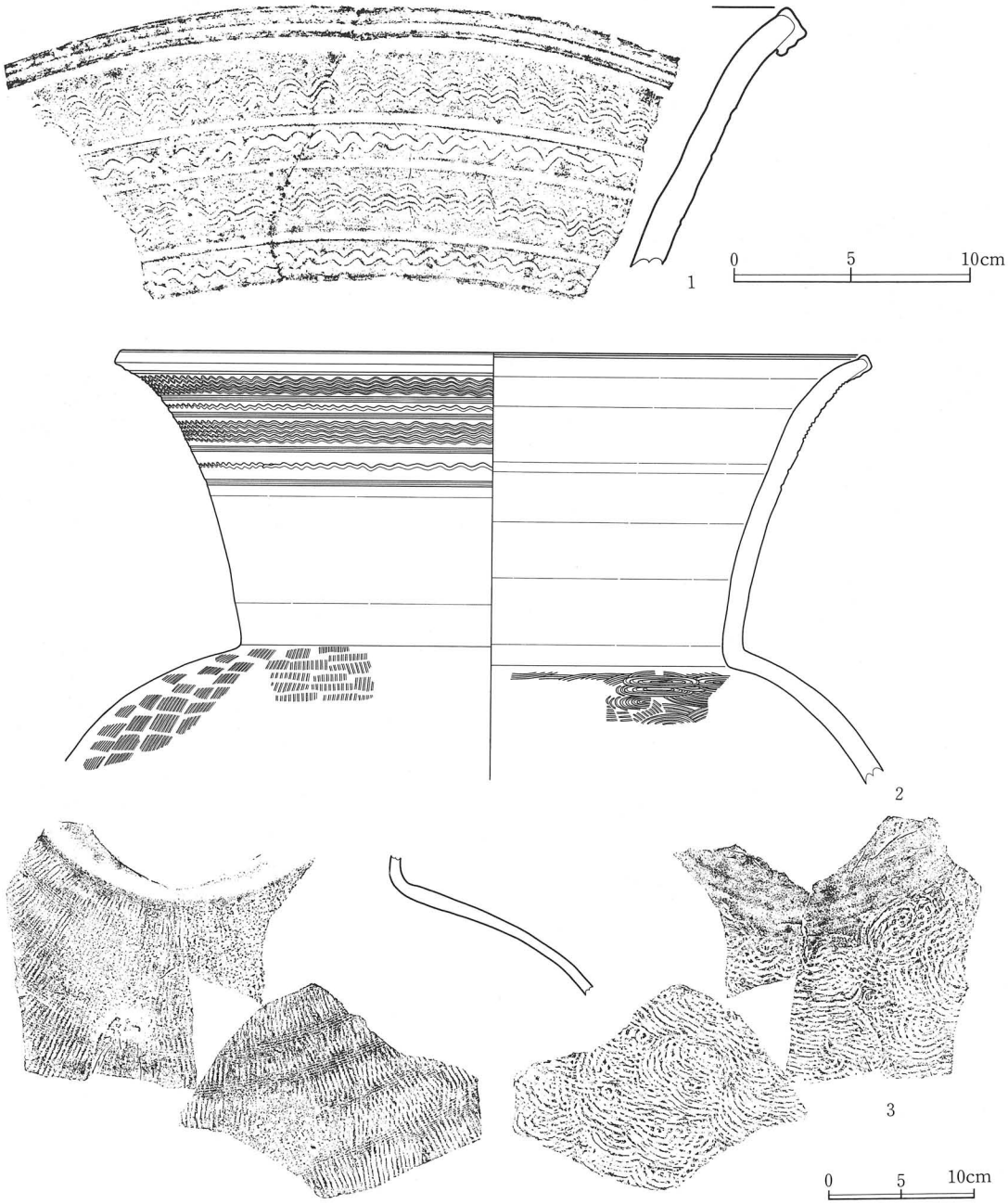


SO-3 窯跡土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	明黄褐(2.5Y6/8) 明褐(7.5YR5/8)	シルト質砂	うずまき状になっている。締り粘性なし。砂粒、小礫、焼土塊、遺物含む
2	暗褐(7.5YR3/4)	シルト	締りなく、粘性有。径1～10数cm礫含む
3	オリーブ黒(10Y3/1)		天井崩落土。焼け締りコークス状になっている。窯跡内面、表面は光沢あり
4	暗褐(7.5YR3/3)	シルト	天井直下のすす焼状の土
5	暗褐(10YR3/4)	シルト質砂	締りなし。炭化物、焼土粒、塊、径数mmの小礫含む
6	褐(10YR4/4)	シルト質砂	締りなし。径数cmの小礫含む
7	にぶい黄褐(10YR5/4)	シルト質砂	締りなし。酸化(火熱)した数cmの砂粒ブロック、小礫、焼土塊含む
8	褐(7.5YR4/4)	シルト質砂	締りなし。焼土粒、小礫、炭化物含む
9	黄褐(2.5Y5/6)	シルト質砂	締りなし。焼土粒、崩落した壁の破片含む
10	赤褐(2.5YR4/8) 黄褐(10YR5/8)	シルト質砂	締りなし。崩落した壁、天井の破片、遺物含む
11	黒(10YR1.7/1)	シルト	炭化物層
12	灰(7.5Y4/1)	砂質シルト	焼けて酸化。締りない
13	赤褐(5YR4/6)	砂	焼け締っている。崩落天井の破片含む
14	にぶい赤褐(5YR4/4)	砂質シルト	焼け締っている。崩落天井の破片含む
15	オリーブ黒(7.5Y3/1)	砂	還元。締って固い
16	浅黄(7.5Y7/3)	砂	還元。締って固い
17	灰(7.5Y4/1)	砂	締って固い。還元
18	明黄褐(10YR6/8)	砂	壁ぎわのみ
19	明赤褐(2.5YR3/6) にぶい赤褐(10YR5/4)	砂	酸化。締りなし
20	暗青灰(5BG3/1)	砂	還元。締って固い
21			還元
22			橙硬焼
23			酸化

第95図　SO-3 窯跡

がある。中には須恵器甕の体部を用いて製作された焼台もみられ、焼台として用いられた礫の表面に自然釉とともに付着した破片がみられる。焼台として加工されたもの以外にも製品の痕跡が表面に残されたものがあり、窯に残された須恵器片の多くは焼台であると考えられる。

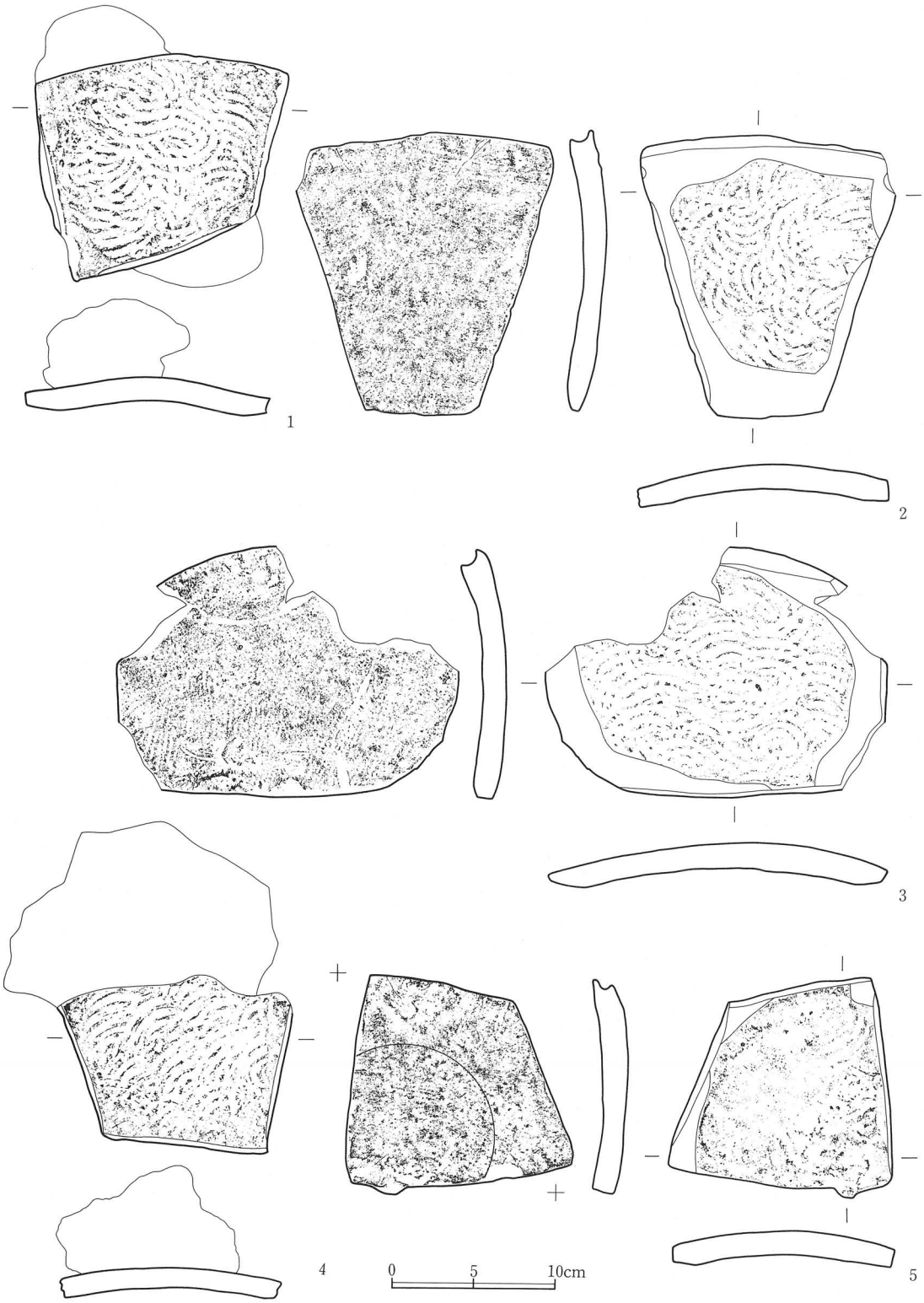


No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	3次床面	須恵器	甕	沈線、波状文	ロクロナデ		SO-3の2、3次床面。図版107-8
2	中部	須恵器	甕	ロクロナデ、沈線、波状文、叩目	ロクロナデ、当具痕		図版107-9
3	2次床面	須恵器	甕	ロクロナデ、叩目	ナデ、当具痕		SO-3の1、2次床面

第96図　SO-3窯跡出土遺物(2)

No.	層位	種別	器形	外面	内面	備考
1	1次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	図版107-11
2	2次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	円形痕跡11cm。 図版107-11、14
3	2、3次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	融解物付着
4	2、3次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
5	2、3次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	円形痕跡10.5cm。 図版107-11
6	2、3次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	円形痕跡8cm

第97図　SO-3 窯跡出土遺物(3)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	備考
1	中部	須恵器	焼台	叩目	当具痕	融解物付着
2	3次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	図版107-11
3	3次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	
4	3次床面	須恵器	焼台	叩目	当具痕	融解物付着
5	上部	須恵器	焼台	叩目	当具痕	円形痕跡11.4cm。 図版107-11

第98図　SO-3 窯跡出土遺物(4)

⑵　横穴墓

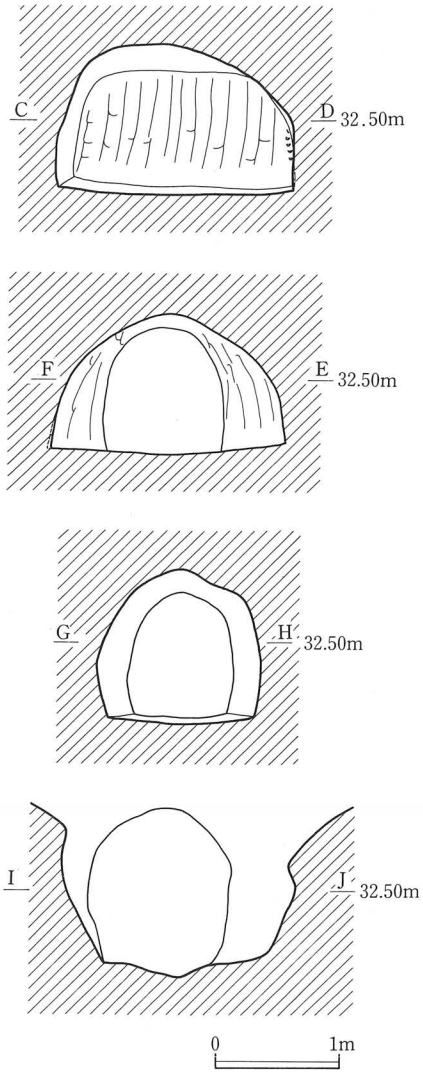
1号横穴墓

南斜面西側の中腹2号窯跡の下段に位置している。斜面の削平によって前庭部が露出していたものである。前庭部は流入土で塞がっており、羨道部から玄室にかけて厚い流入土がみられた。玄室、玄門、羨道、羨門、前庭部が残存しており全長約7 mで、中軸方向はN－25°－Eである。

［玄室］平面計は左側壁がやや内側に膨らみ右側壁より長い歪んだ方形で奥行1.7m、奥壁幅1.8m、前壁幅1.85mである。立面形はアーチ形で高さ1.25mである。床面は若干凸凹がみられるがほぼ平坦である。玄室内部から玄門にかけての堆積土は3層に分けられ若干奥壁に向かって浅くなっている。自然流入土と考えられ下層のものほど粘性が増す。玄室内壁には顕著な工具痕が認められる。工具痕は幅10～12cmの幅広のものと幅約5 cmの楔形のものの2種類認められる。幅広のものは天井部から側壁にかけて、奥壁及び前壁のほぼ全面に認められるが楔形のものは側壁と奥壁及び前壁の境付近に多くみられ、仕上げはかなり粗い方である。

［玄門］玄室中軸よりやや右側に寄っており、立面形はアーチ形で高さは1.0mである。平面規模は奥行きは左壁沿いで0.7m、右壁沿いで0.85m、幅は後端で0.85m前端で0.7mと歪んでいる。玄門前壁下端には幅18～25cm、深さ3～6 cmの閉塞構がある。玄門天井から側壁中位まで玄室同様の工具痕が認められる。床面には閉塞石の一部が散在する。

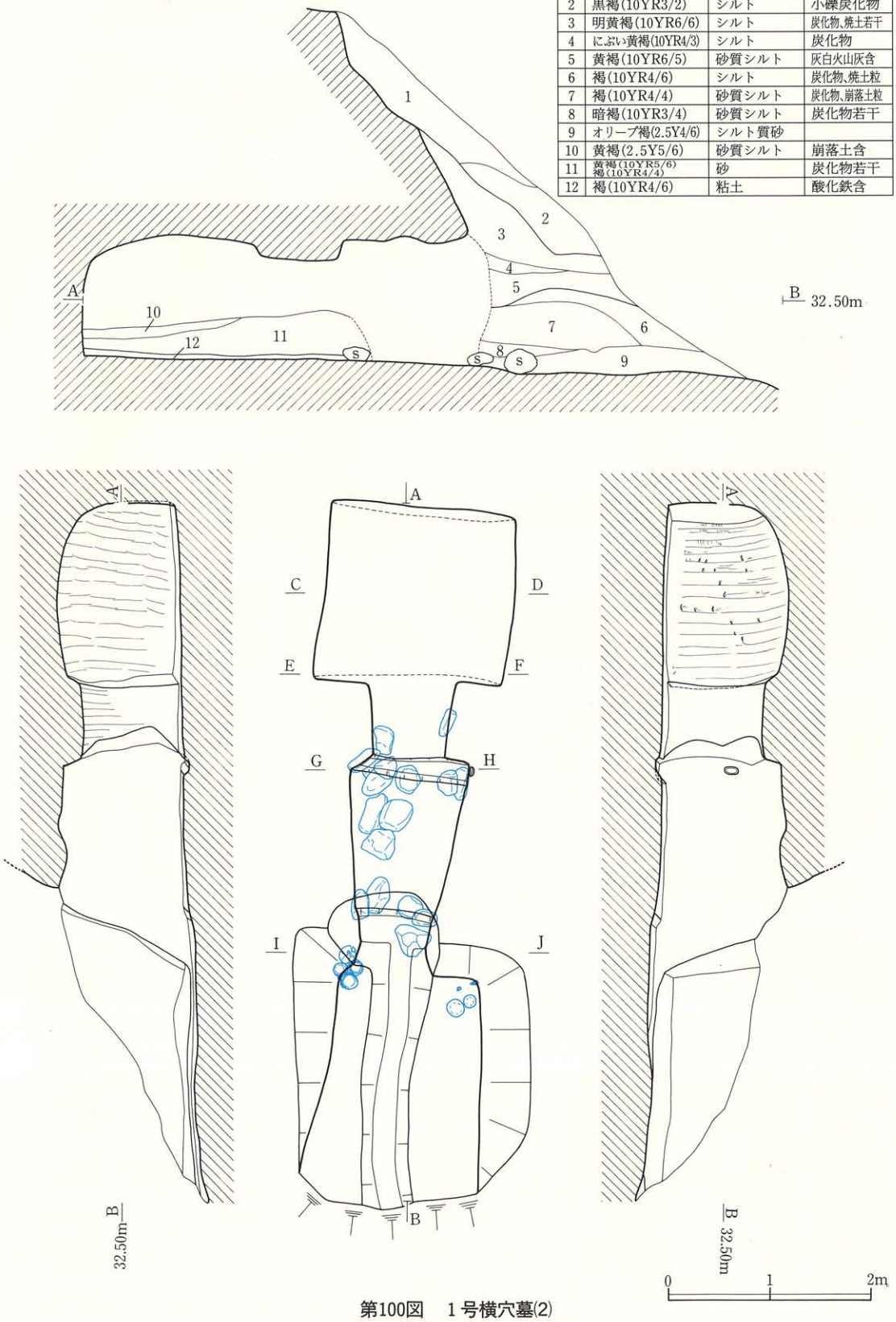
［羨道］玄門のほぼ中央に位置するが中軸線はややずれている。立面形はアーチ形で高さは1.2mである。平面規模は、奥行き1.5m、幅は後端で1.2m、前端で0.8 mであり羨門から奥へ扇形に開く平面形となる。玄門前壁から1.2m前方まで天井が残存している。床面は平坦で羨門方向へわずかに傾斜している。右側壁の玄



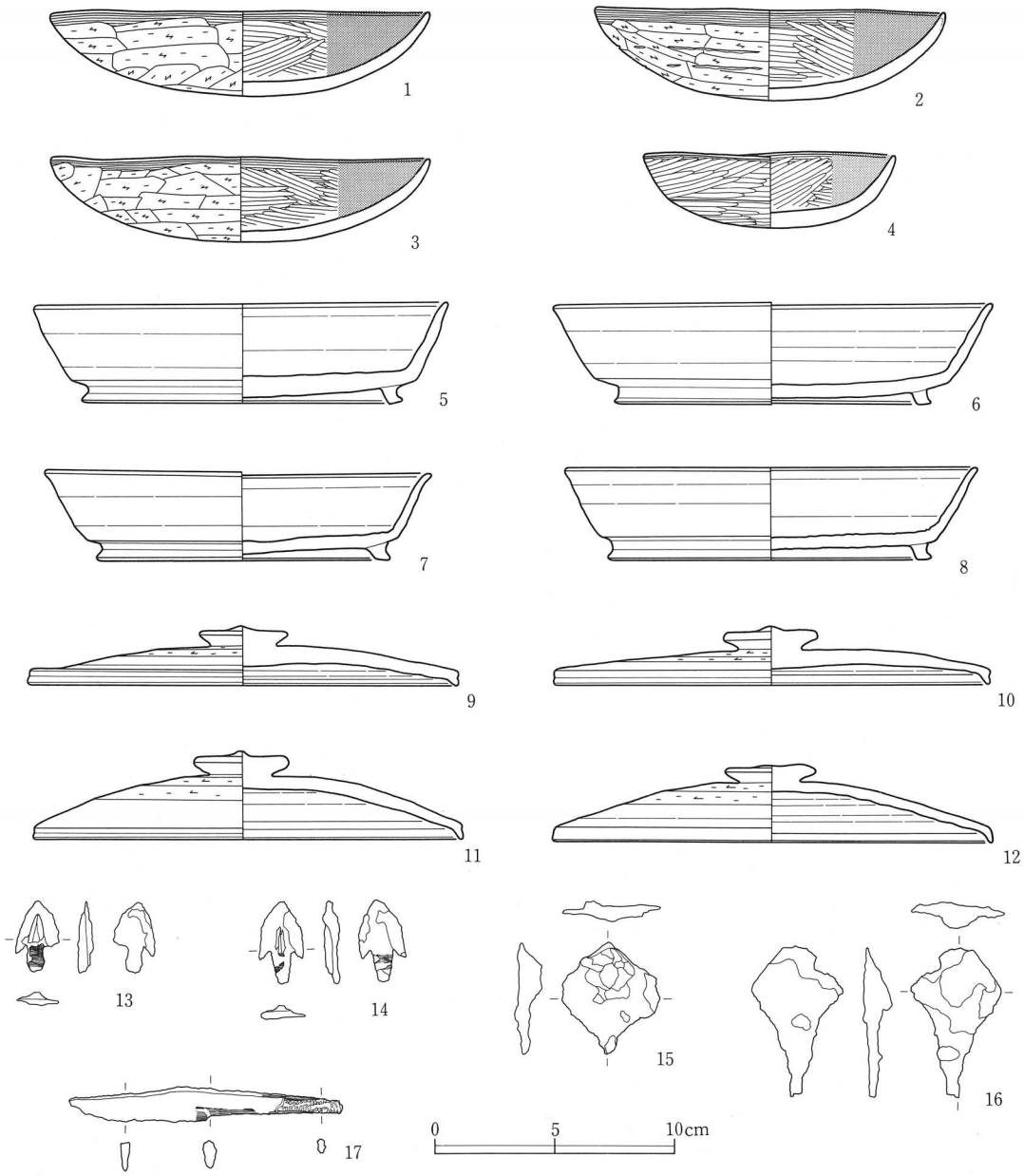
第99図　1号横穴墓(1)

1号横穴墓土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	黄褐(10YR5/8)	砂質シルト	崩落土
2	黒褐(10YR3/2)	シルト	小礫炭化物
3	明黄褐(10YR6/6)	シルト	炭化物、焼土若干
4	にぶい黄褐(10YR4/3)	シルト	炭化物
5	黄褐(10YR6/5)	砂質シルト	灰白火山灰含
6	褐(10YR4/6)	シルト	炭化物、焼土粒
7	褐(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物、崩落土粒
8	暗褐(10YR3/4)	砂質シルト	炭化物若干
9	オリーブ褐(2.5Y4/6)	シルト質砂	
10	黄褐(2.5Y5/6)	砂質シルト	崩落土含
11	黄褐(10YR5/6) 褐(10YR4/4)	砂	炭化物若干
12	褐(10YR4/6)	粘土	酸化鉄含



第100図　1号横穴墓(2)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	玄門前	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ、黒色処理	ケズリ	図版108-1
2	玄門前	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ、黒色処理	ケズリ	図版108-2
3	玄門前	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ミガキ、黒色処理	ケズリ	図版108-3
4	玄門前	土師器	杯	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、黒色処理	ミガキ	図版108-4
5	玄門前	須恵器	高台付杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転ヘラケズリ	図版109-1
6	玄門前	須恵器	高台付杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転ヘラケズリ	図版109-2
7	玄門前	須恵器	高台付杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転ヘラケズリ	大きめの砂粒多い。図版109-3
8	玄門前	須恵器	高台付杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転ヘラケズリ	図版109-4
9	玄門前	須恵器	蓋	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整		図版109-6
10	玄門前	須恵器	蓋	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整		図版109-7
11	玄門前	須恵器	蓋	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整		図版109-8
12	玄門前	須恵器	蓋	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整		大きめの砂粒多い。図版109-9

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
13	羨門部	鉄鏃	2.9×1.8×0.6	1.5	図版110-1
14	羨門部	鉄鏃	3.4×1.8×0.6	2.6	図版110-2
15	羨門部	鉄鏃	4.7×4.1×1.0	13.6	図版110-3
16	羨門部	鉄鏃	(6.3)×3.8×(1.2)	8.8	図版110-4
17	玄室	刀子	11.2×1.4×0.5	14.0	図版110-5

第101図　1号横穴墓出土遺物

門閉塞溝上部に長さ15cm、幅８ cm、深さ４ cm のカンヌキ穴が認められ、床面には人頭大の閉塞石が散在している。

［羨門］羨道前端部に認められる比高差３～10cm の段の部分が羨門と考えられる。天井部の崩落のため立体形、高さは不明である。平面規模は奥行き0.55m、幅は約0.8m である。床面は前庭部方向へ傾斜しており、中央部よりやや右側壁寄りに中軸線に沿って幅45～55cm、深さ５～６ cm の排水溝が前庭部まで延びている。閉塞石の一部が残っている。

［前庭部］羨門前から約2.4m まで検出されたが、前方は斜面で削平されており、全容は不明である。羨門前端で左右側壁までの幅が約1.35m、削平された部分で約1.8m と羨門から前方へ広がる羽子板状となっている。床面は羨門から削平部分へ傾斜しており羨門から続く中央部の排水溝はやや弯曲している。羨門から奥は穿穴によって構築されているが前庭は自然斜面に平行に開削によって構築されている。そのため前庭方から羨門へ向かって左右の側壁は徐々に高くなり、羨門付近の側壁高約1.1m である。前庭部の堆積土は９層に分けられ、７、３層は壁及び天井の崩落土である。

［出土遺物］出土した遺物は、須恵器高台付杯４点、蓋４点、土師器杯４点、鉄鏃４点、その他に須恵器甕の破片がある。このうち須恵器の高台付杯と蓋は前庭部と羨内の境付近の左側壁際に寄せられたような状況で、また土師器杯３点と鉄鏃２点は右側壁際に寄せられたような状況で出土している。また土師器杯１点が玄室内より出土している。

２号横穴墓

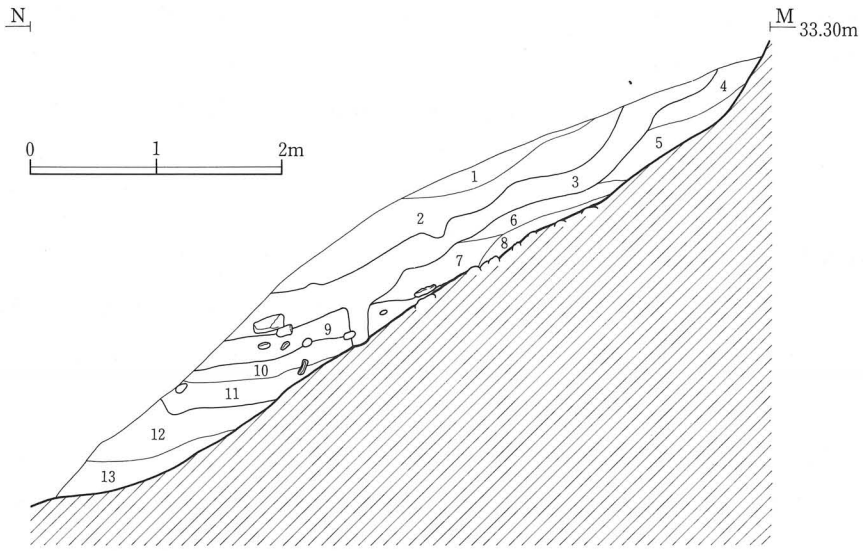
南斜面西寄りの中腹よりやや裾部に近い部分で１号墓の東側に位置している。斜面の表土を除去した階段で前庭部から羨門部にかけての部分が確認された。前庭部は流入土で塞がっており、前庭部から玄門にかけて厚い流入土がみられた。玄室、玄門、羨道、羨門、前庭部が残存しており、全長約6.6m で、中軸方法はＮ－１°－Ｅである。

［玄室］平面計は右側壁の前壁側がやや外形に張り出した方形で、奥行2.08m、奥幅2.10m、前幅2.18m である。立面形はドーム形であるが、天井部の崩落のため正確な高さは不明である。残存高は1.46m である。玄室床面には奥壁、左、右の側壁沿いに３棺座が床面中央をとり囲むように配置されている。それぞれの棺座には縁台はみられない。奥棺座は幅0.8m、長さ2.15m で玄室床面より約７ cm 高くなっている。棺座は奥壁から前方へ緩やかに傾斜している。左棺座は幅0.7m、長さ1.20m で玄室床面より約６ cm 高く、奥棺座より約３ cm 低くなっている。右棺座は幅0.65m、長さ1.20m で玄室床面より約４ cm 高く、奥棺座より約４ cm 低くなっている。左右の棺座は平坦で大きな傾斜はみられない。奥棺座と左右の棺座に幅５～８ cm、深さ２～３ cm の溝が認められる。玄室床面には排水溝等の施設は検出されず、床面全体は玄門方向へ緩やかに傾斜している。玄室内壁には工具痕が認められる。工具痕は幅15cm 前後のものと幅２

～5 cmの楔形のものの2種類ある。幅広のものは天井部から壁面にかけて天井から床面方向にみられ、楔形のものは奥棺座周辺の壁面下端付近に認められるが、全体に保存状況は不良である。玄室内の堆積土は3層に分けられ、自然流入土であると思われる。

［玄門］玄室中軸よりやや左側に寄っており、立面形はアーチ形と思われる。崩落のため高さは不明であるが残存高は最も崩落の少ない前端部で1.05mである。平面規模は、奥行左壁沿いで0.95m、右壁沿いで0.8m、幅は後端で0.75m、前端で0.7mとやや歪んでいる。床面は平坦で羨道に向かって傾斜している。玄門前壁下端には幅15～25cm、深さ5 cm前後の閉塞溝がある。

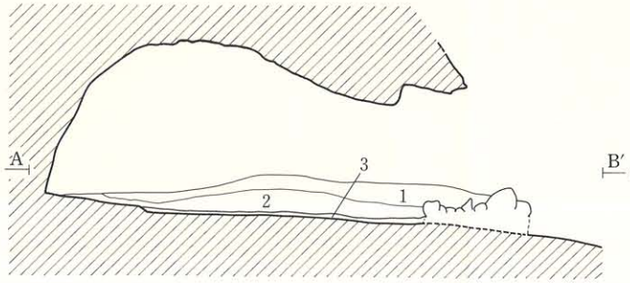
［羨道］玄門のほぼ中央に位置するが中軸線はややずれている。平面形、高さは崩落のため不明である。平面規模は奥行2.30m、幅は後端で1.35m、前端で1 mあり、羨門から奥へ扇形に開く平面形となる。床面は羨門方向へ傾斜しており、羨門近くでは幅0.8m、長さ1 m、深さ約13cmの凹みがある。また、玄門の閉塞溝の上部から手前1.2mの床面には手のひら大から長径50cm程の閉塞石が50cmの高さに崩されたような状態で検出された。



2号横穴墓前庭部土層註記表

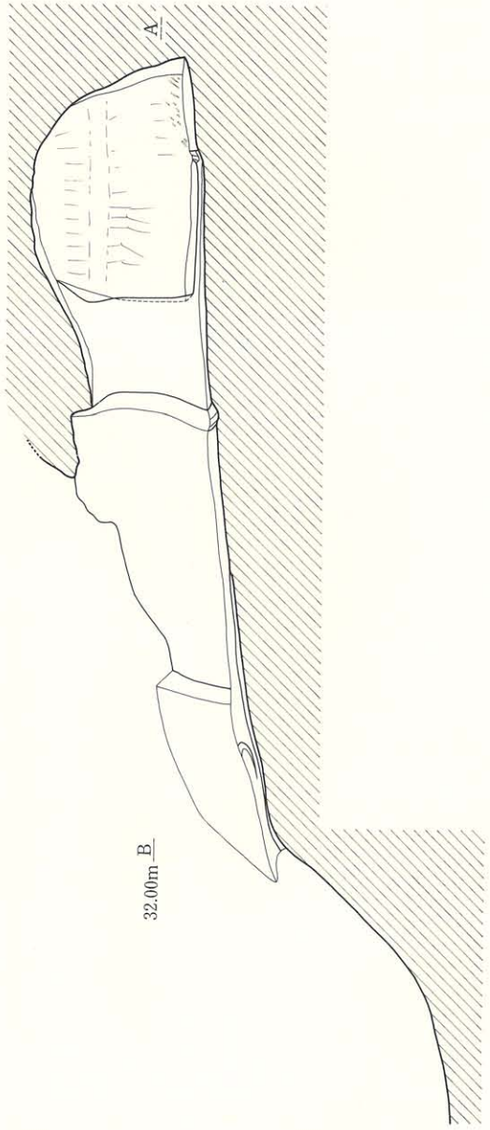
層No	色　調	土　性	備　考
1	黄褐(10YR5/6)	シルト質砂	礫含む
2	暗褐(7.5YR3/3)	砂質シルト	炭化物、砂岩ブロック含む
3	褐(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物、砂岩ブロック含む
4	褐(10YR4/6)	砂質シルト	砂岩ブロック多量に含む
5	褐(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物含む
6	暗褐(10YR3/4)	シルト	炭化物、灰白火山灰含む
7	暗褐(7.5YR3/4)	砂質シルト	小礫、砂岩ブロック含む
8	褐(7.5YR4/6)	砂質シルト	炭化物、礫含む
9	黒褐(7.5YR2/2)	シルト	炭化物、大礫含む
10	褐(10YR4/6) 明黄褐(10YR6/6)	シルト	礫含む
11	黄褐(10YR5/6)	シルト質砂	礫含む
12	黒褐(10YR2/3)	シルト	炭化物、礫含む
13	暗褐(7.5YR3/3)	シルト	小礫含む

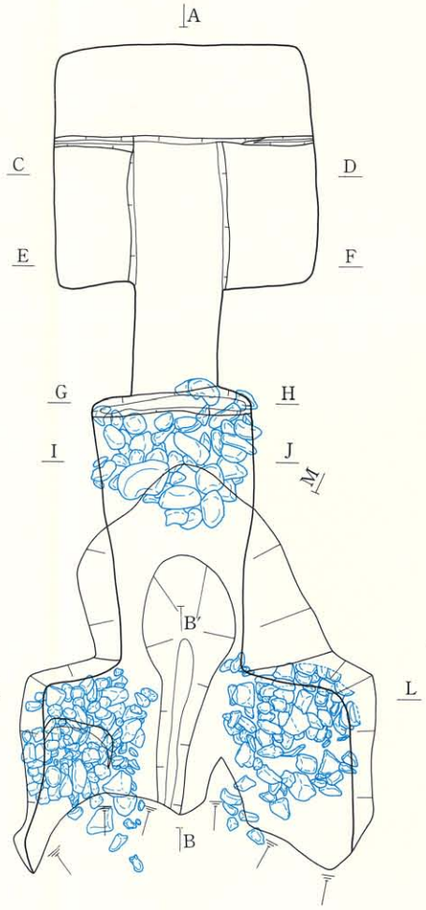
第102図　2号横穴墓(1)

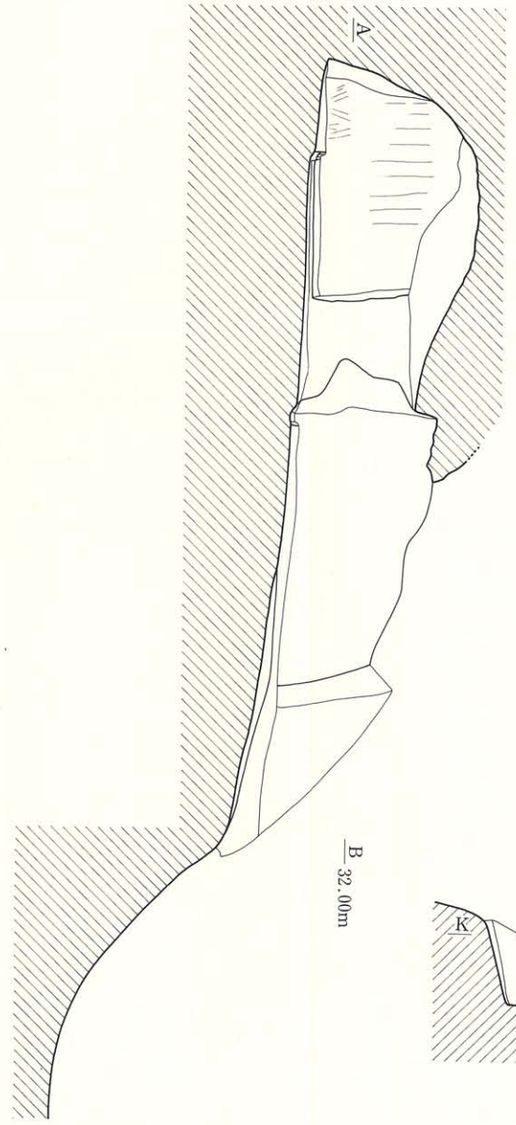


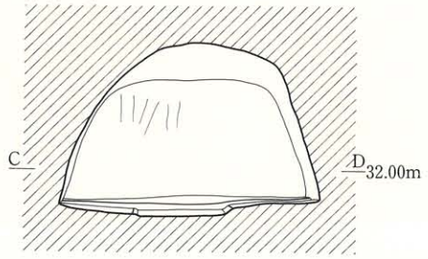
2号横穴墓玄室内土層註記表

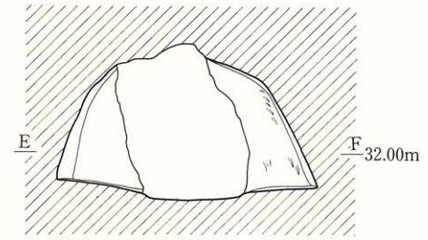
層No	色　調	土　性	備　考
1	オリーブ褐(2.5Y4/6)	シルト質砂	天井崩落土多量に含む
2	黄褐(2.5Y5/4)	砂	炭化物含む
3	黄褐(2.5Y5/3)	粘土質シルト	

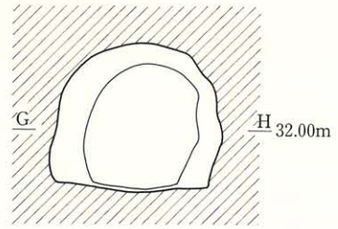


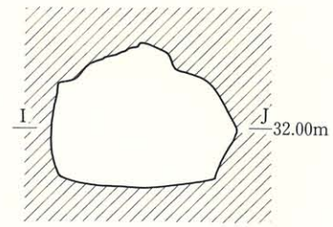


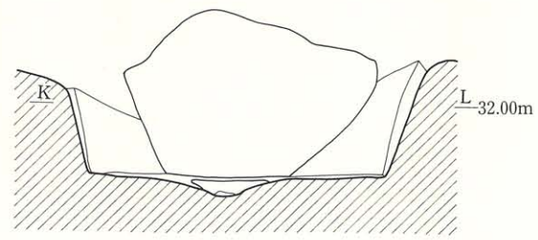


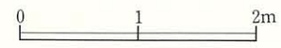








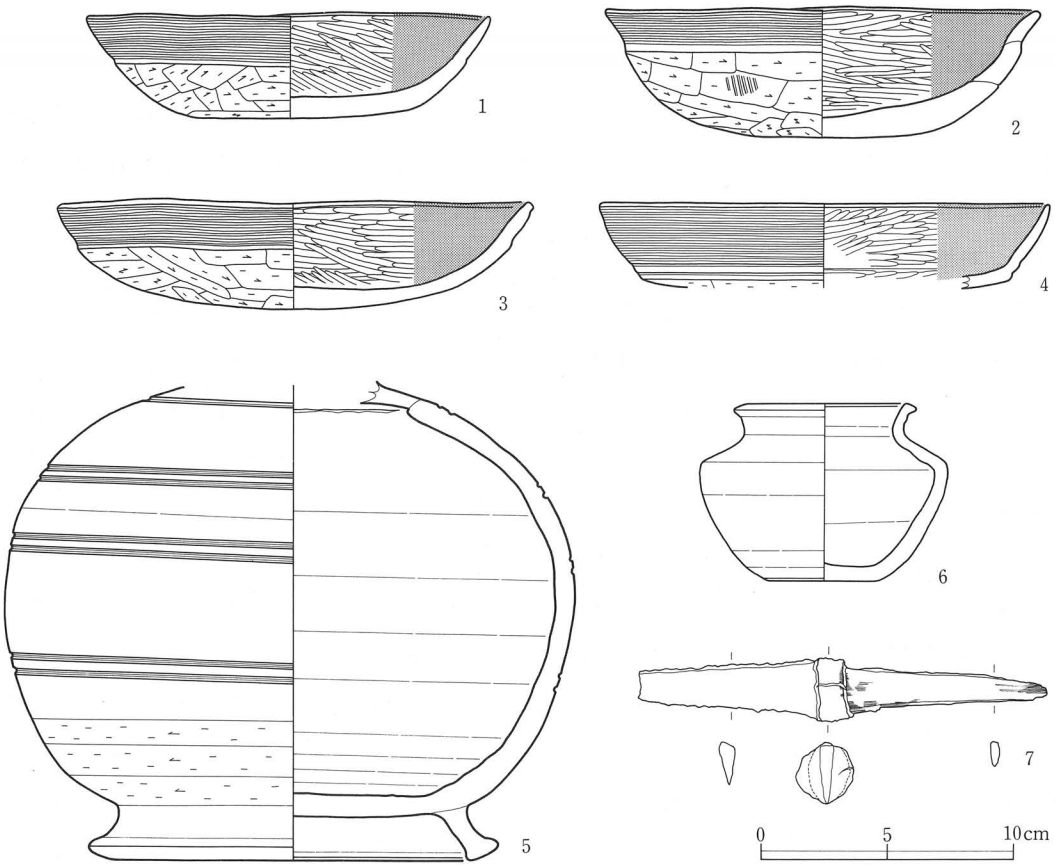




第103図　2号横穴墓(2)

［羨門］段などの施設は見られないが、羨道前端から左に65cm、右に85cm屈曲している。天井部の崩落のため、立面形、高さは不明である。壁の立ち上がりは左側で45cm、右側で75cm残存している。

［前庭部］羨門前から約1.8mまで検出されたが、前方は斜面で削平されており、全容は不明である。羨門前端で左右側壁までの幅が2.5m、削平された部分で約2.8mと羨門から前方へ広がっている。床面は羨門から削平部分へ傾斜しており、幅40～20cm、深さ10～4 cmの溝が羨道部の凹みから続いている。奥壁際には左側で70cm、右側で65cmの高さに閉塞石が積み上げられており、それが前方に崩れた状態で検出された。左側の床面には崩れた閉塞石の下で幅0.6m、長さ0.3m、深さ5 cmの方形の凹みが検出された。羨門から奥は穿穴によって構築されている



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	羨道部	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	図版108-5
2	羨道部	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ、一部ハケメ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	図版108-6
3	玄門前	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	図版108-7
4	検出面	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ミガキ、黒色処理		
5	前庭部	須恵器	長頸壺	ロクロ調整、回転ヘラケズリ、沈線	ロクロ調整	回転ヘラケズリ	
6	玄門	須恵器	短頸壺	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切り	図版109-11

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
7	奥棺座	刀子	(16.1)×2.5×(2.2)	50.5	図版110-6

第104図　2号横穴墓出土遺物

が前庭部は自然傾斜に平行に開削によって構築されている。そのために前庭前方から羨門へ向かって左右の側壁は徐々に高くなり、羨門付近の壁高は約0.9m である。前庭部の堆積土は6層に大別される。自然流入土及び天井、壁の崩落土であると思われる。

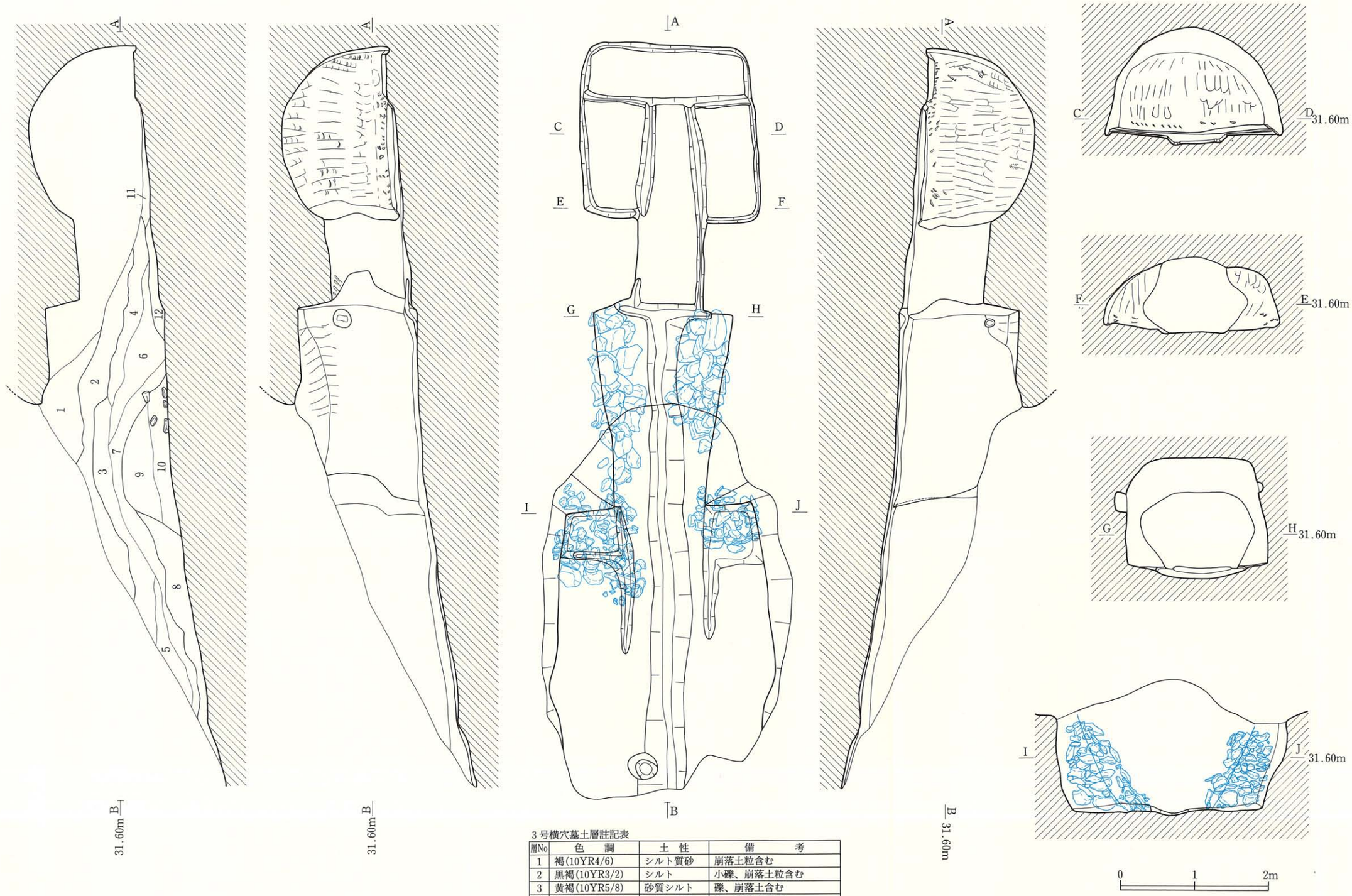
［出土遺物］出土した遺物は須恵器小型壺1点、壺1点、土師器の杯4点、刀子1点、その他に須恵器甕の破片がある。刀子は玄室奥棺座、須恵器小形壺と土師器杯1点は玄門前の崩れた玄門閉塞石と伴に出土している。その他の遺物は羨道から前庭部で出土している。

3号横穴墓

南斜面中央部の中腹よりやや裾部に近い部分に位置している。斜面の表土を除去した段階で前庭部から羨門部にかけての部分が確認された。前庭部は流入土で塞がっており、前庭部から玄門にかけて厚い流入土がみられ、羨道部から玄室内にかけて床面から約1 m の高さまで水が溜っていた。玄室、玄門、羨道、羨門、前庭部が残存しており、全長約10m、中軸方向はN－10.5°－Eである。

［玄室］平面形は右側壁の前壁側がやや外側に張り出した方形で、奥行2.40m、奥幅2.15m、前幅2.37m である。立面形はドーム形で高さ1.58m である。玄室床面には奥壁、左、右の側壁沿いに3棺座が床面中央部をとり囲むように配置されている。それぞれの棺座には縁台はみられない。奥棺座は幅0.73m、長さ2.2m で、棺座は玄室床面より約10cm 高くなっている。奥壁際及び左、右側壁際の三方に幅5～10cm、深さ4～7 cm の周溝が巡っている。棺座は奥壁から前方へ緩やかに傾斜している。左棺座は幅が奥壁側で0.9m、前壁側で0.7m、長さ1.6m で、玄室床面より約12cm 高く、奥棺座より約4 cm 低くなっている。奥棺座と同様に幅5～12m、深さ5～7 cm の周溝が奥棺座との境、左側壁際、前壁際に巡っている。棺座は奥棺座側から前壁側へ、さらに壁側から中央部へ緩やかに傾斜している。右棺座は幅が奥壁側で80cm、前壁側で67cm、長さ160cm で、床面より約12cm 高く、奥棺座より約7 cm 低くなっている。前2棺座と同様三方に幅5 cm、深さ4～6 cm と比較的細い周溝が巡っている。棺座は奥壁側から前方へ、さらに側壁側から中央部へ緩やかに傾斜している。棺座を除く玄室床面には　左、右の棺座沿いに幅13～20cm、深さ3～5 cm の溝を付設しており、床面全体は玄門方向へ傾斜している。玄室内壁には顕著な工具痕が認められる。工具痕は幅9～13cm の幅広のものと幅5～7 cm の楔形のものの2種類認められる。幅広のものは20～30cm の長さを単位として、天井部から玄室内の全壁面にかけて、天井から床面方向へ向いている。壁面下端付近では工具痕は粗くなっている。また、楔形のものは全壁面の下端付近に多くみられる。

［玄門］玄室のほぼ中央に位置し、立面形は崩落の為明らかではないが、方形を基調としたものと考えられ、高さは1.05m である。平面規模は奥行きは左壁沿いで1.05m、右壁沿いで1.15m、幅は後端で1.0m、前端で1.05m とやや歪んでいる。右壁下端には右棺座沿いの溝が延長さ



3 号横穴墓土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	褐(10YR4/6)	シルト質砂	崩落土粒含む
2	黒褐(10YR3/2)	シルト	小礫、崩落土粒含む
3	黄褐(10YR5/8)	砂質シルト	礫、崩落土含む
4	黄褐(2.5Y5/4)	シルト質砂	礫、崩落土含む
5	褐(10YR4/4)	シルト質砂	礫、炭化物含む
6	黄褐(2.5Y5/6)	シルト質砂	
7	褐(10YR4/6)	砂	礫、炭化物含む
8	黒褐(10YR2/2)	砂質シルト	多量の礫、炭化物含む
9	黄褐(2.5Y5/3)	砂	崩落土含む
10	にぶ黄(2.5Y6/3)	砂	大礫、炭化物含む
11	黄灰(2.5Y4/1)	粘土質シルト	
12	黄褐(2.5Y5/4)	砂	

第105図　3 号横穴墓

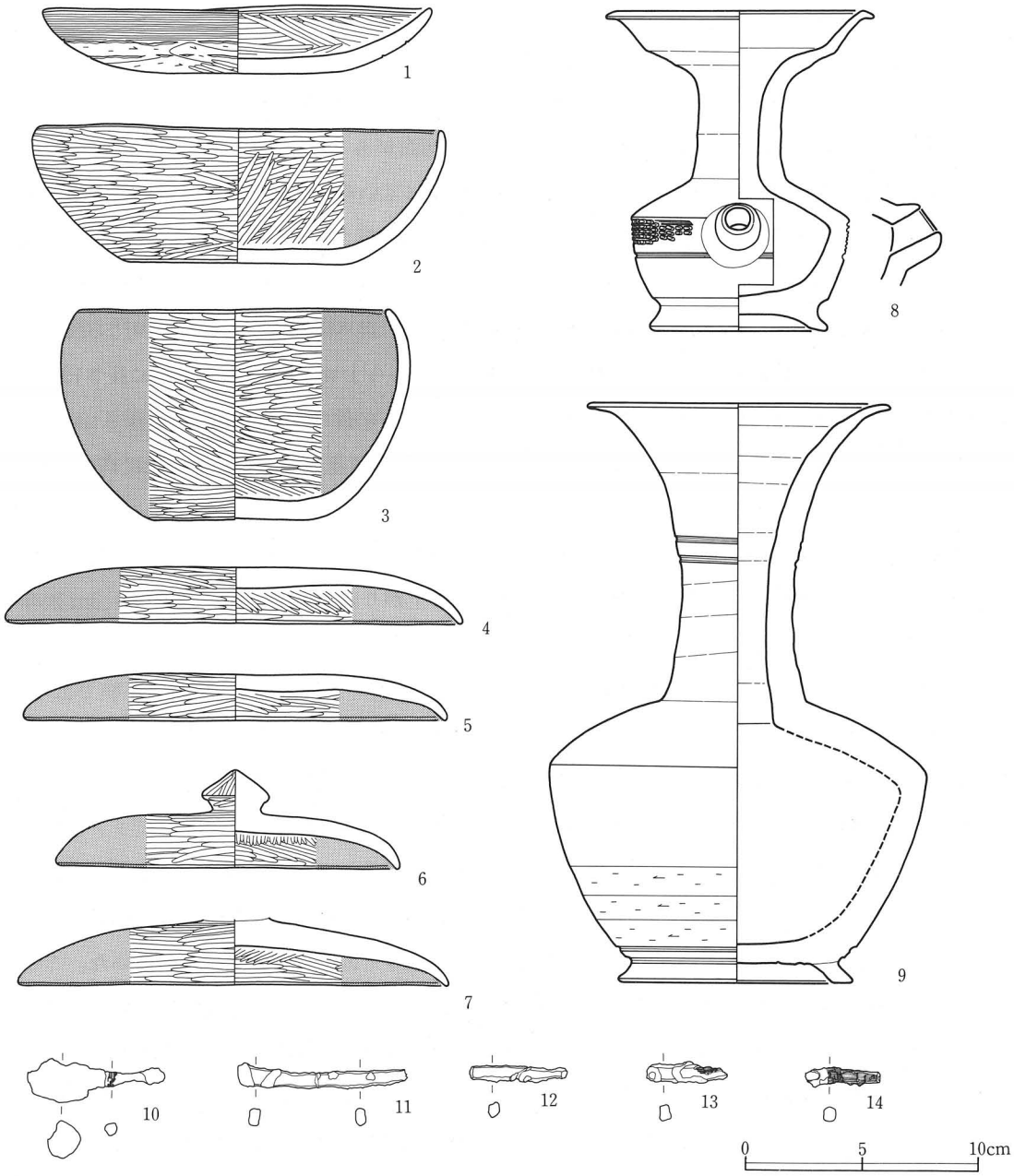
れた幅７～13cm、深さ３～５ cm の排水溝がある。床面は平坦で羨道に向かって傾斜している。玄門前壁下端には幅10～20cm、深さ４～７ cm の閉塞溝がある。

［羨道］玄門のほぼ中央に位置するが中軸線はややずれている。立面形は壁と天井部の境にやや丸味を持つが方形で、高さは1.6m である。平面規模は奥行き2.6m、幅は後端で1.87m、前端で1.2m あり羨門から奥へ扇形に開く平面形となる。玄門前壁から1.0m 前方まで天井が残存している。床面中央部に幅45cm、深さ２～４ cm と広く浅い排水溝が延びており、羨門方向へ傾斜している。左右両側壁の玄門閉塞溝上部、右側では床から１ m の高さのところに長さ13cm、幅12cm、深さ８ cm、左側では床から0.8m の高さのところに長さ25cm、幅25cm、深さ16cm のカンヌキ穴が認められ、床面には人頭大から長径60cm 程の閉塞石が左右両側壁際に寄せられ、積み上げられていた。

［羨門］段などの施設は見られないが、羨道前端から左65cm、右に60cm 屈曲している。天井部の崩落のため立面形、高さは不明である。壁の立ち上がりは右側で1.1m、左側で1.3m 残存している。

［前庭部］羨門前から約3.9m まで検出されたが、前方は削平されており、全容は不明である。羨門前端で左右側壁までの幅が2.5m、削平された部分で約3.7m と羨門から前方へ広がる羽子板状となっている。床面は羨門から削平部分へ傾斜しており、羨道から続く中央部の排水溝が削平部まで検出された。また、排水溝の先端付近には直径約40cm、深さ24cm のピットが検出された。奥壁際には左側で1.2m、右側で1.05m の高さに閉塞石が積み上げられており、それが前方に崩れた状態で検出された。閉塞石は床面に左側で長さ0.6m、幅0.75m、深さ５ cm、右側で長さ0.8m、幅0.75m、深さ４ cm の方形の掘り方を掘りその上に積み上げられていた。この掘り方の中央側から幅15cm、深さ７～３ cm の溝が約1.2m の長さで前方に延びている。羨門から奥は穿穴によって構築されているが前庭部は自然傾斜に平行に開削によって構築されている。そのために前庭部前方から羨門へ向かって左右の側壁は徐々に高くなり、羨門付近の側壁高は約1.3m である。前庭部から玄室にかけての堆積土は６層に大別され、奥に向かって浅くなっている。自然流入土及び壁、天井の崩落土であると思われる。

［出土遺物］出土した遺物は須恵器長頸壺１点、瓿１点、土師器杯１点、埦２点、蓋４点、鉄鏃４点、その他に須恵器甕の破片がある。遺物は全て前庭部の羨門付近で崩れた羨門閉塞石と伴に出土している。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	羨門部	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	ケズリ、ミガキ	図版108-8
2	前庭部	土師器	椀	ミガキ	ミガキ、黒色処理	ミガキ	図版108-14
3	羨道部	土師器	椀	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理	ミガキ	図版108-15
4	羨道部	土師器	蓋	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		図版108-10
5	前庭部	土師器	蓋	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		図版108-11
6	前庭部	土師器	蓋	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		図版108-13
7	羨道部	土師器	蓋	ミガキ、黒色処理	ミガキ、黒色処理		図版108-12
8	前庭部	須恵器	瓶	ロクロ調整、沈線、刺突文	ロクロ調整	ロクロ調整	図版109-15
9	前庭部	須恵器	長頸壺	ロクロ調整、回転ヘラケズリ、沈線	ロクロ調整	ロクロ調整	図版109-14

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
10	羨門部	鉄鏃	(5.9)×0.6×0.5	8.6	
11	羨門部	鉄鏃	(7.2)×0.8×1.0	4.8	
12	羨門部	鉄鏃	(4.2)×0.7×0.5	1.7	
13	羨門部	鉄鏃	(3.4)×0.7×0.5	2.1	
14	羨門部	鉄鏃	(3.2)×0.7×0.5	1.5	

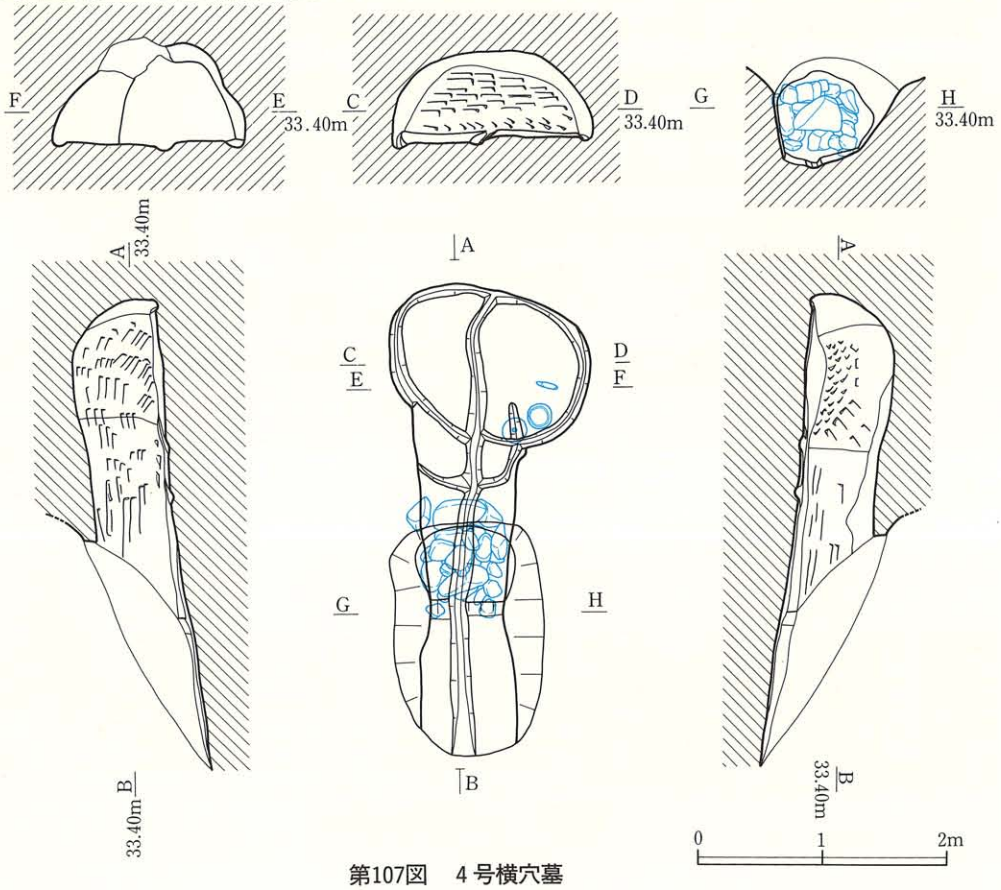
第106図　3号横穴墓出土遺物

4号横穴墓

南斜面中央部の中腹部に位置している。斜面の表土を除去した段階で閉塞石が確認された。玄室、玄門、羨道、羨門、前庭部が残存しており、全長約3.8mで、中軸方向はN－2.5°－Wである。

［玄室］平面形は不正な楕円形で各壁の境界は不明であり、奥行1.2m、幅1.65mである。立面形はドーム形で高さは0.73mである。玄室床面には棺座は付設されず、壁沿いに幅5～13cm、深さ2～5cmの周溝が巡り、中軸線に沿うようにやや弯曲しながら幅7～12cm、深さ3～6cmの排水溝が付設されている。また、中央の排水溝の右側床面に長さ0.3m、幅5～10cm、深さ5cmの溝が付設されており、床面全体は玄門方向へ傾斜している。玄室内壁には顕著な工具痕が認められる。工具痕は幅5～10cm幅広のものと幅2～3cmの楔形のものの2種類認められる。幅広のものは横方向・斜方向のものがあり、長さは20～50cmで、天井部から全壁面にみられる。楔形のものは壁面の下端近くにみられる。

［玄門］玄室中軸よりやや左側に寄っており、立面形はアーチ形で一部に崩落は見られるが、残存部の高さは0.68mである。平面規模は奥行きは左壁沿いで0.5m、右壁沿いで0.3m、幅は後端で0.95m、前端で0.8mと歪んでいる。床面中央に玄室から続く幅13cm、深さ4cmの排水溝があり、右壁沿いに玄室右側に付設された溝が延長され、幅5～7cm、深さ5cmで中央の排



第107図　4号横穴墓

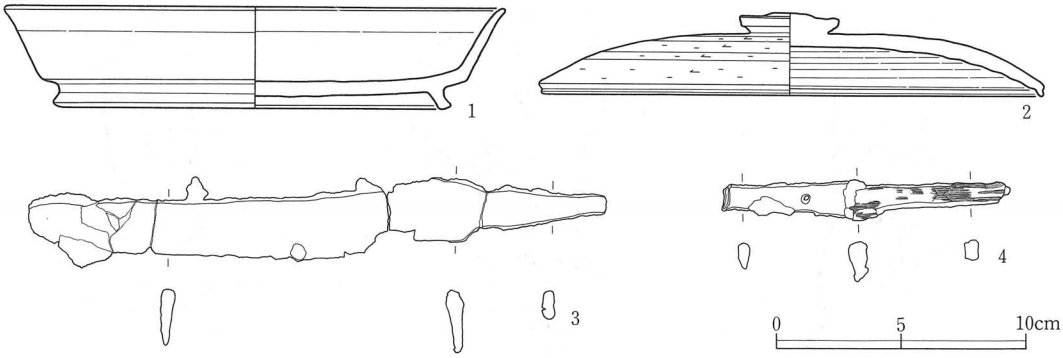
水溝に繋がり、その部分から左壁までさらに幅５～10cm、深さ５ cm の溝が付設されている。この部分までが玄門であると考えられる。床面は平坦で羨道方向へ傾斜している。天井部から壁面にかけて玄室内でみられた幅広の工具痕がみられる。

［羨道］玄門部との境は明確ではなく、天井及び側溝は連続している。玄門前端と考えられる溝から羨門までの規模は、奥行き0.9、幅は後端で0.77m、前端で0.6m であり、羨門から奥へ扇形に開く平面形となる。玄室前端から0.85m 前方まで天井部が残存している。床面中央に玄室から幅10～15、深さ４～６ cm の排水溝が延びている。床面全体は羨門方向へ傾斜している。天井部から壁面にかけて玄門同様の工具痕がみられる。また、カンヌキ穴等の施設はなかったが、羨道部全体に人頭大の閉塞石が散在しており、前端では0.75m の幅で、0.6m の高さまで閉塞石が積まれており、中には長径40cm をこえる石もみられた。

［羨門］羨道前端部に認められる比高差３～６ cm の段の部分が羨門と考えられる。天井部の崩落のため、立面形、高さは不明である。段の部分の幅は0.6m である。この部分まで閉塞石がみられた。

［前庭部］羨門前から約1.1m まで検出されたが、前方は斜面で削平されており、全容は不明である。羨門端で左右側壁までの幅0.6m、削平された部分で幅0.75m と羨門から前方へ広がる羽子板状になっている。床面は羨門から削平部分へ傾斜しており、羨道から続く中央の排水溝は削平部まで延びている。羨門から奥は穿穴によって構築されているが、前庭部は自然傾斜に平行に開削によって構築されている。そのために前庭部前方から羨門に向かって左右の側壁は徐々に高くなり、羨門付近の壁高は約0.5m である。

［出土遺物］出土した遺物は須恵器高台付杯１点、蓋１点、刀子２点である。全て玄室床面出土のものであり、刀子の１点は高台付杯の内面に付着した状態で出土した。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	玄室	須恵器	高台付杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転ヘラケズリ	図版109-5
2	玄室	須恵器	蓋	ロクロ調整、回転ヘラケズリ	ロクロ調整		図版109-10

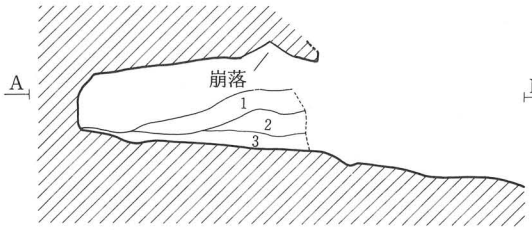
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
3	玄室	直刀	(23.2)×2.6×(0.7)	49.4	図版110-7
4	玄室須恵器内	刀子	(11.5)×1.4×0.5	21.4	図版110-8

第108図　４号横穴出土遺物

5号横穴墓

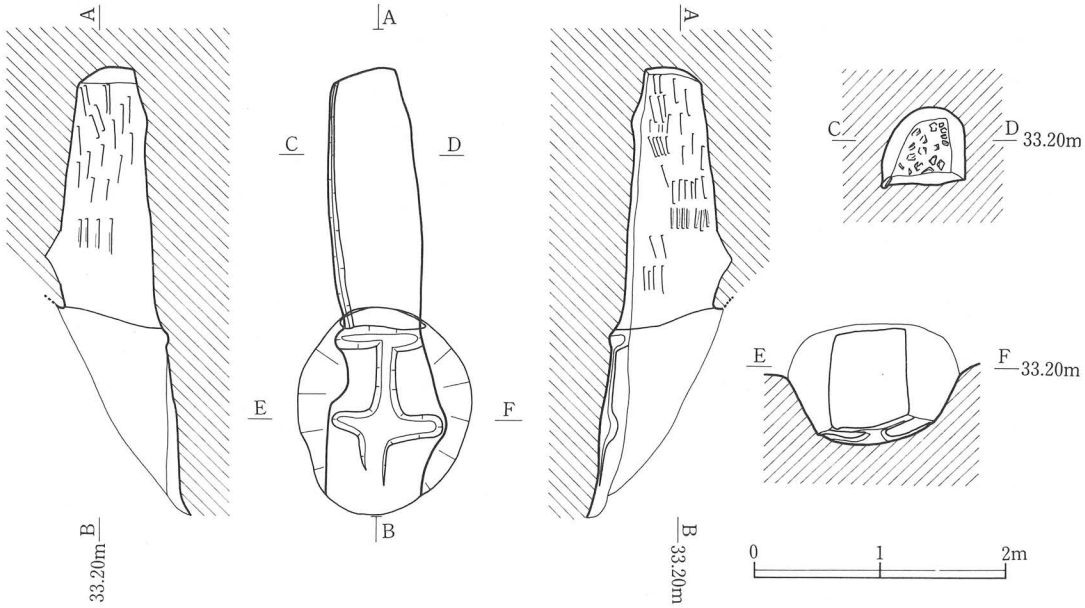
南斜面中央部の中腹部、4号横穴墓の東に位置している。斜面の表土を除去する段階で人頭大から長径50cm程の河原石が1m前後の範囲に塊まって確認された。しかし、重機による表土除去作業で表土と共に取り除いてしまったため、記録は残っていない。玄室内部には流入土がみられるが、奥壁近くまでは達していない。玄室、羨道、羨門、前庭部が残存しており、全長約3.55m、中軸方向はN－11°－Wである。

［玄室］平面形はやや胴張り形の右側壁が左側壁よりやや長い歪んだ長方形で、奥行き2.05m、奥壁幅0.5m、前幅0.6mである。立面形は、右側壁がほぼ垂直に立ち上がったアーチ形で高さ0.75mである。玄室床面には、棺座は付設されず、左側壁沿いに幅3～7cm、深さ3cmの排水溝が付設され、玄門部の閉塞溝に取り付いている。床面全体は玄門方向へ傾斜している。玄室内の堆積土は3層に分けられ、玄内部から奥壁に向かって浅くなっている。自然流入土と考えられ、下層のものほど粘性が増す。玄室内壁には顕著な工具痕が認められる。幅5cm前後、長さ20～30cmのものが天井部から側壁全体に横方向に施されている。また、奥壁全面には幅、長さとも5cm前後の楔形の工具痕がみられる。天井部は奥壁から1.8mまで残存しており、その部分では立面形は方形となっている。



5号横穴墓玄室内土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	褐(10YR4/6)	シルト	崩落土
2	暗褐(10YR3/4)	シルト質砂	小礫含む
3	オリーブ褐(2.5Y4/6)	粘土質シルト	小礫含む



第109図　5号横穴墓

［玄門］玄室と玄門の境は明確ではないが、玄室前端部に付設された幅10～15cm、深さ6 cmの溝が閉塞施設と考えられ、この部分が玄門と考えられる。崩落のため立面形、高さは不明であるが、玄室の天井部の崩落した部分の形態を考えると、方形であると思われる。

［羨道］玄門からやや右方向にずれて位置しており、中軸線もずれている。立面形、高さは崩落のため不明であるが壁の立ち上がりは左側で0.75cm、右側0.65m残存している。平面規模は奥行きは、左側壁で0.55m、右側壁0.6m、幅は後端で0.65m、前端で0.9mあり、奥から羨門へ開く扇形の平面形となる。床面中央部に幅15～20cm、深さ6 cmの排水溝が延びており、羨門方向へ傾斜している。

［羨門］羨道の前端部に付設された幅20cm、深さ6 cmの溝が羨門部であると考えられる。幅は0.95mあり、壁の立ち上がりは左側で0.45m、右側で0.4m残存している。

［前庭部］羨門前から約0.6mまで検出されたが、前方は斜面で削平されており、全容は不明である。羨門前端で左右側壁までの幅が0.9m、削平された部分で0.75mと羨門から前方へ狭くなっている。床面は羨門から前方へ傾斜しており、羨道から続く中央の排水溝は羨門前端から0.35mまで延びている。本横穴墓については他の横穴墓と同様に羨門から奥が穿穴によって構築されているものかどうかを考えると、横穴墓の構築された斜面の傾斜と、遺存状況を考え合わせると、玄門付近まで開削によって構築されているものと考えられる。

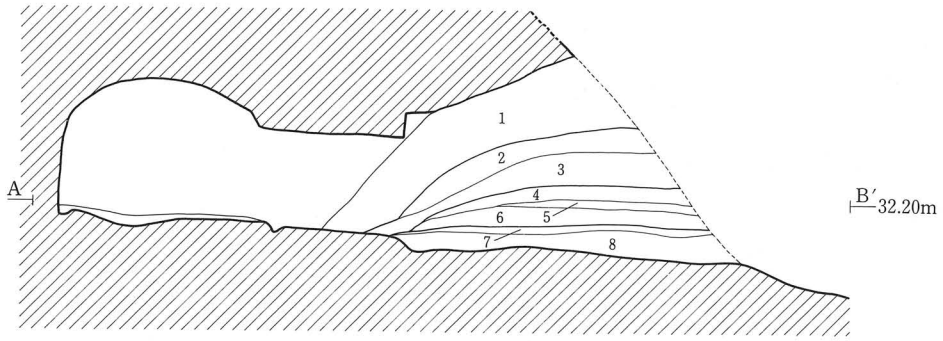
［出土遺物］遺物は出土していない。

6号横穴墓

南斜面中央やや東寄り、5号墓の東側に位置している。斜面の表土を除去した段階で前庭部から羨門部にかけての部分が確認された。前庭部は流入土で塞がっており、重機を用いてこの部分の土を除去して羨門部を検出した。玄室、玄門、羨道、羨門、前庭部が残存している。3号横穴墓と同様、玄室内に大量に水が溜まっていた。全長約8.5mで、中軸方向はN－18°－Wである。

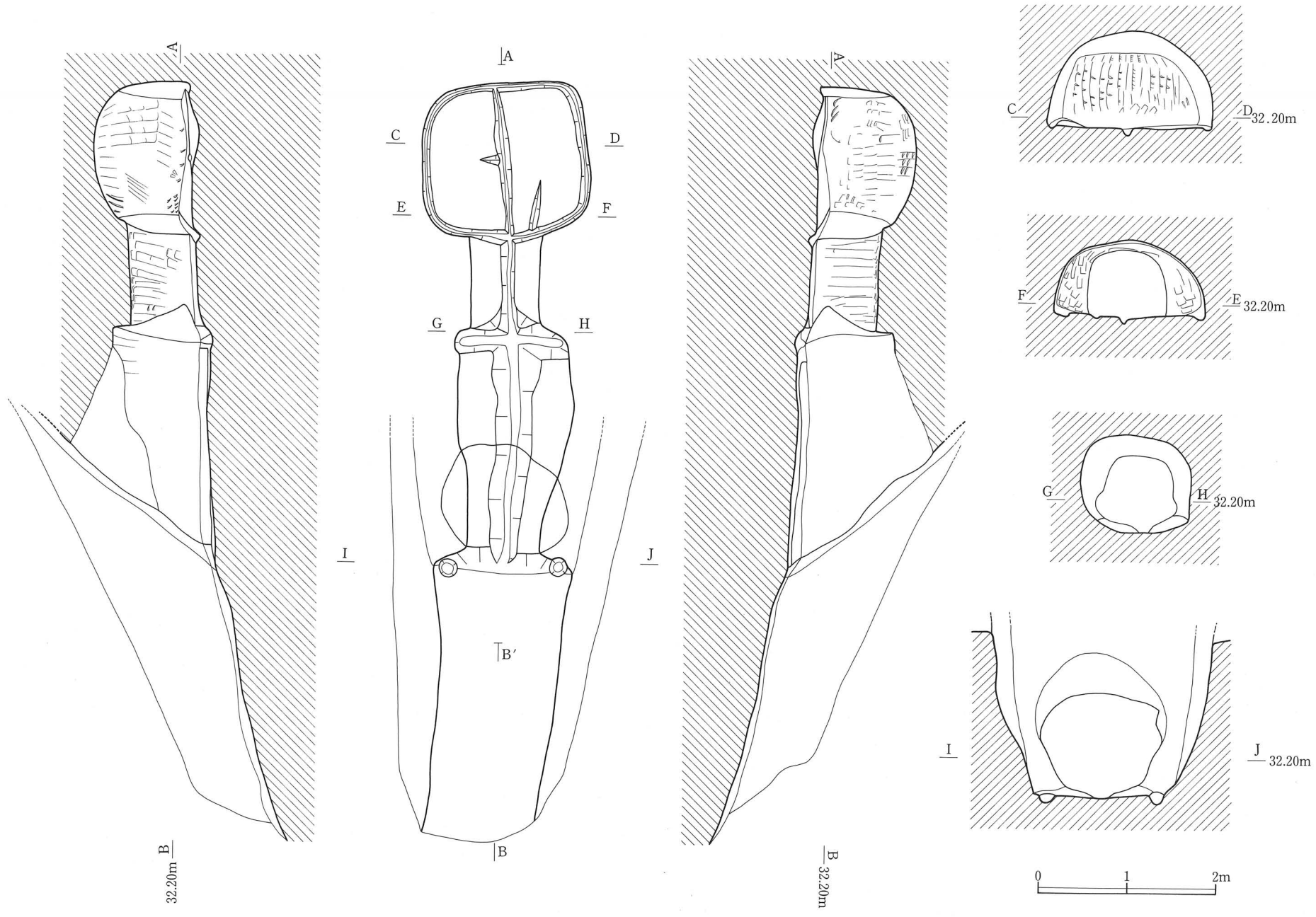
［玄門］平面形は隅丸で右側壁がやや外側に張り出した方形で、奥行1.77m、奥幅1.65m、前幅1.8mである。立面形は奥壁がやや急角度になるドーム形で高さ1.08mである。玄室床面には、棺座は付設されず、壁沿いに幅7～12cm、深さ5～10cmの周溝が巡り、中軸線に沿うように幅6～15cm、深さ5～7 cmの排水溝が付設されている。また、排水溝の中央付近と玄門付近の周溝にそれぞれ長さ0.2mと0.55mの排水溝が付設されており、床面全体は玄門方向へ傾斜している。玄室内壁には顕著な工具痕が認められる。幅7～12cmで、天井部から側壁、奥壁にかけてと前壁のほぼ全面にみられ、それぞれ天井から床面方向である。側壁の下端付近では工具端部の痕跡がみられる。玄室床面上には流入土が僅かに堆積していた。

［玄門］玄室のほぼ中央に位置し、立面形は天井部と側壁の境が丸味を持った方形で高さ0.77



6号横穴墓玄室・羨道土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	褐(10YR4/6)	シルト質砂	崩落
2	褐(10YR4/6)	粘土質シルト	
3	褐(10YR4/4)	粘土質シルト	小礫地山粒
4	黄褐(2.5Y5/6)	シルト	
5	にぶい黄褐(10YR5/3)	砂質シルト	
6	オリーブ褐(2.5Y4/4)	砂質シルト	崩落
7	灰黄褐(10YR5/2)	シルト	
8	黄褐(2.5Y5/4)	砂質シルト	
9	褐灰(10YR4/1)	シルト質粘土	



第110図　6号横穴墓

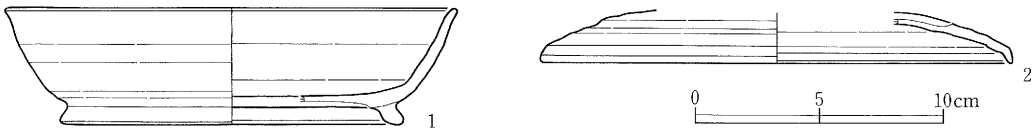
m である。平面規模は奥行左壁沿いで1.05m、右壁沿いで0.95m、幅は後端で0.85m、前端で0.75 m とやや歪んでいる。床面中央部には、玄室から幅15cm、深さ 7 cm の排水溝が延びている。床面は中央から側壁方向に高くなっており、全体として羨道に向かって傾斜している。床面には人頭大の閉塞石が 3 個残されていた。天井部から側壁にかけて玄室と同様の工具痕が認められるが下端近くでは浸水のためか壁が抉れている。玄門前壁下端には幅22～40cm、深さ 4 ～ 7 cm の閉塞溝がある。

［羨道］玄門の中央に位置するが、中軸線はややずれている。立面形は天井部と側壁の境が丸味を持った方形で高さは1.1m である。平面規模は奥行左壁沿いで2.4m、右壁沿いで2.45m、幅は後端で1.3m、前端で0.8m あり、羨門から奥へ扇形に開く平面形となる。玄門前壁から0.25 cm 前方まで天井部が残存している。床面中央部には、幅55～30cm と羨門に向かって狭くなる。深さ 4 ～ 6 cm の排水溝が延びている。床面全体は中央から側壁方向に高くなっており、羨門に向かって傾斜している。玄門前の左側壁の一部に工具痕が残存している。羨道から玄門中央部にかけての堆積土は 4 層に大別され、 2 、 3 層は壁及び天井部の崩落土であり、 1 層は流入土である。

［羨門］羨道前端部に認められる比高差 5 ～ 7 cm の段を形成し、羨道前端から左、右に各々45 cm 屈曲している。天井部の崩落のため立面形、高さは不明である。段の下端、左、右の側壁から各々 5 cm のところに直径18cm、深さ 7 cm のピットが検出され、閉塞のための施設であると考えられる。

［前庭部］羨門前から約 3 m まで検出されたが前方は斜面で削平されており、全容は不明である。羨門前端で左右側壁までの幅が約1.55m、削平された部分で約1.25m と羨門から前方へ狭くなっている。床面は羨門から前方へ傾斜している。羨門から奥は穿穴によって構築されているが前庭部は自然傾斜に平行に開削によって構築されている。そのために前庭部前方から羨門へ向かって左右の側壁は徐々に高くなり、羨門付近の側壁高は約1.2m である。

［出土遺物］出土した遺物はいずれも破片であるが、須恵器高台付杯 1 点、蓋 1 点、甕が数片である。全て玄門部から出土している。



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	玄門	須恵器	高台付杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転ヘラケズリ	
2	玄門	須恵器	蓋	ロクロ調整	ロクロ調整		

第111図　6 号横穴墓出土遺物

7号横穴墓

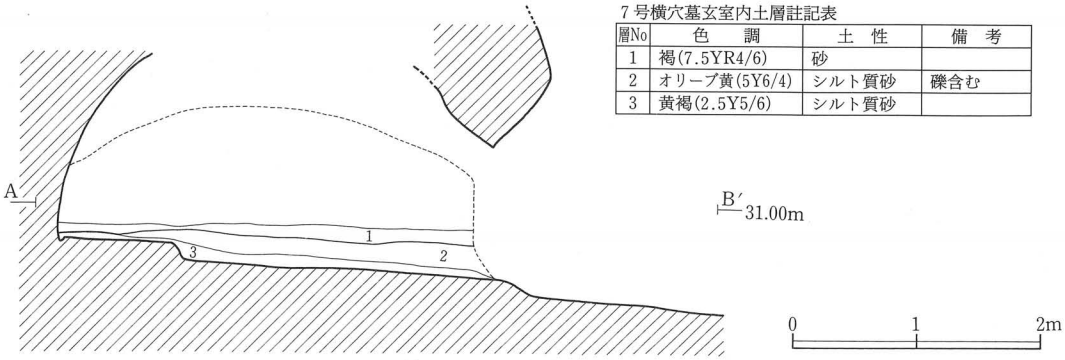
南斜面東端の裾部に位置している。斜面の表土を除去した段階で前庭部から羨道部にかけての部分が黒色土の溝状の落ち込みとして確認された。堆積していた土砂を重機を用いて除去して前庭部から羨道部を検出した。玄室、玄門、羨門、前庭部が残存しているが羨道部と羨門、前庭部の境は明らかではない。玄室の天井部は全体的に崩落していた。全長約11m で中軸方向はN－5°－Eである。

［玄室］平面形は方形で、奥行3.53m、奥幅3.65m、前幅3.6m である。立面形、高さは天井部の崩落のため不明であるが、奥壁の立ち上がりから、立面形はドーム形であろうと推定される。玄室床面には奥壁、左、右の側壁沿いに3棺座が床面中央をとり囲むように配置されている。それぞれの棺座には縁台は認められない。奥棺座は幅0.85m、長さ2.65m で玄室床面より約10 cm 高くなっている。棺座の一部が崩落のため残存しないが、右隅の奥壁際から左側壁まで幅約3 cm、深さ約3 cm の排水溝が巡っている。棺座中央には奥壁から前方に向かって幅約5 cm 深さ約4 cm の溝が付設され、棺座を左右に分けており、奥壁から前方に緩やかに傾斜している。左棺座は幅0.8m、長さ1.45m、玄室床面より約8 cm 高く、奥棺座より6 cm 低くなっている。側壁から前壁際にかけて幅3～7 cm、深さ約3 cm の排水溝が巡っており、奥棺座との境にも幅8 cm、深さ2 cm の排水溝が付設されている。棺座は側壁から中央に向かって傾斜している。右棺座は幅0.75m、長さ1.55m で玄室床面より約8 cm 高く、奥棺座より4 cm 低くなっている。奥棺座との境に幅4 cm、深さ2 cm の排水溝が付設されており、側壁から中央に向かって穏やかに傾斜している。3棺座を巡る排水溝の断面は鋭いV字形になっている。棺座を除く玄室床面には、左右の棺座沿いに幅5～10cm、深さ約3 cm の排水溝が付設され、床面全体は玄門方向へ傾斜している。玄室の壁面には幅10cm 前後の工具痕が認められる。工具痕は壁面の上から下へ向かって施されている。玄室内の堆積土は2層に大別されるが、流入土と天井部の崩落土である。

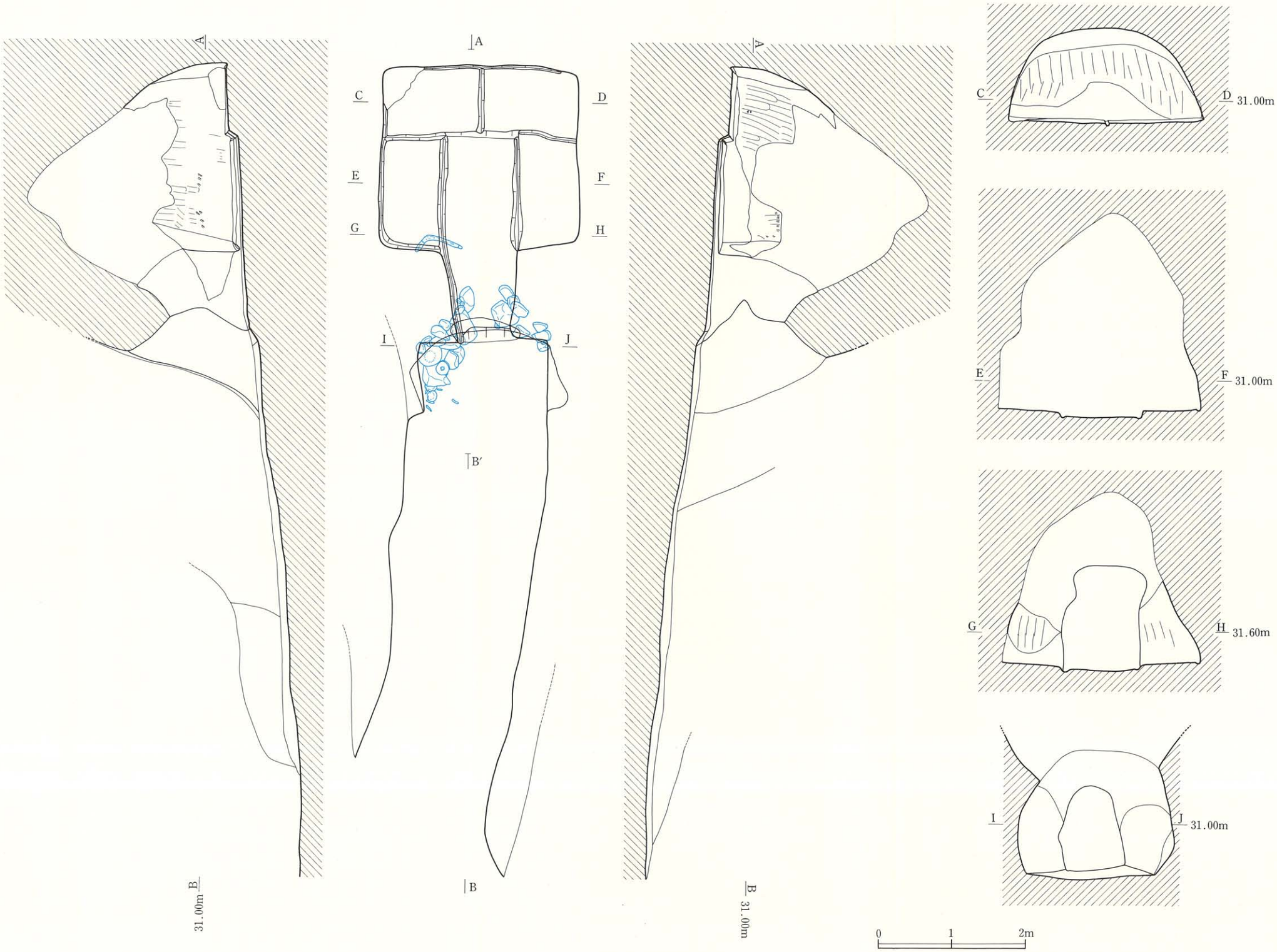
［玄門］玄室中軸よりやや右側に寄っている。立面形、高さは天井部、壁面の崩落のため不明である。平面規模は奥行左壁沿いで1.25m、右壁沿いで1.2m、幅は後端で1.05m、前端で0.7m

7号横穴墓玄室内土層註記表

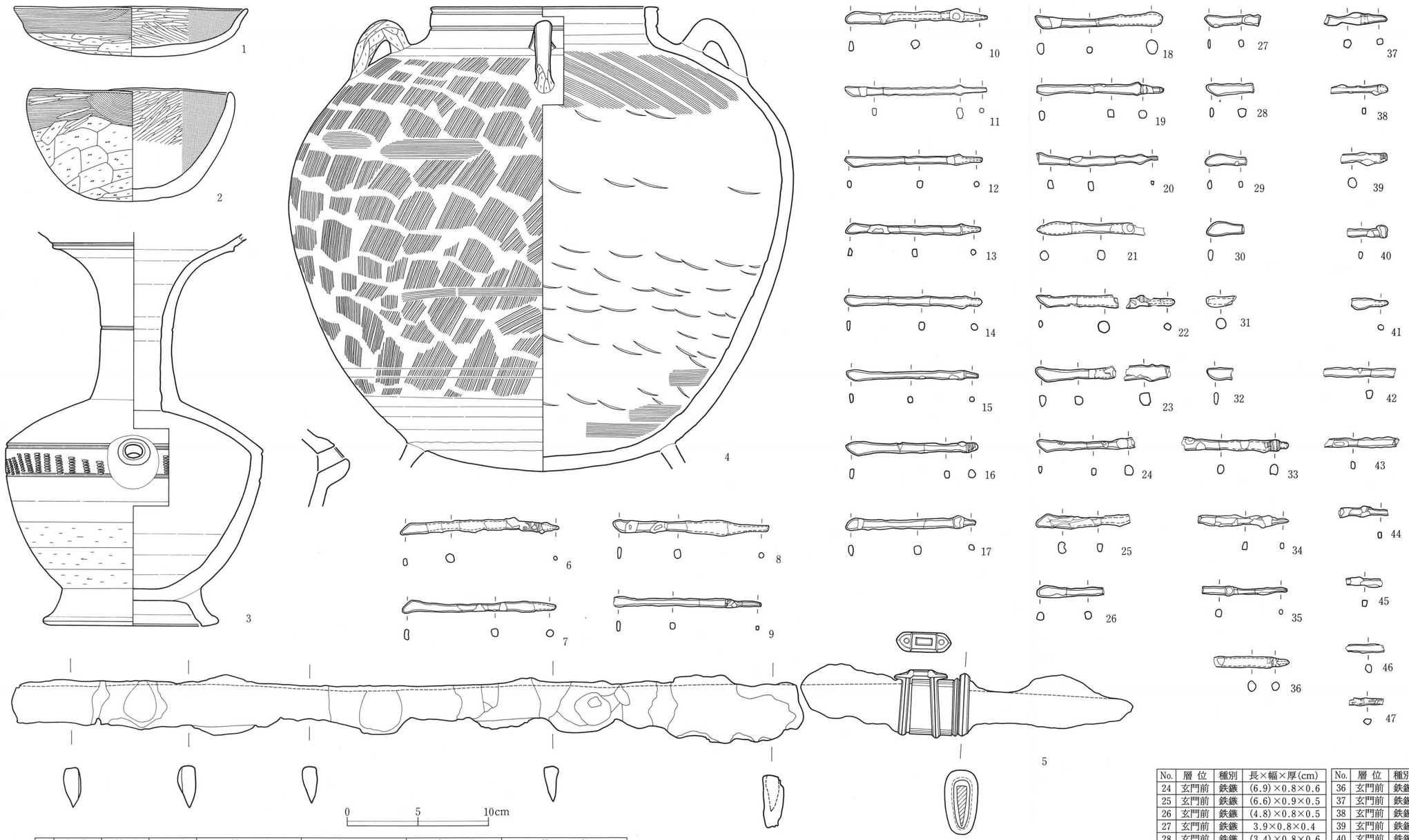
層No	色　調	土　性	備　考
1	褐(7.5YR4/6)	砂	
2	オリーブ黄(5Y6/4)	シルト質砂	礫含む
3	黄褐(2.5Y5/6)	シルト質砂	



第112図　7号横穴墓(1)



第113図　7号横穴墓(2)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	玄門前	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	図版108-9
2	玄門前	土師器	椀	ヨコナデ、ケズリ、ミガキ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	内面下半部に付着物有り。図版108-16
3	玄門前	須恵器	甕	ロクロ調整、回転ヘラケズリ、沈線、刺突文	ロクロ調整	ロクロ調整	図版109-16
4	玄門前	須恵器	壺	ロクロ調整、叩目、ナデ、ケズリ	ロクロ調整、オサエメ、ナデ	ロクロ調整	図版109-13

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
5	玄室	直刀	(80.0)×5.1×1.9		図版110-9、10

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)
6	玄門前	鉄鏃	10.7×0.8×0.6
7	玄門前	鉄鏃	10.7×0.8×0.5
8	玄門前	鉄鏃	11.0×1.1×0.5
9	玄門前	鉄鏃	(10.4)×0.7×0.3
10	玄門前	鉄鏃	9.9×0.8×0.6
11	玄門前	鉄鏃	(1.0)×0.7×0.4

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)
12	玄門前	鉄鏃	9.8×0.8×0.4
13	玄門前	鉄鏃	9.5×0.7×0.3
14	玄門前	鉄鏃	9.8×0.8×0.5
15	玄門前	鉄鏃	9.8×0.8×0.3
16	玄門前	鉄鏃	9.3×1.1×0.5
17	玄門前	鉄鏃	9.0×0.8×0.5

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)
18	玄門前	鉄鏃	8.9×0.9×0.4
19	玄門前	鉄鏃	9.0×0.9×0.6
20	玄門前	鉄鏃	(8.5)×0.9×0.4
21	玄門前	鉄鏃	(7.6)×1.0×0.6
22	玄門前	鉄鏃	(8.8)×0.9×0.8
23	玄門前	鉄鏃	(8.9)×1.1×0.8

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)
24	玄門前	鉄鏃	(6.9)×0.8×0.6
25	玄門前	鉄鏃	(6.6)×0.9×0.5
26	玄門前	鉄鏃	(4.8)×0.8×0.5
27	玄門前	鉄鏃	3.9×0.8×0.4
28	玄門前	鉄鏃	(3.4)×0.8×0.6
29	玄門前	鉄鏃	(2.9)×0.8×0.3
30	玄門前	鉄鏃	2.7×1.0×0.4
31	玄門前	鉄鏃	(2.0)×0.8×0.7
32	玄門前	鉄鏃	(2.9)×0.9×0.3
33	玄門前	鉄鏃	(7.6)×0.8×0.6
34	玄門前	鉄鏃	(6.4)×0.7×0.3
35	玄門前	鉄鏃	(6.0)×0.6×0.5

No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)
36	玄門前	鉄鏃	(5.3)×0.8×0.6
37	玄門前	鉄鏃	(4.4)×0.8×0.5
38	玄門前	鉄鏃	(4.0)×0.6×0.2
39	玄門前	鉄鏃	(3.3)×0.7×0.6
40	玄門前	鉄鏃	(2.8)×0.6×0.3
41	玄門前	鉄鏃	(2.6)×0.8×0.4
42	玄門前	鉄鏃	(5.0)×0.7×0.4
43	玄門前	鉄鏃	(5.0)×0.7×0.3
44	玄門前	鉄鏃	(3.5)×0.5×0.2
45	玄門前	鉄鏃	(2.5)×0.4×0.4
46	玄門前	鉄鏃	(2.7)×0.6×0.4
47	玄門前	鉄鏃	(2.4)×0.5×0.4

第114図　7号横穴墓出土遺物

とやや歪んでいる。床面の左側壁沿いに幅 7 cm、深さ 2 ～ 3 cm の排水溝が玄室内から延びており、羨道に向かって傾斜している。玄門前端部に幅約20cm、比高差約12cm の段が認められる。

［羨道、羨門、前庭部］玄門前から前庭部にかけての流入土を重機を用いて除去したため、壁面を削平してしまい、羨道と羨門、前庭部の境は不明である。羨道が判別できるのは、玄門前端から0.9m までである。幅は後端で1.7m、前端で1.65m と奥に開く平面形となっている。床面は奥から前方へ緩やかに傾斜している。玄門前の床面には崩落土に混じって、人頭大から径50cm 程の閉塞石が左右の奥壁～側壁際に寄せられるように残されていた。玄門前端から0.9m で左側壁が20cm 屈曲しており。この部分が羨門である可能性があるが右側壁にはその痕跡は確認できなかった。前庭部は玄門前端から約7.25m まで検出されたが、その地点で床面は現地表面と同一面となる。中軸方向は玄室中軸線より左に弯曲しており、羨門の可能性のある地点で幅1.85m、壁が残存する部分で幅約2.5m となっている。奥から前方に向かって緩やかに傾斜している。羨門の可能性のある部分から奥は穿穴によって構築された痕跡がみられるが、どの部分から穿穴によって構築されたかは不明である。穿穴部以前は開削によって構築されたものと考えられ、前庭部前方から奥へ向かって左右の側壁は徐々に高くなり、羨道を確認できる部分で壁高は 2 m を越えている。

［出土遺物］出土した遺物は、須恵器四耳壺、𤭯、土師器杯、碗各 1 点、鉄鏃61点及び直刀 1 振である。直刀は玄室の左棺座前壁付近で鍔から約10cm の部分で折れ曲がった状態で出土した。故意に折られたものである可能性もある。その他の遺物は玄門前の羨道床面、左側壁際に寄せられた閉塞石と伴に出土している。特に鉄鏃は伏せられた土師器 2 点の下から一括して出土している。

8 号横穴墓

南斜面西寄りの中腹よりやや裾部に近い部分で 1 号窯の西側に位置している。斜面の削平によって前庭部が露出していたものである。底面付近に焼土及び焼礫がみられ、調査前には窯跡と考えられていた。上部の表土及び崩落土を除去した段階で、 1 号窯跡及び 3 号窯跡と重複関係があり、それぞれの窯跡を破壊して構築されていることが確認された。遺構の精査中、窯跡ではなく 1 号、 3 号窯跡より新しい横穴墓であることが判明した。玄室、玄門、羨道、羨門、前庭部が残存しているが、崩落のため天井部は残存しない。全長約8.8m で、中軸方向は N－3°－W である。

［玄室］平面形は左側壁の前壁側がやや張り出した方形で、奥行2.4m、奥幅2.25m、前幅は2.5 m である。立面形、高さは天井部の崩落のため不明であるが、奥壁の立ち上がりからドーム形であろうと推定される。玄室床面には奥壁、左、右の側壁沿いに棺座が床面中央をとり囲むよ

うに配置されているが、奥と左右の棺座の境はなく一体となっており、縁台も認められない。幅は左側壁沿いで0.75m、奥壁沿いで0.85m、右壁沿いで0.7m である。玄室床面より約 6 cm 高くなっており、左側の部分では水平となり、奥と右側では中央に向かって緩やかに傾斜している。左奥隅の側壁と奥壁の境に、棺座の面から45cm の高さまで、下端部分の奥行が約20cm の掘り込みがみられる。排水溝などの施設は付設されておらず、壁面の工具痕も崩落のため不明である。玄室内には、下部に流入土、上部には壁や天井部の崩落土がみられた。

［玄門］玄室のほぼ中央に位置している。立面形、高さは天井部の崩落のため不明である。平面規模は奥行1.3m、幅は後端で 1 m、前端で0.77m、前端部から0.85m 後方で開く平面形になっている。床面は平坦で羨道に向かって緩やかに傾斜している。玄門前端部に幅約35cm、深さ約10cm の閉塞溝がある。

［羨道］玄門の中央に位置している。立面形、高さは天井部の崩落のため不明である。平面規模は奥行左壁沿いで3.85m、右壁沿いで4.1m、幅は後端で1.55m、前端で1.05m あり、羨門から奥に開く平面形となる。床面の右壁沿いの奥壁から 1 m のところに幅35cm、奥行15cm の方形の凹みがある。玄門前端の閉塞溝は長さが1.38m あり羨道側壁の下端から左、右に張り出している。その閉塞溝に接して、左側に径30cm、深さ33cm、右側に径35cm、深さ18cm のピットがある。床面全体は羨門方向へ緩やかに傾斜している。また、左右両側壁の玄門閉塞溝上部、左側では床から0.9m のところに径15～20cm、深さ10cm、右側では床から 1 m のところに径15 cm 深さ10cm のカンヌキ穴が認められ、玄門閉塞溝の上部には手のひら大から長径40cm 程の閉塞石が左右の奥壁～側壁際に寄せられるように残されており、羨道中央部には約1.7m の長さに長径20～45cm 程の礫が並べられていた。

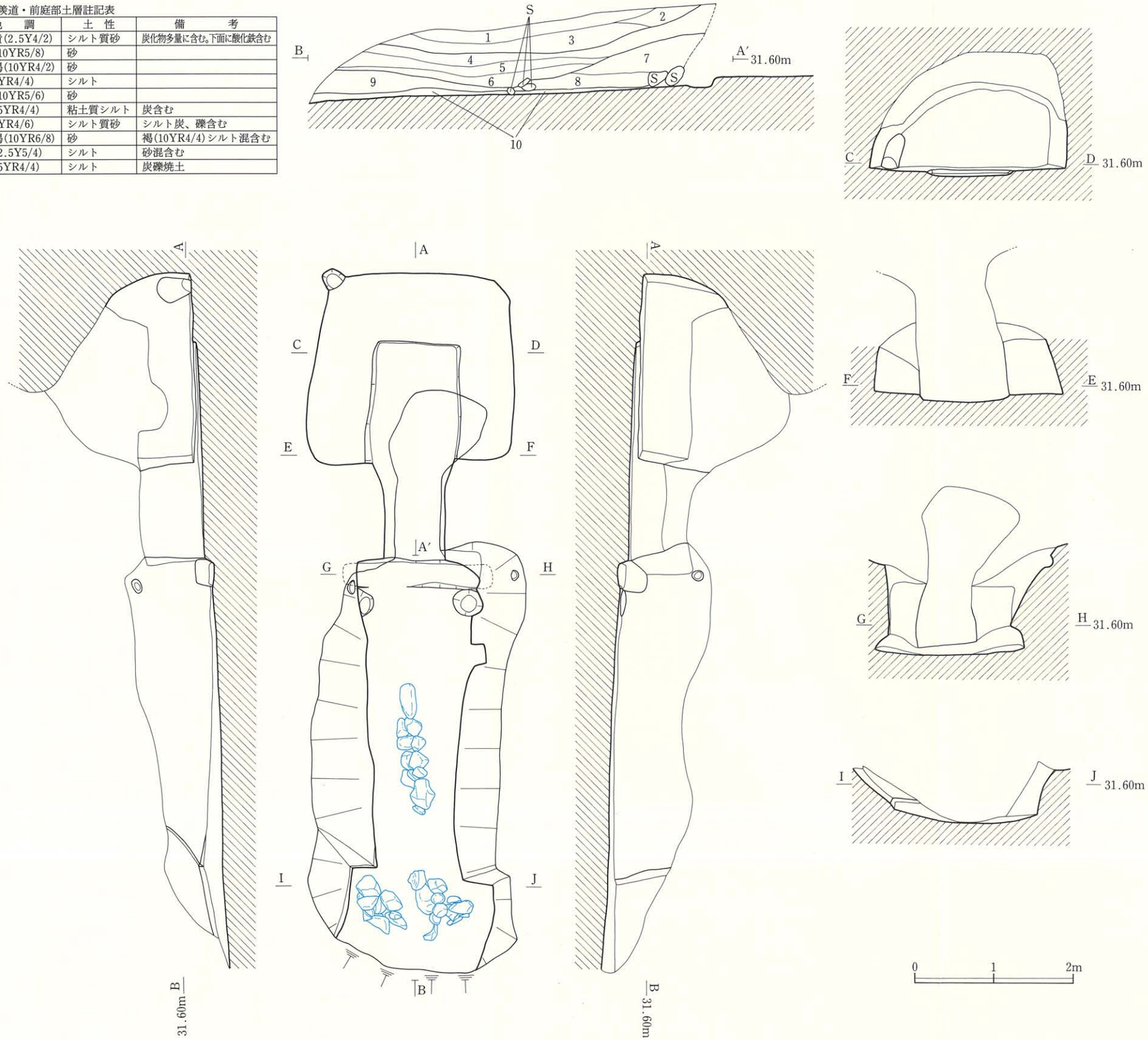
［羨門］段などの施設は見られないが、羨道前端から左に30cm、右に40cm 屈曲している。天井部の屈落のため、立面形、高さは不明である。壁の立ち上がりは左側で0.5m、右側で0.7m である。

［前庭部］羨門前から約1.2m まで検出されたが、前方は斜面で削平されており、全容は不明である。羨門前端で左右側壁まで1.8m 削平された部分で1.8m と側壁はほぼ平行になっているが、中軸方向は羨道中軸からずれている。床面は中央部から側壁及び削平部分に向かって徐々に高くなっている。前庭部から玄門にかけての堆積土は 3 層に大別され、自然流入土と天井及び壁の崩落土に、 1 号、 3 号窯跡の炭化物や焼土などが流れ込んでいる。

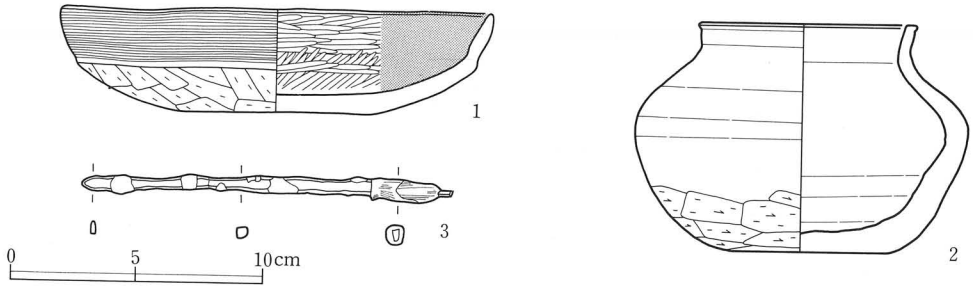
［出土遺物］出土した遺物は須恵器短頸壺 1 点、土師器杯 1 点、その他に須恵器甕の破片がある。須恵器短頸壺、土師器杯は羨道部から出土している。また、須恵器甕の破片は羨道部から前庭部にかけて出土しており、 1 号及び 3 号窯跡からの流入品と考えられる。

8号横穴墓羨道・前庭部土層註記表

層No	色　調	土　性	備　考
1	暗灰黄(2.5Y4/2)	シルト質砂	炭化物多量に含む。下面に酸化鉄含む
2	黄褐(10YR5/8)	砂	
3	灰黄褐(10YR4/2)	砂	
4	褐(10YR4/4)	シルト	
5	黄褐(10YR5/6)	砂	
6	褐(7.5YR4/4)	粘土質シルト	炭含む
7	褐(10YR4/6)	シルト質砂	シルト炭、礫含む
8	明黄褐(10YR6/8)	砂	褐(10YR4/4)シルト混含む
9	黄褐(2.5Y5/4)	シルト	砂混含む
10	褐(7.5YR4/4)	シルト	炭礫焼土



第115図　8号横穴墓



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	羨道部	土師器	杯	ヨコナデ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	ケズリ	
2	羨道部	須恵器	短頸壺	ロクロ調整、手持ヘラケズリ	ロクロ調整	ケズリ	図版109-12

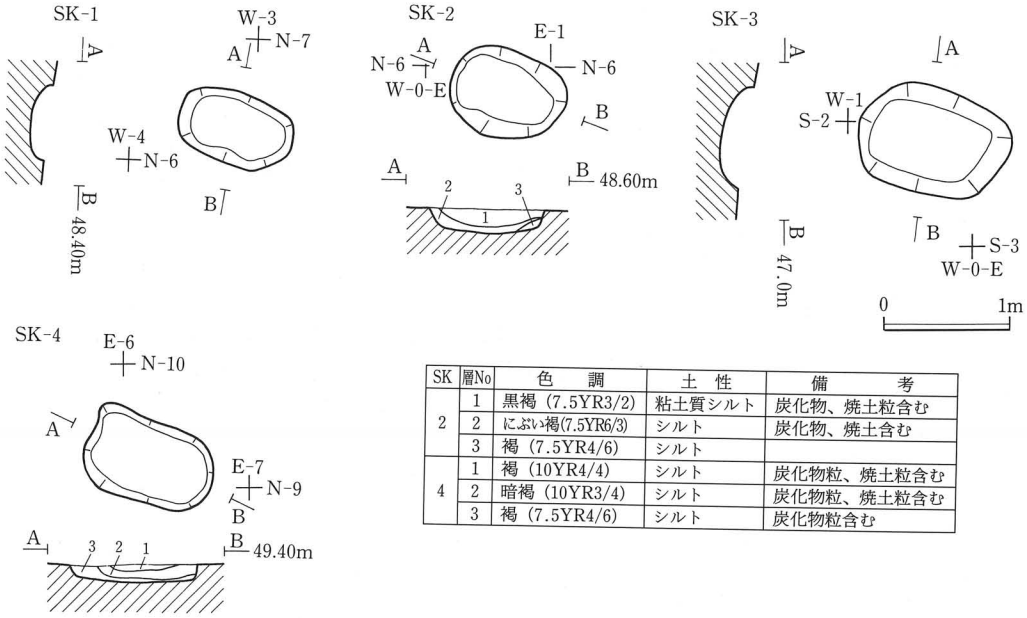
No.	層位	種別	長×幅×厚(cm)	重量(g)	備考
3	羨道部	鉄鏃	(14.5)×0.9×0.7	17.7	図版110-24

第116図　8号横穴墓出土遺物

(3) その他の遺構

西側緩斜面及び東側北部平坦部で土坑10基及び溝跡1条が検出された。また、遺構外出土遺物には、縄文土器、須恵器、土師器がある。

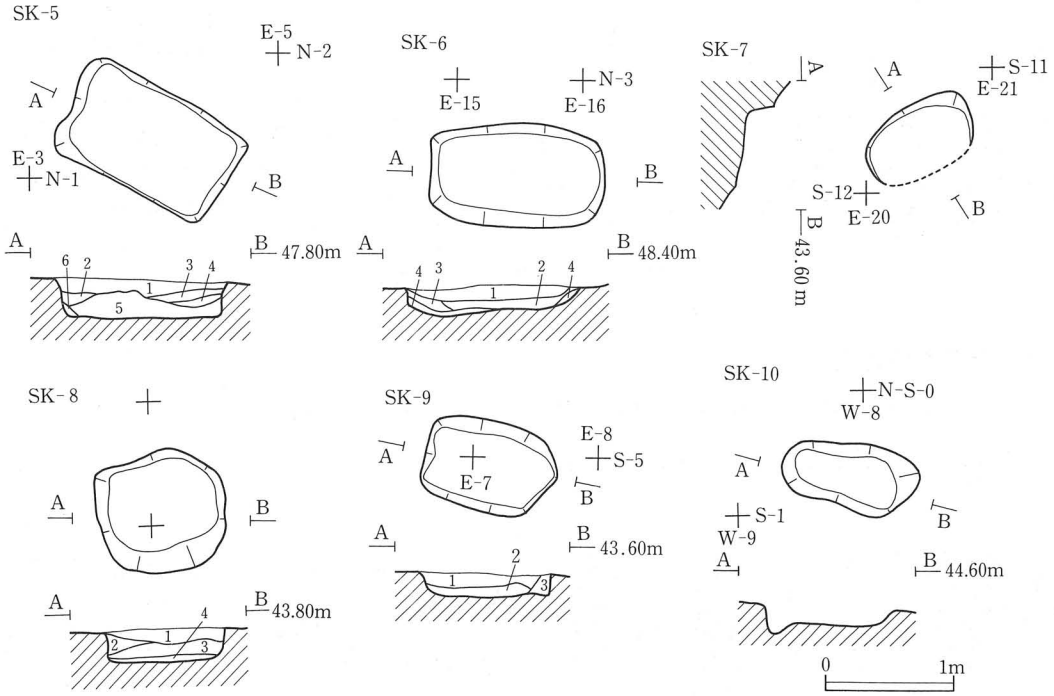
SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底面	焼面、炭化物	遺物、備考
1	不整長方形	0.93×0.57	西壁22、緩傾斜	平坦、中央低い	北・東壁焼面	単層。褐(10YR4/4シルト)。炭焼土混入
2	不整長方形	0.93×0.72	西壁24、緩傾斜	平坦、中央低い	東・西・北壁焼面、底一部炭化物付着	
3	不整長方形	1.2×0.85	北壁22、緩傾斜	平坦、中央低い	北・東壁焼面、底一部炭化物付着	単層。にぶい黄褐(10YR4/3)シルト。炭焼土混入
4	不整隅丸長方形	1.05×0.7	北東隅11、急角度	平坦、中央低い	北壁焼面、底一部炭化物付着	



SK	層No	色調	土性	備考
2	1	黒褐 (7.5YR3/2)	粘土質シルト	炭化物、焼土粒含む
	2	にぶい褐(7.5YR6/3)	シルト	炭化物、焼土含む
	3	褐 (7.5YR4/6)	シルト	
4	1	褐 (10YR4/4)	シルト	炭化物粒、焼土粒含む
	2	暗褐 (10YR3/4)	シルト	炭化物粒、焼土粒含む
	3	褐 (7.5YR4/6)	シルト	炭化物粒含む

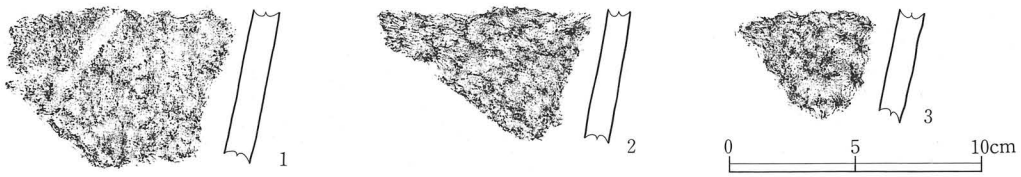
第117図　SK-1・2・3・4土坑

SK	平面形	規模(m)	壁面(cm)	底　面	焼　面、　炭　化　物	遺物、備考
5	不整長方形	1.45×0.85	北壁38、急角度	平坦、中央低い	壁～底全面焼面。東壁特に還元され青灰色に焼締	
6	不整隅丸長方形	1.4×0.83	北壁26、急角度	平坦、北側高い	東・西壁焼面。底全面炭化物付着	
7	不整隅丸長方形	0.93×(0.55)	北壁23、急角度	平坦、北側高い	北壁～底全面炭化物付着	単層。褐(10YR4/4)シルト。南半削平
8	不整正方形	1.05×0.98	北壁33、急角度	平坦、中央低い	底一部炭化物付着	
9	不整隅丸長方形	1.07×0.73	北東隅19、急角度	平坦、北側高い	東西壁焼面、東西壁～底全面炭化物付着	
10	不整楕円形	1.1×0.57	西壁20、緩傾斜	西側凹、北側高い		縄文土器片。単層褐(7.5YR4/3)シルト。固く締る



SK	層No	色　調	土　性	備　考
5	1	褐 (7.5YR4/4)	シルト	若干炭化物粒、焼土粒含む
	2	黒褐 (7.5YR2/2)	粘土質シルト	炭化物、焼土多量に含む
	3	暗赤褐 (5YR3/6)	粘土質シルト	焼土多量に含む
	4	赤褐 (5YR4/8)	砂質シルト	焼土塊含む
	5	明赤褐 (5YR5/8)	砂質シルト	焼土塊多量に含む
	6	極暗褐(7.5YR2/3)	シルト	炭化物多量に含む
6	1	褐 (7.5YR4/4)	シルト	小礫、炭化物粒含む
	2	黒 (7.5YR1.7/1)	シルト	焼土粒含む
	3	暗褐 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒含む
	4	褐 (7.5YR4/6)	粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒含む

SK	層No	色　調	土　性	備　考
8	1	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	小礫、炭化物をわずかに含む
	2	極暗褐(7.5YR2/3)	粘土質シルト	炭化物を含む
	3	褐 (7.5YR4/4)	シルト	小礫、炭化物を1層よりも多く含む
	4	黒褐 (10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物を多量に含む
9	1	褐 (7.5YR4/4)	シルト	小礫炭化物含む
	2	黒褐 (10YR2/3)	シルト	焼土粒含む
	3	褐 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	



No.	遺　構	層　位	種　別	器　形	外　面	内　面	底　面	備　考
1	SK-10	堆積土	縄文土器		不明縄文	マメツ		胎土中に植物繊維混入
2	SK-10	堆積土	縄文土器		不明縄文	ナデ		胎土中に植物繊維混入
3	SK-10	堆積土	縄文土器		不明縄文	ナデ		胎土中に植物繊維混入

第118図　SK-5・6・7・8・9・10土坑

SD－１溝跡

［遺跡の確認］東側平坦部の北側に位置し、２層上面で確認された。

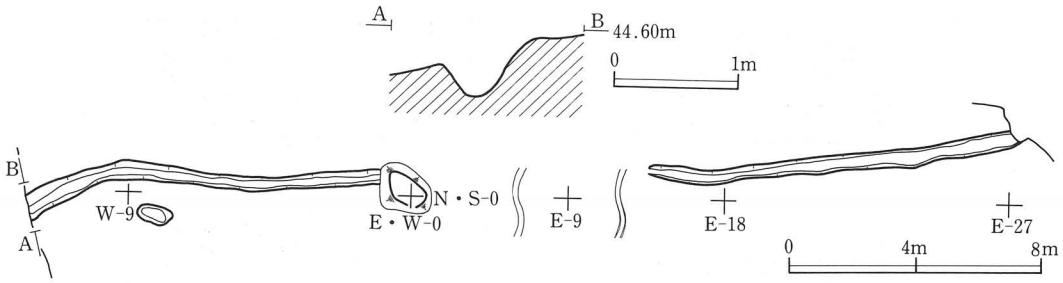
［規模］東側平坦部北東端のＮ－２、Ｅ－27から、西端のＳ－１、Ｗ－12までの直線距離にして約40mに亘って続いていたものと思われるが、Ｅ－15からＥ－０にかけては後世の削平のため確認されなかった。また、今回検出されたのは一部分であり調査区外の東及び西側に延びているものと考えられる。幅は約0.4～0.7mである。削平されている中間部分は本遺構を確認した部分では最も標高の高くなっている部分である。

［堆積土］単層、にぶい黄褐色（10YR4/3）シルトである。

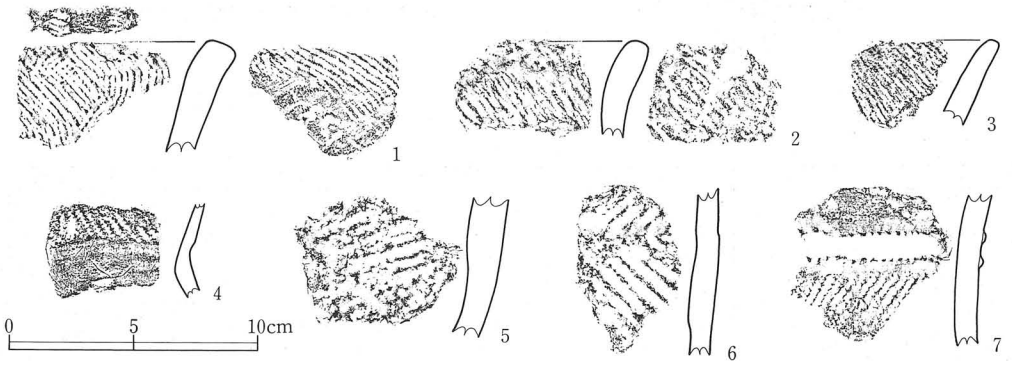
［壁面］２層からなり、５～35cmの深さで残存している。底面から緩やかな角度で立ち上がっている。

［底面］２層からなり、細かな凸凹が見られる。底面レベルは地形に対応しながら緩やかに変化しており、削平されている中央部分に向かって高くなっている。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

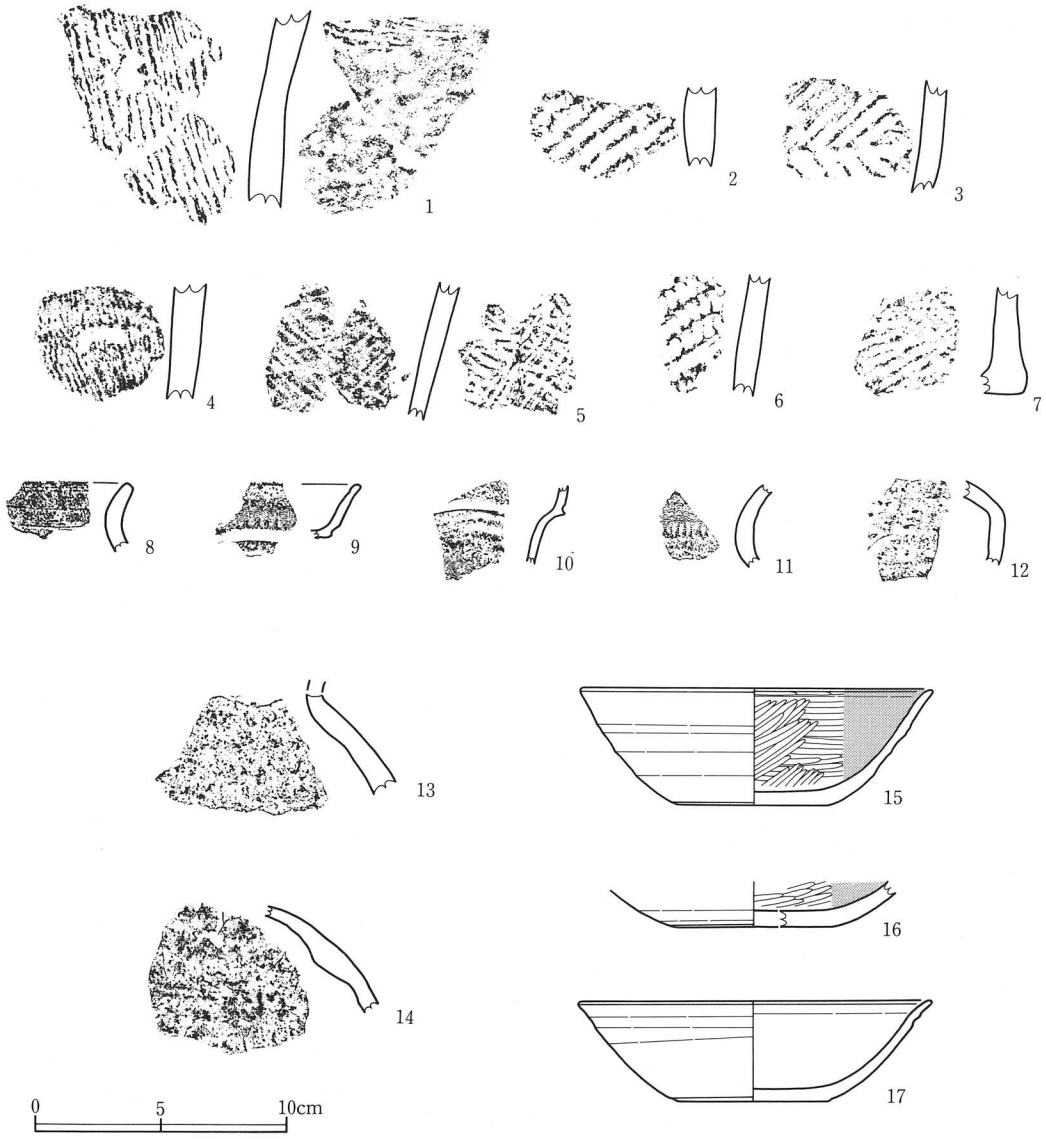


第119図　SD-1 溝跡



No.	層位	種別	器形	外面	内面	備考	
1	西表土	縄文土器		R撚糸文、口唇部に撚糸圧痕	R撚糸文、ナデ	胎土中に植物繊維混入。	図版110-25
2	東表土	縄文土器		R撚糸文	R撚糸文	胎土中に植物繊維混入。	図版110-26
3	西表土	縄文土器		R撚糸文	ナデ	胎土中に植物繊維混入	
4	西表土	縄文土器		縄文RL、ナデ	ナデ		
5	西表土	縄文土器		縄文LR	ナデ	胎土中に植物繊維混入	
6	西表土	縄文土器		結束条文	ナデ	胎土中に植物繊維混入。	図版110-28
7	西表土	縄文土器		縄文LR、隆線、刻目	ナデ		図版110-27

第120図　遺構外出土遺物(1)



No.	層位	種別	器形	外面	内面	底面	備考
1	東表土	縄文土器		R撚糸文	R撚糸文、ナデ		胎土中に植物繊維混入。図版110-29
2	東表土	縄文土器		縄文LR	ナデ		胎土中に植物繊維混入。図版110-30
3	西表土	縄文土器		結束縄文	ナデ		胎土中に植物繊維混入。図版110-31
4	西表土	縄文土器		R撚糸文	ナデ		胎土中に植物繊維混入。図版110-32
5	東表土	縄文土器		条痕文	条痕文		図版110-33
6	東表土	縄文土器		縄文LR	ナデ		胎土中に植物繊維混入。図版110-34
7	東表土	縄文土器		縄文LR	ナデ		胎土中に植物繊維混入。図版110-35
8	東表土	須恵器		ナデ	ナデ		図版110-36
9	東表土	須恵器		隆線、波状文	ナデ		図版110-37
10	東表土	須恵器		隆線、波状文	ナデ		図版110-38
11	東表土	須恵器		波状文	ナデ		図版110-39
12	東表土	須恵器		ナデ	ナデ		
13	東表土	須恵器		ナデ	ナデ		
14	東表土	須恵器		ナデ	ナデ、オオエメ		
15	南表土	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整、ミガキ、黒色処理	回転糸切	
16	南表土	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整、ミガキ、黒色処理	回転糸切	
17	南表土	土師器	杯	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切	

第121図　遺構外出土遺物(2)

V まとめ

〔1〕 土手内遺跡

1．遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品などがある。ここでは土器について図示資料を中心として記述していく。

(1) 縄文土器

土手内遺跡の縄文土器は、竪穴遺構、土坑、表土等から出土している。出土状況には、規則性や一括性は認められなかった。

SI14 底面出土土器（第46図１～３）は、地文のみが施文された体部破片であるが、胎土中に植物繊維の混入が認められることから、概ね早期後葉から前期前葉のものであると考えられる。その他に SK23、SX １出土土器（第58図２、63図２～５、７）は胎土中に植物繊維の混入が認められ、同様の時期のものであると考えられる。

SX １出土土器（第63図１）は、３～４条を１単位とする沈線文と連続した半截竹管文、さらに円文が施文され、同図６は刻目をもつ粘土紐が貼付られたものである。これらに類似した資料は七ヶ浜町大木囲貝塚、迫町糖塚貝塚出土土器（興野：1968）にみられ、前期大木３式とされており、本資料も同時期のものと考えられる。

SK15 出土土器（第53図１）は、縦位の沈線文間に縄文が施文され、磨消縄文帯が下垂している。類似した資料は蔵王町二屋敷遺跡（加藤他：1984）などにみられ後期前葉南境式とされている。

その他の縄文土器についても概ね早期後葉から後期前葉にかけての時期のものであると考えられる。

(2) 弥生土器

弥生土器は、竪穴住居跡、土坑及び遺物包含層、表土等から出土している。SI12 住居跡及び、SK22 土坑から出土した土器は、床面を中心とした出土状況を示しており、遺構に伴うものであると考えられる。その他については、出土状況に一括性や規則性は認められない。

SI12 住居跡出土土器（第41図）の特徴は、複合口縁を呈し、口縁部に縄文あるいは撚糸圧痕文がみられ、口縁部下端には刺突文がみられる。また、ミニチュアの高杯には連孤文がみられ、無文の甕あるいは壺と思われる破片がある。

SK22 土坑出土土器（第55～57図）の特徴は、複合口縁を呈し、波状口縁のものは、突起頂部に刻目がみられるものがあり、口縁部に沈線文が施文されている。複合口縁下端に刺突文や指頭状の圧痕文がみられる。複合口縁のものは、頸部が無文になっており、小型のものは体部が

無文のものがある。単純口縁のものは口縁〜体部に沈線文と磨消縄文がみられる。その他に縄文のみが施文されたものなどがある。

以上のような特徴を呈する土器は、一迫町上ノ原A遺跡(佐藤：1978)、瀬峰町大境山遺跡(阿部・赤澤：1982)、仙台市富沢遺跡（太田：1988)、利府町郷楽遺跡（庄子：1990）等から出土しており、概ね天王山式と捉えられており、本遺跡出土土器も同様に捉えられる。

天王山式土器の特徴として、「口縁部突起の発達」、「交互刺突文」、「条の縦走する縄文」、「体部文様帯下端の連弧文」の4点が指摘されている（中村：1976)。また、天王山式に後続する型式として踏瀬大山式と呼称される土器群が認識されている。その特徴として、複合口縁で平縁のものが多く、口縁部下端に刺突文や指頭状圧痕をめぐらし、沈線文による横位平行文、円孤文、山形文などが描かれる。地文には縄文や撚糸文が用いられ、天王山遺跡出土土器に多くみられる条が縦走するものは少なく、斜走するものが多い、等のことがあげられている。

以上のことから、SI12及びSK22出土土器は、天王山式から踏瀬大山式にかけての特徴を呈しており、踏瀬大山式の特徴により近いものと考えられる。SI12出土の無文の土器については、天王山式には見られないものであるが、出土状況から他の3点と同時期のものであると考えられる。

また、SI 2住居跡出土の弥生土器（第13図3）は、甕あるいは壺形のものであるが、地文が付加条文であり、頸部では羽状を呈している。その他の文様はみられない。この資料については、北関東に分布の中心を持つ弥生時代後期の土器に類似性をみい出せそうであるが、単独の出土であり、これ以上の吟味はできない。同様の資料の増加を待ちたい。

(3) 古墳時代の土器

古墳時代の竪穴住居跡[註1]が11軒検出された。住居跡に重複関係はない。出土土器の多くは堆積土出土であり、明確に住居跡に伴う土器は少ない。また、小型製品は破片が多く、更に、土器表面の保存状態も良好ではない。このような制約のある資料ではあるが、各住居跡出土土器を観ると、明らかに型式の異なる土器を含む例は少なく、住居最終使用後、廃絶されてから一定の時間幅をもつ資料ではあるものの、比較的限定された時間幅内におさまる資料と考えられる。住居跡の床面・細部および堆積土出土土器を一括した資料は、厳密な共伴資料とは言えないものであるが、一定の時間幅での特徴をもつ資料であり、概略（傾向性）を捉えることはできる資料である。本遺跡の古墳時代の土器は、土器の特徴と共伴関係（出土状況）およびこれまでの研究成果から、大きく2群に分けられる。以下では、時間幅のある資料であることを念頭に置きながら、各群毎に検討していきたい。

第Ⅰ群土器

SI10住居跡出土の古墳時代前期の土器群である。本住居跡出土土器は住居跡に伴う資料では

ないが、大型壺2点、中・小型壺各1点他が出土している。大型壺は口頸部破片である。折り返し口縁のもので、頸部は刷毛目である。中型壺も口頸部破片で、器厚は薄く、胎土には砂粒が少ない。刷毛目後ヘラミガキが施されている。小型壺は体部破片である。これも、薄く、砂粒が少ない。体部中央に最大径をもっている。外面ヘラミガキである。この他に、SI13住居跡出土の大型壺も本群に入る可能性がある。球形の体部下半の破片で、外面は刷毛目である。SI10・13住居跡の土器群は欠落している器種もあるが、現状では前期の土器群と考えられ、丹羽　茂氏による塩釜式の第III段階（丹羽：1985）に相当しようか。完形品が皆無であり、中期の古相の土器群の可能性もあるが、SI10・13住居跡の下方にあるSI 2・6住居跡出土の小型丸底鉢や台付甕が本群からの流れ込みと推定し、本群の段階を設定した。

第II群土器

SI 1・2・3・4・5・6・8・9・11住居跡出土の古墳時代中期の土器群である。高杯などの欠落器種もあるが、図示資料も多いので、まず、本群については土器の分類を行う。その後、出土状況の検討を踏まえて、これまでの研究成果と比較したい。

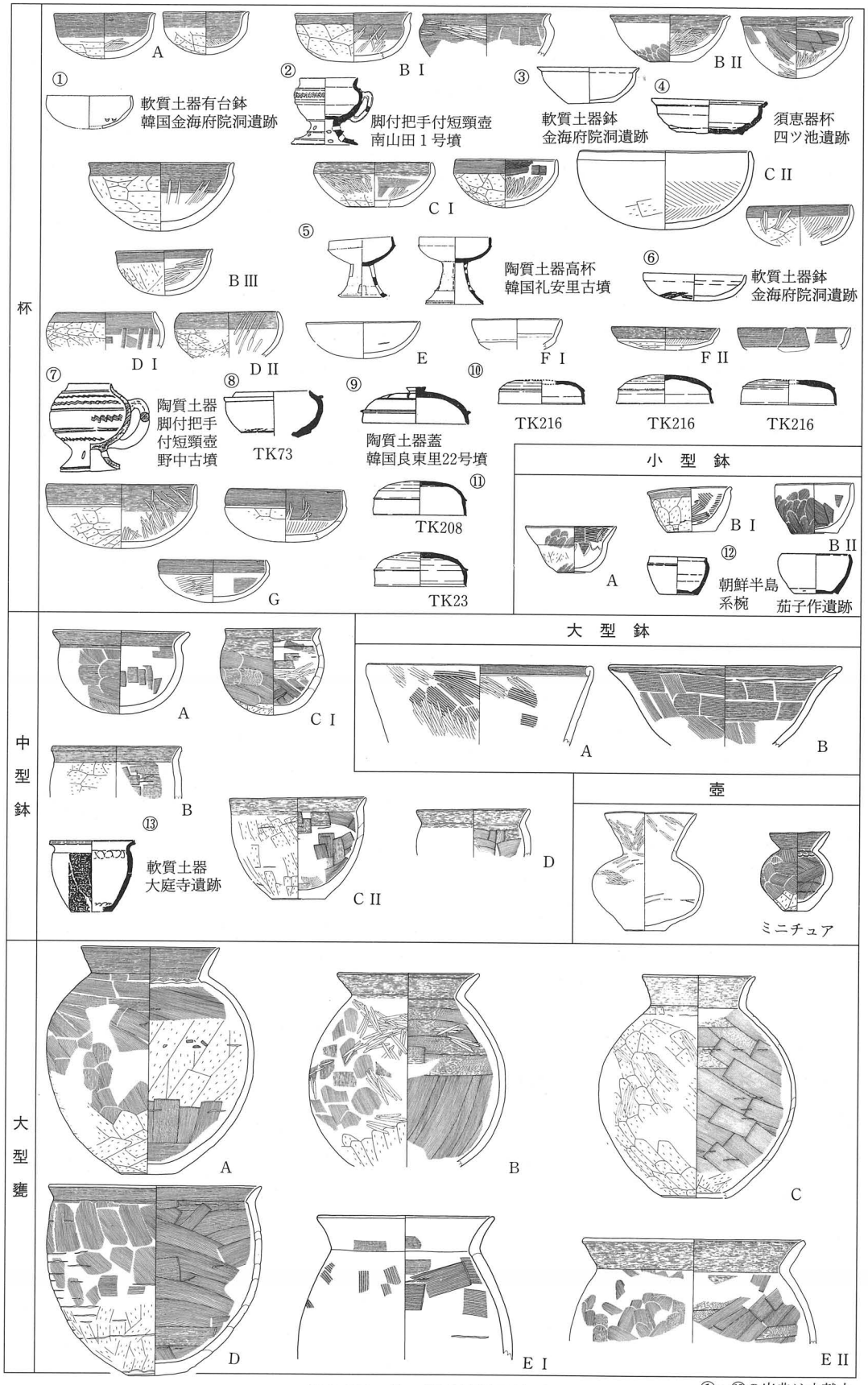
〈分類〉

土師器の器種には、杯・鉢・壺・甕・甑があり、その大部分の胎土に白色針状物質（海綿動物骨針）が認められる（第122・123図）。高杯は破片もない。

〔杯〕　口縁部～体部の特徴により分類すると、12種類になる。

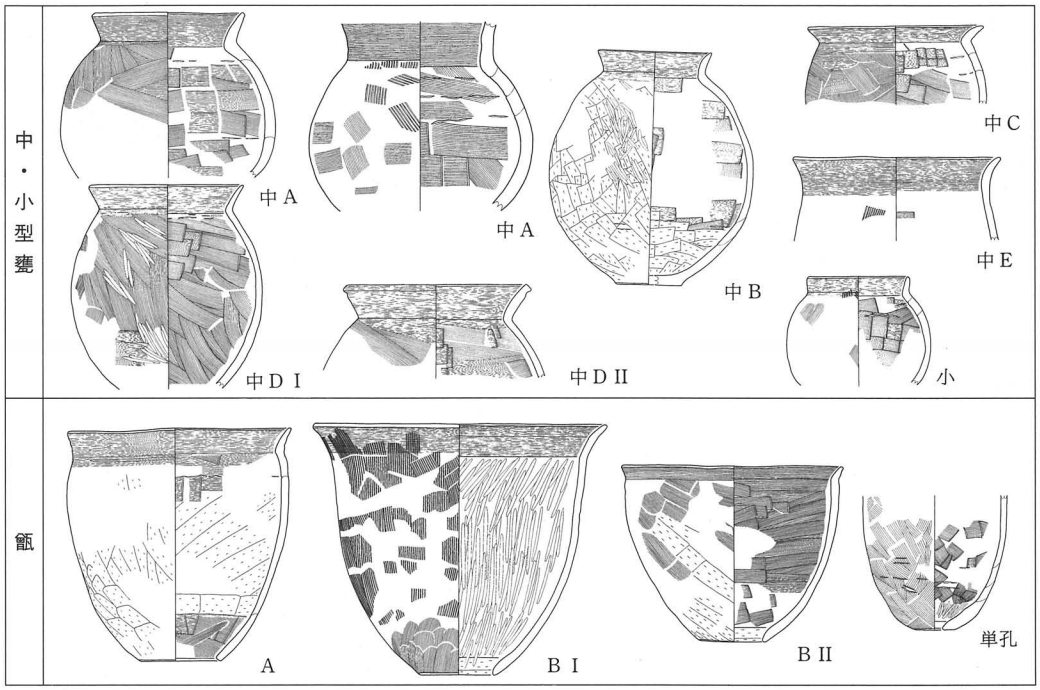
本群の杯の色調は特徴的であり、赤色系のものを主体としている。焼成実験や分析はしていないが、これらには、焼成方法により赤く焼かれたもの、表面にのみベンガラなどの赤色顔料を含む化粧土を塗って焼いたもの、胎土そのものに赤色顔料を含ませて焼いたもの、鉄分の多い胎土を使用したものなどがあると推定される。また、赤色塗彩されたものも数点ある。更に鉢・甕にも同様に赤色系のものがあり、赤を基調とした土器群である[註2]。何故、赤くしたのかは、祭祀的色彩の可能性があるものの、朝鮮半島の三国時代に「赤褐色軟質土器」や「赤焼土器」と呼称されている一群の土器があり（武末：1991）、それとの関連にも注目したい。

形態的には、F類を除いて、深めの半球状の体～底部のものが多い。口縁部の特徴を観ると、F・G類以外は、大きくは、口縁部が外傾・外反するものとそうでないものとに分けられる。やや詳細に分類すると、口縁端部内面が軽く外反するもの（A類）、口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部が小さく外反・外傾するもの（B類）、口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部が直立・内傾気味のもの（C類）、口縁部が内湾気味のもの（D類）、底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部に至る半球形のもの（E類）、口縁部と体部の境に段・稜をもち、口縁部が外傾するもの（F類）、口縁部と体部の境に段をもち、口縁部が直立・内傾気味のもの（G類）がある。底部は丸底のものが多いが、BII類、CI類には平底のものがある。法量は、A類に中・小、BI



第122図　第Ⅱ群土器分類（１）

①～⑬の出典は文献末



第123図　第Ⅱ群土群分類（２）

類は中のみ、BⅡ類に大・中・小、BⅢ類に大・小、CⅠ類に大・中・小、CⅡ類に大・小、D・E類は中のみ、F類は中・小、G類は大・中・小がある。器面調整は、大部分が、外面が横ナデ・ヘラケズリかナデ（後ヘラミガキ）、内面が、横ナデ・ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキである。A類のSI9住居跡出土のものの外面のヘラケズリは回転ヘラケズリ風である。また、放射状ヘラミガキのもの（BⅡ・BⅢ・CⅡ・G類）もある。

本群の各種の杯は、基本的に、古墳時代前期にはみられないものであり、その出自は興味深い。ここで、若干、本群の杯の祖型について考えてみたい。

まず、F・G類については、須恵器の模倣と推定される。これらは、杯蓋の模倣であろう。仙台市内には、北部にTK216型式期（ON46型式）の大蓮寺窯跡、南部にTK208型式期の金山窯跡（渡辺：1991）があり、基本的には、在地での須恵器窯成立以後の器種であろう。因みに、本遺跡と金山窯跡は直線距離にして、僅か300mである。その他の杯類は『土師式土器集成』1～3（杉原・大塚編集：1971～73）と『古墳時代の研究』6（石野・岩崎・河上・白石編集：1991）から概観すると、口縁部の多少の違いはあるものの、ほぼ全国的に分布しているものであることがわかる。[註3] これらは、各地に於いても、新しい器種として出現していることから考えると、一部は前期のある器種の系譜に連なるものもあるかもしれないが、多くは、新たな焼き物の影響の下に出現した可能性がある。在地須恵器窯出現以前の焼き物で全国的に影響をおよ

ぼす可能性のあるものとしては、朝鮮半島の陶質土器や軟質土器[註4]および出現期須恵器[註5]が挙げられる[註6]。そこで、今手元にある資料(『韓国の考古学』(金　監修：1989)、『金海府院洞遺跡』(東亜大学校博物館：1981)、第21回埋蔵文化財研究集会資料『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』(大阪府埋文：1987)、『研究入門須恵器』(中村：1990)、『季刊考古学』第33号「日本出土陶質土器の原郷」(定森：1990)、「陶質土器と初期須恵器」(酒井：1990)、『土器からみた日韓交渉』(武末：1991)、『古墳時代の研究』6「陶質土器とその分布」(木下：1991)、『陶邑III』(中村：1978)、『陶邑・大庭寺遺跡』(大阪府教委：1989、1990)、『韓式系土器研究』II・III(韓式系土器研究会：1989・1991))で、朝鮮半島および日本出土の陶質土器・軟質土器や出現期須恵器を観ると、同形態の杯はほとんど見当らない。しかし、軟質土器・出現期須恵器には、若干ながら類似形態のものがあり、また、陶質土器・軟質土器・出現期須恵器の杯以外の他器種のものには、本体部分の形態が類似しているものはある。このような観点から、本群の杯を観ると、まず、BI類は、前期の鉢の形態変化の可能性もあるが、伽耶系陶質土器の口縁部の外反する脚付把手付短頸壺の脚と把手を取った本体部分に類似している。BI類に似る脚付把手付短頸壺は、近県では、福島県郡山市南山田1号墳から出土しており(柳沼：1990)、これは福島県に於ける中期の古い段階とされている白河市道南北遺跡1号住居跡出土の土師器「椀形土器」(根本：1982、辻：1989)に類似している。また、出現期須恵器の把手付椀にもやや類似するものがある。BII類[註7]の平底のものは、韓国の金海府院洞遺跡の軟質土器鉢に類似しており、堺市四ツ池遺跡出土の出現期須恵器杯(樋口：1978)にも類例がある。また、伽耶系陶質土器の口縁部が内斜する高杯の杯部にも似ている。A類は、金海府院洞遺跡の軟質土器有台鉢の鉢部に類似している。また、伽耶系陶質土器の口縁部が小さく内斜する脚付把手付短頸壺の蓋にも似ている。BIII類は、A・BI・BII類から変化したものであろうか。C類は、前期の器台の受部から成立した可能性もあるが、金海府院洞遺跡の軟質土器鉢にも同形態のものがある。また、伽耶系陶質土器の口縁部が直立・内傾する高杯の杯部にも類似している。更に、出現期須恵器の杯蓋にも似る。DI類は伽耶系陶質土器の口縁部が内湾・内傾する脚付把手付短頸壺や耳付・把手付椀に似ている。また、出現期須恵器の羽釜形の杯や有蓋高杯の杯部にも似る。DII類はDI類からの変化か。E類は、CII類からの変化かもしれないが、半球形状の伽耶系陶質土器の蓋や出現期須恵器杯蓋にも似ている。

以上のように大摑みではあるが、本群の杯には、朝鮮半島系土器・出現期須恵器の杯類や杯以外の器種の本体部分に形態的に類似しているものがあることを紹介した[註8]。

〔鉢〕　法量により、小・中・大に分けられる。

小型鉢：2種類ある。A類は前期の小型丸底鉢の系譜に連なるものであるが、粗製で、平底である。器面調整は外面ナデ・ヘラケズリ、内面刷毛目である。B類は平底で、やや丸味をもっ

て立ち上がり、口縁部が小さく外反するもの（ＢＩ類）と、直立するもの（ＢII類）とがある。このＢ類の形態は、陶質土器の把手付椀や、ゲタ痕跡をもつ陶質土器・軟質土器の椀や出現期須恵器の小型の平底鉢に類似しており、朝鮮半島系の新しい器種である。器面調整は前者が外面横ナデ・ヘラケズリ（下端は横方向のヘラケズリ）、内面刷毛目、後者が外面ナデ、内面ヘラナデである。Ｂ類の類例は畿内では河内平野地域で顕著に認められる。

中型鉢：４種類ある。Ａ類は、丸底で、丸味をもって立ち上がり、口縁部が強く外反する金魚鉢形のもの。器面調整は口縁部内外面横ナデ、体部外面ナデ、体部内面ヘラナデである。丸底である特徴は須恵器的である。

Ｂ類は、口縁部～体部上半の破片であるが、ほぼ直立する体部に外傾する口縁部をもつもので、口縁端部は「ロクロ」ナデ風の調整により、平坦面をもち、角張っている。器面調整は口縁部内外面横ナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデである。本類は、朝鮮半島系土器の平底鉢（米田氏の韓式系平底鉢：1991）の口縁部形態に類似している。群馬県渋川市空沢遺跡出土の軟質土器平底鉢（大塚：1988）を以前に実見したことがあり、この器種を祖型としたものであろうと考えられる。類例は、南小泉式古段階とされている福島県いわき市龍門寺４号住居跡出土資料にある（廣岡：1989）。

Ｃ類は、口縁部が小さく、外傾・外反するもので、大型甕Ｅ類の小形のものである。口縁部形態が杯ＢＩ類と同様のもの（ＣＩ類）と杯ＢII類と同様のもの（ＣII類）とがある。前者は丸底のもの、後者には平底のものがある。器面調整は、口縁部内外面横ナデ、体部外面ナデ・ヘラケズリ、内面ナデ・ヘラナデである。本類も、基本的には、朝鮮半島系土器の平底鉢に連なるものであろうが、杯ＢＩ・ＢII類を深くしたものであり、これらと同じ祖型の影響も受けたものと考えられる。尚、ＣＩ類は丸底である点、須恵器的である。

Ｄ類は、口縁部～体部上半の破片である。口縁部が外傾・直立気味のもので、口縁端部は丸くおさまる。器面調整は、口縁部内外面横ナデ、体部外面ナデ・ヘラケズリ、体部内面ナデ・ヘラケズリである。本類は丹羽氏の塩釜式第IIＢ段階以降の系譜のものに中型鉢Ｂ・Ｃ類が影響を与えた器種であろう。

大型鉢：２種類ある。Ａ類は、口縁部が内側に折り返され、口縁端部が水平・平坦なもの。Ｂ類は、大きく開くものである。器面調整は前者が外面刷毛目、内面ナデ・刷毛目、後者が内外面ナデである。本類は甑の可能性もある。尚、Ａ類の口縁部形態は類例を知らない。

〔壺〕　中型とミニチュアがある。

中型壺：平底で、体部は算盤玉状、口頸部は直線的に外傾する。器面調整は外面ヘラミガキである。この壺は前期の丸底壺の系譜に連なるものかもしれないが、平底であり、体部の形態などは、出現期須恵器瑳の影響を受けている可能性もある。

ミニチュア壺：ヘラケズリによる平坦でない平底で、体部中央に最大径をもち、やや受け口状の口縁部のもの。器面調整は、体部外面ナデ・ヘラケズリ、内面ナデである。口縁部形態は布留系小型壺に似る。

〔甕〕 大・中・小がある。

大型甕：７種類ある。底部のわかるものは、いずれも平底であるが、底面がヘラケズリされており、平坦ではない。ヘラケズリのため、前期や後期の甕に比べて、体部下端が横に突出していない。このような底部形態は、中期のある段階の一時的特徴の可能性があり、あるいは、丸底を基調とする布留系甕や須恵器甕の影響を受けたものかもしれない。A～C類は形態的に壺とすべきものかもしれないが、下半に火熱を受けたものもあり甕とした。

A類は、体部上半に最大径をもつ倒卵形のものである。１点のみである。本例は、本群の甕類の色調が赤色系を基調としているのに対して、黒ずんでおり、また、白色針状物質も含んでいない。器面調整は、口縁部内外面横ナデ、体部外面の肩部横方面のナデ・中央部ナデ・下半ヘラケズリ、体部内面全面ヘラケズリ、底部内面ナデ、底部外面ヘラケズリである。口縁部と肩部の接合部分の内面には指頭痕が顕著である。この土器の特徴は内面のヘラケズリにあるため、若干、これについて触れておく。本類以外にも、本群の甕・鉢・甑には内面ヘラケズリのものがあり、破片にも、本群のものだけに認められる。在地の甕は、前期から基本的には内面ヘラケズリをしない器壁の厚いものである。本群の内面ヘラケズリの甕も器壁の薄いものではなく、ヘラナデが強く施された結果、砂粒の移動が認められるものかもしれない。しかし、器壁を薄くする技法としてのヘラケズリではないものの、一定量の存在は、内面ヘラケズリされた甕を表面的に模倣したものの可能性も考えられる。典型的布留式甕とは底部の形態が異なるものの、口縁部・体部の形態や厚さは、米田敏幸氏による布留式期Ⅳ～Ⅴ（米田：1991）の布留系甕に類似している。肩部外面の横方向のナデも、古相の布留系甕に特徴的な肩部の横方向の刷毛目の模倣の可能性があり、指頭痕が顕著に残る点も注意したい。米田氏の布留式期Ⅴは、TK216～TK208 型式期前後であり、それ以前の布留式期Ⅳを含めても、中期である本群の年代と矛盾はしない。尚、ヘラケズリに関して、該期の鉢・甕・甑の体部外面にヘラケズリが多いことは、須恵器の影響によるものかもしれない。

B類は、体部下半に最大径をもつ茄子形のものである。器面調整は、口縁部内外面横ナデ、体部上半外面ナデ後ヘラミガキ・下半ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ・ナデである。本類は、丹羽氏の塩釜式第Ⅲ段階以来の系譜に連なるものと考えられるが、布留系甕にも、形態的に類似するものがある。尚、SI 8 住居跡出土のB類甕の口縁部の横ナデは、横ナデの痕跡が途中で切れることなく全周しており、回転台を速く回転させて施されたものと考えられる。

C類は、体部中央に最大径をもつ紡錘形状のものである。器面調整は外面が口縁部横ナデ・

体部ヘラケズリ後ヘラミガキかナデ、内面口縁部横ナデ・体部ヘラナデ・一部ヘラケズリである。本類の中には、内外面赤色塗彩されたものがある(SI 9住居跡出土)。本類は丹羽氏の塩釜式第Ⅲ段階以降の系譜に連なるものであろう。

D類は中型鉢CⅠ類の大形のもので、口径と体部最大径がほぼ等しく、高さのないものである。口縁部の形態は、杯BⅠ類に似て外反している。器面調整は、外面口縁部横ナデ・体部上半ナデ・下半ヘラケズリ、内面口縁部横ナデ・体部ヘラナデである。本類は、杯BⅠ類・中型鉢CⅠ類と同様に、朝鮮半島系土器の影響下に出現した可能性のある新しい器種である。

E類は、撫で肩・長胴で、最大径を体部中央にもつものである。口縁部はくの字に外反している。この内、口縁端部に平坦面をもち、四角いものをEⅡ類とする。器面調整は、外面が口縁部横ナデ・体部は刷毛目・ナデ、内面が口縁部横ナデ・体部ヘラナデである。本類も新しい器種である。底部形態や器面調整は異なるものの、畿内で韓式系長胴甕（米田：1991）とされているものの器形に類似している。尚、EⅡ類の口縁部はあたかも、在地の平安時代の「ロクロ」使用の甕のようであり、大型甕B類や中型鉢B類と同様に、回転台を速く回して、横ナデを施した結果であろう。回転ヘラケズリ風の杯Aもあり、これらは、須恵器の製作技法の影響を受けているものであろう。

中型甕：5種類ある。A類は体部球形の壺形のもの、B類は細身紡錘形状の壺形のもの、C類は大型甕D類の小形、D類は大型甕EⅠ類の小形（DⅠ類）と大型甕EⅡ類の小形（DⅡ類）である。

A類の口縁部は外傾・直立気味である。器面調整は、口縁部内外面横ナデ、体部外面ナデ・刷毛目、体部内面ヘラナデである。前期に連なる器種であろう。

B類は器面調整が、口縁部内外面横ナデ、体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、体部内面ヘラナデ・ヘラミガキ、底部外面ヘラケズリである。丹羽氏の塩釜式第Ⅲ段階以降の系譜に連なるものである。

C類は器面調整が、口縁部内外面横ナデ、体部外面ナデ、体部内面ヘラナデである。大型甕D類と同じく、新しい器種である。

D類は器面調整が、口縁部内外面横ナデ、体部外面ナデ後ヘラミガキ、体部内面ヘラナデである。大型甕E類と同じく、新しい器種である。

E類は、口縁部～体部上半の破片であるが、口縁部と体部の境に変化がなく、ゆるやかに開く口縁部のものである。甑の可能性もあるが、本群段階以降に盛行する在地型長胴甕の初現とみることもできようか。朝鮮半島系土器や出現期須恵器の系譜の新しい器種である。

小型甕：体部球形・壺形の中型甕A類の小形である。1点のみ出土している。

〔甑〕 いずれも比較的大型のものである。頸部がやや窄まって屈曲し、口縁部が小さく外反し

て、口径と体部最大径がほぼ等しいもの（A類）と、口縁部が大きく開き、最大径が口縁部にあるもの（B類）の2種類がある。A類の器面調整は、口縁部内外面横ナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ・ヘラナデ・ヘラケズリである。A類の口縁部は、中型鉢B・C類に類似しており、また、牛角状・棒状の把手や多孔式の底部ではないものの、畿内の韓式系土器の甑（米田：1991）の形態に近いものである。B類は大・小がある。大型のBⅠ類は、器面調整が、口縁部内外面横ナデ、体部外面刷毛目・ナデ、内面ヘラミガキ・ヘラケズリである。小型のBⅡ類は、口縁部形態・器面調整がA類類似のものである。A・B類は、器高で観ると、A類は長胴、B類は短胴であり、この2種は朝鮮半島系土器・出現期須恵器にすでに認められる形態である。これらA・B類の甑は無底式であるが、分類しなかったものには、小型の単孔式のもの（SI 1住居跡出土）もある。

〔須恵器〕 SI 9住居跡出土の甕か甑の破片と、SI11住居跡出土の杯蓋の破片がある。前者は図示していないが、外面ヘラケズリ、内面ロクロナデで、胎土に白色針状物質を含んでいる。色調は灰オリーブ色で、本遺跡周辺窯産のものであろう。後者は、天井部が偏平なもので、天井部に回転ヘラケズリが施されている。胎土に白色粒子を多く含むが、白色針状物質は観察されない。色調はオリーブ黒である。

〈出土状況〉

図示資料の中で、分類可能なものだけの各器種、各類の出土状況は以下の通りである（下線は堆積土、括弧内は点数）。

SI 1住居跡―杯BⅡ(7)・CⅠ(1)・FⅡ(2)、中型鉢D(1)、大型甕C(1)、中型甕A(1)、中型甕E(1)、小型甕(1)、甑A(1)・単孔式(1)

SI 2住居跡―杯A(1)・BⅡ(2)・CⅡ(1)・DⅠ(1)・DⅡ(2)、FⅠ(1)、小型鉢BⅠ(1)、中型鉢D(1)、中型甕C(1)、甑A(1)

SI 3住居跡―杯CⅠ(1)、小型鉢A(1)、大型鉢A(1)、中型壺(1)、

SI 4住居跡―杯A(1)・BⅠ(1)・BⅡ(2)・BⅢ(2)・CⅡ(3)・E(1)・G(1)、大型鉢B(1)、大型甕C(1)・EⅠ(1)、中型甕A(2)、甑BⅠ(1)

SI 5住居跡―ミニチュア壺(1)、大型甕C(2)

SI 6住居跡―杯A(2)・CⅠ(1)、大型甕A(1)、中型甕DⅡ(1)、甑BⅡ(1)

SI 8住居跡―杯CⅠ(2)・G(1)、小型鉢BⅡ(1)、中型鉢A(1)・CⅠ(2)・CⅡ(2)、大型甕B(1)・EⅡ(1)、中型甕DⅠ(1)・DⅡ(1)

SI 9住居跡―杯A(2)・BⅠ(3)・CⅠ(1)・DⅡ(1)、大型甕C(1)・D(1)、中型鉢B(1)、甑A(1)、須恵器甕？破片(1)

SI11住居跡―中型甕B(1)、須恵器杯蓋破片(1)

前述したように堆積土出土が多く、時間幅のある資料であるが、杯各類の出土状況を基に観察すると、各住居跡出土土器は大きく２群にまとめられる。杯Ｂ類を主体とし、須恵器模倣の杯ＦII・Ｇ類を含む群とそれ以外の杯類を主体とし、須恵器模倣のＦＩ類を含む群である。これまでの該期の研究成果によれば、後者が古相であり、前者が新相である。そこで、後者を第IIＡ群土器、前者を第IIＢ群土器として、再整理する。

〔第IIＡ群土器〕

ＳＩ２・３・５・６住居跡出土の土器群である。図示遺物の多いSI ２・６住居跡出土資料を観ると、杯Ａ・Ｃ・Ｄ・ＦＩ類と若干の杯ＢII類、小型鉢ＢＩ類、中型鉢Ｄ類、大型甕Ａ類、中型甕Ｃ・ＤII類、甑Ａ・ＢII類から成る。杯はバラエティーがあり、大型のものを含んでいない。SI ６住居跡出土の台付甕はこの段階に存在していても良いと考えるが、刷毛目調整でもあり、第Ｉ群土器段階のものと捉えた。これに対して、SI ３住居跡出土資料は、やや上げ底・小型で外面ヘラミガキの特徴をもつ杯ＣＩ類の外、前期の小型丸底鉢の系譜に連なる平底で小型粗製の鉢Ａと中型壺と大型鉢Ａから成っている。出土資料が少なく、欠落している器種もあると思われるが、杯ＣＩ類の特徴と小型丸底系鉢の存在から観て、SI ２・６住居跡出土資料よりは前出的である。SI ５住居跡資料も大型甕Ｃ類とミニチュア壺しかないが、前期的形態の甕もあり、SI ３住居跡資料に近い一群と考えられる。このように観てくると、第IIＡ群土器は第IIＡ（古）群土器―SI ３・５住居跡資料と第IIＡ（新）群土器―SI ２・６住居跡資料に分けられる可能性がある。尚、色調で観ると、第IIＡ（新）群土器から赤色系のものが多くなる。

〔第IIＢ群土器〕

SI １・４・８・９・11住居跡出土の土器群である。焼失家屋であるSI ４住居跡に代表される群である。杯はＡ～Ｇ類の全ての類があるが、Ｂ類を主体とし、須恵器模倣のＦII・Ｇ類を含んでいる。法量的には大・中・小がある。その他の器種には、小型鉢ＢII類、中型鉢Ａ～Ｄ類、大型鉢Ｂ類、大型甕Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ類、中型甕Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ類、小型甕、甑Ａ・ＢＩ類がある。SI ９・11住居跡からは須恵器が出土している。本群には、分類した大部分の器種が含まれており、一定の年代幅が予想され、更に細分される可能性がある。本群の出土状況から、この点についての厳密な細分はできないものの、平底の杯ＢII・ＣＩ類を含み、古相の須恵器杯蓋模倣と推定される杯ＦII類をもつSI １住居跡資料と、丸底杯のＢ類を主体とし、新相の須恵器杯蓋模倣と推定される杯Ｇ類をもつSI ４・８住居跡資料や、須恵器をもつSI ９・11住居跡資料は、分けられる可能性がある。このことから、実証性には欠けるものであるが、前者を第IIＢ（古）群土器、後者を第IIＢ（新）群土器としておきたい。尚、杯が平底から丸底へと次第に変化することは、朝鮮半島系土器の椀・鉢が平底であることから、須恵器杯身の形態が出現期に平底のものがあり、TK216 型式期以降丸底化することに対応している可能性がある。

〈編年的位置〉

宮城県内に於ける古墳時代中期の土器群の変遷案を整理する。丹羽　茂氏による3段階の変遷案（丹羽：1983）を基に、加藤道男氏による2段階変遷案（加藤：1989）、白鳥良一氏・古川一明氏による3段階変遷案（白鳥・古川：1991）を踏まえ、柳沼賢治氏による福島県中通り地方での該期土器群についての3段階変遷案（柳沼：1989）を参考にすると、県内の中期土器群の変遷の大略は以下のようになる。

第1段階＝仙台市南小泉遺跡第12次調査住居跡（佐藤他：1985）段階→第2段階＝多賀城市山王遺跡第3号遺構（高倉：1981）段階→第3段階＝仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第1号住居跡（白鳥・加藤他：1974）段階→第4段階＝大河原町台ノ山遺跡第5号住居跡（阿部・千葉：1980）段階→第5段階＝仙台市富沢埴輪窯跡祭祀土器群（渡辺他：1974）段階の5段階になる。

第2段階とした山王遺跡第3号遺構の資料について、県内では南小泉式の最古段階として認識されている土器群である。しかし、県外での知見を踏まえると、最古段階には位置しない可能性がある。その理由は、①杯が多く、杯は形態・器高にバラエティーがあり、大・中の法量のものを含んでいること、②小型の壺が少ないこと、③高杯脚部の形態に新相のものが多いこと、④大型甕に体部球形のものを含まないこと。更に1点のみではあるが、高杯に口縁部が内湾気味に立ち上がる杯部をもつ器種のあることが挙げられる。この高杯は、県内に例のないものである。この形態の高杯は、米田氏による畿内の後期型高杯[註9]（米田：1991）に類似するものであり、布留式期Ⅴに出現し、以後、盛行するものである。これらのことから、山王遺跡第3遺構の土器群は、第3段階に近い時期のものと考えられる。これは、村田町新峯崎遺跡の一括の祭祀土器群の様相（阿部他：1991）からもうかがえる。丹羽氏が指摘するように、山王遺跡第3号遺構土器群の全体的様相は、第3段階の土器群よりは先行する土器様相であることを踏まえると、第2段階の土器群の盛行した時期は、第3段階に先行するものの、年代的に近接した時期と捉えられる。また、第1段階の土器群も資料不足である。この資料が南小泉式の最古段階の可能性はあるものの、その位置づけは微妙であり、今後の資料の増加により、補強あるいは修正される土器群である。尚、各段階と須恵器との関係については、共伴例はないものの、これまでの研究成果から推定すると、第1段階は須恵器出現期～TK73型式期、第2段階はTK73～TK216型式期、第3・4段階はTK216～TK208型式期、5段階はTK208～TK23型式期となろうか。[註10]

以上の県内の中期土器群の各段階と第Ⅱ群土器の各群を対比し、本群の編年的位置を考えてみる。第ⅡA群土器は第1～3段階に対応するものであろう。第ⅡA（古）群土器は、古相の特徴である小型・上げ底・ヘラミガキの杯CⅠ類と前期的土器群との構成から、第1～2段階に位置付けられる。第ⅡA(新)群土器段階のSI 2住居跡出土の須恵器杯蓋模倣の杯FⅠ類は、

小型・浅めで、口縁部の外傾するものである。このような形態的特徴をもつ須恵器杯蓋は、TK73～TK216型式のものにみられることから、本群は、第2～3段階に位置付けられる。本群に甑はあるが、住居壁造り付けのカマドはない[註11]。第ⅡB群土器は、第3～5段階に相当しよう。まず、第ⅡB（新）群土器を代表する焼失家屋のSI 4住居跡の資料を観ると、本遺跡から直線距離にして僅か600mにある富沢埴輪窯跡祭祀土器群の杯組織と同様（本群の丸底杯BⅠ・BⅡ・BⅢ・G類の存在）であり、第5段階に位置付けられる。杯G類の形態は、TK208～TK23型式の須恵器杯蓋の特徴であり、第5段階であることと矛盾しない。SI 8住居跡資料も、杯G類の存在から第5段階と考えられる。また、本住居跡の中・大型甕の口縁部のつくりは、須恵器の製作技法の影響によるものである。これは形態的模倣だけではなく、近くにある金山窯跡の工人の手による可能性を含んでいる資料とも考えられる[註12]。第ⅡB（古）群土器としたSI 1住居跡の資料は全て堆積土出土であるが、まとまりがある。平底の杯BⅡ・CⅠ類を含み、これに杯FⅡ類をもっている。杯FⅡ類は、7～8世紀代の在地の杯に類似するもので、後出的器形をしている。しかし、杯G類よりは浅めで、口縁部が外傾している特徴はTK216～TK208型式の須恵器杯蓋の形態に類似するものである。このことから、SI 1住居跡資料は、第3～4段階に位置付けられることになろう。SI 9住居跡は周辺窯産と推定される須恵器破片をもっていることから、金山窯産のものと考え、第ⅡB（新）群土器段階とした。しかし、土師器杯の組成は古相である。須恵器が無ければ、第ⅡA（新）～第ⅡB（古）群土器＝第2～4段階に位置付けられる土器群である。金山窯周辺での須恵器の生産開始が遡れば、土師器杯組成との編年的矛盾はない[註13]。SI11住居跡は、偏平な天井部の須恵器杯蓋がある。これはTK216～TK23型式のものに類似しており、第3～5段階に相当しよう。

以上のように、本群の各群についての編年的位置を想定したが、前述しているように、共伴関係の厳密でない資料であり、本群の各住居跡出土資料を各段階に、対応させたものである。

〈本群の整理〉

〔杯の成立に関連して〕 本群の杯が朝鮮半島系土器や出現期須恵器の杯類や他器種の本体部分の形態に似ていることを紹介した。現状では、全国的にも、該期の杯類の成立は前期からの伝統的鉢類を中心とした器種からの内的な形態変化に求められている。しかし、前期の鉢類と比較して、その形態的変異は大きいものと考える。全ての杯類とは考えないが、該期の杯類には朝鮮半島系土器・出現期須恵器の形態の影響を受けて出現した可能性のある器種が含まれているのではないかと推測する。この影響としたものには、前期の器種に朝鮮半島系土器・出現期須恵器が形態的影響を与えた可能性のあるものと、朝鮮半島系土器・出現期須恵器から独自に出現した可能性があるものの二者がありえると考える。畿内・西国の該期土器群を実見したことのない現状に於いては、慎重に対応しなければならないことではあるが、以下、予察として、

その可能性を模索してみたい。

①出現（4世紀後半）：県内では、朝鮮半島系土器の発見例はない。[註14] 朝鮮半島との位置を考えれば、類似杯の初源は九州地方に求められる可能性がある。注目したい資料は、柳田康雄氏による北部九州地域の土師器Ⅲａ式にある（柳田：1991）。この段階には、陶質土器模倣の脚付短頸壺が存在しており、新しい器種の鉢が出現している。この鉢は、本群の杯Ａ・Ｂ類似のものである。畿内では、大和地域に、本群の杯Ａ類似鉢がある。寺沢　薫氏の布留３式段階にあり、同時期には陶質土器模倣の壺が出現している（寺沢：1986）。興味深いことに、県内に於いても丹羽氏の塩釜式第Ⅲ段階（丹羽：1985）に少量ながら、本群の杯Ｂ類似の鉢が出現することである。本遺跡に近い、六反田遺跡４号住居跡からも杯ＢⅠ・ＢⅡ類似の杯が発見されている（佐藤：1987）。このことは、九州・畿内と在地に於いて、ほぼ同時期に出現した同形態の器種の存在が認められる訳であり、同じ祖型から出現した可能性が推定される。[註15] その祖型は北部九州地方や大和地域での陶質土器模倣の土器の存在が示唆的である。尚、これらの類似杯の在地での出現については、ほぼ同時期に出現する中実棒状脚の高杯の存在から、大和地域との関連に注意したい（岩崎：1989）。

②導入（５世紀前半）：畿内では、本群杯に類似する杯は、大和地域で認められる。寺沢氏の布留４式（新）段階には本群の杯Ａ・ＢⅠ類似の鉢が確認される（寺沢：1986）。杯Ａ類似鉢は布留３式からの系譜の器種、杯ＢⅠ類似鉢は新出の器種（杯）と捉えられている。この段階では、朝鮮半島系土器だけではなく、出現期須恵器との関係も考慮しなければならない。土師器と出現期須恵器との関係で注目すべき資料は、堺市四ツ池遺跡出土の須恵器杯である。この杯については、小型丸底鉢の形態模倣の可能性と、土師器工人の須恵器製作への参画が指摘されている（樋口：1978）。この杯は金海府院洞遺跡の軟質土器鉢と同形態のものであり、本群の杯ＢⅡ類の平底のものに類似したものである。小型丸底鉢の形態模倣とされているが、その形態的変異は大きく、むしろ、軟質土器模倣（還元焔焼成）の須恵器と考えた方が良いのではないだろうか。このように観ると、本群の杯ＢⅡ類の平底のものも、軟質土器鉢や出現期須恵器から成立した器種と推定できるかもしれない。

この段階で興味深いのは、この四ツ池遺跡も含まれる河内平野地域に於いて朝鮮半島系の小型平底鉢（椀）はあるが、土師器杯はあまり認められないことである。大庭寺遺跡や陶邑など、朝鮮半島から渡来してきた人々の諸活動の顕著な地域であり、朝鮮半島系土器の出土例も多いが、土師器杯はほとんどない。在地に於いては、第２段階に各種杯が出現している。畿内での杯の偏在的様相を考えると、在地での類似杯出現の背景は大和地域との関連が想定される。

③普及（５世紀後半）：在地では、朝鮮半島系土器・出現期須恵器の影響を受けたと推定される杯に、在地産須恵器の形態模倣の杯が加わる。また、本群の杯ＢⅡ類に類似する杯が、ＴＫ208

型式までには河内平野地域に出現する(坪之内：1989)。在地での杯ＢⅡ類の増加は、第３段階以降であり、この段階以降の在地と河内平野地域との関連にも注目したい。

尚、畿内と在地との地理的位置・歴史的経緯を考慮すれば、基本的には畿内との関係ではあるものの、在地に該期の大型前方後円墳が存在していない点を踏まえると、そこには、毛野地域や北武蔵地域、あるいは東京湾東岸地域などとの関連も介在させる必要がある。

以上のように、杯の出現と展開を想定してみたが、あくまでもラフなスケッチである。今後、朝鮮半島系土器と出現期須恵器の年代観を踏まえた、各器形毎の出現過程についての個別的・実証的検討が必要である。

〔本群の構成〕 分類の中で、本群の土器への諸系譜の影響を考えてみた。ただし、その諸系譜は折衷的でる。あえて、分けるとすれば、本群には、Ⅰ･在地の前期の土器に系譜のある土器、Ⅱ・畿内の布留系甕の影響を受けた土器、Ⅲ・朝鮮半島系土器・出現期須恵器に系譜のある土器、Ⅳ・Ⅰを母体とする折衷的土器、Ⅴ・在地産須恵器に系譜のある土器となろう。器種でみると、杯は可能性を想定したⅢ系とⅤ系。甑はⅢ系。壺はⅣ系。鉢はⅠ・Ⅲ・Ⅳ系。甕はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ系である。これらの諸系譜を本群の段階毎に整理したのが、第１表である。

第１表　諸系譜各器種の段階毎出土状況と変遷

	第ⅡＡ（古）群土器	第ⅡＡ（新）群土器	第ⅡＢ（古）群土器	第ⅡＢ（新）群土器
Ⅰ　系	小型鉢Ａ、大型甕Ｃ 大型鉢Ａ		大型甕Ｃ、中型甕Ａ 小型甕	大型甕Ｃ・大型鉢Ｂ 中型甕Ａ・Ｂ
Ⅱ　系		大型甕Ａ		
Ⅲ　系	杯ＣⅠ	杯Ａ・Ｃ・Ｄ主体(ＢⅡ出現) 小型鉢ＢⅠ、中型甕Ｃ・Ｄ、甑Ａ・ＢⅡ	杯Ｂ主体（ＢⅠ・ＢⅡ） 大型甕Ｄ、中型甕Ｅ、中型鉢Ｂ、甑Ａ	杯Ｂ主体（ＢⅡ・ＢⅢ） 小型鉢ＢⅡ、中型鉢Ｃ、大型甕Ｅ、中型甕Ｄ、甑ＢⅠ
Ⅳ　系	中型壺、ミニチュア壺	中型鉢Ｄ	中型鉢Ｄ	中型鉢Ａ、大型甕Ｂ
Ⅴ　系		杯ＦⅠ	杯ＦⅡ	杯Ｇ

第ⅡＡ（古）群土器段階は、相対的に前期的である。食膳具はⅢ系の杯ＣⅠ類があるが小型である。煮炊具は前代を踏襲しており、Ⅰ系の小型鉢Ａ、Ⅳ系の中型壺も前代的である。第ⅡＡ（新）群土器段階は、Ⅰ系は不明であるが、食膳・貯蔵・煮炊具に於いて、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ系の出現と増加が認められる。ただし、杯は大型がなく、甕は小がない。朝鮮三国系(畿内的)食事用具の体系的導入段階と捉えられる。第ⅡＢ（古）群土器段階は、前段階の普及期と捉えられる。カマドの普及に伴って、貯蔵・煮炊具に大・中・小が加わり、新器種が増加する。食膳具の杯は大が加わる。Ｂ類（ＢⅠ・ＢⅡ類）が主体となり、杯の選択的峻別がおこなわれ、

形態的画一化が始まる。河内平野地域との関係に注目したい。畿内的食事用具の全器種が出揃う。第ⅡB（新）群土器段階は、貯蔵・煮炊具は前段階を踏襲しているが、器種が増加する。食膳具では、杯は河内平野地域類似のBⅡ類を主体とし、在地産須恵器模倣杯G類が出現する。杯G類は以後、須恵器杯蓋の形態に対応しながら、在地に於いて形態変化していく。また、Ⅲ系の大型甑BⅠ類の器面調整は後出的であり、更に、口縁部の外反が強くなって、口縁部が特徴的に発達してくる杯BⅢ類や中型鉢A類の出現も後出的様相である。この段階で、畿内的食事用具は定着し、在地化が始まるものと推定される。

以上が本群の概略的変遷である。県内の該期土器群との比較や整合性については詳細に検討していない。あくまでも、本遺跡での本群についての観察による素描的理解であり、土器の観察・分析視点の提示と考えている。[註16]

〈土坑出土土器〉

SK17、SK18、SK26、SK29、SK32からは古墳時代の土師器が出土している。SK17の甕は第ⅡB群土器段階である。SK18の甕2点は第Ⅰ群～第ⅡA群土器段階である。SK26の甕底部は、第Ⅱ群土器段階である。SK29の甑は第Ⅱ群土器段階である。SK32出土土器については、詳述する。図示遺物は、いずれも甕であり、この内、完形品の甕形土器について検討する。形態的には、北関東地方の弥生時代後期の広口長頸壺に類似するもので、外面は口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ、内面ヘラナデである。県内での類例は、本遺跡に近い仙台市下ノ内浦遺跡1号河川跡出土資料（渡部：1988）1例のみである。全体の器形と口縁部形態および器面調整から、最も類似するものは茨城県内で発見されている十王台式土器の無文化したものである（佐藤：1988）。北関東地方では、十王台式土器や樽式土器の無文化したものと五領式土器の共伴例が知られ、検討が進んでいる（佐藤：1988、友廣：1991、村田：1991）。市内の2例は共伴資料は不明であるが、今後共、注意しなければならない土器である。注目しておきたいこととして、市内でこの2例はいずれも、北関東地方の弥生時代後期の土器に系譜のある無文土器であり、在地の系譜の弥生土器の無文化したものではないことである。[註17]

註1：竪穴住居跡としたが、中には、炉やカマドのない竪穴建物とすべきものや、柱穴や周溝のない竪穴遺構とすべきものが含まれている。このことは、本来的に、住居として使用されたものではない遺構もあると理解している。

註2：該期の土器群の色調については、佐藤　洋氏による報告がある（佐藤：1990）。氏は赤色系の土器を赤色A（赤色顔料の塗布されたもの）と赤色B（胎土自身が赤いもの）とに分けて、各器種毎に観察している。また、内面の黒色処理についても言及している。本報告に於いては、この点についての詳細な観察は行わなかったが、重要な観察視点だと考えられ、今後、検討の必要がある。

註3：該期の杯類が、東国や一部畿内・西国にも分布していることについては、既に、原　明芳氏が指摘している（原：1989「長野県における「黒色土器」の出現とその背景」『東国土器研究』第2号）。そして、「その中心は、畿内に求められるのではないか」と考えている。

註４：韓式土器・韓式系土器という呼称があり、広く使用されているが、ここでは使用しない。それは、使用者によって概念規定がまちまちであることによる。本報告に於いては、朝鮮半島系土器とし、韓式土器と韓式系土器も含むものとして使用する。

註５：本報告では、仙台市大蓮寺窯跡（TK216 型式期）成立以前のものを、出現期須恵器と呼ぶことにする。よって、定型化以前の初期須恵器全般を包括したものではない。

註６：該期の土器群の祖型について考えるようになった契機は、1989年11月に開催された福島県鹿島町でのシンポジウム「福島県に於ける古代土器の諸問題」での関東地方北部の土器についての福田健司氏のコメントによるところが大きい。

註７：ＢⅡ類と同形態の南河内の杯について、坪之内　徹氏は、渡来した可能性のある器種とし、TK208 型式期には出現しているものとしている（坪之内：1989「韓式系土器と７世紀の土師器」『韓式系土器研究』Ⅱ）。

註８：金海府院洞遺跡出土の本群の杯に類似する軟質土器については、亀田修一氏に御教示頂いた。更に、もし、土師器に朝鮮半島系土器の影響があるとすれば、それは陶質土器よりも、日常生活用具である軟質土器からの影響の方が強いだろうとの御指摘も受けた。

註９：米田氏の後期型高杯について、坪之内　徹氏は、これを渡来された可能性の強い器種と捉えている（坪之内：1989）。また、寺沢　薫氏は、その出現を布留４式（新）段階としている（寺沢：1986）。

註10：須恵器の出現期の実年代については、４世紀末～５世紀初頭とする白石太一郎氏の年代観（白石：1985）に従いたいが、全国的な土師器編年大綱や大庭寺遺跡に関連する陶質土器の年代観を踏まえれば、現状ではそれよりやや下る時期頃とすべきかもしれない。また、TK47 型式は５世紀末～６世紀初頭と理解している。

註11：県内に於けるカマドの出現時期について、丹羽　茂氏は南小泉式Ａ群土器段階（山王遺跡第３号遺構）と捉えている（丹羽：1983）。本報告に於いては、丹羽氏のＡ群土器を第２段階の土器群と理解し、最古段階のものではない可能性を指摘した。県内のカマドの出現期は、例外的に先行するものがあるかもしれないが、第２段階頃であり、その普及は第３段階以降と考えられる。本遺跡の第ⅡＡ（新）群土器段階＝第２～第３段階である SI ２住居跡からは、住居内部にある焼面の左右に粘土による高まりが認められている。これは、所謂「類カマド」状の遺構と捉えられる。上部構造や付属施設のあり方は不明であるが、壁から離れて住居内部に造られたカマドの可能性を考えている。類例は、県内では、宮前遺跡第３号住居跡（丹羽：1983）にあり、関東では埼玉県本庄市の古川端遺跡22号住居跡（小久保　徹・柿沼幹夫：1979）にある。第ⅡＡ（新）群土器には定型化した甑が存在している。県内外に於いても、住居壁への造り付けカマドの出現以前に、定型化した甑の存在していることが確認されている。これを、甑の形態だけを模倣した段階のものと捉えることもできようが、やはり、定型化した甑の存在は、甑としての本来的機能をもって使用されたためと考えたい。

註12：SI ４・８住居跡からは、焼けたスサ入り粘土塊が出土している。出土状況は判然としないが、焼けていることから造り付けカマドに使用された可能性がある。また、SI ４住居跡は焼失家屋であり壁土の可能性もある。スサ入り粘土は通常、窯体構築の際に使用されるものである。SI ４・８住居跡と同時期であり、近くにある金山窯跡や富沢埴輪窯との関連に注目したい。また、SI ６・９住居跡は造り付けカマドのないものである。特に、SI ９住居跡は周辺窯と考えられる須恵器をもっているが、カマドはない。SI ９は住居以外の施設の可能性がある。

註13：本遺跡の横穴墓群の上方の斜面表土や横穴墓堆積土からは、須恵器甕・短頸壺・甕の破片が出土している。これらには、TK216～TK23 型式のものが含まれている。また、本遺跡に近い沖積地内微高地上にある富沢遺跡内の泉崎浦遺跡からは、遺物包含層より南小泉式土器と共に、須恵器杯身・甑把手・甕口縁部が出土している（主浜：1988）。杯身は「在地産」とされているが、小型であることと、全体的器形、口縁部形

態から観ると、TK216 型式のものに類似している。甑の把手は「朝鮮系」とされているが、この把手は牛角状で、上面中央部に溝を持つものである。このような特徴の把手は、TK85 窯と TK216 型式のものにみられる。甕口縁部は、大きく外反して開くもので、口縁端部は丸くおさまっている。口縁部直下に断面三角形の突線が巡っている。この特徴と最も類似するものは TK73 窯に認められる。これらの須恵器が、この周辺で生産されたものであり、在地での形態的変容は大きくないものと仮定し、型式比定が妥当であれば、金山窯の生産開始が遡るか、あるいは、金山窯に先行する周辺別窯が存在する可能性がある。泉崎浦遺跡に近い下ノ内遺跡 SI 4 住居跡からは、第 2 段階の土師器と共に TK73 型式期の羽釜形の杯身・甕が出土しており（篠原・藤沢他：1990）、注目される。この杯は受部直下に波状文をもつ、「尾張型」のもの（岩崎：1987）である。「尾張型」であることについては、定森秀夫氏の御教示による。

註14：実見していないが、可能性のあるものとして、山王遺跡出土の杯身があり、これについては、石本　弘氏が江田船山古墳出土例に類似していることを指摘している（石本：1989）。また、朝鮮半島系土器ではないが、仙台市泉崎浦遺跡ＳＩ１住居跡から出土した土師器蓋は伽耶系陶質土器や出現期須恵器の蓋の形態に類似している（吉岡・篠原：1989）。

註15：塩釜式の終末は 4 世紀末～ 5 世紀初めと理解している。丹羽氏の塩釜式第Ⅲ段階の鉢の祖型を朝鮮半島系土器に求めてみたが、丹羽氏の塩釜式第Ⅰ段階（布留 0 式新段階併行）にも本群杯と類似する鉢が存在する。これも、この段階の全国的傾向であり、北部九州地方では、やや先行して類似鉢が出現している。その祖型に注目したい。

註16：本文脱稿後、福田健司氏より、関東地方の和泉式土器に関する坂野和信氏の論文（「和泉式後期土器の様相」『本庄市立歴史民俗資料館紀要第 2 号』1988、「和泉式土器の成立について」『土曜考古第16号』1991、「和泉式土器成立過程とその背景」『埼玉考古学論集―埼玉県埋蔵文化財調査事業団設立10周年論文集』1991）の提供を受けた。坂野氏の和泉式土器についての基本的視座は、本文の観察視点と共通するものであるが、坂野論文は、畿内・西国の土器群の実見に基づくものであり、詳細かつ実証的である。本文は、坂野論文を踏まえていない素描である。基本的には、本文の観察視点と共通するものではあるが、該期の杯については、坂野氏も朝鮮半島系土器・出現期須恵器の影響のものとはしていない。大和地域では、「韓式土器」模倣土器や「韓式系」土器の存在を指摘しているが、本群杯の類例については「大和型椀」としてる。

註17：SK32 に近い、SI12 住居跡からは無文の甕と連孤文の高杯が出土している。甕・高杯の器形は、十王台式土器に類似している。SK32 土器は、この住居跡に伴う遺物の可能性がある。この住居跡からは他に床面から、在地の踏瀬大山式系土器の破片が出土している。北関東系の土器と在地の土器は共伴資料と捉えたい。

2．遺　　構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡12軒、竪穴遺構 4 基、土坑41基、溝跡 1 条、不明遺構 1 基である。ここでは竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑について検討する。

(1)　竪穴住居跡

今回の調査で12軒の住居跡が検出された。そのうち SI12 住居跡が弥生時代、その他の11軒は古墳時代のものである。

弥生時代の住居跡

SI12 住居跡は西側へ張り出す丘陵の南西部、平坦面から斜面にかかる傾斜の変換点付近に位置している。平面形は楕円形で、床面中央に地床炉が付設されているが、周溝はない。柱穴は

3個確認されているが、炉から北寄りに位置しており、南半部にも存在し、4個であった可能性もある。この住居跡の年代は床面から後期の天王山式から踏瀬大山式に比定される土器が出土していることから、天王山式から踏瀬大山式期のもとであると考えられる。

宮城県内で同時期の住居跡は、栗原郡一迫町上ノ原A遺跡（佐藤・三塚・高橋：1978)、宮城郡利府町郷楽遺跡（進藤・庄子他：1990）で検出されている。各々1軒づつであり、本例が3軒目となる。これらを比較すると平面形、炉・柱穴および周溝に関して共通する部分は、上ノ原A遺跡、郷楽遺跡の住居跡で地床炉とされる、床面の焼面が複数であるという点のみであり、その他の部分では認め難い。その理由については資料が少なく明らかではない。今後の資料の蓄積によって検討されなければならない問題である。

古墳時代の竪穴住居跡

古墳時代の住居跡は11軒検出されており、西側に張り出す丘陵尾根頂部の平坦面から南～北西斜面にかけて分布している。その範囲は標高68～70mの範囲におさまっている。なお住居跡分布域の北側は傾斜の緩やかな斜面となっており、住居跡の分布が広がっている可能性がある。11軒の住居跡の所属年代は出土土器の検付により、第Ⅰ群土器～第Ⅱ群土器の年代である。それぞれの土器群段階毎に住居跡をまとめる。

第Ⅰ群土器段階

SI10・13住居跡の2軒である。いずれも丘陵頂部の平坦面に立地している。SI10は一辺が6.5mを超える大形のもので、SI13についても正確な規模は不明だが大形のものである。柱穴は4個検出されている。SI10では、周溝が住居跡を全周し、地床炉が検出された。また、北西コーナー部分に外延溝が付設されており、周溝と接続している。

第ⅡA群土器段階

SI 2・3・4・6住居跡の4軒である。丘陵頂部の平坦面からやや西側の斜面寄りに立地している。SI 2・6が一辺5.5mを越える大形のもので、SI 3・5は一辺5m以下の小形のものであり、いずれも正方形を基調とした平面形である。SI 2・3では4個の柱穴が検出されている。周溝はSI 2で全周するが、その他のものは半周あるいは一部に認められ、SI 3住居跡では床面レベルの高い部分に、SI 6住居跡では低い部分に認められる。SI 6を除く3軒から炉が検出された。いずれも住居跡中央よりやや西寄りの位置である。特にSI 2住居のものは、遺物の項でふれられているように亘理町宮前遺跡第3号住居跡に付設されているカマドに類似しており(丹羽：1983)、カマドの可能性も考えられるが、住居跡壁からの距離がやや離れている点や、盛り上げられた粘度の外側まで火熱を受けている点異なっており、上部構造も不明であり、断定できない。SI 2・5の壁際には貯蔵穴が検出されている。また、SI 3・6では外延溝が付設されている。SI 3の外延溝は、住居跡との接続部分がトンネル状に遺存していた。

第IIA群土器は、新・旧2段階に細分されており、SI 3・5は古い段階、SI 2・6が新しい段階のものである。これらの住居跡の構造上の違いは、新段階のSI 2にカマドに類した施設が認められ、カマドがこの時期に住居内に付設されはじめたことを示唆する資料として注目される。またSI 6は、柱穴、炉が検出されず、周溝も一部に認められるのみであるが外延溝が付設されており、遺物もまとまりをもって出土していることから本項で住居跡として扱ったが、居住のための施設でない可能性も考えられる。

第IIB群土器段階

SI 1・4・8・9・11住居跡の5軒である。丘陵頂部の平坦面から南側の斜面寄りに立地しているSI 4・9は一辺が5mを越える大形のもので、SI 1・8・11は一辺が5m以下の小形のものであり、平面形が明らかなSI 9は正方形である。この段階の住居跡にのみ貼床が認められる。床面の一部が地山となっており、貼床には幅0.7～2.2m、深さ5～30cmの掘り方が認められる。SI 4・8は掘り方が住居跡を全周し、SI 9では「コ」字状に三方に認められる。SI 4・8でのみ、4個の柱穴が検出され、その他の住居跡では検出されなかった。周溝は住居跡を全周するものはなく、SI 9では住居跡半周、SI 8・11で一部にのみ認められる。SI 9・11では床面レベルの高い部分に認められ、特にSI 9では、貯蔵穴から住居跡内を壁から離れて半周し、外延溝に接続している。SI 9で炉が検出され、SI 1・4・8でカマドが検出されている。カマドはいずれも北あるいは北東壁に付設されている。残存状況はSI 1では、袖部及び天井部の補強に用いられていた礫のみが残存し、SI 4では焼面のみが残存し、SI 8では粘土で構築された袖部とその補強に用いられていた礫が袖部の先端に残っていた。煙道部は全て住居跡の外に付設され、燃焼部と境には段が認められる。煙道底面は先端に向かって徐々に高くなっており、SI 1では先端に煙出しのピットがある。貯蔵穴はSI 4・8・9で検出されており、SI 9では周溝が接続している。また、SI 9は住居内を半周した周溝が南東コーナーで外延溝と接続している。

第IIB群土器は、新旧2段階に細分されており、SI 9・11が古い段階、SI 1・4・8が新しい段階のものである。住居跡の構造では大きな相異がみられ、古い段階のSI 9・11では炉が付設されているのに対し、新しい段階のSI 1・4・8はカマドが付設されている。この段階では住居内のカマドは普偏的なものとなっていると考えられる。また、古い段階のSI 9・11は柱穴が検出されず、特にSI11では規模も小さく、削平のためとも考えられるが炉も検出されていない。これらは遺物の出土状況やその他の施設から本項で住居跡として扱ったが、IIA群土器新段階のSI 6と同様居住のための施設ではない可能性がある。

外延溝について

竪穴住居跡に付設された施設の一つに、住居跡の壁から外側に延びる溝（外延溝）がある。

今回の調査では、SI 3・6・9・10住居跡の4軒に認められた。同様の施設をもつ竪穴住居跡の検出側は宮城県内に於ても増加しているが、塩釜式期のものは亘理町宮前遺跡45号住居跡(丹羽：1983)、河南町須江糖塚遺跡3号住居跡（高橋・阿部：1987）に、南小泉式期のものは前記宮前遺跡46・49号住居跡に類例が見られるのみである。それらは、周溝あるいはピットから延びる溝に接続しており、本遺跡の場合もSI 3を除いて周溝あるいは溝に接続している。機能的には、瀬峰町大境山遺跡（阿部・赤澤：1983）で検討されているように排水施設であると考えられる。本遺跡SI 3の場合は、周溝の無い床面のなかで最もレベルの低いコーナーに接続している。これは、住居跡床面のレベルの高い部分の壁面下にのみ周溝を設け、それ以外の部分は壁面下端を水が伝い、レベルの低いコーナー部分から外延溝を通して排水するという形が考えられる。

(2) 竪穴遺構

竪穴遺構は4基検出されている。年代が推定できるのは、SI14のみで、出土遺物から縄文時代早期末～前期初頭と考えられる。その他のものは遺構の年代が推定できる遺物が出土していない。平面形は楕円形あるいは隅丸の方形を基調としたもので、削平のため不明のものもある。規模は長軸2.5～3.4m、短軸2～2.6mでSI16を除いてほぼ同程度の規模である。底面に焼面を有するものがSI14・16の2基、ピットを有するものがSI18の1基であり、他には底面の施設は検出されていない。これらの性格が明らかになるような資料は見られず、性格は不明である。

(3) 土　坑

土坑は西区で38基・東区で3基の計41基検出された。調査区内に散在しており、住居跡の分布範囲より広い範囲に分布している。遺物の出土状況からSK22土坑は弥生時代天王山式期に、SK29土坑は古墳時代、SK36土坑は平安時代であると考えられる。これ以外の土坑ではSK32土坑がSI 6住居跡の外延溝を切っていることから住居跡より新しく、SK37土坑がSI13住居跡、SK39土坑がSI 5住居跡の床面で検出されていることからそれぞれの住居跡より古いことが判明しているのみである。今回の調査で検出された住居跡は、弥生時代のもの1軒、古墳時代のもの11軒であり、出土遺物には、中・近世のものが見られないことから、平安時代以前、特に古墳時代前後のものが多いと考えられる。

土坑の性格については、明らかにできる資料は認められないが、41基の土坑のうち、底面や壁面に焼面が認められるものが18基、焼面は認められないが炭化物が付着するものが6基ある。平面形は隅丸の長方形、楕円形のものが多い。堆積土は全て自然堆積の状況を示しているが、下部の堆積土中には多量の炭化物、焼土が混入している。この土坑は宮城県内の多くの遺跡で検出され、焼土遺構と呼称されているものと同様のものである。その性格については明確にさ

れておらず、本遺跡検出のものも性格を推定できる資料は見られなかった。その他の土坑についても同様である。

〔2〕 土手内窯跡と出土遺物

南東に伸びる丘陵の南斜面の東端部で、3基の地下式窖窯が発見された。丘陵斜面は、すでに削り取られており、前庭部や灰原はない。3基の窯の位置は、斜面の上位（標高35m）に1基（2号窯）、下位（標高32.5m）に2基（1・3号窯）がある。上位の2号窯は北東を向き、下位では1号窯は北、3号窯はやや北西を向くが、2基はほぼ並列している。3基に直接の切り合い関係はないが、1・2号窯は位置的に重複しており、新旧関係が認められる。

3基の窯跡からの出土遺物は、焼台に使用された礫・砂と須恵器甕類のみであり、杯・蓋などの小型製品はない。また、甕の大部分は焼台として使用されたものである。さらに、多くは体部破片であり、口縁部片は少ない。このような状況ではあるが、本窯は調査時から7世紀代の窯跡と推定された県内では稀な窯跡であり、その歴史的意味も大きい。以下では、甕に残された痕跡の観察を中心として、推論してみたい。

1．操業順位の想定

(1) 加工焼台の観察

2・3号窯からは、焼成前の甕の体部を方形や台形に切り、切り取ったものの内面（凹面）の縁辺を削って加工した焼台が出土している(第89～93、97～98図)。これを、加工焼台とする。加工焼台は、焼台としての使用方法を考慮すると、一度焼いてから使用されたものと推定される。このような焼台は、他に、福島県福島市宮沢窯跡（伊東・伊藤・内藤：1965）の例を知るのみである。[註1] 類例が少ないことから、製品としては焼成できない失敗作の活用とみられる。

加工焼台は、合計41点出土しているが(第2表)、これは本来の形の壊れた破片の点数である。破片は、全て同一の叩き痕であり、各窯内や窯間でも接合することから、1個体から分割して作られたものである。2号窯床面と3号窯1～3次床面から出土しているが、2号窯と3号窯のものでは、自然釉のかかる部位、色調(焼け具合)、付着物などの点で異なっている。2号窯のものは、内面（凹面）に釉のかからないもの―外面（凸面）のみを上にして使用したものだけであるが、3号窯のものは、内・外面や断面にも釉がかかっており、両面使用されている。また、3号窯のものは2号窯のものよりも、色調がまだらであり、焼け斑が著しく、焼けひずんだものや、内・外面に砂の付着したものが多い。このことから、加工焼台は、2号窯段階で製作され、使用されたものが、3号窯でも継続して使用したものと考えられる。つまり、加工焼台の観察から、2号窯→3号窯の操業順位を想定することができる。1号窯は加工焼台がないため、加工焼台から検討することはできないが、1号窯床面出土の焼台として使用されている甕の底部（第86図3）は3号窯3次床面出土の破片と接合する。1号窯出土の底部は、割れ

口の一部に研磨痕が認められ、何らかの用途に一度使用されたものを焼台として、さらに使用しているものである。よって、この例から、3号窯→1号窯の操業順位が想定される。ただし、1号窯の底部は3号窯1次床面の頸部（第94図6）と同一個体とも考えられることから、1号窯が3号窯の操業終了後のものなのか、一時併行して操業されたものなのかは判らない。

以上のことから、大枠として、本窯の操業順位を2号窯→3号窯→1号窯であると想定できる。

(2) 甕の体部破片の観察

本窯出土の須恵器の胎土には、白色針状物質（海綿動物骨針）が多く含まれている。他の含有物については分析をしていないので詳細は不明である。焼成・色調は、焼台が大部分であり、本来の状況は判らないが、堅く焼締まり、灰白色・褐灰色・暗赤灰色・赤黒色を呈している。

以下では、叩き痕跡を中心として観察する。

甕体部の叩き痕は、全て、外面平行叩き目、内面同心円文である。[註2]

平行叩き目には、Ⅰ・叩き目に間隔の広い木目が直交し、格子風のもの、Ⅱ・叩き目に間隔の狭い木目が直交しているもの、Ⅲ・叩き目に木目が右上がりに斜行するもの、Ⅳ・叩き目に木目が平行するものの4種と、叩き痕ではないが、Ⅱにカキ目を施したもの（Ⅴ）がある。Ⅳは3号窯2次床面出土の破片3点のみである。

同心円文には、1・中心が凸で、木目のみられないもの、2・中心が凸で、柾目状の木目のみられるもの、3・中心が凸で、凸線際に小突起があり、柾目状の木目のみられるもの、4・中心が凹で、木目のみられないもの、5・中心部が凹で、柾目状の木目のみられるもの、6・中心が凹で、凸線際に小突起があり、柾目状の木目のみられるものの6種がある。

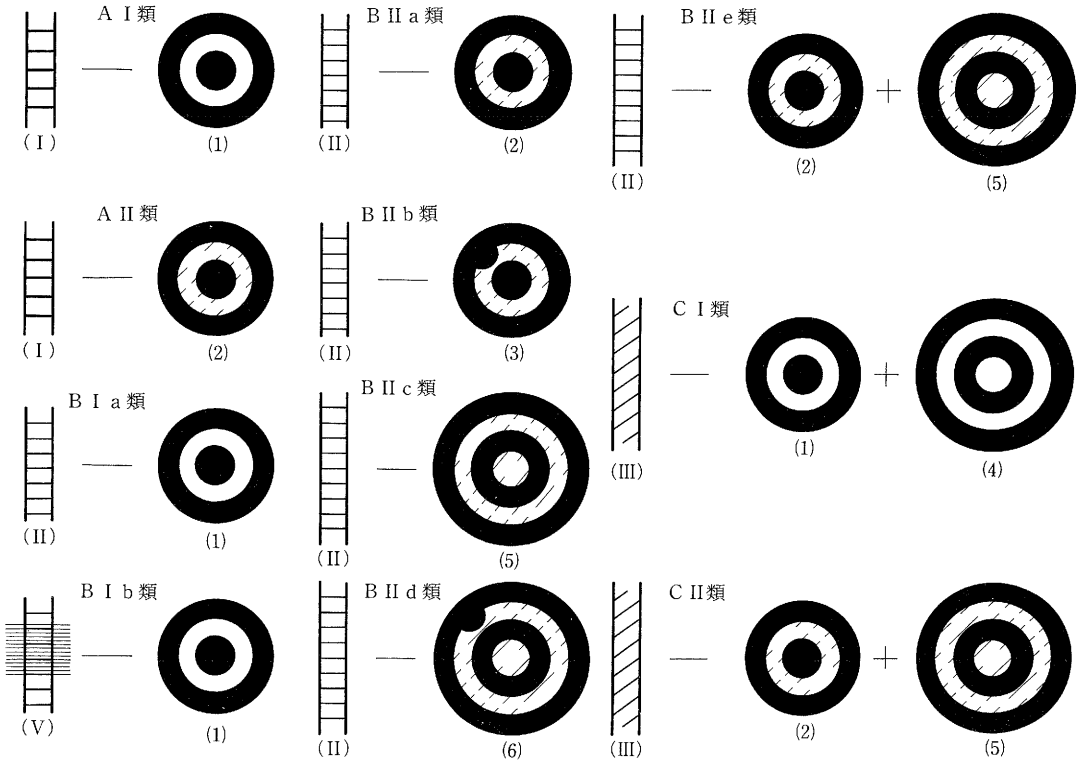
これらを内外面での組合せでみると、Ⅰと1、Ⅰと2、Ⅱと1、Ⅱと2、Ⅱと3、Ⅱと5、Ⅱと6、Ⅱと2＋5、Ⅲと1＋4、Ⅲと2＋5、Ⅴと1の11種類になる。Ⅳの内面は不明である。この内外面での組み合わせを平行叩き目の3種と同心円文に木目のないものとあるものとで再整理し、分類すると、大きく3種類になる（第124図、第2表）

A類—平行叩き目（Ⅰ）で、同心円文に木目のない（1）と木目のある（2）とがある。それぞれ、AⅠ類、AⅡ類とする。

B類—平行叩き目（Ⅱ）で、同心円文に木目のない（1）と木目のある（2、3、5、6、2＋5）とがある。前者をBⅠ類、後者をBⅡ類とする。BⅠ類には同心円文（1）のBⅠa類と、（Ⅴ）—（1）のBⅠb類がある。BⅡ類には、同心円文（2）のBⅡa類、（3）のBⅡb類、（5）のBⅡc類、（6）のBⅡd類、（2＋5）のBⅡe類がある。ただし、BⅡe類は同心円文が2種使用されているものであり、小破片では確認できないため、これらの小破片は、BⅡa類かBⅡc類に混入する可能性がある。

C類—平行叩き目（Ⅲ）で、同心円文に木目のない（１＋４）と木目のある（２＋５）とがある。それぞれＣⅠ、ＣⅡ類とする。ただし、この類の同心円文は２種使用されているものであるが、小破片では１種しか確認できないものもあり、その場合は、１種でも、この類に含めた。

その他、加工焼台は、平行叩き目であるが、ナデ消されて木目が不明で、同心円文は（１）である。



第124図　甕の叩き痕の分類

第２表　甕体部破片各類の出土状況（破片集計表）

	加工焼台	ＡⅠ	ＡⅡ	ＢⅠａ	ＢⅠｂ	ＢⅡａ	ＢⅡｂ	ＢⅡｃ	ＢⅡｄ	ＢⅡｅ	ＣⅠ	ＣⅡ	分類不能	計
SO1	0	0	0	0	0	6	1	15	9	1	0	0	31	63
SO2	26	1	0	0	0	0	0	0	0	0	25	0	5	57
SO3 (1)	1	4	0	5	1	5	1	7	1	0	4	0	23	52
SO3 (2)	7	3	1	63	5	33	8	15	3	1	28	4	36	207
SO3 (3)	6	21	3	76	1	54	12	16	16	0	53	11	46	315
SO3(不明)	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	6
計	41	29	4	144	7	98	22	53	29	2	111	15	145	700

各類の出土状況（第３表）をみると、Ａ類は２・３号窯、Ｂ類は１・３号窯、Ｃ類は２・３号窯から出土している。これを窯跡で整理すると、１号窯はＢ類のみ、２号窯はＡ・Ｃ類、３号窯はＡ～Ｃ類の全てがある。つまり、各窯での出土量の多少もあるが、１号

第３表　甕体部破片の類別出土状況

	加工焼台	A		B		C	
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ
SO1					○		
SO2	○	○				○	
SO3 (1)	○	○		○	○	○	
SO3 (2)	○	○	○	○	○	○	○
SO3 (3)	○	○	○	○	○	○	○

窯と２号窯には共通する類がなく、３号窯には１・２号窯と共通する類があることになり、３号窯をはさむことによって、１・２号窯との関連を捉えることができる。このことを、同心円文の木目の有無から検討してみる。１号窯は、全て木目のあるもの、２号窯は、全て木目のないもの、３号窯は、木目のないものと木目のあるものの両者がある。木目の有無は同一当て具の使用頻度を反映している可能性がある。外面の平行叩き目については、同一叩き具の使用を重ねると木目が浮き出し、叩き目が格子状になることが指摘されている(田辺：1981)。内面への当て具は叩き具ほど衝撃を受けないものかもしれないが、使用を重ねると叩き目と同様に同心円文にも木目が鮮明になるのではないだろうか。[註3] 木目のあるものにのみ認められる凸線際の小突起も、使用を重ねた結果の当て具の傷とみることができる。このように仮定した場合、同心円文の原形は、２号窯にある（１）と（４）であり、３号窯・１号窯で引き続き同一当て具が使用された結果、（１）から（２）（３）に、（４）から（５）（６）に変化したものと推定することができる。各類で整理すると、ＡＩ・ＣＩ類は２号窯、ＢＩ類は３号窯を初現とし、１号窯はＢII類のみであることから、加工焼台で想定した２号窯→３号窯→１号窯の操業順位を補強することになる。

甕体部片の叩き痕の観察を行った本来の目的は、甕しかない本窯跡の製品の特徴を提示することにあった。大部分が焼台として使用されたものであり、前段階で焼成されたものも含んでいることは、接合関係からも明らかである。しかし、大略としては、各窯から出土した焼台でもある甕は、各窯の操業時の製品の特徴を示しているものと判断することができそうである。

本窯では、叩き成形の道具の観察から、３基の窯での変化を捉えることができた。このことは、同一系譜の工人集団による継続的な操業を意味しており、また、焼台の接合関係から、その操業期間は、さほど長くはないものと推定される。

２．生産年代の推定

(1)　口縁部資料の検討

３基の窯から、合計10点の口縁部資料が出土している。この内、各窯の製品と判断できるものは、各窯１点ずつの計３点だけであり、その他のものは焼台として使用されているものである。この焼台として使用されているものも、基本的には、出土した窯の製品と仮定し、さらに、窯間で接合するものについては、窯の操業順位の古い方の製品と認定すると、各窯の製品は第125図のようになる。２号窯は４点（SO ２－１～４とする）、３号窯は５点（SO ３－１～５）、１号窯は１点（SO １－１）である。SO ３－１～３・５は焼台であり、２号窯の製品の可能性もあるが、上の基準に沿って、３号窯に含めておく。以下、各窯毎に、その特徴をみていく。

〈２号窯製品〉　１・２は甕の口縁部である。口縁部上面が水平なもので、口縁部に粘土を貼り付けている。２は貼り付けた粘土帯の下端をつまみ出して突線となっている。１はつまみ出し

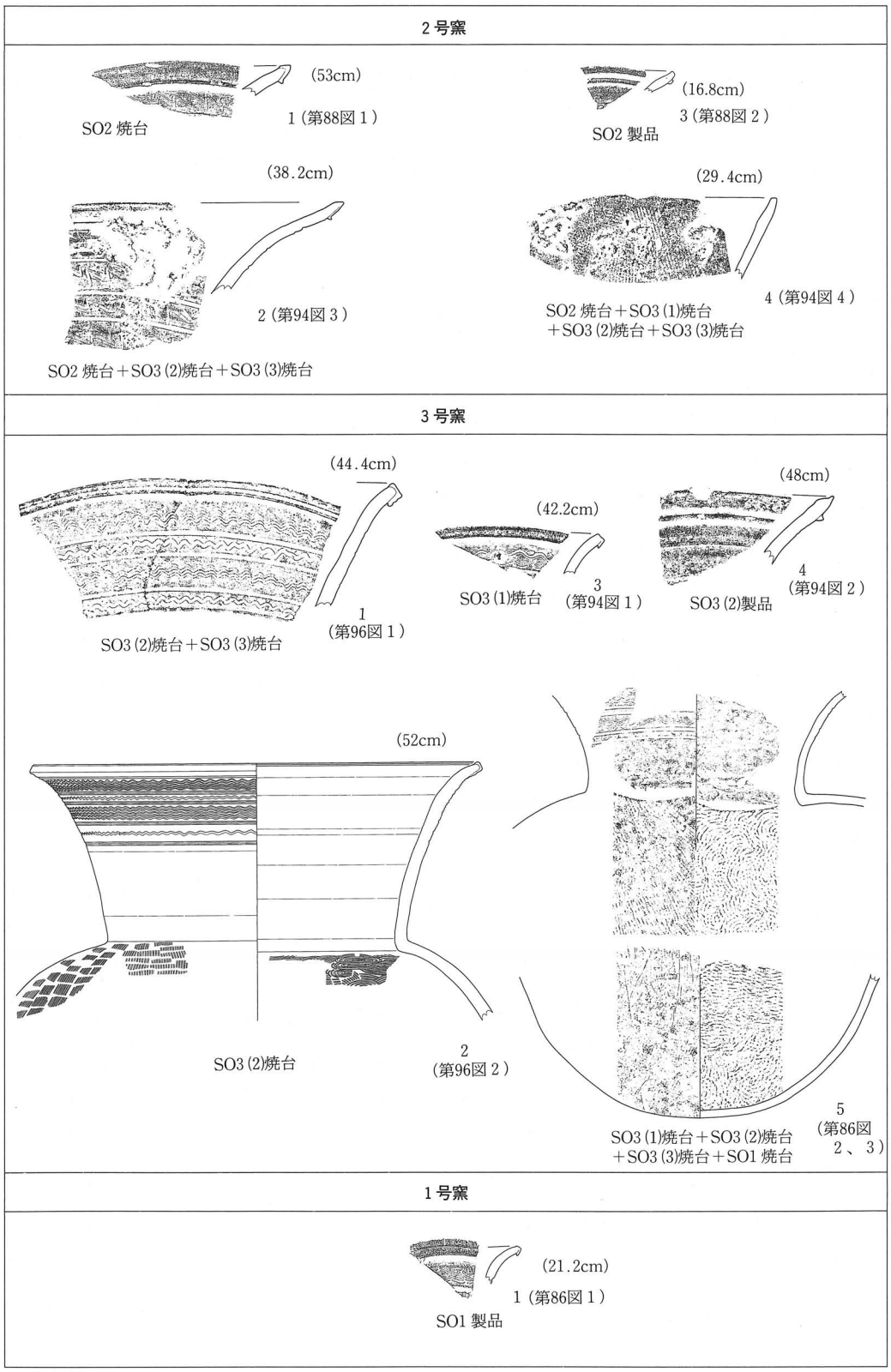
が弱く、突線状の部分もあるが、全体的に肥厚している。両者とも目の細い波状文が施されている。2の波状文は一定幅の沈線区画内に描かれている。3は横瓶などの瓶類の可能性もあるが、壺としておく。口縁部外面に低い突帯が巡っている。4は鉢形のものとして図示した。口縁部上面は水平である。外面は平行叩き目が口縁部直下まで認められ、口縁部はロクロナデ調整されている。口縁部のつくりや調整から判断すると、この器種は、天地逆にして、脚付壺などの脚部の可能性もある。

〈3号窯製品〉 全て甕の口縁部である。1は口縁部に粘土を貼り付けて、方形に肥厚させている。頸部には沈線と目の粗い波状文が施されている。沈線による区画帯の幅は一律ではない。2は1と同様の頸部文様をもつもので、口縁部のつくりも1と同じであるが、貼り付けた粘土帯の下端に強いロクロナデ調整が施されているために、1ほどは方形に肥厚していない。体部の叩き痕はＢⅡｃ類である。3は口縁部の縁帯を折り返してつくっているものである。断面形は1に近く、やや方形に肥厚しているが、縁帯の幅の狭いものである。波状文は波の山をたがえて、2回施されている。4は口縁部がほぼ水平なものであるが、端部が上方につまみ上げられている。直下には粘土紐を貼り付けた突帯が巡っている。突帯の断面形はやや上向きの三角形である。頸部には釉がかかっているため、判然とはしないが、波状文はなく、沈線が一条認められる。5は口縁部を欠くものであるが、同一個体と考えられる頸部から底部の接合資料である。頸部には2条1組の沈線による区画帯内に波状文が施されている。底部は丸底である。体部の叩き痕はＢⅡｄ類である。

〈1号窯製品〉 小型の甕である1は、口縁部断面が矢印状に近いものであるが、口縁部のつくりはSO 3－3と同様であり、形態も類似している。頸部には沈線と波状文が施されている。

以上の各窯の製品を甕にしぼって、その特徴をまとめると、2号窯は、①口縁部に粘土を貼り付けている。粘土帯の下端の調整の仕方で、縁帯状に肥厚するもの（1）と突線の巡るもの（2）とがある。②口縁部上面が平坦で水平である。③目の細いシャープな波状文である。④沈線による区画帯の幅が一定である（2）。3号窯は、①口縁部断面形が方形に肥厚して縁帯を形成するもの（1・2・3）と縁帯のない水平なもの（4）とがある。前者には、粘土を貼るもの（1・2）と折り返したもの（3）とがある。後者は口縁直下に粘土紐による突帯の巡るものである。②沈線による区画帯の幅が一定のもの（5）と一定でないもの（1・2）とがある。③波状文は粗く、丁寧ではあるが、シャープさに欠ける。1号窯は、折り返した口縁部のつくりで、波状文はルーズである。

各窯の特徴を、想定された操業順位を踏まえて観察すると次のようになる。①口縁部が水平なものは、2号窯からあり、3号窯にもあるが、2号窯のものは粘土を貼り付けた縁帯状のものや突線をもつものであり、3号窯のものは口縁端部を上方につまみ上げ、粘土紐による突帯



第125図　土手内窯の甕　　（　）内は推定口径

をもつものである。②口縁部に粘土を貼り付ける技法は、2号窯からあり、3号窯にもあるが、2号窯のものは水平口縁であり、3号窯のものは、水平ではない方形口縁である。③方形口縁は3号窯からあり、1号窯も類似しているが、3号窯でも粘土を貼り付けたものと折り返したものがあり、1号窯のものは折り返したものである。④口縁直下の装飾として、2号窯は粘土帯下端をつまみ出した突線であり、3号窯は粘土紐による突帯である。⑤波状文は、2号窯は目が細くシャープであるが、3号窯は目が粗く、丁寧ではあるがシャープではない。1号窯はルーズである。⑥頸部文様の沈線による区画帯の幅は、2号窯では一定しているが、3号窯では一定しているものと、そうでないものとがある。各属性からみた、このような特徴は、SO 3－1～3・5の位置が流動的ではあるが、本窯の中での概略的な甕の口縁部の変化と捉えられる。ただし、これがどの程度の年代幅のものなのか、また、この地域での普遍的な様相なのかは今後の調査の進展による。

(2) 口縁部資料の類例と年代

①水平な口縁部の類例－窯跡では、SO 2－2が、福島県相馬市善光寺遺跡3号窯の図34－12（木本・福島：1988）に近い[註4]。頸部文様は異なっているが、口縁部のつくりは同じである。また、福島市宮沢窯跡4号窯の第34図3（伊東・伊藤・内藤：1965）も類似しているが、確認できなかった[註5]。これらの窯跡の年代は、善光寺3号窯が善光寺ⅡA期・善光寺2式期（TK217・飛鳥Ⅱ相当）であり（木本：1989）、宮沢4号窯は7世紀第2四半期から第3四半期である（木本：1989）。また、SO 3－4のように、口縁端部を上方につまみ上げる手法も、善光寺3号窯の甕にあり、それ以前の善光寺1号窯には認められていない。

宮城県内での、水平な口縁部（SO 2－1・2とSO 3－4類似）の甕を出土している遺跡には、仙台市善応寺横穴群17号横穴－図版第35－26[註6]（伊東・氏家：1968）、同市茂ケ崎横穴群3号横穴－第7図（木村・渡辺他：1989）、色麻町色麻古墳群第403号墳－第67図（古川：1983）、第108号墳－第26図11・12、第100号墳－第29図4・5（古川：1984）などがある。近県以外ではほとんど確認できなかったが、口縁部が水平より内傾するものは神奈川県横浜市熊ケ谷東遺跡の窯跡[註7]（7世紀前半）にある（大谷他：1986）。

②方形の口縁部の類例－SO 3－1は善光寺1号窯の図7－11・13に類似しているが、善光寺例は口縁部が水平であり異なっている。水平である点ではSO 2－1に近い。ただし、同窯の横瓶の口縁部（図14－76）は水平ではなく、SO 3－1に類似している。善光寺1号窯の年代は善光寺Ⅰ期・善光寺1式期（TK209・飛鳥Ⅰ相当）である（木本・福島：1988）。近県以外では、埼玉県東松山市舞台遺跡C－1号窯（井上他：1978・1979）のものがあるが、善光寺1号窯と同様に口縁部は水平である。年代はTK217型式期である。また、同県滑川村の羽尾窯（高橋：1980）のものは口縁部が水平ではなく、本窯のものに近い。年代はTK209型式期である。その

他、口縁部が肥厚していて、方形に近いものは、TK209 型式期の窯である茨城県常陸太田市幡山遺跡1・2号窯(関根：1977)にある。畿内では、陶邑窯の TK209 号窯、KM234 号窯、KM115 号窯、KM28－Ⅰ号窯のものに類例がある（田辺：1966、中村：1976)。これらの年代は中村編年のⅡ型式5段階～Ⅲ型式1段階、田辺編年の TK209～TK217 型式期である。

県内での方形の口縁部の類例としては、仙台市法領塚古墳玄門出土のもの－図版第17－5～10（氏家：1972）がある。これについてはその後、田中則和氏により舞台C－1号窯との類似が指摘（田中：1987）されているように、口縁部が水平なものである。善光寺1号窯のものとも類似するが、粘土を貼りつけた下端の形態は、善光寺1号窯よりも SO 3－1に近い[註8]。また、法領塚古墳の甕の頸部文様は SO 3－5と同じであり、この文様は、前述した善応寺横穴群17号横穴のものも同じである。さらに、名取市清水遺跡（丹羽・小野寺・阿部：1981）で第Ⅴ群土器に含まれているA溝出土のもの（第195図2）も同じ文様をもっている[註9]。SO 3－5と清水遺跡例の口縁部は不明だが、法領塚例は水平な方形の口縁部、善応寺例は水平だが方形でない口縁部のものであり、同一文様で異なった口縁部のものがあることが判る。その他の県内の類例としては、色麻古墳群第104号墳－第14図（古川：1984)、第71号墳－第71図22[註10]（古川：1985）や、仙台市郡山遺跡第13次調査表採のもの（第16図10）がある（青沼・木村：1982)。

以上のように、本窯の特徴的な口縁部形態の類例は、TK209～TK217 型式期の窯跡に認められた。

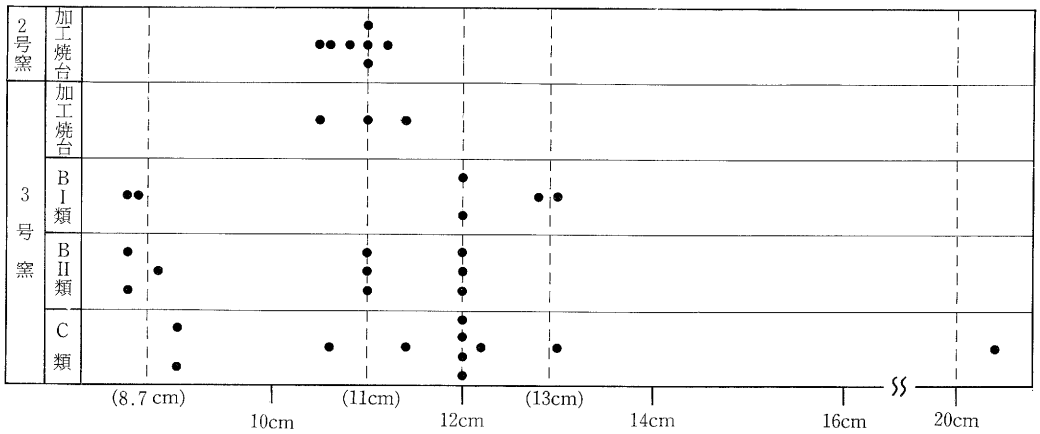
(3) 焼台の円形痕跡の観察

焼台に使用された甕には、円形に変色した製品を置いた痕跡のみられるものがある(第4表)。2・3号窯の焼台の30点に認められ、同一破片に1つ以上の痕跡のあるものもある。2号窯では加工焼台のみ、3号窯では加工焼台・BⅠ・BⅡ・CⅠ類に認められる。加工焼台とCⅠ類は外面にのみ、BⅠ・BⅡ類は内外面に確認される。外面にのみ痕跡のある加工焼台は、2号窯段階で専用焼台として作られたものであり、3号窯のものは、2号窯のものの再利用であることから3号窯の加工焼台の円形痕跡も大部分は2号窯操業時のものと推定される。つまり、2号窯操業時の痕跡は加工焼台のもの、3号窯操業時の痕跡はBⅠ・BⅡ・CⅠ類のもの主体となる。これらの円形痕跡の直径を示したものが第126図である。

2号窯段階の痕跡は直径10.5～11.4cm に集中しており、平均は11cm である。3号窯段階のものは、集中域が大きく4つに分かれる。①直径8.5～9 cm に集中し、平均8.7cm のグループ、②直径10.6～11.4cm に集中し、平均11cm のグループ、③直径12cm に集中するグループ、④直径13cm に集中するグループがある。3号窯の床面でみると、1次床面で

第4表　焼台円形痕跡の出土状況

	加工焼台	A類	BⅠ類	BⅡ類	CⅠ類	CⅡ類	不明	計
SO1	0	0	0	0	0	0	0	0
SO2	5	0	0	0	0	0	0	5
SO3(1)	0	0	0	0	1	0	0	1
SO3(2)	1	0	2	3	3	0	0	9
SO3(3)	2	0	4	5	3	0	0	14
SO3(不明)	0	0	0	0	0	0	1	1
計	8	0	6	8	7	0	1	30



第126図　焼台円形痕跡の直径

は円形痕跡のあるものは12cm 1点のみ、2・3次床面では、4グループが認められる。直径22cmのものは3次床面である。

この円形痕跡は杯・蓋類などの小型製品の痕跡と推定される。本窯では、これらの製品の出土が皆無であり、具体的に比較検討することはできないが、まず、円形痕跡の位置から、焼台の使用方法や窯詰め方法について考えてみたい。

杯・蓋の窯詰め方法について、陶邑窯では、I・II期の杯H[註11]は「身に蓋を正常にかぶせた状態で焼成することが多い」が、「身と蓋をわけて、同一器形のものだけを幾段にもつみかさねた例」があり、杯GはTK217号窯では、「つまみを保護するために、蓋を裏返して杯身へかぶせた状態のものを1組として、それをさらに幾段にも重ねて焼成した例」がある（田辺：1966）。これらはいずれも、底部を下にした窯詰め方法であるが、北陸では杯の口縁部を下にしてつみ重ねる方法も確認されている[註12]。本窯の円形痕跡は焼台甕体部の内面に認められたものは4点だけであり、その他は全て外面に認められる。甕体部片は湾曲している。その外面に痕跡があるということは、底部を下にして置いたのでは不安定であり、杯・蓋類の口縁部を下にするか高杯などの脚部を持つ器種でなければ安定しない。また、内面に痕跡のあるもの4点の内、3点は全て直径8.7cmのグループのものである。このグループに属するもので、外面に痕跡のあるものに、1点だけ3号窯3次床面から円形痕跡だけではなく、製品の端部が付着し、二重のリング状になるものがある（図版111－11）。付着部分が二重になることから、この焼台に置かれたものは、杯Gの蓋か立ち上がりの短い杯Hの身の口縁部の可能性が考えられるが、杯H身の受部までの径がこれほど小さいものはないことから、この痕跡は杯G蓋の口縁部を下にして置いた痕跡と推定される。このことから、直径8.7cmのグループは蓋の痕跡と考えられ、内面上に置くものもある理由は、カエリの部分と焼台との付着を防ぐためであろう。尚、同グループでも外面に痕跡のあるものには杯G身の口縁部の痕跡も含まれている可能性がある。以上のこ

とから、本窯の円形痕跡は、杯・蓋類か高杯類のものと推定され、杯・蓋類は口縁部を下にして置いたための痕跡と考えられた。[註13]

次に円形痕跡の直径に関連して、特徴的なものを抽出して検討してみる。

2・3号窯の円形痕跡の大部分の直径は、8.5～13cmの範囲内に入っている。2号窯では、直径11cmに集中し、3号窯では4グループが認められた。これを、杯・蓋類の法量分化の傾向とみることもできるが、2号窯での点数が少なく、また、製品もないことから、検証することはできない。2・3号窯の全体的傾向としては、直径の小さいものの多いことが挙げられるだろう。特に、3号窯2・3次床面で認められる直径8.7cmのグループのものは、特徴的である。これは、杯Gの口径と推定されたが、このような小型の杯Gは、陶邑窯では、中村編年のII型式第6段階～III型式第1段階(中村：1976)、田辺編年のIII期・TK217型式期(田辺：1966・1981)に認められるものであり、飛鳥・藤原京編年の飛鳥II期（奈文研：1978、小笠原：1988）の杯Gも同様である。東北地方では、福島県相馬市善光寺遺跡3号窯（木本・福島：1988)、高田遺跡1号窯（木本他：1989）に存在する。善光寺3号窯・高田1号窯は善光寺編年のIIA期・善光寺2式期であり、これはTK217・飛鳥IIに相当するものとされている。これらの例から、円形痕跡でみると、直径8.7cmに集中する杯Gと仮定した製品を含む3号窯の時期も、ほぼTK217型式期を中心とした頃と推定される。8.7cmのグループ以外の直径についても、善光寺3号窯の杯・蓋の口径が示唆的である。同窯では、杯は3点あり、口径8.8cm・12.3cm・13cm、蓋は2点あり、10.6cmである。さらに、同窯には、口径21.3cmの盤があり、本窯の3号窯3次床面の直径22cmの円形痕跡に近いものである。

以上のように、円形痕跡から、3号窯はTK217型式期頃と考えられたが、3号窯3次床面の二重のリング状痕跡をもつものは、宮城県の名取川流域で特に集中して出土している偏平化した小型の杯G蓋の可能性もある。この小型で偏平な杯G蓋に関しては、木本元治氏によって、その編年的位置についての考察(木本：1989)がなされている。木本氏は、仙台市郡山遺跡SI289住居跡で、小型で「やや偏平」な蓋が善光寺7号窯の杯Eに類似する有段丸底の杯と共伴していることなどから、善光寺IIB期（善光寺3式期）としている。このことをもってすれば、3号窯の年代も善光寺IIB期（TK46・飛鳥III相当）を含むものと考えなければならない。[註14]

〈本窯の生産年代と供給地〉

最後に、前述した口縁部形態での検討も含めて、本窯の生産年代について整理しておく。口縁部形態からは、TK209～TK217型式期のものに類似していることが判った。3号窯の焼台の円形痕跡からは、TK217～TK46型式期の杯・蓋類の口径を示している可能性について推定した。このことから本窯の年代は、TK217型式期を中心とした頃と捉えられる。その実年代については、畿内においても諸論があり、善光寺窯についても福島雅儀氏(福島：1988)、木本元治

氏（木本：1989、1990）、辻　秀人氏（辻：1990）の各氏の論があり、微妙に異なっている。小型製品のない本窯からはこの議論に参加することはできない。ここでは、最近の、窯跡や飛鳥・藤原京地域での所見や地方の様相を総合的に整理している藤原　学氏の年代観（藤原：1991）に従うこととする。同氏は、7世紀第2四半期を中心として7世紀中葉を含む時期としている。よって、本窯の実年代も、7世紀第2四半期から中葉を中心とした頃としておきたい。

本窯の製品（甕）の供給先については、周辺の7世紀代の集落跡、官衙跡、古墳、横穴墓の出土遺物を実見したが、現段階では確認できなかった。ただし、形態・文様など類似するものはあり、本窯周辺での継続的生産をうかがわせる。また、小型の杯Gは、周辺では郡山遺跡と清水遺跡にあるが、主に、郡山遺跡から出土しており、本窯の操業が郡山遺跡Ⅰ期官衙と関連しているものと推定される。

(4)　窯体構造

3基の窯は、全て地下式窖窯である。これらの窯は、南東に伸びる丘陵の南斜面の東端部に位置している。上位にある2号窯が古く、下位にある3号窯から1号窯へと継続的に操業されている。前庭部が削られているものや未調査部分もあり、全体の構造の判るものはないが、残っている部分から判断すると、平面形は全て、窯体のほぼ中央部に最大径をもつ胴張り型のものである。焼成部の傾斜は20°～30°であり、煙出し部は奥壁の立つものである。平面形が最も類似している例は、近県では善光寺1号窯（善光寺Ⅰ期・善光寺1式期）であるが、規模と煙出し部の形態が異なっている。規模・煙出し部の形態を踏まえると、善光寺3号窯と宮沢4号窯が近似している。善光寺3号窯はTK217型式期、宮沢4号窯は7世紀第2四半期～第3四半期（木本：1989）とされており、本窯の年代とも矛盾はしない。尚、地域は離れるが、規模・焼成部傾斜・煙出し部の形態は、石川県の南加賀窯跡群の7世紀第2四半期の窯体構造の特徴とも同じである（福島：1985、望月：1990）。

註1：福島市振興公社文化財調査室保管の宮沢窯跡資料の実見にあたっては、斎藤義弘氏にお世話頂いた。ただし、類似加工焼台と類似甕資料や小型製品は確認できなかった。尚、類似加工焼台の存在は、石本　弘氏の御教示による。

註2：叩き痕の観察・分類は、内堀信雄：1984『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会を参考にした。これを基にした、本窯の観察・分類の基礎作業は高橋綾子による。

註3：亀田修一氏は、木製の無文当て具の使用による当て具の木目の浮き出しについて指摘している。亀田：1989「陶製無文当て具小考」『横山浩一先生退官記念論文集』Ⅰ

註4：福島県文化センター遺跡調査課保管の善光寺窯・高田窯資料の実見に際しては、石本　弘氏に御教示頂いた。

註5：註1同。

註6：仙台市博物館保管の善応寺横穴群と法領塚古墳資料の実見にあたっては、原河英二氏にお世話頂いた。善応寺17号横穴の甕は、報告書では水平な口縁部になっているが、実際は、水平な部分と丸くおさまる部分

とがあり、どの部分を特徴とみなすかは検討の余地がある。尚、善応寺17号横穴と法領塚古墳の甕は白色針物質を僅かながら含んでいる。

註７：関東地方の７世紀代の窯跡の資料収集にあたっては、酒井清治氏・浅野春樹氏・福田健司氏にお世話頂いた。特に、酒井氏からは有益な御教示や御協力を頂いた。記して、感謝する次第である。

註８：法領塚古墳資料を実見した際、氏家氏が報告し、田中氏が検討した甕の他に、同様の口縁部形態をもち、報告例よりも大型の甕の口縁部破片のあることが判った。また、報告例の甕には頸部と肩部の接合部分の破片があり、この破片には粘土紐による角張った突帯が付いている。これは、埼玉県・群馬県を中心として関東地方に分布している「頸部補強帯」（酒井：1991「須恵器の編年－関東」『古墳時代の研究』６）と考えられる。

註９：東北歴史資料館保管の清水遺跡資料の実見に際しては、丹羽　茂氏に御助言を頂いた。Ａ溝出土の甕は、SO ３－５と類似しており、本窯の製品かとも考えたが、叩き痕の違いや波状文の雑さから、やや年代の下がる同系譜の別窯のものかと推定する。清水遺跡の甕には白色針状物質が多く含まれている。

註10：色麻71号墳の甕は実見していないが、頸部と肩部の境に粘土紐を帯状に巡らしているもので、法領塚古墳のものと同様に、「頸部補強帯」の可能性がある。調査・報告者である古川一明氏も、その可能性を考えられている。また、この甕の肩部にはボタン状の貼り付けがあり、酒井清治氏の御教示では、関東地方に類例があると言う。

註11：杯Ｈ・杯Ｇの用語は、便宜的ではあるが、飛鳥・藤原京編年の分類名を使用する。奈良国立文化財研究所：1978『飛鳥・藤原京発掘調査報告』II

註12：北野博司氏の御教示による。尚、同氏からは、加工焼台について、「初期瓦」の可能性はないかとの御指摘を受けた。

註13：善光寺窯資料を実見させて頂いた際に、報文の図版115の１号窯出土の横瓶（図14－76）にみられる円形痕跡を観察した。この円形痕跡の直径は同窯の杯Ｂとされているものの口径と同じである。

註14：本窯の資料からは検討できないが、郡山遺跡 SI289 住居跡出土の蓋が善光寺ＩＩＢ期であったとしても、偏平で小型の蓋が全て、その時期のものであるかは断定できない。SI289 の蓋は、木本氏も指摘しているように、「やや偏平」で、郡山遺跡の他の偏平で小型の蓋のツマミとも「異なっている」のであり、他の多くの偏平・小型の蓋が善光寺ＩＩＢ期以前に遡る可能性についても否定はできない。Ｉ期官衙以前の遺構とされている SI441 住居跡（木村・長島：1984）からは、小型で偏平ではない蓋（口径8.4cm）が出土しており、善光寺ＩＩＢ期を待つことなく、在地窯では偏平化した可能性もあるのではないだろうか。

〔３〕　土手内横穴墓群Ｂ地点

１．遺　　物

８基の横穴の内、５号を除く、７基の横穴墓から遺物が出土している（第５表）。遺物には、金属製品（鉄刀・刀子・鉄鏃）、須恵器（高台杯・蓋・長頸壺・短頸壺・甑）、土師器（杯・蓋・椀・皿）がある。これらの遺物の出土位置は、羨門前や玄門前に集中している。その出土状況は、側壁際に寄せられてまとまっており、片付けられた状態を示している。玄室内からの出土例、出土量は少なく、原位置を保っているかも不明であるが、鉄刀・刀子が出土する傾向が認められる。

横穴墓出土の遺物は、一連の埋葬儀礼・閉塞に伴う呪的儀礼・葬送儀礼・年忌的墓前祭により残されたものであり、これに、追葬や改葬も考慮すると、本横穴墓の出土遺物が、どの段階

での副葬品なのか、または、どの段階での供献に伴う遺物なのかの判断は困難である。ここでは、出土遺物の年代を中心として整理し、本横穴墓群の構築年代の上限と使用年代の下限について考えてみたい。

(1) 金属製品

〔鉄刀〕 4号玄室から1本、7号玄室から1本の計2本出土している。錆で形状の不明な部分もあるが、いずれも、平棟・平造りの直刀と考えられる。4号刀は刀身の半分を欠くものである。残存刀身長は17.5cm、茎(なかご)長は5.7cm、元幅は2.5cmである。区(まち)は両区で、茎がやや棟方に偏っている。茎尻は丸みを帯びず、角張っている。7号刀は切先部分を欠くものである。残存刀身長は68.5cm、茎長は11.5cm、元幅は4 cm、先幅は3 cmである。区は刀装具で観察できないが、両区と推定される。茎はやや棟方に偏っており、棟方はほぼ水平であるが、刃方が上方に傾いている。刀装具は、表面の剝落が著しいが、金銅装のものと考えられる。鎺(はばき)は、長さ約3 cmで、表面に鍍金が僅かに残っている。断面形は、刃方の狭い、長楕円形である。鐔(つば)は喰み出し鐔で、幅約8 mm、中央部に稜をもつものである。平面形は、鎺の断面と同じ長楕円形である。鞘(さや)口金具も中央部に稜をもっており、幅は約3 mmである。足金具は双脚のものである。一の足金具は鎺の上に乗って残っているが、二の足金具は脚が腐って取れている。脚は、幅約6 mmで、鐔や鞘口金具と同じく中央部に稜があり、部分的に鍍金が残っている。脚の上は矢倉を設け角帯状になっており、上面には、金象嵌(ぞうがん)と考えられる円文などの文様が認められる[註1]。また、脚の下には部分的に鞘木が残っており、表面黒色であることから、黒漆塗の鞘の可能性がある。

鉄刀の年代については、本横穴墓に近い大年寺山横穴墓の報告書（進藤・佐藤・菊地：1990）で、菊地芳朗氏による詳細な検討がなされているので、それに従うこととする。まず、7号刀

第5表 横穴墓遺物の出土状況

	前庭	羨門前	羨道	玄門前	玄室
1号		杯3・鉄鏃4（右側壁際） 高台杯4・蓋4（左側壁際） 刀子			杯1（堆積土）
2号	杯1（堆積土） 長頸壺（床）		杯2（床）	杯1（閉塞石の下） 短頸壺1（閉塞石の中）	刀子1（奥棺座左床）
3号		皿1（閉塞石の下） 皿1・椀1・蓋1 （閉塞石の中） 長頸壺1・甕1 （閉塞石手前床）	皿1・椀1・蓋1（床）		
4号					高台杯1・蓋1 （玄室前方右床） 刀子（高台杯内） 鉄刀（玄室右床）
5号					
6号				高台杯1・蓋1 （破片－床）	
7号				鉄鏃25（閉塞石手前床） 杯1・椀1（鏃の上） 短頸壺1・甕1 （閉塞石の中）	鉄刀（玄室前方左床）
8号			杯1・鉄鏃1 （堆積土下層） 短頸壺（堆積土上層）		

からみると、刀装具の特徴は、大年寺山横穴墓群の鉄刀C類の「変容」したものの特徴に類似することから、7世紀後葉以降と推定される[註2]。類例は、東大寺正倉院に宝物として伝えられている大刀に認められる(正倉院事務所：1977)。4号刀は、両区という特徴以外になく、このことからは、6世紀後葉以降の年代が考えられる。尚、年代以外のこととして、4号刀は刀身の半分が欠損しており、7号刀はL字に折れて出土している。副葬品と考えられる鉄刀のこのような状態は、埋葬儀礼や呪的儀礼に関係あるのかもしれない。

〔刀子〕 1号羨門前から1本、2号玄室奥棺座から1本、4号玄室須恵器高台杯内から1本の計3本出土している。いずれも、刀身の前部を欠くもので、平棟・平造りである。1号刀子は、残存刀身長約5.8cm、茎長約5.5cm、元幅1.3cmで、区から茎にかけて把木が一部残っている。把木の下には巻糸が認められる。区は、把木や錆で判然としない。2号刀子は、残存刀身長約8.2cm、茎長約7.9cm、元幅2cmで、区の部分に鉄製の把鏝(把縁金具)が、茎に把木の一部が残っている。区は不明である。4号刀子は、残存刀身長約5cm、茎長約6cm、元幅1.5cmで、区の部分に鉄製の把鏝が残り、把鏝から茎には把木が部分的に残っている。把鏝の上には鞘木が一部残っており、呑み口式の刀子と考えられる。区は両区と推定される。

刀子の年代について、1・4号刀子は出土状況から一括性のある須恵器や土師器の年代が参考になる。2号刀子は不明である。尚、4号刀子が須恵器高台杯内に納められていたことは胞衣埋納の方法に似ており、興味深い。

〔鉄鏃〕 1号羨門前から4点、3号羨門前から4点、7号玄門前から25点、8号羨道から1点の計34点出土している。羨門前と玄門前の閉塞を伴う部分からの出土が特徴的である。34点の鉄鏃は鏃身部の形態等から4種類に分けられる。I類鏃：広根・有茎、造り不明・両刃、鏃身五角形、逆刺を有するもの。重さ約2.5g。有茎ではあるが、鏃身部片面にのみ径約3.5mmの木製の別づくりの茎が糸で巻かれて装着されている。1号羨門前から2点出土している。II類鏃：広根・有茎、造り不明・両刃、鏃身菱形、鏃身部斜区のもの。重さ約8.8g。1号羨門前から2点出土している。III類鏃：細根・長頸、端刃造り・両端刃、鏃身部無区・頸部棘状区のもの。重さ約7.3g。茎に矢柄が一部残っている。8号羨道の1点のみである。IV類鏃：細根・長頸、端刃造り・片端刃、鏃身部無区・頸部棘状区のもの。重さ約5g。矢柄が一部残っているものには、巻糸や黒漆の付着のみられるものがある。7号玄門前の25点はすべてこの類である。

古墳時代後期の鉄鏃は、終末期になると組成が全国的に画一的な様相を呈することが指摘されている(杉山：1987)。杉山秀宏氏の研究によれば、鏃身形態が端刃造りの鏃の出現は、TK209型式期であり、本横穴群のIII・IV類鏃は、同氏の第九様式期（TK217～TK46型式期）に属するものである。これは、宮城県を中心とした地域の群集墳の造営年代について発表している岡安光彦氏の金属製品総体としての年代観（岡安：1990）ともほぼ同じであり、7世紀中葉前後の

年代と推定される。しかし、Ⅲ・Ⅳ類鏃の類例は正倉院宝物として伝わる鏃にも認められ（末永：1941)、その年代については他の共伴する遺物も踏まえた検討が必要である。[註3] Ⅰ・Ⅱ類鏃は大型で幅広のものであり、年代的にはⅢ・Ⅳ類鏃より新しい可能性がある。[註4] Ⅱ類鏃は、北部九州地方を中心に分布する圭頭鏃に形態的に類似しており、興味深い。尚、７号玄門前の25点のⅣ類鏃は、整然と置かれたものではなく、倒置された土師器杯と椀の下に集中して散在していたものである。本来、玄室内に副葬されていたものが、片付けられたものであろうか。また、１号羨門前のⅠ・Ⅱ類鉄鏃は、大きさ、形態、矢柄への取り付け方などからみると、儀仗用(葬儀用）かもしれない。

⑵　須恵器

高台杯・蓋・長頸壺・短頸壺・瑤が計19点出土している。小型短頸壺と小型瑤の２点を除き、他の17点の胎土には白色針状物質が含まれている。器種構成でみると、１・４・６号は食膳具のみ、２・３・７・８号は貯蔵具のみであり、食膳・貯蔵の両形態が混在することはない。

〔高台杯・蓋〕　１号羨門前から片付けられた状態で高台杯４点・蓋４点、４号玄室から刀子を納めた高台杯１点・蓋１点、６号玄門前から破片であるが高台杯１点・蓋１点の各々計６点出土している。いずれも、蓋と高台杯のセットで出土している。蓋はカエリのない、偏平な宝珠形のツマミのものである。天井部には回転ヘラケズリがなされている。４号蓋は、涌谷町長根窯跡Ａ地点出土のもの（佐々木・桑原：1971）に類似する。１号の４点の蓋は偏平なものも含み、天井部の形態からも、４号蓋より後出的である。この１号蓋の類例は、利府町硯沢窯跡Ｂ地点３号窯出土のもの（真山・佐藤他：1987）にある。高台杯は、回転ヘラケズリの施された平底で、杯部が比較的浅く、口縁部まで直線的に外傾するものである。高台はしっかりとふんばっている。４号と１号２・３の高台杯は端部・屈曲部のつくりがシャープで、底部内面中央部はヘラミガキされている。１号の１・４のものは、これに比べてややルーズで、内面中央部はロクロナデ調整のままである。後者の方が、やや後出的な可能性がある。これらの高台杯と同形態のものは、県内の窯跡では、まだ確認されていないが、高台は長根窯Ａ地点のものに類似し、杯部は硯沢窯Ｂ２・３号窯や福島県相馬市善光寺窯９号窯のもの（木本：1989）に類似する。年代は、陶邑窯・猿投窯・湖西窯および飛鳥・藤原京・平城京地域での類例を検討すると、木本元治氏の年代観（木本：1990）が妥当なものと考えられる。それに従うと、４号高台杯・蓋は７世紀末～８世紀初頭、１号高台杯・蓋は８世紀初頭～前葉である。

〔長頸壺〕　２号前庭部から１点、３号羨門前から１点の計２点出土している。２号壺は頸部を欠くものである。球形の体部に足の張った高台がついている。底部は平底で、ナデられている。体部には二条１組の沈線が４本巡っている。体部中央に外から内に向けての焼成後の穿孔が認められる。２号壺の類例は窯跡出土のものでは確認できないが、形態的には平城京 SK820 出土

の体部破片（奈文研：1976、中村：1990）に似る。しかし、この球形の器形に最も類似するものは、金銅製の香水壺や蔵骨器であり、鍑模倣の唐三彩や奈良三彩蔵骨器も似ている（金子編：1989・奈文研他：1989）。沈線が巡ることからも金属器模倣の形態であろう。平城京SK820出土資料は平城III期であり、2号壺も同期と推定すると、年代は8世紀第2四半期となる。3号壺は体部の肩の張るもので、口縁部は大きく外反して開いている。頸部には二条の沈線が巡っている。頸部内面にはシボリ目は観察されない。この類例は、陶邑窯では、中村編年のIII型式第3段階～IV型式第1段階、田辺編年のTK48～MT21型式期、猿投窯では岩崎17号窯式～岩崎41号窯式のもの（斎藤他：1980）、湖西窯では吉美中村遺跡A地点出土のもの（後藤：1990）にある。その年代は、7世紀末～8世紀初頭であり、3号壺も同年代と考えられる。

〔短頸壺〕　2号玄門前から1点、7号玄門前から1点、8号羨道から1点の計3点が出土している。2・8号壺は小型、7号壺は大型である。小型の方からみると、2号壺は薬壺形のもので、肩が張り、平底で、口縁部は外傾し、口縁端部は外に張り出している。底部は回転糸切り・無調整である。つくりはシャープで胎土に白色針状物質を含んでいない。8号壺は、2号ほど肩の張らない丸底気味の平底のもので、口縁部は直立気味に外傾し、口縁端部は水平である。体部下端～底部は手持ちヘラケズリされている。2号壺は、形態的特徴と底部の切り離し技法から、猿投窯の岩崎25号窯式のもの（楢崎他：1984）に類似する。年代は8世紀第2四半期である。8号壺は、陶邑窯の中村編年III型式第3段階～IV型式第1段階、尾北窯の篠岡2号窯（楢崎他：1983）、美濃須衛窯の老洞1号窯（楢崎：1981）出土のものに類例があり、その年代は、7世紀末～8世紀前葉である。7号壺は大型の四耳壺である。丸底で、体部最大径をやや上部にもつ、ほぼ球形のもので、口縁部は直立し、口縁端部は水平である。高台は剝落している。体部外面は斜格子風の平行叩き目、内面は無文当て目である。体部下半に外から内に向けての焼成後の穿孔がある。類例は陶邑窯のIV型式第2段階のものにあり、8世紀第2四半期と考えられる。

〔瓾〕　3号羨門前から1点、7号玄門前から1点の計2点出土している。2点とも高台のつくものである。3号瓾は小型のもので、在地産と推定されるが白色針状物質を含んでいない。屈曲する肩部の下の沈線間に櫛状工具による連続刺突文が施されている。頸部から外反し、稜をもち、更に大きく外反して口縁部に至る。頸部内面にはシボリ目が認められる。7号瓾は、頸部が折れて出土している。大型のもので、器形・文様はほぼ3号瓾に類似するが、体部・肩部がやや丸味をもっており、口縁部は突帯の上が内湾気味である。頸部内面にはシボリ目が認められる。3・7号瓾のように高台をもち、器形の類似する瓾は、猿投窯の岩崎41号窯、美濃須衛窯の老洞1号窯、湖西窯の吉美中村遺跡A地点から出土している。年代は、7世紀末～8世紀前葉である。尚、本横穴群に近い名取市南台窯跡では瓾の破片が表採されており（太田他：

1973)、注目される。

以上みてきたように、出土須恵器の年代は、全て、7世紀末～8世紀第2四半期におさまるものである。

(3) 土師器

杯・皿・椀・蓋が計18点出土している。全て、食膳形態の器種である。また、3点を除いて胎土に白色針状物質が含まれている。土師器は出土状況と器形・調整技法の特徴から、大きく4群にまとめられる。

Ⅰ群は7号横穴墓の杯と椀である。共に丸底で、外面横ナデ・ヘラケズリ、内面ヘラミガキ・黒色処理である。杯は口縁部が外反し浅い皿状のもの。椀の外面には部分的にヘラミガキが施されている。この椀は、銅鋺模倣の可能性がある(仲田：1989)。Ⅱ群は2号横穴墓の杯と8号横穴墓の杯である。丸底気味の平底で、体部に段があり、口縁部は外反・外傾・内湾気味のものがある。外面横ナデ・ヘラケズリ、内面ヘラミガキ・黒色処理である。Ⅲ群は1号横穴墓の杯である。羨門前の3点は、白色針状物質を含んでいない。丸底で、半円形の体部のものである。外面のヘラケズリが口縁部近くまで施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理である。この3点は内外面とも火を受けており、黒色処理はとんでいる。玄室出土のものは、丸底で、体部下方に軽い稜をもつもので、外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ・黒色処理である。この半円形の器形は、飛鳥・藤原京地域で飛鳥Ⅰの段階から出現する半円形の杯Cと同じく、金属器模倣のものであろう。この器種は7世紀中葉以降の関東地方にもみられるものであり、県内のこの器種の出現には関東地方の土器の影響が考えられる。Ⅳ群は3号横穴墓の皿・椀・蓋である。胎土は、あまり砂粒を含まず、精選されている。白色針状物質も僅かである。全て内外面ヘラミガキが施されている。皿・椀は平底で、体部に段・沈線・稜をもたないものである。椀の浅いものを除いて、全て内外面黒色処理である。蓋を伴なう椀は銅鋺模倣の形態であり、皿も佐波理皿の形態模倣であろう。同形態の椀や皿は飛鳥・藤原京地域では杯A・皿Aとして飛鳥Ⅱに出現しているものである。尚、全面黒色処理のものは黒漆器の色模倣であろうか。

Ⅰ～Ⅳ群は7～8世紀の土師器である。県内でのⅠ～Ⅳ群の出現時期は、ほぼⅠ→Ⅳ群の順であり、これらが重複しながら変遷している。Ⅰ～Ⅳ群の内、Ⅱ～Ⅳ群の土師器は、仙台市郡山遺跡SD35 Ⅱ期官衙外郭南辺大溝1層から出土している土師器群（青沼・木村：1981、木村・金森：1985）の中に類例がある。SD35土器群は7世紀後葉～8世紀初頭（辻：1990）とされている。Ⅰ群は、杯が名取市清水遺跡第42号住居跡出土のもの（丹羽・小野寺・阿部：1981）に類似する。この杯は、清水遺跡第Ⅳ群土器に含まれるもので、年代は7世紀前半とされている。椀は、内面も丸底のもので古相を呈しており、柳沼賢治氏が銅鋺模倣の可能性を指摘した福島県山王川原遺跡3号住居跡のものと形態的に類似する。時期は柳沼氏の栗囲式中段階—TK217

型式期である（柳沼：1989）。杯・椀の類例から、Ⅰ群の年代は、杯が皿状である点が気になるが、7世紀前半～中葉頃としておきたい。

土師器の年代は以上のように考えられたが、須恵器の年代との関係について、出土状況を踏まえながら確認してみる。1号横穴墓は、Ⅲ群土師器と須恵器が同様に片付けられていることから、同時期の可能性が強い。2号横穴墓は、Ⅱ群土師器杯1点が閉塞石の下、須恵器短頸壺が閉塞石中からであり、上下関係が認められる。これを新旧関係とみれば、Ⅱ群土師器が須恵器より古くなるが、閉塞石と共にこの2点を片付けたとすれば、ほぼ同時期のものと推定される。3号横穴墓は、Ⅳ群土師器が閉塞石の下や中から、須恵器長頸壺・瑯が閉塞石の手前から出土しており、直接の新旧関係は認められないが、年代的には同時期に存在してもよいものである。7号横穴墓は、Ⅰ群土師器が閉塞石の手前、須恵器短頸壺・瑯が閉塞石中であり、直接の新旧関係は認められない。Ⅰ群土師器は7世紀前半～中葉、須恵器が7世紀末～8世紀第2四半期であり、年代が離れている。Ⅰ群土師器は、鉄鏃25点の上に蓋をするように倒置されていたものであり、鉄鏃との同時性が想定される。鉄鏃の年代は、TK217型式期以降であり、Ⅰ群土師器の年代と矛盾しない。このことから、Ⅰ群土師器・Ⅳ類鏃は、7世紀中葉頃のものと推定される。8号横穴墓は、Ⅱ群土師器杯が堆積土下層、須恵器短頸壺が堆積土上層であり、層序的にはⅡ群土師器が古いが、年代的には同時期に存在してもよいものである。整理すると、1・2・3・8号横穴墓の土師器・須恵器はほぼ同時期のもの、7号横穴墓は土師器と須恵器に時期差があるものと捉えられた。

最後に、横穴墓出土遺物に関連する本横穴墓の特徴をまとめておきたい。①本横穴墓群の構築年代の上限は、7号横穴墓玄門前出土の土師器杯・椀と鉄鏃の年代から、7世紀中葉頃と考えられる。使用年代の下限は、1・2・3・4・6・7・8号横穴墓の須恵器の年代から、8世紀第2四半期である。②1・2・3・8号横穴墓の土師器・須恵器は各横穴墓においても、また全体的にも、ほぼ同時期のものと推定される。しかし、土師器は1号のⅢ群、2・8号のⅡ群、3号のⅣ群と異なっている。1号のⅢ群は、関東的、2・8号のⅡ群は在地的、3号のⅣ群は高級品（金属器・漆器）模倣の土器群である。これは、時期差の可能性はあるものの、各横穴墓の被葬者集団の身分や宗教観や出自なども具現化しているものかもしれない。③金属器模倣形態のみのⅣ群土器は、食膳具ではあるが、模倣した金属器の本来的性格である仏具としての性格も与えられたものの可能性がある。郡山遺跡では、Ⅱ期官衙段階で付属寺院が成立しており、示唆的である。④金属器模倣のみのⅣ群土器を供献している3号横穴墓と金銅装大刀と多量の鉄鏃を副葬している7号横穴墓は、本群中では規模が大きいものであり、最下位に位置している。また、3・7号横穴墓のそれぞれ西側に位置する横穴墓群は、3・7号横穴墓よりしだいに位置が高くなって斜行している。近くの茂ケ崎横穴墓群では、低位から高位へと

斜行して横穴墓が築造されていった可能性が指摘されており（木村・渡辺：1989)、本群も同様の例かもしれない。とすると、本横穴墓群は、３号と７号の横穴墓を中心とした２群に分かれることになり、３・７号横穴墓が、それらの中で最も古い築造となる。⑤本横穴墓群の使用年代の下限を示す須恵器や土師器は、丁寧に片付けられていたり、片付けられた閉塞石の中や下から出土している。本横穴墓群で閉塞された状態のままで確認されたものは、小型の４号横穴墓だけ（５号横穴墓は重機で削られている）であり、他の横穴墓は、全て、開いた状態で埋没していたものである。これは、使用年代の下限である８世紀第２四半期に行われた最後の埋葬か墓前祭の後に、意識的に開けられた状態を示している。盗掘の可能性も否定できないが、横穴墓を開けた理由の１つとしては、改葬が考えられる。小型である４・５号横穴墓への改葬か、それとも、他の葬地への改葬であろうか。なぜ、改葬したのかは知るすべもないが、火葬墓等の新たな墓制の出現と関係するのであろうか。

以上、本横穴墓群の遺物について、派生する問題も含めて検討した。

註１：東北歴史資料館の御厚意により、手塚　均氏にＸ線写真を撮影して頂いた。

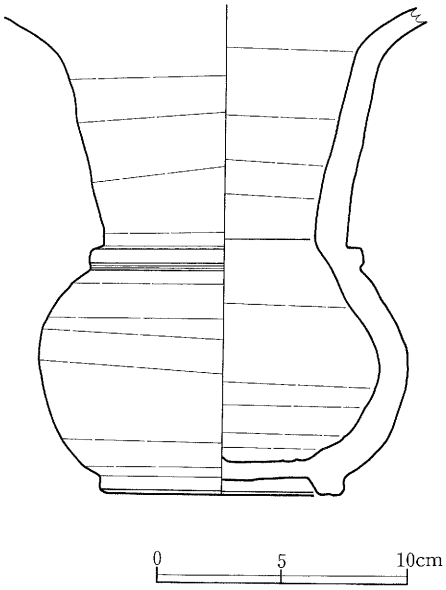
註２：本横穴墓群の金属製品については、菊地芳朗氏に御教示を頂いた。７号鉄刀は、宮城県七ヶ浜町砂山第５号横穴出土の鉄刀よりも新しく、８世紀前半頃の可能性が強いとの御指摘である。

註３：古墳時代後期の鉄鏃を対象とした関　義則氏の編年でも、Ⅲ・Ⅳ類鏃は、７世紀第２四半期以降のものとされている。関　義則：1986「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号

註４：菊地芳朗氏の御教示による。

資料紹介「土手内横穴墓群Ａ地点」出土土器

土手内横穴墓群Ａ地点は、本横穴墓群（Ｂ地点）と谷を挟んで向かい側の北向き斜面に位置している。横穴墓発見の経緯および横穴墓の形態・出土遺物の概要については、既に、昭和25年刊行『仙台市史』３別篇１の「仙台市内の古代遺跡」の中で、伊東信雄氏によって報告されている。これによると、横穴墓からは、人骨四体と「長さ60cm の鉄直刀１本、高さ20cm、径26cm の器台のある祝部土器１個、口頸部に波状を有する祝部大壺１個(現存部高さ38cm)」が出土しており、当時、出土遺物は近くにある西多賀小学校にあったようである。今回紹介する土器は、２点ある土器の内の「器台のある祝部



種別	器形	外面	内面	底面	備考
須恵器？	長頸壺	ロクロ調整、体部と頸部の境に突帯	ロクロ調整	回転ヘラケズリ？	図版110-40

第127図　Ａ地点出土遺物

土器」である。１点のみが、現在、仙台市教育委員会に保管されている。しかし、法量が伊東氏報告の記載と異なっているため、正確には、「器台のある祝部土器」と紹介されたものと推定される土器である。以下、その特徴を述べる。

高台をもつ長頸壺である。口縁部が欠損している。底径9.6cm・器高19.6cm・残存口径16cm・体部最大径14.8cm である。器高は伊東氏報告に合うが、口径が10cm 小さい。口径16cm のものが26cm と誤記されたものであろうか。底部は平底である。高台は短く、幅広で、高台底面は段がつき、内側にやや傾いている。体部は最大径を中央部にもつ潰れた球形である。体部と頸部の境には、やや丸味をおびた突帯が巡っている。頸部は直線的に外傾して立ち上がり、上部で急に外反して開いている。器面調整は、高台・底部～体部・頸部に至るまで、ロクロナデ調整である。調整方向は反時計回りである。底部内面中央部は、回転ヘラケズリされたように反時計回りの砂粒の動きが認められ、中心は臍状に突出している。底面は回転ヘラ切り痕か回転ヘラケズリ痕か判然としないが、砂粒が反時計回りに動いている。胎土には、透明・白・赤の砂粒を比較的含んでおり、白色針状物質も僅かに認められる。焼きは、堅緻である。色調は内外面がにぶい褐色（7.5YR5/3）～灰褐色(7.5YR4/1）で、断面は橙色（7.5YR6/6）である。内外面と断面の色が異なっており、表面を燻したような感じをうける。外面には、部分的に赤味がかった漆状の光沢のあるものが付着している。

器形・色調・調整技法などから、朝鮮半島の陶質土器や陶質土器に直接の系譜をもつ土器ではないかと考え、朝鮮半島・国内での類例を探したが、部分的類似例はあるものの、同形態のものは確認できなかった。ただし、朝鮮半島系土器の可能性を否定するものではない。今後の類例の出土に期待したい。尚、朝鮮半島系土器に関連して、近くある大年寺山横穴群出土の第45図３（進藤・佐藤・菊地：1990）の在地窯産とされている小型の長頸壺は、体・底部の形態と体部下端の平行叩き目が、「百済系」とされている瓶形の陶質土器に類似している。

(謝辞)類例の探索においては、江浦　洋氏、亀田修一氏、定森秀夫氏、酒井清治氏に全面的御協力と御指導を頂いた。記して、感謝する次第である。

２．遺　　構

今回の調査で検出された横穴墓は８基であるが、土手内横穴Ｂ地点の横穴墓の分布は、金洗沢北岸の500m 以上の範囲に及ぶものと考えられ横穴群全体の規模は不明である。その中で今回調査されたのは、全体の東端に近い部分であると考えられる。検出されたのは、東端の７号墓から西端の８号墓までの約50m の範囲で、標高は30～33m の範囲内におさまっている状況である。横穴墓の配置関係をみると、東端の７号墓が隣の横穴墓から25m と最も離れている他は、７～13m の間隔となっており、横穴相互に重複関係はない。３号墓と６号墓の間は、13m の距離があるが、この中に４号・５号墓があり、３ｍ前後とかなり近接している。羨門部の標高で

は、７号墓が30.2m と最も低く、４号墓が33.0m、５号墓が32.8m と最も高くなっている他はその範囲内に分布している。７号墓を除く６基は基本的に玄室、玄門、羨道、羨門、前庭部まで残存している。７号墓については検出時の削平のため羨道～前庭部の境界が不明であるが、他の７基と同様の構造であると考えられる。その中で形態的な差異の認められる玄室の立面形と平面形及び棺座の有無、形態によって本横穴群の構造上の分類をしておきたい。

(1) 立　面　形

A　類：ドーム形を呈するもの……２、３、４、６、（７、８）号墓

B　類：アーチ形を呈するもの……１、５号墓

(2) 平　面　形

I　類：正方形を呈するもの……１、２、３、７、８号墓

II　類：隅丸正方形を呈するもの……６号墓

III　類：楕円形を呈するもの……４号墓

IV　類：長方形を呈するもの……５号墓

(3) 棺座の有無

1　類：棺座を有するもの。棺座の形態によって細分される。

1a　類：３棺座のもの……２、３、７号墓

lb　類：１棺座のもの……８号墓

2　類：棺座の無いもの……１、４、５、６号墓

以上のことを整理すると

1　群：立面形A類、平面形I類、棺座１類のもの

A－I－la……２、３（７）号墓

A－I－lb……（８）号墓

2　群：立面形A類、平面形II類、棺座２類のもの

A－II－２……６号墓

3　群：立面形A類、平面形III類、棺座２類のもの

A－III－２……４号墓

4　群：立面形B類、平面形I類、棺座２類のもの

B－I－２……１号墓

5　群：立面形B類、平面形IV類、棺座２種のもの

B－IV－２……５号墓

さらに各群の特徴を述べると、１群は今回調査した横穴墓群中でも大形の規模のもので、立面形はドーム形で正方形を呈し、棺座を有するものである。b類とした１棺座の８号墓につい

ても、棺座の形態は奥壁及び左・右の側壁に面した「コ」字状であり、3棺座のそれぞれの境界の無いもので、基本的に3棺座と同様のものと考えられるものである。

2群は平面形は隅丸の正方形で、立面形はドーム形を呈し、棺座の無いものである。床面の中央部に玄室の奥壁から羨門部まで排水溝が付設されている。

3群は比較的小規模なもので平面形は楕円形、立面形はドーム形を呈し、棺座の無いものである。玄門から羨道にかけての壁面はその境が明遼ではなく、他の横穴墓と形態的な相異が認められる。床面中央には玄室壁沿いと奥壁から前庭部にかけて排水溝が付設されている。

4群は規模は1群に次ぐものである。平面形は楕円形・立面形はアーチ形を呈し、棺座の無いものである。

5群は、今回調査した横穴群中で最小の規模のものである。平面形は長方形、立面形はアーチ形を呈し、棺座の無いものである。玄室右壁沿いに排水溝が付設されている。玄室の入口、玄門の部分にはくびれはなく、玄室と玄門の境がみられないという点でも他の横穴墓と大きな相異が認められ、横穴墓の中でも退化した形態を示している。

以上のような1～5群の横穴墓は、玄室内の棺座を有するもの（1群）と有さないもの（2～5群）の、大きく2つのグループに分けられる。さらに棺座を有する1群の横穴墓は、3棺座のものと1棺座のものがあり、1棺座のものは壁沿いに「コ」字状に付設されたもので、3棺座の境が無くなった簡略化したものと考えられる。2～5群の横穴墓では、3群及び5群とした4号及び5号横穴墓は形態上から他の横穴墓と比較して後出的なものであると考えられる。宮城県内における横穴墓の形態的な変遷は一般に、平面形は正方形→長方形へ、立面形はドーム形→アーチ形へ、斜面底位から高位へと移行すると考えられている。(木村他：1989)これらのことを考え合わせると、la群→lb群→2群→4群→3群→5群という変遷が考えられ、実際には3・7号墓→2・8号墓→1・6号墓→4・5号墓という変遷が想定される。

〔4〕 その他の遺構と遺物

1．その他の遺物

土手内窯跡群、横穴墓群出土遺物以外の遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器類、石器、石製品がある。ここでは特徴的な縄文土器、須恵器について述べる。

(1) 縄文土器

縄文土器は、土坑堆積土及び各調査区表土から出土している。ＳＫ10出土土器（第118図）は摩滅のため原体は不明であるが縄文が施文され、胎土中に植物繊維が混入している。表土出土土器（第120図～121図）についても、縄文あるいは撚糸文が施文され、口唇部に撚糸文の原体を押圧しているものもみられる。胎土中に植物繊維が混入しているものが多く、土手内遺跡出土土器同様早期末～前期初頭のものであると考えられる。また、第120図7は、刻目の付された

線文が施文されており、同様に大木３式に位置付けられる。これらは、その出土状況から斜面の上部に位置する土手内遺跡からの流れ込みの遺物であると考えられる。

⑵　須恵器

須恵器は窯跡群、横穴墓群の上部の東側平場表土より出土している。第121図８・13、同９～12・14がそれぞれ同一個体であり、肩部から口縁部にかけてのものである。これらは断面的な資料であるため全体的な器形などの詳細は不明であるが、前者は無文の短頸壺、後者は、頸部及び口縁部に極く細い櫛描波状文が施文され、口縁部と頸部の境に隆帯がみられるもので瓶であると考えられる。編年的な位置付けについては、上記の特徴から、５世紀中葉から後葉に位置付けられるものと考えられる。これらは、その出土状況から斜面の上部に位置する土手内遺跡からの流れ込みの遺物であると考えられるが、本遺跡の南約300m付近に位置する金山窯跡と同時期の遺物と考えられ、金山窯跡の製品である可能性もあり、その関係が注目される。

２．その他の遺構

窯跡群、横穴墓群の他に土坑10基、溝跡１条が検出されている。

⑴　土　　坑

土坑は調査区内、西側緩斜面及び東側平場に散在している。ＳＫ10土坑を除く９基は、所謂焼土遺構とされているもので、土手内遺跡で検出されているものと同様のものである。平面形は、長方形のものが多く、隅丸となるものや正方形のものなどがある。壁面及び底面に顕著な焼面が見られ、炭化物が付着している。特にＳＫ５土坑の場合、東壁が他の壁面に比べ、還元されて青灰色に焼け締り、更にその外側の地山まで赤変しており、かなりの火熱の影響があったものと思われるが、その性格を明らかにできるような資料は認められなかった。

⑵　溝　　跡

東側の平場に１条検出された。東側と西側に分かれて検出されたが、本来１条の溝が、削平によって中央部が途切れていると考えられる。平場と北側の斜面の間の何らかの区画施設であるものと考えられる。

〔５〕　まとめ

１．土手内遺跡、土手内窯跡、土手内横穴墓群Ｂ地点は、青葉山丘陵から派生する丘陵の先端部に立地し、土手内遺跡は丘陵上に、窯跡及び横穴墓群は南斜面中腹～裾部に位置している。

２．土手内遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居１軒、土坑１基が検出され、天王山式から踏瀬大山式期にかけての遺物が出土した。古墳時代の前期から中期にかけての竪穴住居跡が11軒、竪穴遺構４基、土坑が40基検出され、塩釜式期から南小泉式期の遺物が出土した。特にⅡＡ群土器の新段階の住居跡でカマドに類した施設が検出された。またⅡＢ群土器段階の住居群は、近くにある金山窯跡や富沢窯跡との関連を検討していく必要がある。

3．土手内窯跡では3基の須恵器専用窯跡が検出された。製品はほとんど残存しないが、焼台として利用された甕片及び甕体部を焼成前に切断して加工した焼台が出土しており、製品の痕跡が認められた。出土遺物及び窯体の特徴から窯の実年代については、7世紀第2四半期から中葉を中心とした年代が考えられた。本窯の製品の供給先については明らかではないが、東方約2.5kmに位置する郡山遺跡Ⅰ期官衛との関連が推定される。

4．土手内横穴墓群B地点では8基の横穴墓が調査されたが、今回の調査区は横穴墓群の東端部にあたる。横穴墓の構築年代の上限は7世紀中葉頃であり、使用年代の下限は8世紀第2四半期である。尚、被葬者についてはそれを推定できる資料はみられなかった。

引用・参考文献

丹羽　茂（1985）：「今熊野遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第104集

武末純一（1991）：『土器からみた日韓交渉』学生社

渡辺泰伸（1991）：「3須恵器の編年　9東北」『古墳時代の研究』雄山閣

杉原荘介・大塚初重編集（1971～73）：『土師式土器集成』1～3

石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編集（1991）：『古墳時代の研究』6

金　元龍監修（1989）：『韓国の考古学』　講談社

東亜大学校博物館（1981）：「金海府院洞遺跡」『古蹟調査報告』第5冊

大阪府埋蔵文化財協会（1987）：第21回埋蔵文化財研究集会資料『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第Ⅰ～Ⅲ分冊

中村　浩（1990）：『研究入門　須恵器』　柏書房

定森秀夫（1990）：「日本出土陶質土器の原郷」『季刊　考古学』第33号

木下　亘（1991）：「5陶質土器とその編年」『古墳時代の研究』6

中村　浩（1978）：「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書』第30集

大阪府埋蔵文化財協会（1989・90）：「陶邑・大庭寺遺跡」「陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ」『大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第41・50集

韓式系土器研究会（1989・91）：『韓式系土器研究』Ⅱ・Ⅲ

柳沼賢治（1990）：「南山田遺跡出土の須恵器をめぐって」『郡山市埋文ニュース』第31号　郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団

根本信孝他（1982）：「道南北遺跡」『白河市埋蔵文化財調査報告書』第6集

辻　秀人（1989）：「東北古墳時代の画期について（その1）―中期後半の画期とその意義―」『福島県立博物館紀要』第3号

米田敏幸（1991）：「2土師器の編年　1畿内」『古墳時代の研究』6

大塚昌彦（1988）：『空沢遺跡第8次発掘調査報告書』渋川市教育委員会

廣岡　敏（1989）：「福島県いわき地方の土師器」『福島県に於ける古代土器の諸問題―特に5～7世紀を中心として』シンポジウム資料

丹羽　茂（1983）：「朽木橋横穴墓群・宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ

白鳥良一・古川一明（1991）：「2土師器の編年　8東北」『古墳時代の研究』6

柳沢賢治（1989）：「福島県中通り地方の土師器」『福島県に於ける古代土器の諸問題』シンポジウム資料

佐藤甲二他（1985）：「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書」第80集

高倉敏明（1981）：「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第2集

白鳥良一・加藤道男他（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第35集
阿部博志・千葉宗久（1980）：「台ノ山遺跡―東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第62集
渡辺泰伸他（1974）：「富沢窯跡」『古窯跡研究会研究報告書」第３冊
阿部　恵（1991）：「新峯崎遺跡」『宮城県村田町文化財調査報告書』第９集
柳田康雄（1991）：「２土師器の編年　２九州」『古墳時代の研究」６
佐藤　洋（1987）：「六反田遺跡Ⅲ」『仙台市文化財調査報告書』第102集
岩崎卓也（1989）：「古墳分布の拡大」『古代を考える　古墳』
寺沢　薫（1986）：『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告書第49冊
樋口吉文（1978）：「四ツ池遺跡出土の須恵器」『陶邑Ⅲ所収―大阪府文化財調査報告書』第30集
坪之内　徹（1989）：「韓式系土器と７世紀の土師器」『韓式系土器研究』Ⅱ
渡部　紀（1988）：「下ノ内浦遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第115集
佐藤次男（1988）：「茨城県における弥生時代終末期の一様相―とくに十王台式土器と五領式土器の共伴関係について―」『考古学叢考』下巻
友廣哲也（1991）：「群馬県における古墳時代前期の土器様相」『群馬考古学手帳』VOL. 2
村田健二（1991）：「関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅰ」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第８号
佐藤　洋（1990）：「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第140集
白石太一郎（1985）：「年代決定論」『岩波講座　日本考古学』Ⅰ
主浜光朗（1988）：「泉崎浦遺跡」「仙台市文化財調査報告書』第119集
篠原信彦・藤沢　敦他（1990）：「下ノ内遺跡―仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ」『仙台市文化財調査報告書』第136集
岩崎直也（1987）：「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第39巻第４号
石本　弘（1989）：「東北地方における古墳時代の須恵器」『福島県に於ける古代土器の諸問題』シンポジウム資料・コメント
酒井清治（1990）：「陶質土器と初期須恵器」『季刊　考古学』第33号
伊東信雄・伊藤玄三・内藤政恒（1965）：「宮沢瓦窯跡」『腰浜廃寺』福島市教育委員会
田辺昭三（1981）：『須恵器大成』角川書店
木本元治・福島雅儀（1988）：「国道113号バイパス遺跡調査報告書Ⅳ―善光寺遺跡」『福島県文化財調査報告書』第192集
木本元治他（1989）：「国道113号バイパス遺跡調査報告書Ⅴ―高田遺跡」『福島県文化財調査報告書』第211集
木本元治（1989）：「善光寺・黒木田遺跡及び宮沢窯跡群出土の飛鳥時代の瓦」『福大史学』46・47合併号
伊東信雄・氏家和典（1968）：「仙台市燕沢善応寺横穴群調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第３集
木村浩二・渡辺雄二（1989）：「仙台市茂ケ崎横穴墓群発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第130集
古川一明（1983）：「宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和57年度）―色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第95集
古川一明（1984）：「宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和58年度）―色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第100集
大谷　徹他（1986）：「神奈川県横浜市緑区奈良町奈良地区遺跡群発掘調査報告書―熊ケ谷東遺跡」奈良地区遺跡調査団
井上　肇他（1978・1979）：「日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」『埼玉県遺跡発掘調査報告書』第17・18集
高橋一夫（1980）：『埼玉県比企郡滑川村羽尾窯跡発掘調査報告書』滑川村教育委員会
関根忠邦（1977）：『幡山遺跡発掘調査報告』常陸太田市教育委員会
田辺昭三（1966）：『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ
中村　浩（1976）：「陶邑Ⅰ」『大阪府文化財調査報告書』第28集

氏家和典（1972）：「仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書」仙台市教育委員会
田中則和（1987）：「善応寺横穴墓群、法領塚古墳出土鉄・銅製品整理報告書」『仙台市博物館調査研究報告書』第７号
丹羽　茂・小野寺祥一郎・阿部博志（1981）：「東北新幹線関係調査報告書Ｖ―清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第77集
古川一明（1985）：「色麻町香ノ木遺跡・色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第103集
青沼一民・木村浩二（1982）：「宮城県仙台市郡山遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第142集
奈良国立文化財研究所（1978）：『飛鳥・藤原京発掘調査報告書』II
小笠原好彦（1988）：「古墳時代末期の土器」『季刊考古学』第24号
木本元治（1990）：「南東北地方における歴史時代の須恵器編年Ｉ」『考古学古代史論攷』
藤原　学（1991）：「３須恵器の編年　１近畿」『古墳時代の研究』６
福島正実（1985）：「那谷金比羅山窯跡群」石川県立埋蔵文化財センター
望月精司（1991）：『戸津古窯跡群』Ｉ　小松市教育委員会
木村浩二・長島栄一他（1984）：「宮城県仙台市郡山遺跡Ⅳ」『仙台市文化財調査報告書』第64集
進藤秋輝・佐藤則之・菊地芳朗（1990）：「大年寺横穴群」『宮城県文化財調査報告書』第136集
正倉院事務所（1977）：『正倉院の大刀外装』日本経済新聞社
杉山秀宏（1987）：「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』８
岡安光彦（1990）：「東北地方の群集墳造営年代をめぐる諸問題」『日本考古学協会第56回総会研究発表要旨』
末永雅雄（1941）：『日本上代の武器』弘文堂書房
佐々木茂禎・桑原滋郎（1971）：『宮城県遠田郡涌谷町小里長根窯跡』涌谷町教育委員会
真山　悟・佐藤則之他（1987）：「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第116集
奈良国立文化財研究所（1976）：『平城京発掘調査報告』Ⅶ
金子裕之編（1989）：「古代の都と村」『古代史復元』９　講談社
奈良国立文化財研究所（1989）：『平城京展』図録　朝日新聞
齋藤孝正他（1980）：「愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告書（Ｉ）」愛知県教育委員会
後藤健一（1990）：『吉美中村遺跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会
楢崎彰一（1984）：『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会
楢崎彰一他（1983）：『愛知県古窯跡群分布調査報告書（Ⅲ）』愛知県教育委員会
楢崎彰一他（1981）：「老洞古窯跡発掘調査報告書」岐阜市教育委員会
太田昭夫・千葉宗久（1973）：「名取市高館箕輪南台須恵器窯跡について」『宮教考古』第５号
仲田茂司（1989）：「陸奥国における奈良時代土師器の地域性について」『歴史』第72輯
木村浩二・金森安孝他（1985）：「郡山遺跡Ｖ」『仙台市文化財調査報告書』第74集
山内清男（1929）：「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第１巻２号史前学会
興野義一（1968）：「大木式土器理解のために（Ⅲ）」『考古学ジャーナル NO.18』ニューサイエンス社
加藤道男他（1984）：「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第99集
阿部正光他（1983）：「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第４集瀬峰町教育委員会
高橋守克他（1987）：「須江糠塚遺跡」『河南町文化財調査報告書』第１集河南町教育委員会
佐藤信行（1978）：「上ノ原Ａ遺跡」『宮城県一迫町文化財調査報告書』第３集一迫町教育委員会
中村五郎（1976）：「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
太田昭夫他（1988）：「富沢遺跡第24次調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第113集仙台市教育委員会
庄子　敦他（1990）：「利府町郷楽遺跡II」『利府町文化財調査報告書』第５集利府町教育委員会

○第122図　第II群土器分類(1)関係出典

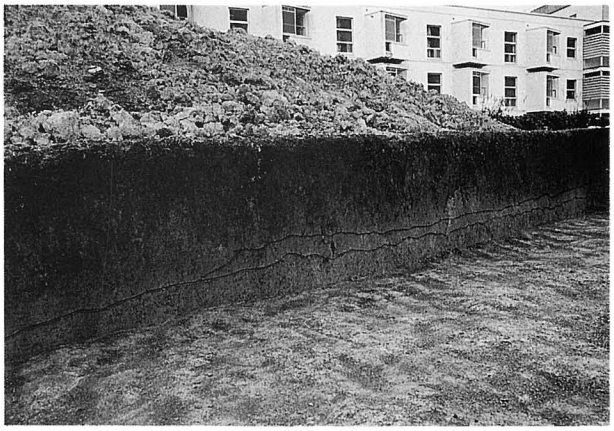
①・③・⑥―東亜大学校博物館（1981）
②・⑦・⑬―木下　亘（1991）
④―樋口吉文（1978）
⑤―中村　浩（1990）
⑧・⑩・⑪―田辺昭三（1981）
⑨―武末純一（1991）
⑫―埋蔵文化財研究会（1987）

写　真　図　版

図版 1　土手内遺跡全景
（東より）

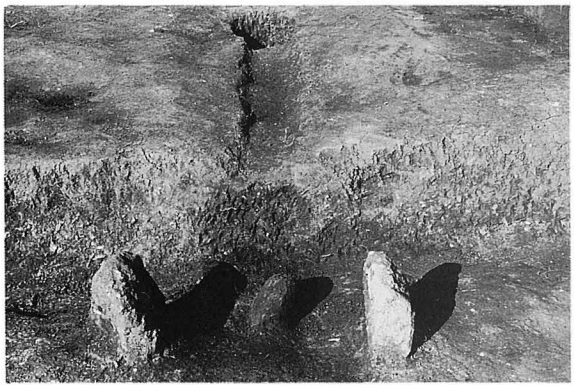
図版 2　土手内遺跡
東半部
（南東より）

図版 3　旧石器確認状況（西より）



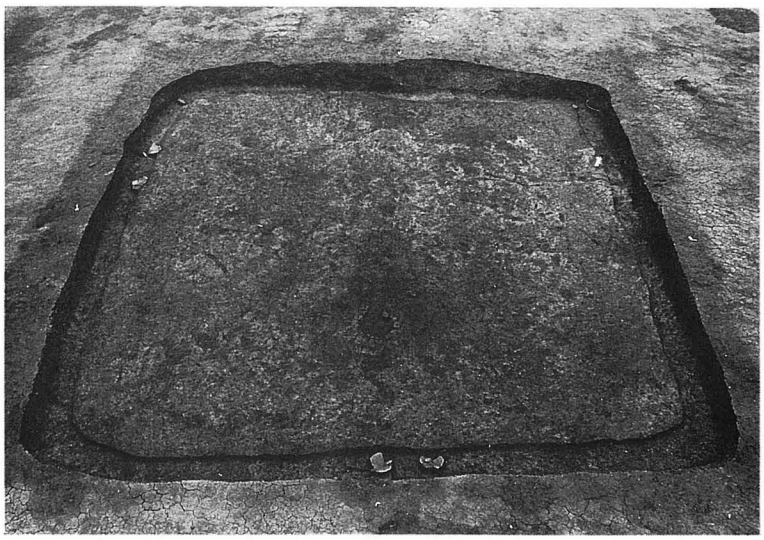
図版 4　旧石器確認トレンチセクション

図版 5　SI- 1 住居跡
（南西より）

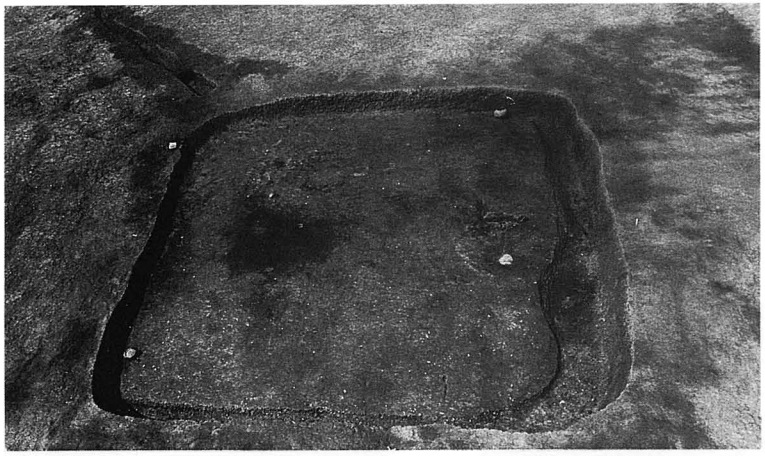


図版 6　SI-1 住居跡カマド（南西より）

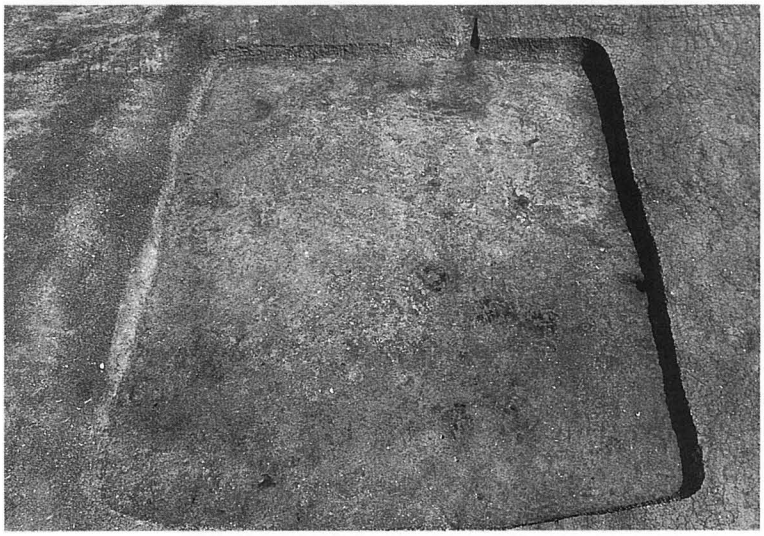
図版 7　SI-1 住居跡出土土器



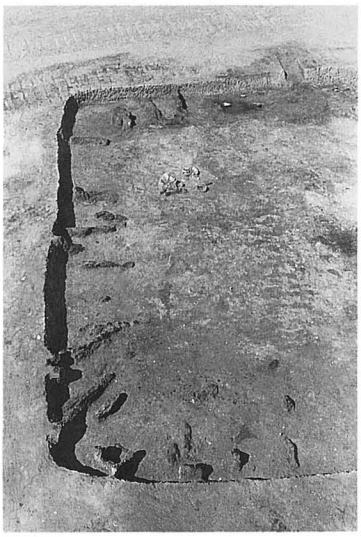
図版 8　SI-2 住居跡
（西より）



図版 9　SI-3 住居跡
（南西より）



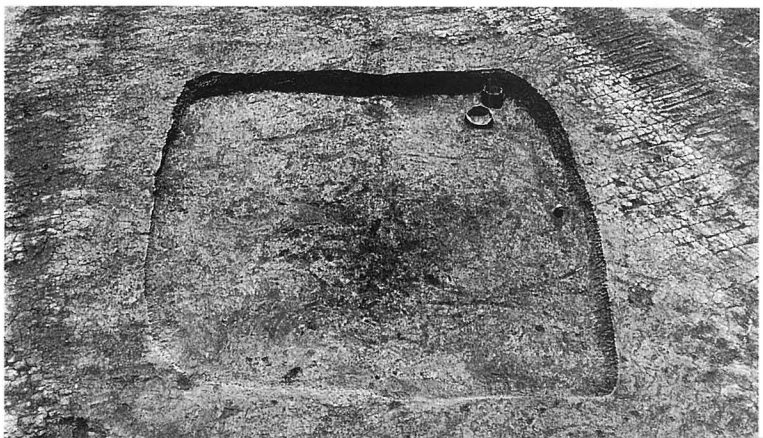
図版10　SI-4 住居跡（南西より）



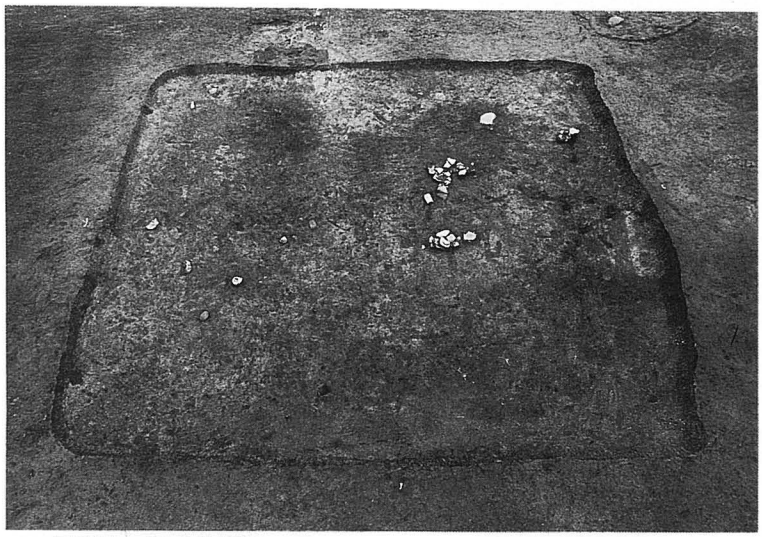
図版11　SI-4 住居跡炭化材
検出状況（南西より）

図版12　SI-4 住居跡遺物出土状況

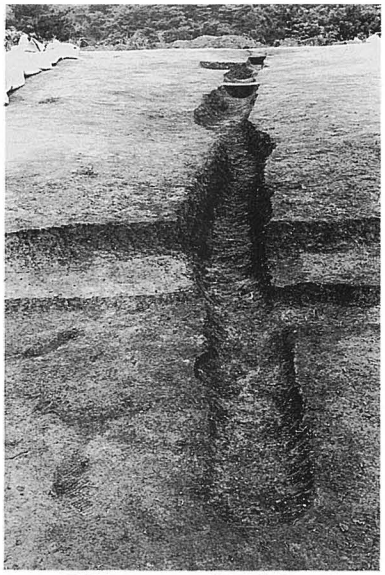
図版13　SI-4 住居跡出土土器



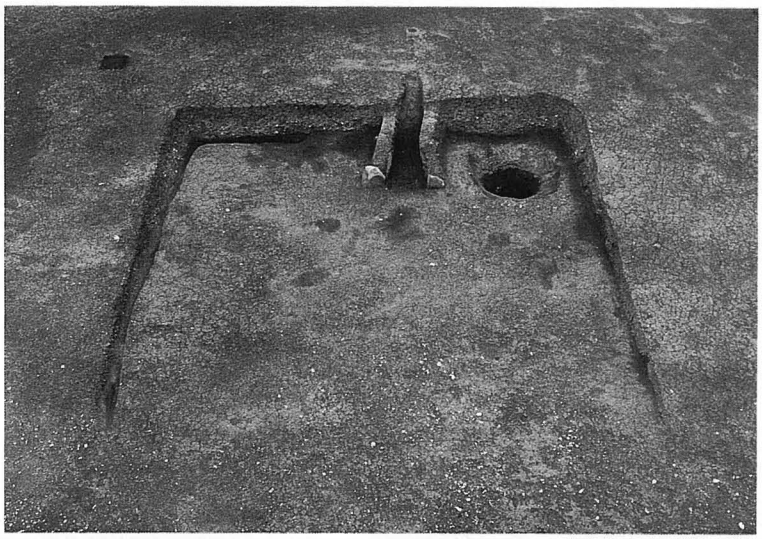
図版14　SI-5 住居跡
（北西より）



図版15　SI-6 住居跡
（西より）



図版16　SI-6 住居跡外延溝
（北より）

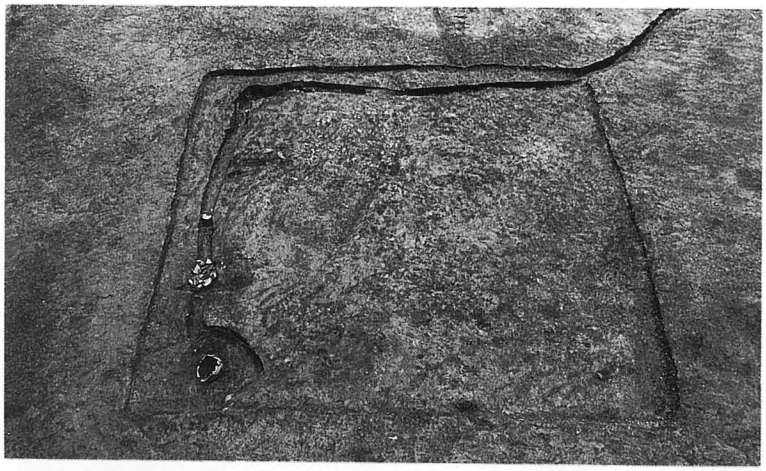


図版17　SI-8 住居跡
（南より）

図版18　SI-8 住居跡貯蔵穴（東より）

図版19　SI-8 住居跡遺物出土状況（南より）

図版20　SI-8 住居跡出土土器



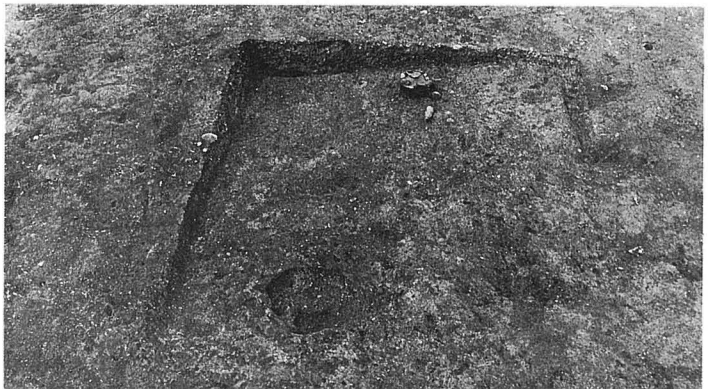
図版21　SI-9 住居跡
（北西より）

図版22　SI-9 住居跡外延溝（北より）

図版23　SI-9 住居跡貯蔵穴遺物出土状況（南より）

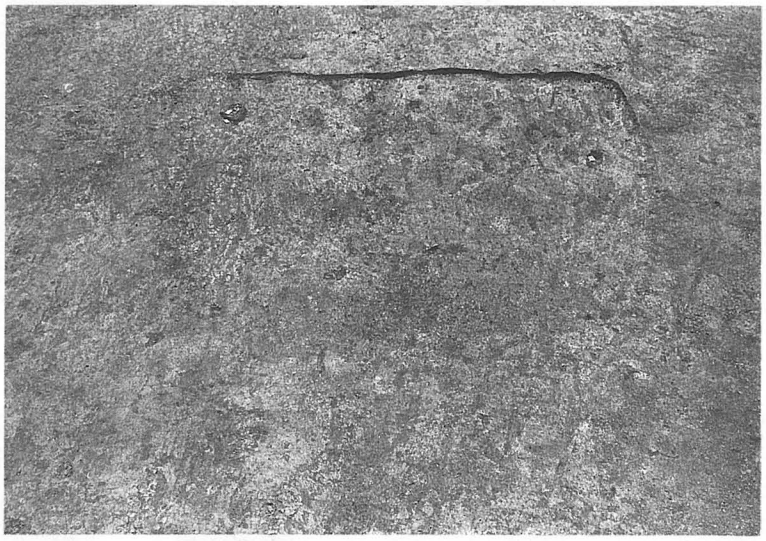
図版24　SI-10 住居跡（南東より）

図版25　SI-10 住居跡外延溝
（南東より）

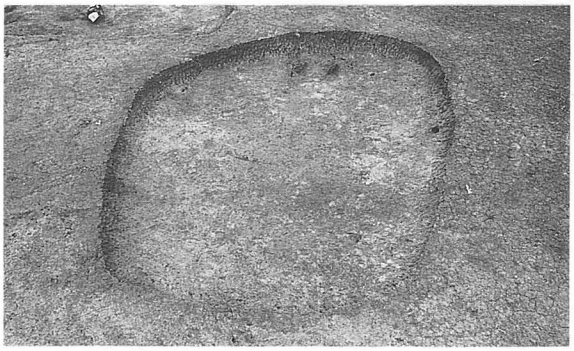


図版26　SI-11 住居跡
（南西より）

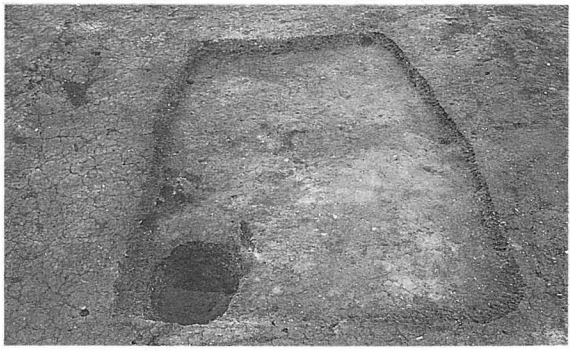
図版27　SI-12 住居跡
（南西より）



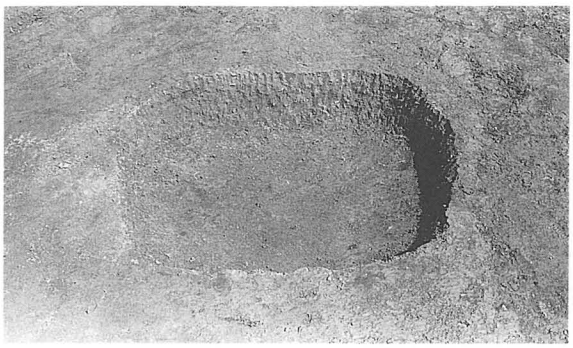
図版28　SI-13 住居跡
（北西より）



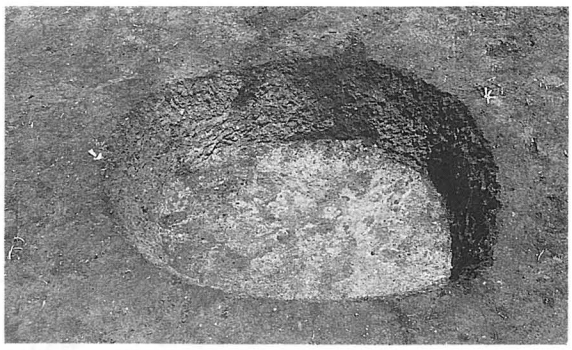
図版29　SI-14 竪穴遺構（南西より）



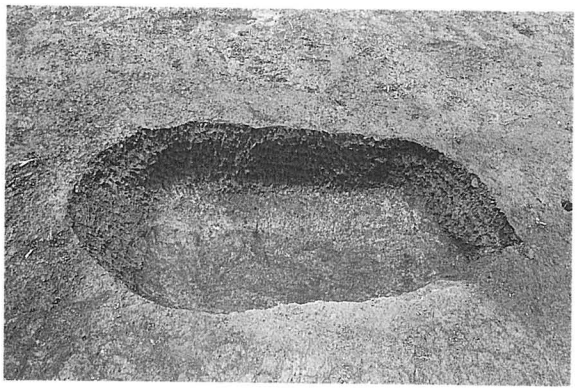
図版30　SI-18 竪穴遺構（西より）



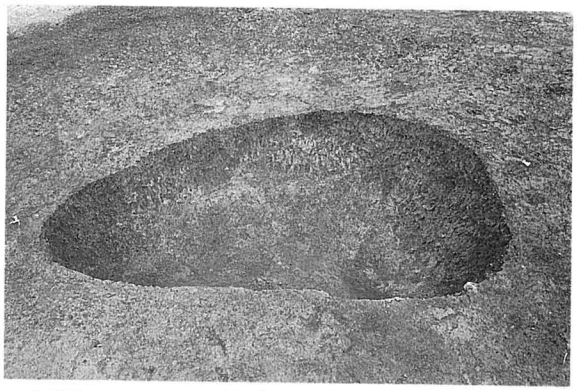
図版31　SK-4 土坑（北西より）



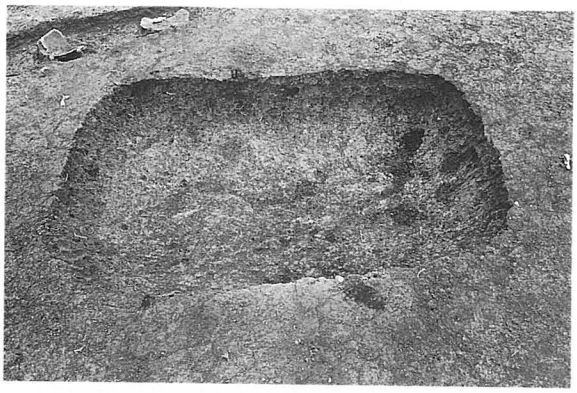
図版32　SK-5 土坑（南西より）



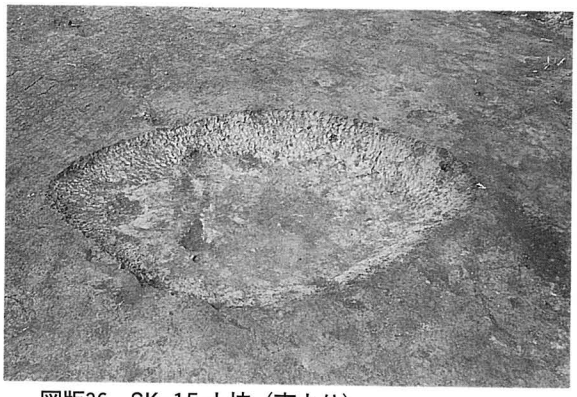
図版33　SK-10 土坑（北より）



図版34　SK-11 土坑（西より）

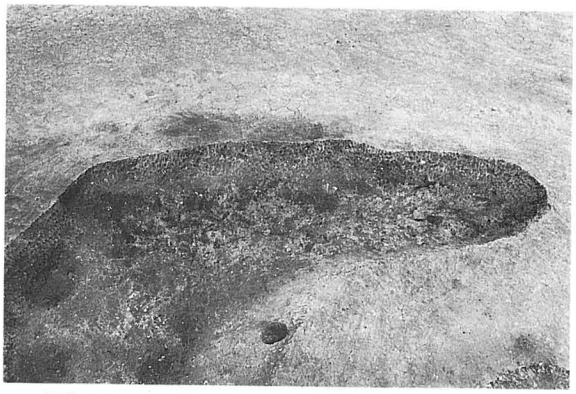


図版35　SK-12 土坑（西より）

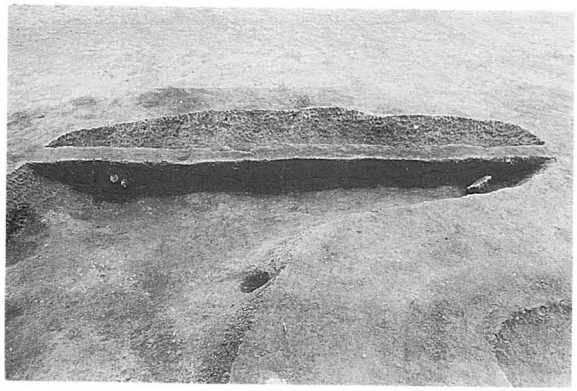


図版36　SK-15 土坑（南より）

図版37　SK-17 土坑（南より）

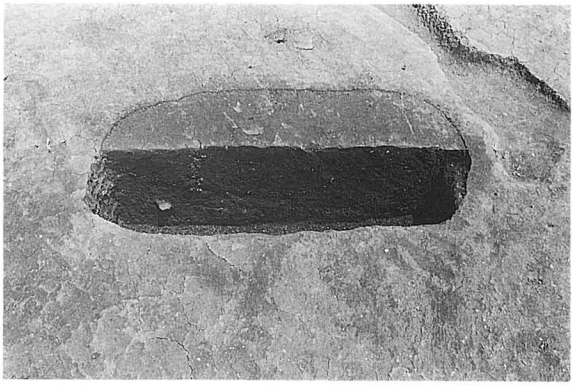


図版38　SK-22 土坑（南西より）

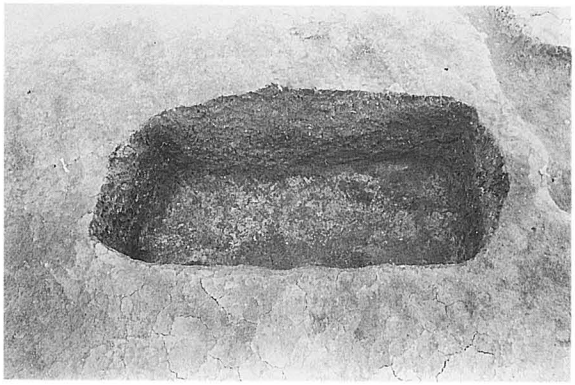


図版39　SK-22 土坑土層断面（南西より）

図版40　SK-22 土坑出土土器

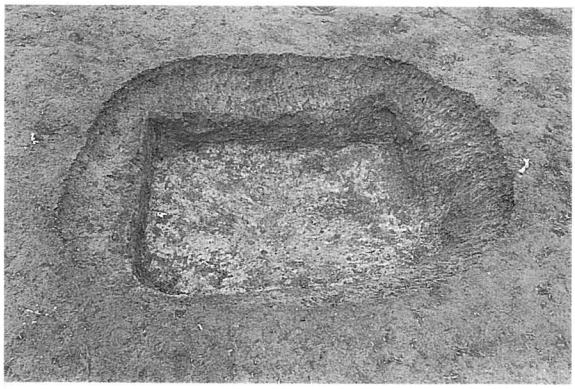


図版41　SK-26 土坑土層断面（南西より）



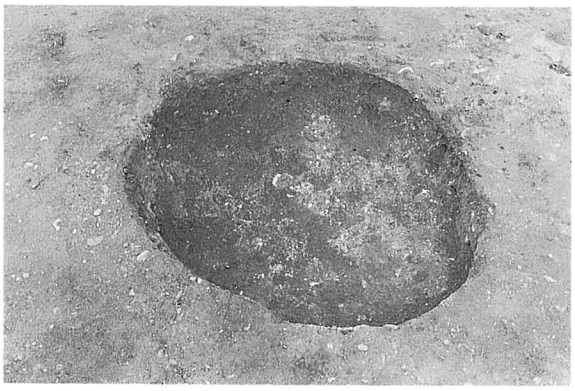
図版42　SK-26 土坑（南西より）

図版43　SK-29（南西より）

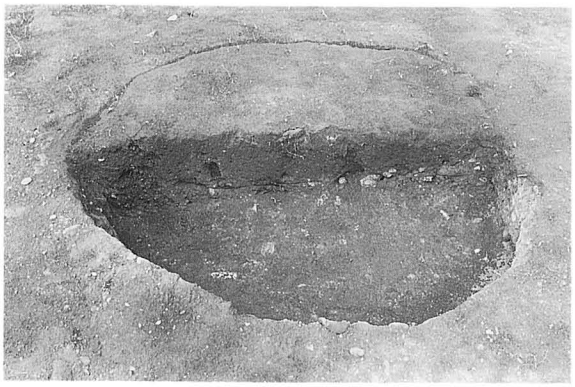


図版44　SK-33 土坑（北東より）

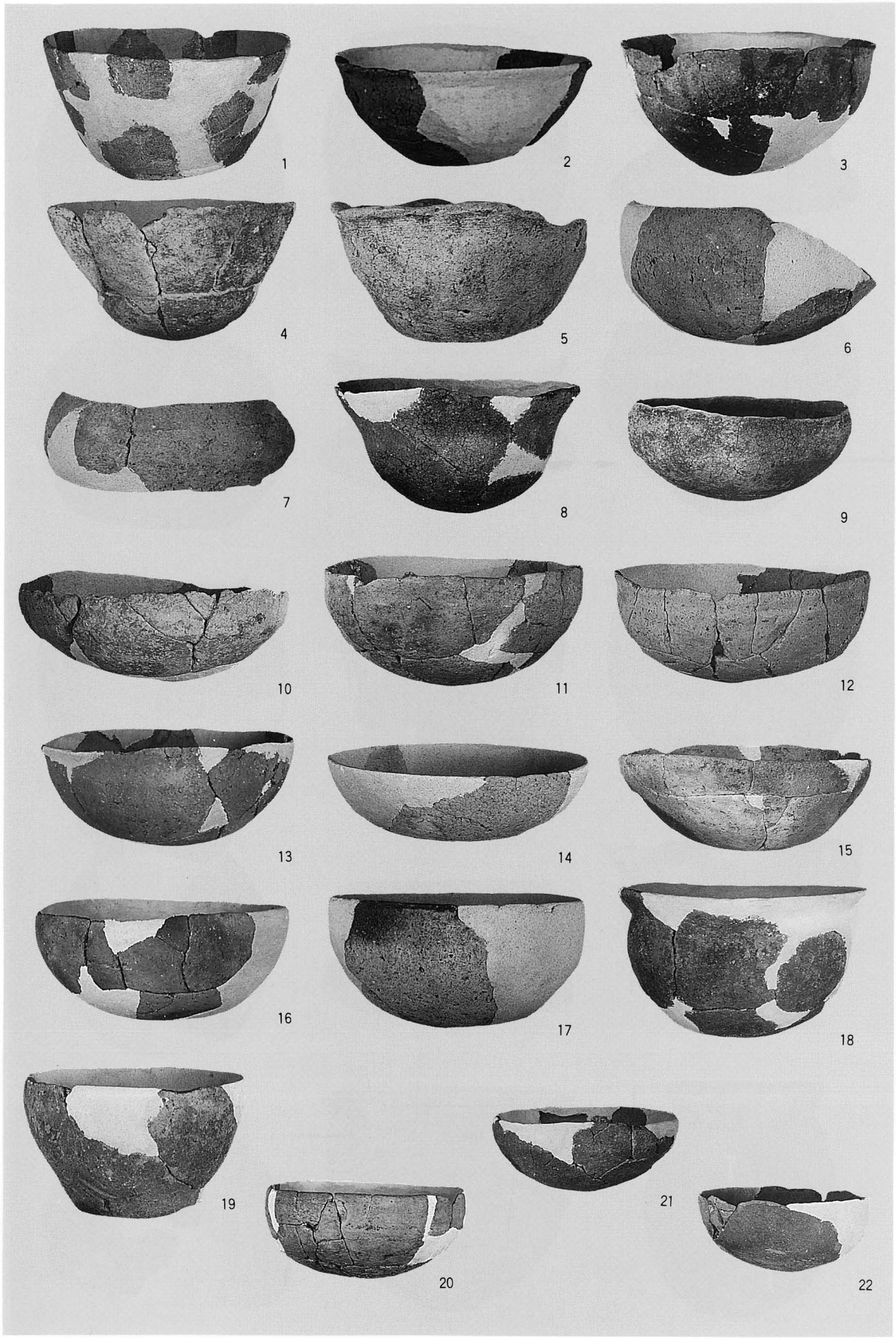
図版45　SK-36 土坑（南より）



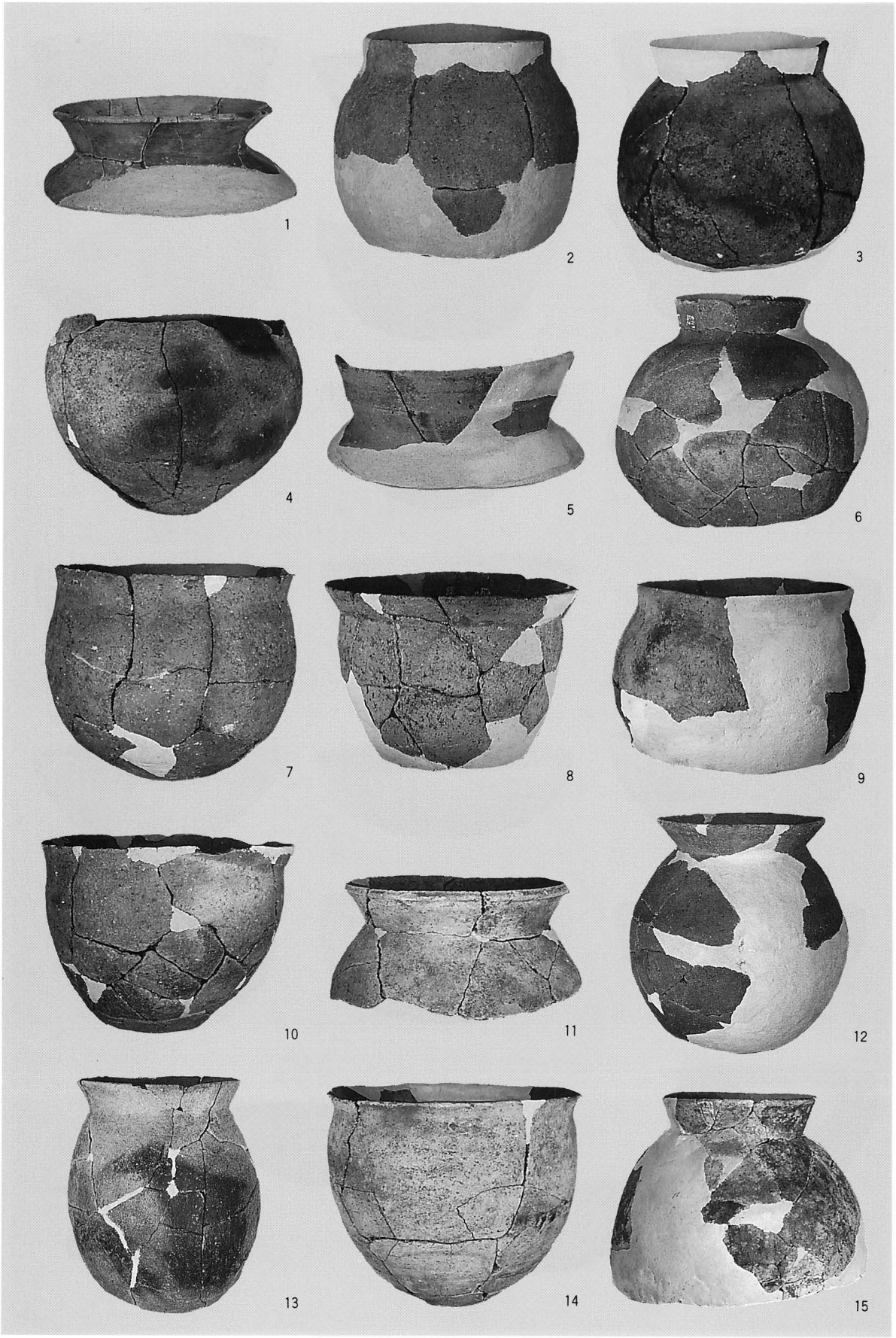
図版46　東区 SK-2（南より）



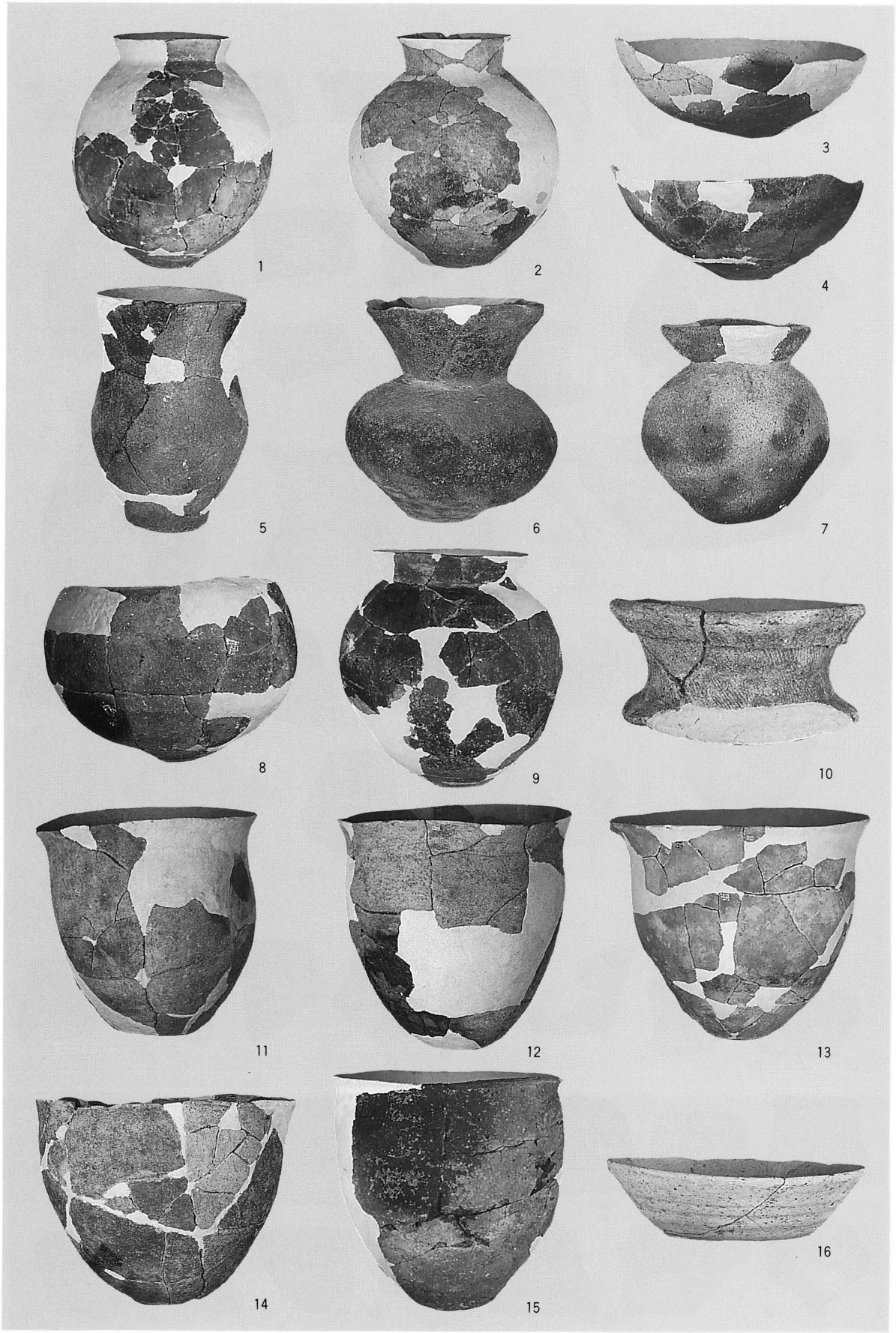
図版47　東区 SK-2 土坑土層断面（南より）



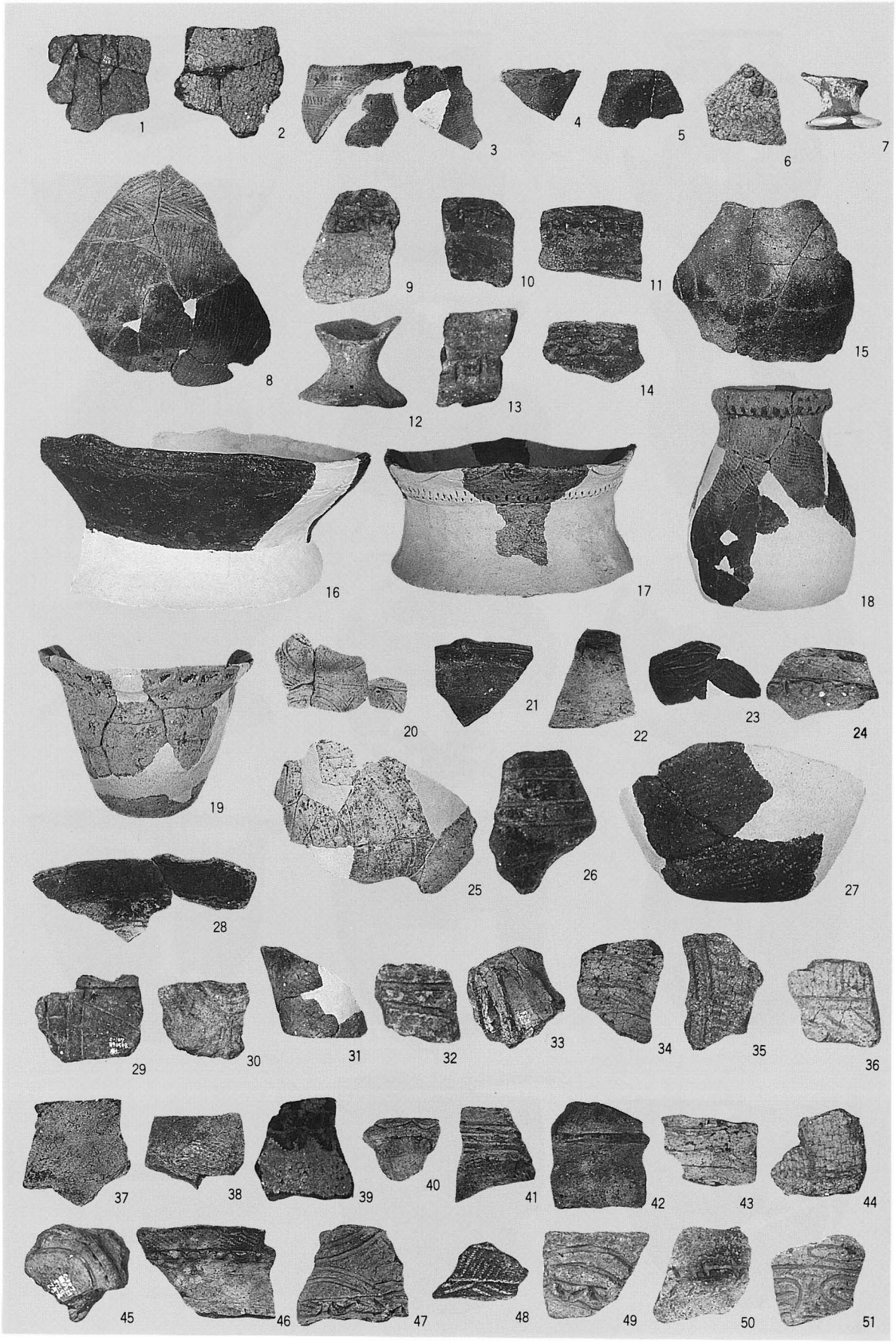
図版48　土手内遺跡出土遺物(1)



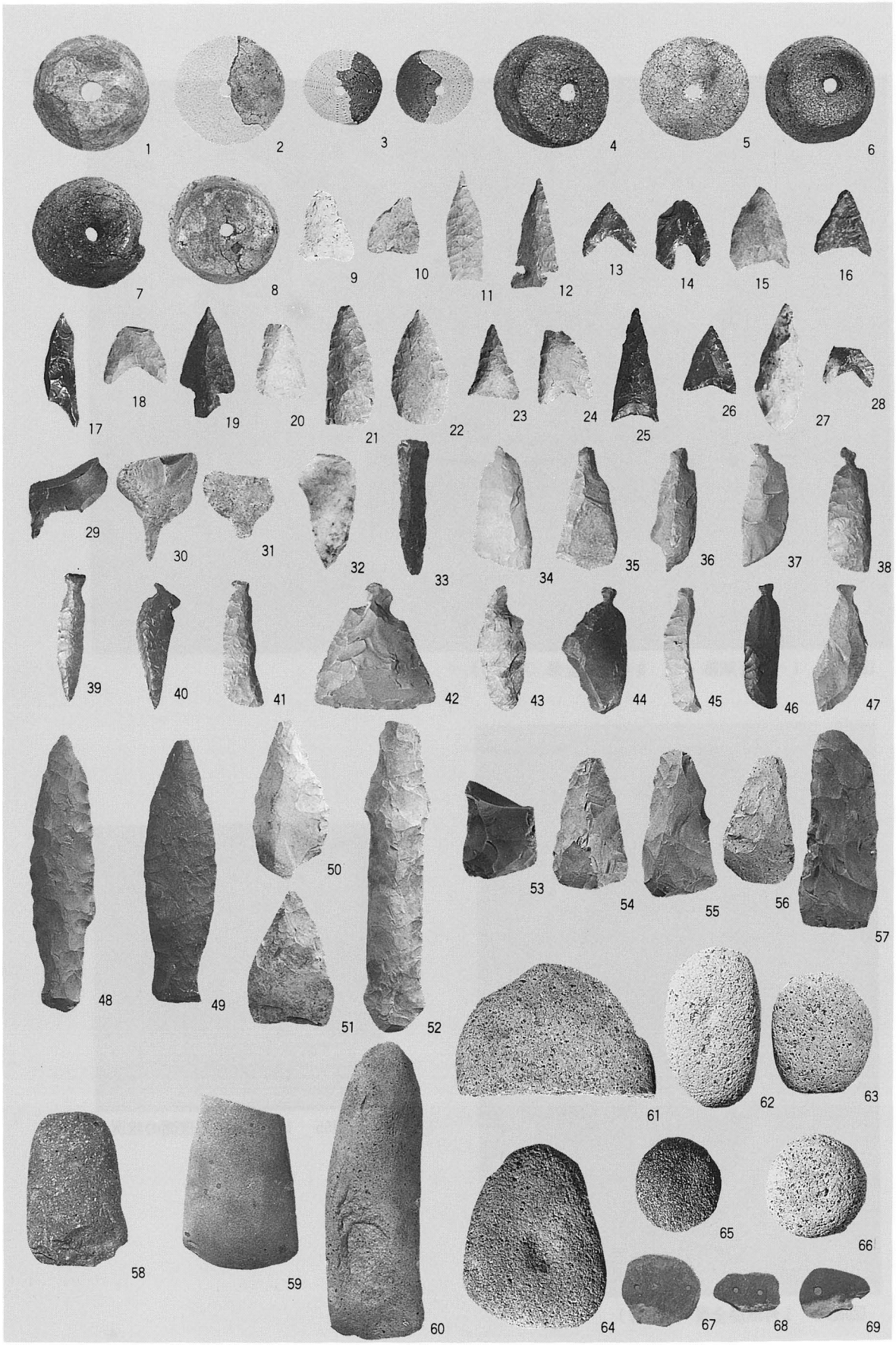
図版49　土手内遺跡出土遺物(2)



図版50　土手内遺跡出土遺物(3)



図版51　土手内遺跡出土遺物(4)



図版52　土手内遺跡出土遺物(5)

図版53　1～3号窯跡・1、8号横穴全景（南より）

図版54　1号窯跡全景（南より）

図版55　1号窯跡床～壁面の状況

図版56　2号窯跡全景
（南西より）

図版57　2号窯跡壁（右）

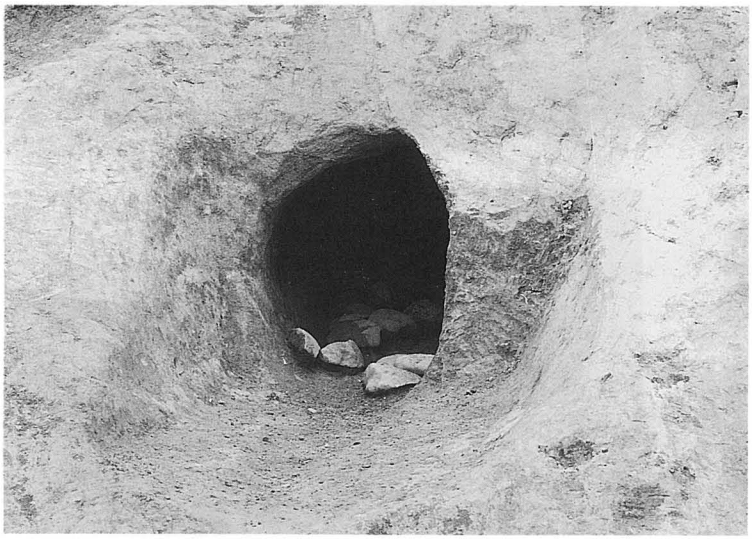
図版58　2号窯跡出土焼台

図版59　3号窯跡最終床面
（南東より）

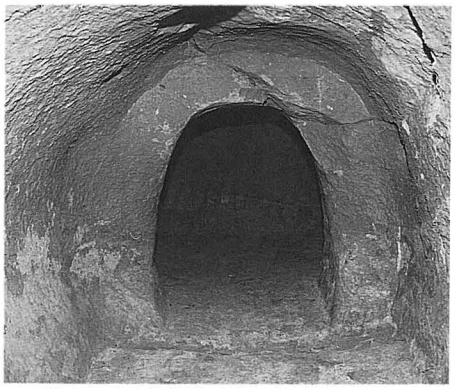
図版60　3号窯跡壁（左）

図版61　3号窯跡出土焼台

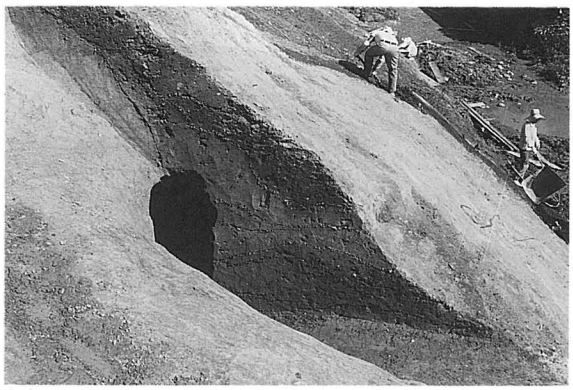
図版62　1～3号横穴（南西より）左1号、中央2号、右3号



図版63　1号横穴全景（南より）



図版64　1号横穴玄門



図版65　1号横穴前庭部土層断面（西より）

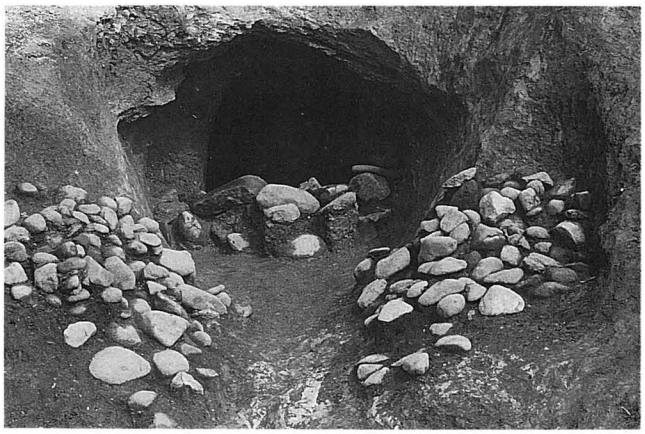
図版66　1号横穴・奥壁

図版67　1号横穴羨門部左壁須恵器出土状況

図版68　1号横穴羨門部右壁土師器出土状況

図版69　1号横穴出土土器

図版70　2号横穴全景（南より）

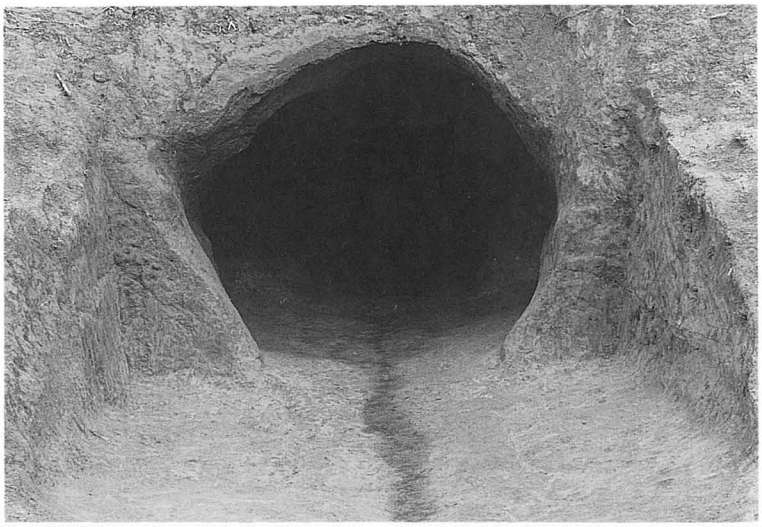


図版71　2号横穴石積状況（南より）

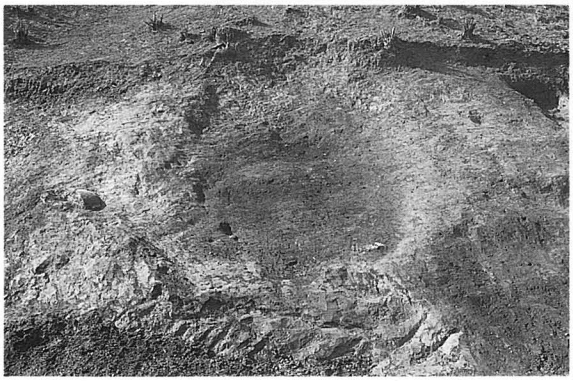
図版72　2号横穴前庭部土層断面（東より）

図版73　2号横穴玄室内部

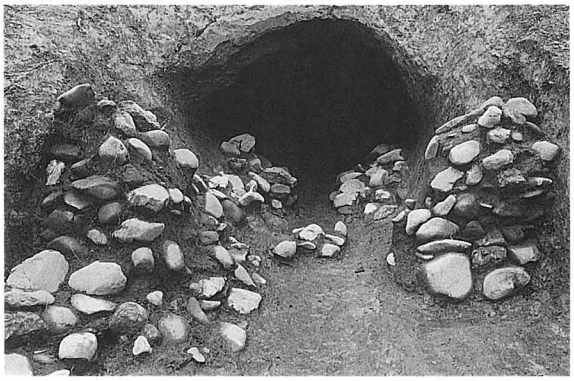
図版74　2号横穴出土土器



図版75
3号横穴全景
（南より）

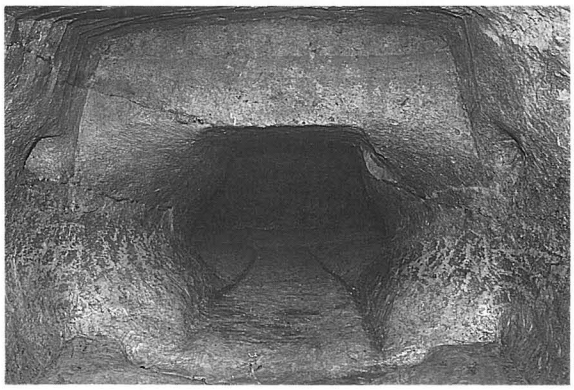


図版76　3号横穴検出状況（南より）



図版77　3号横穴羨門部石積み状況（南より）

図版78　3号横穴前庭部～羨道部土層断面（東より）



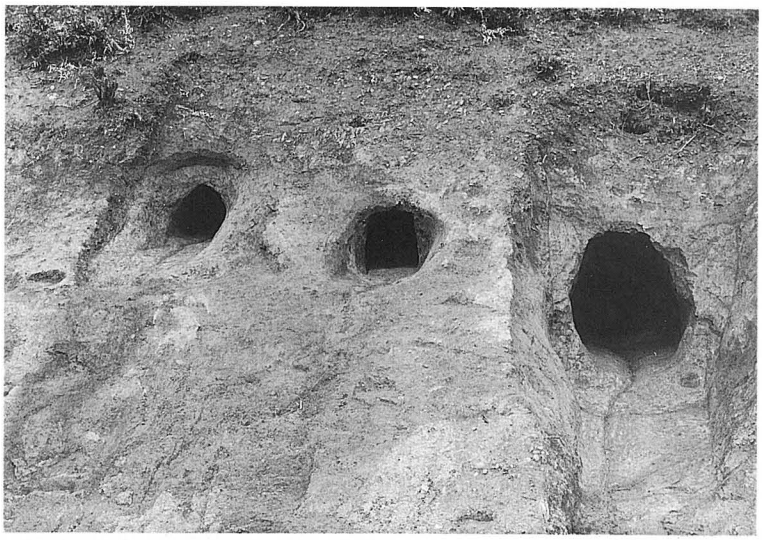
図版79　3号横穴玄門

図版80　3号横穴玄室内部

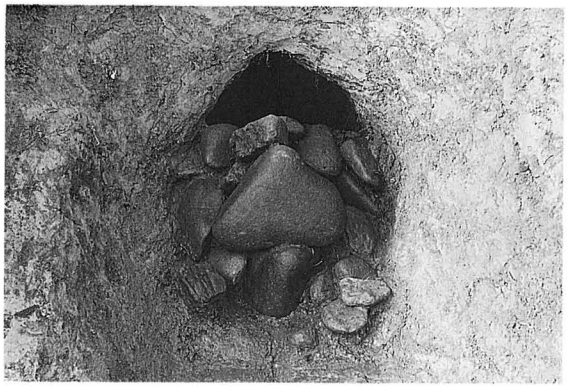
図版81　3号横穴カンヌキ穴

図版82　3号横穴

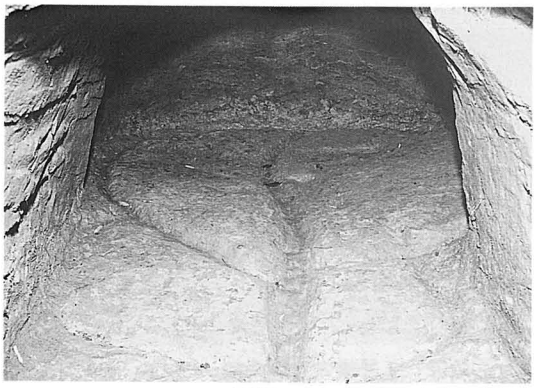
図版83　3号横穴出土土器



図版84　4～6号横穴全景
（南より）



図版85　4号横穴閉塞状況（南より）

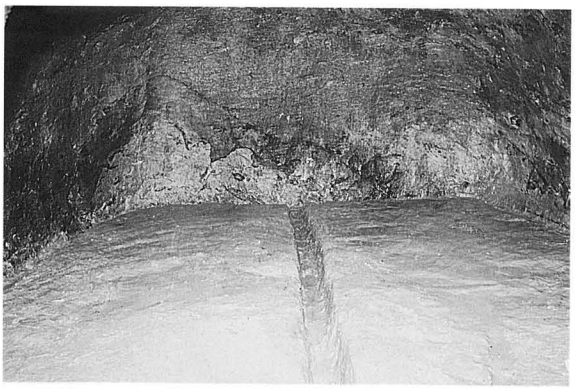


図版86　4号横穴玄室内部

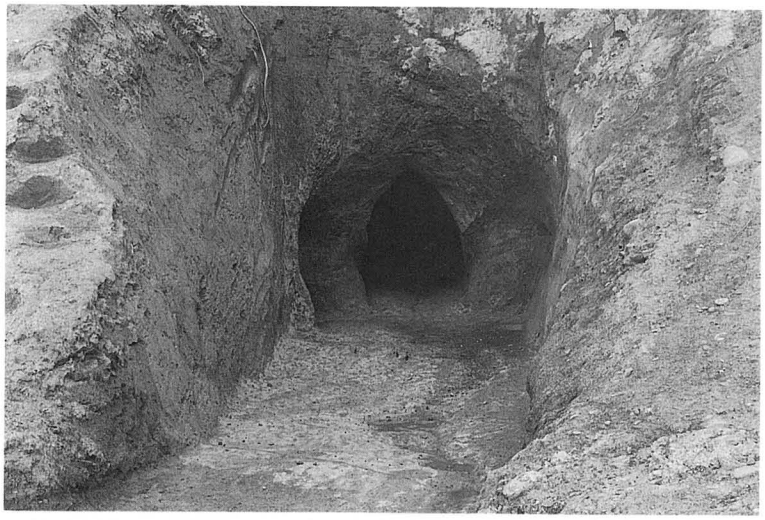
図版87　4号横穴出土土器

図版88　5号横穴玄室内部

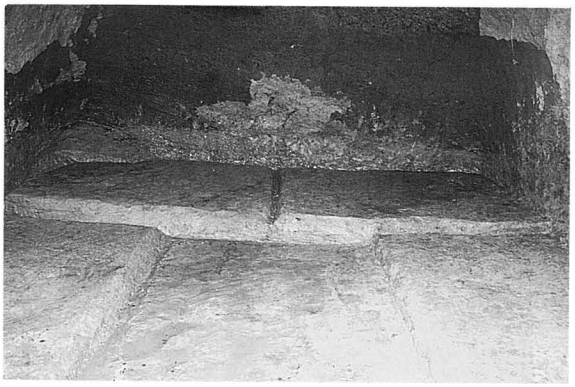
図版89　6号横穴玄門



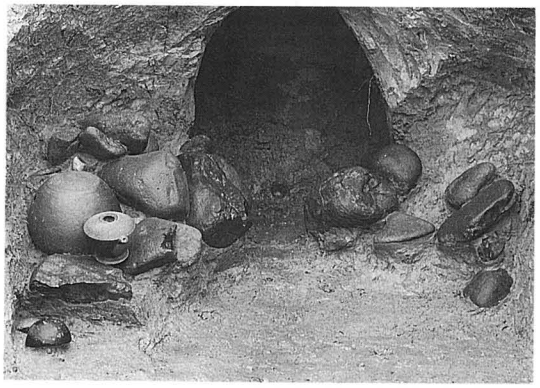
図版90　6号横穴玄室内部



図版91　7号横穴全景
（南より）



図版92　7号横穴玄室内部

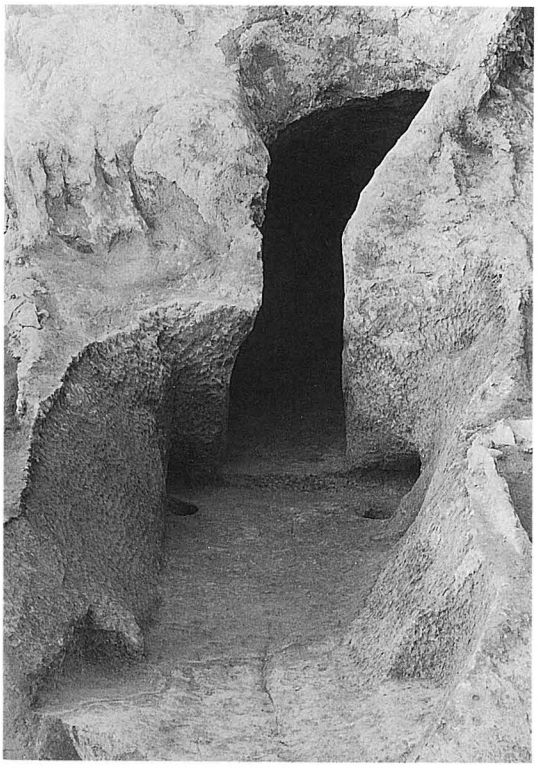


図版93　7号横穴玄門部遺物出土状況、閉塞石

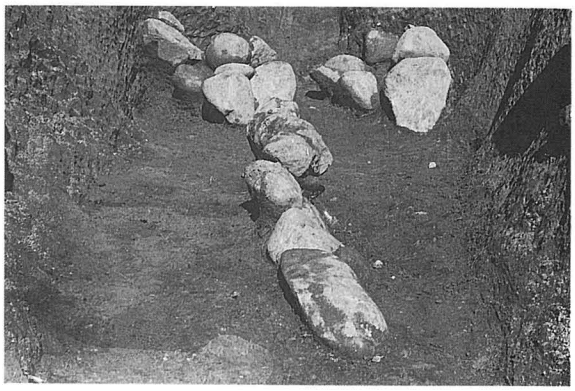
図版94　7号横穴玄門左側鉄器出土状況

図版95　7号横穴玄室直刀出土状況

図版96　7号横穴出土土器

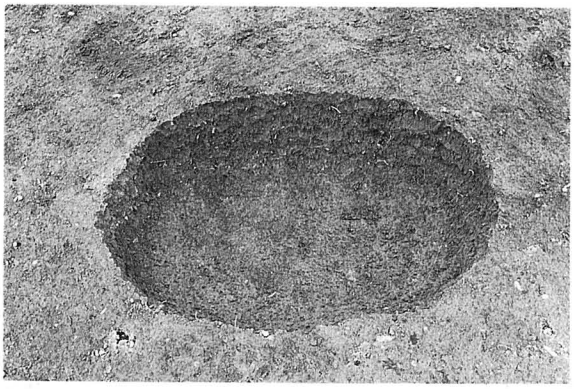


図版98　8号横穴全景（南より）

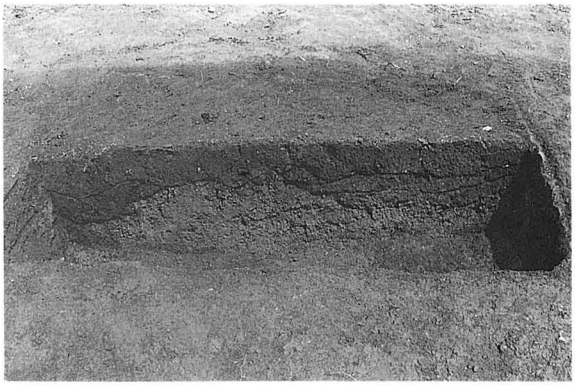


図版97　8号横穴羨道部中央部の石列

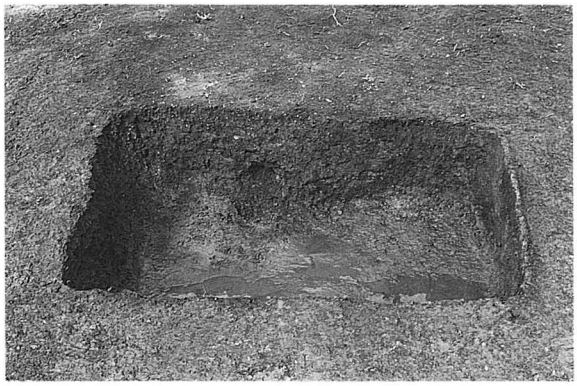
図版99　8号横穴玄室内部



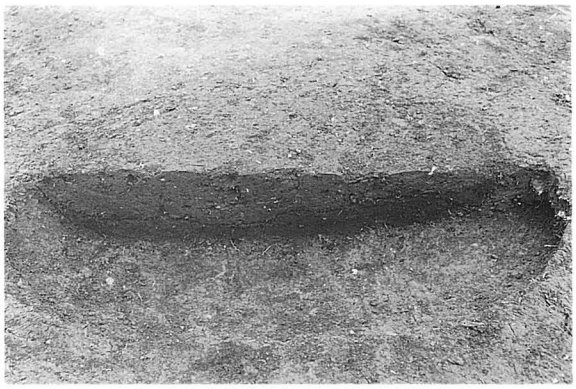
図版100　SK-2土坑（南より）



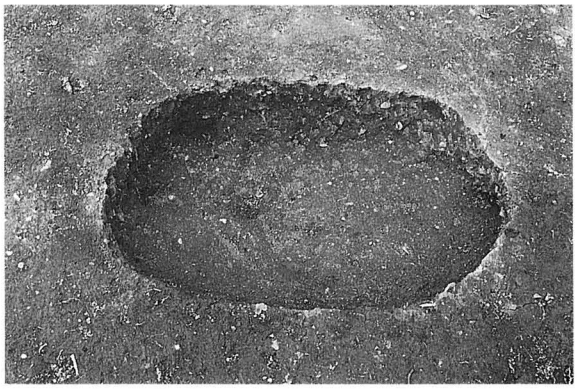
図版101　SK-5 土坑（南西より）



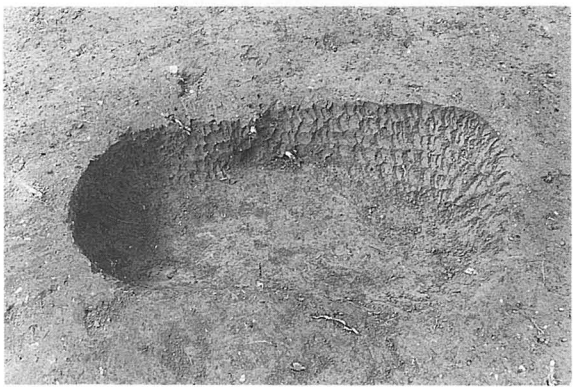
図版102　SK-5 土坑（南西より）



図版103　SK-9 土坑土層断面（南より）

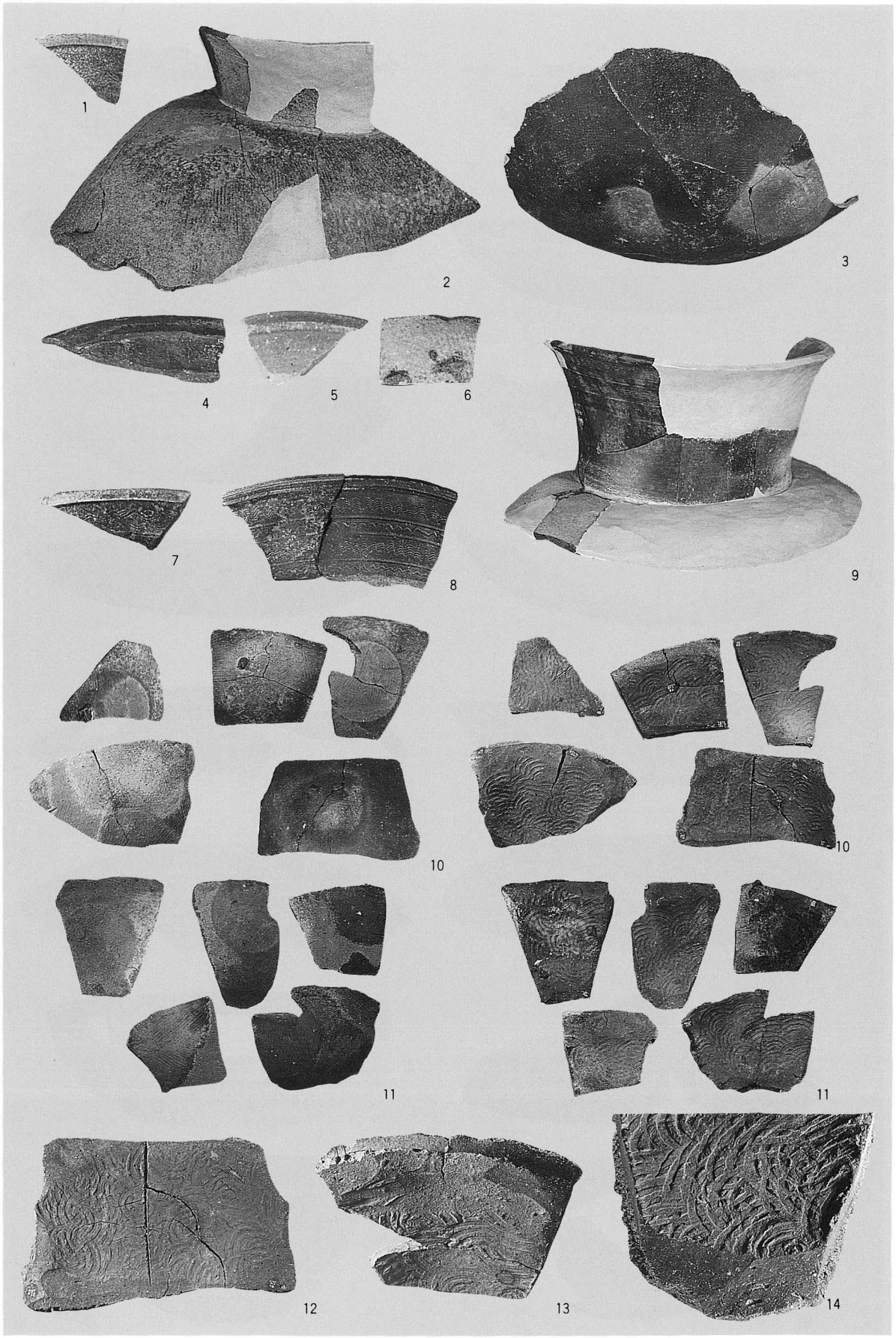


図版104　SK-9 土坑（南より）

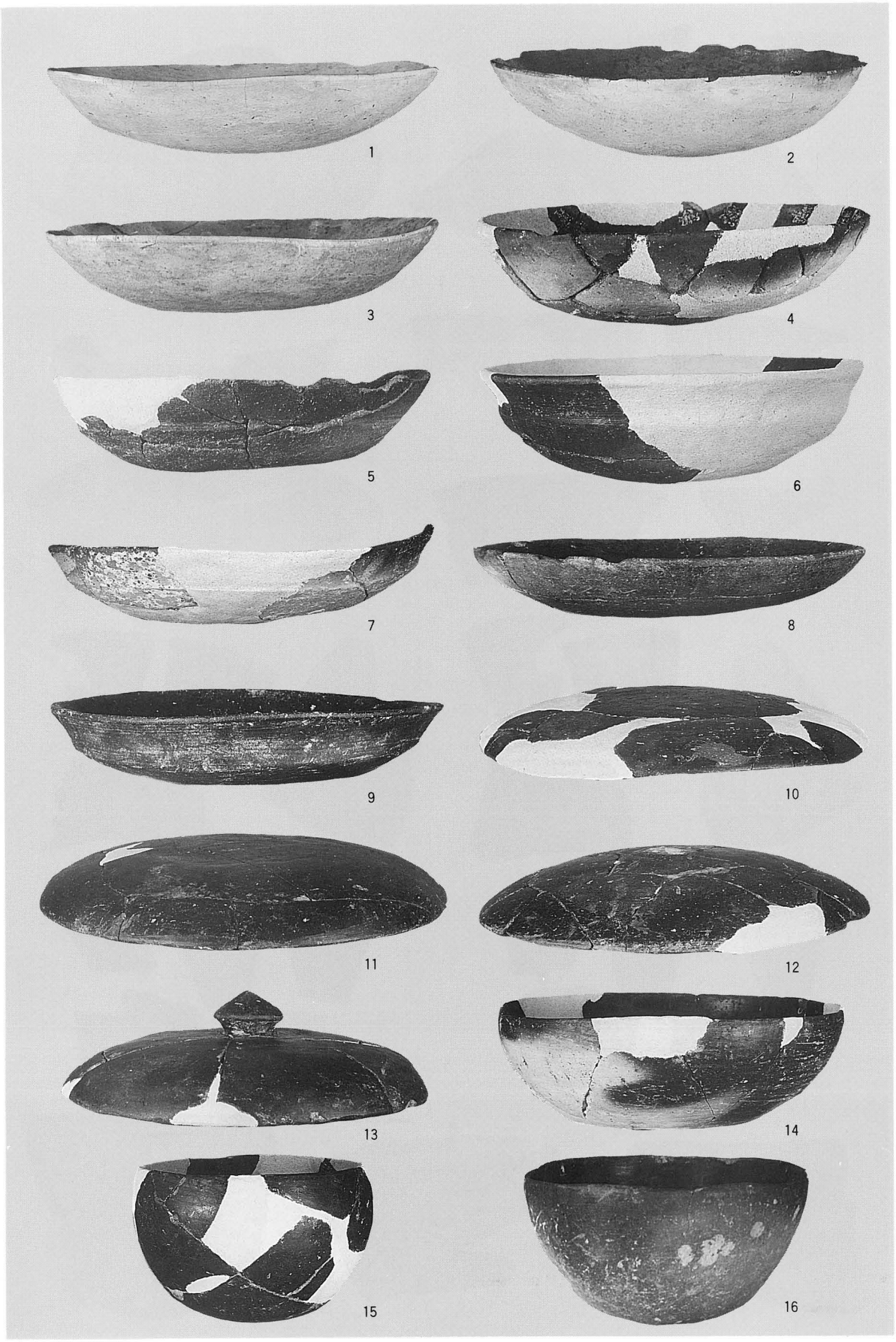


図版105　SK-10 土坑（南より）

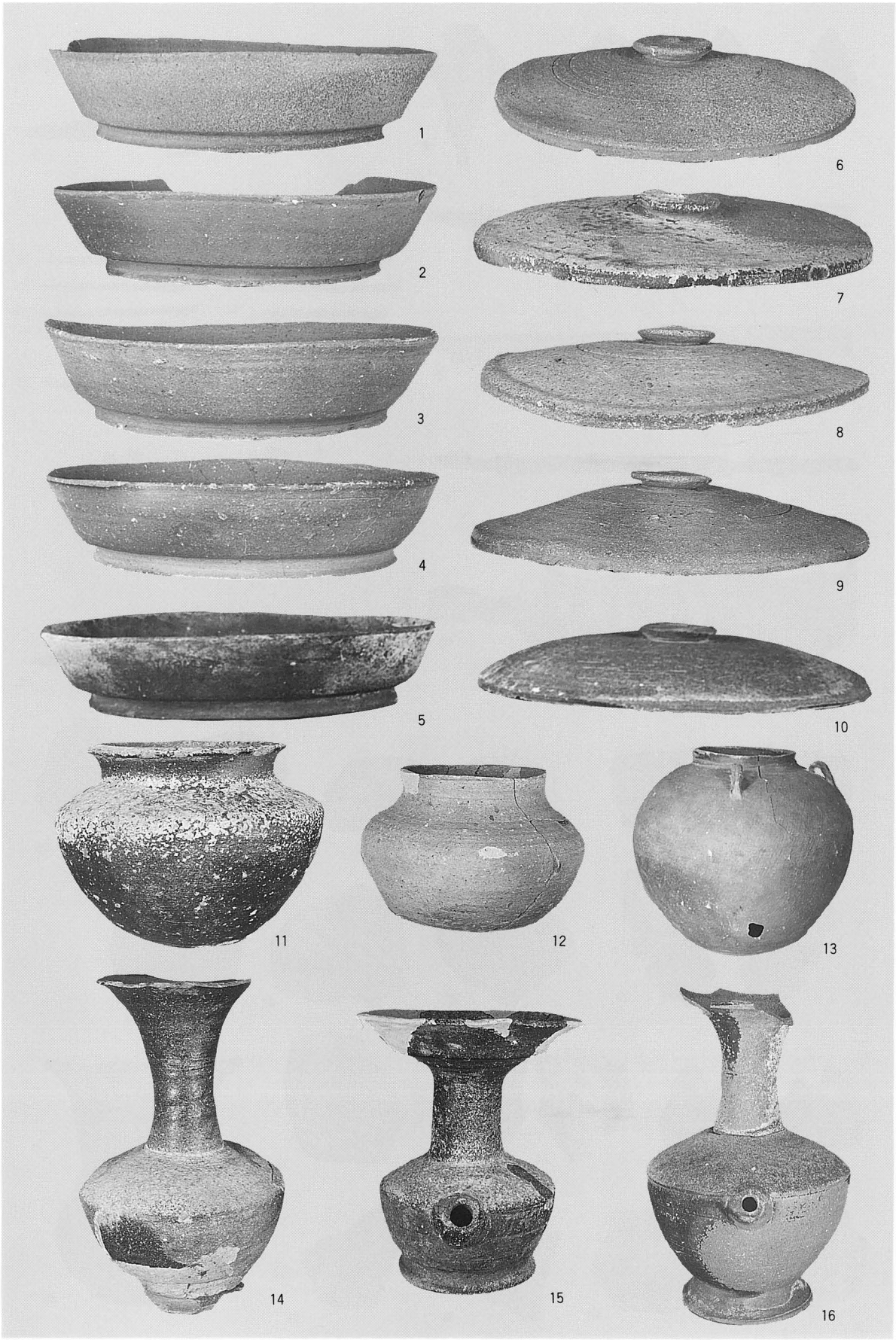
図版106　SD-1 西側（東より）



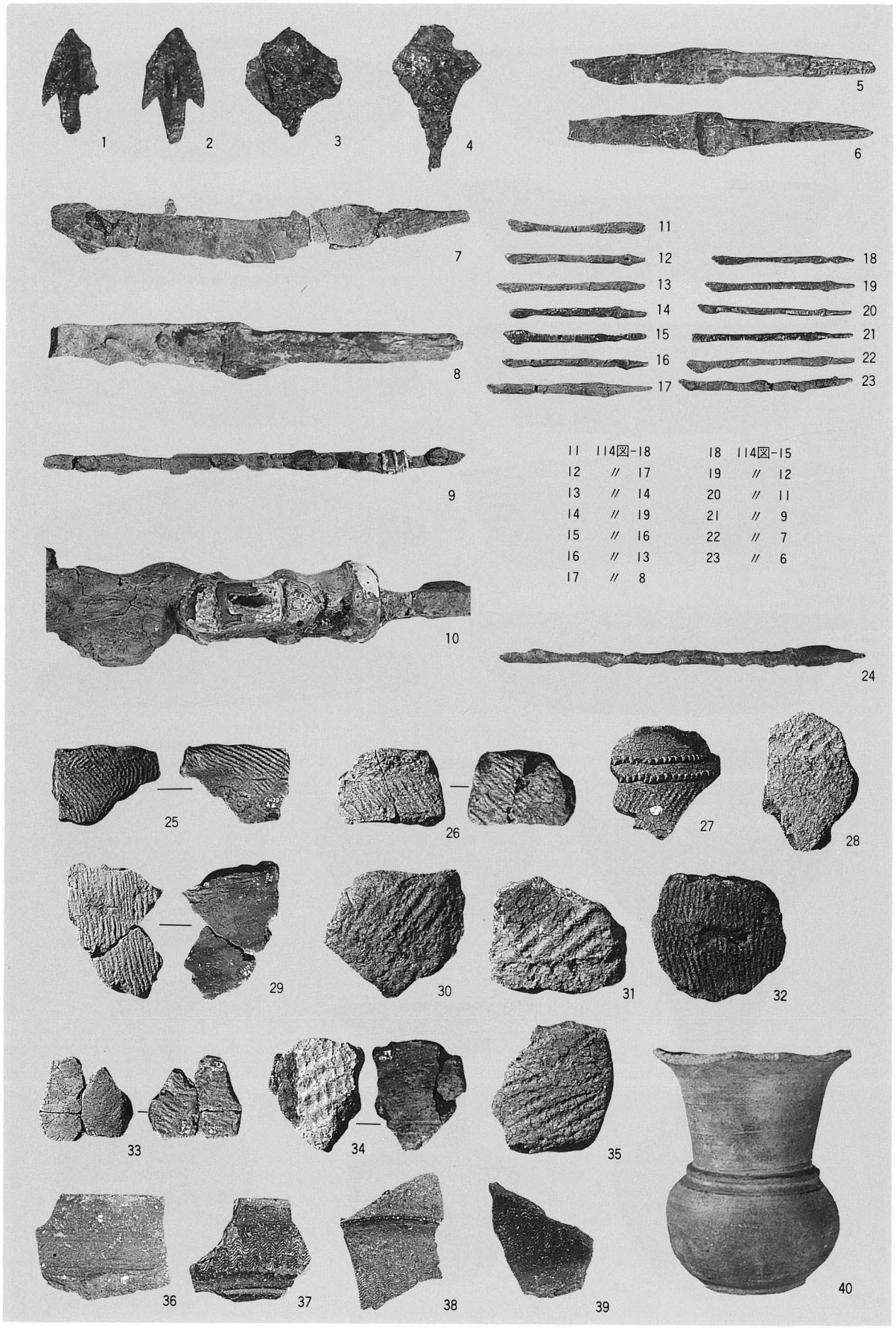
図版107　土手内窯跡出土遺物



図版108　土手内横穴 B 地点出土遺物(1)

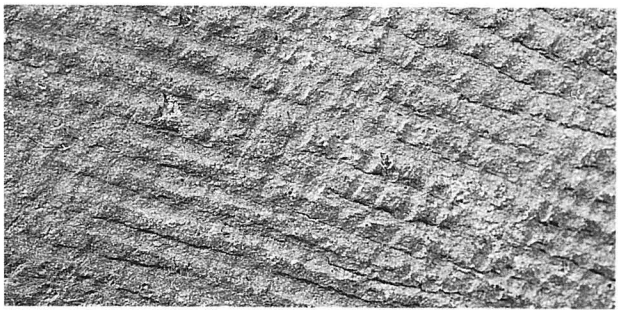


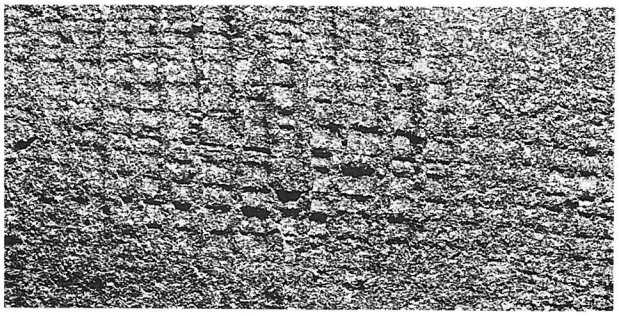
図版109　土手内横穴 B 地点出土遺物(2)



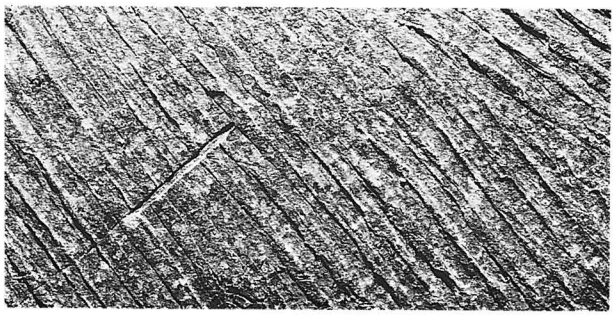
11	114図-18	18	114図-15
12	〃 17	19	〃 12
13	〃 14	20	〃 11
14	〃 19	21	〃 9
15	〃 16	22	〃 7
16	〃 13	23	〃 6
17	〃 8		

図版110　土手内横穴 B 地点出土遺物 (3)

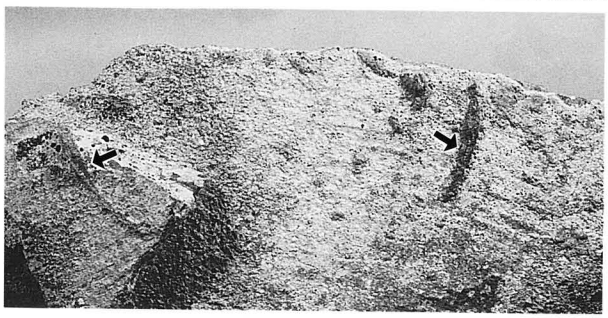

1


2

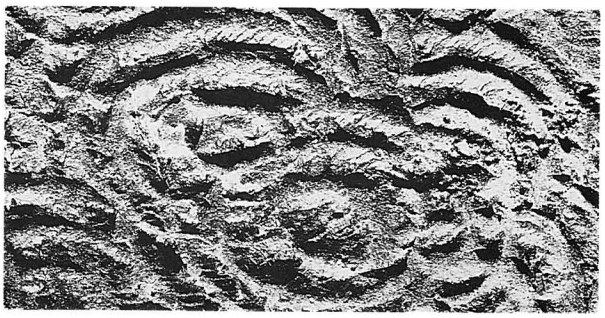
3

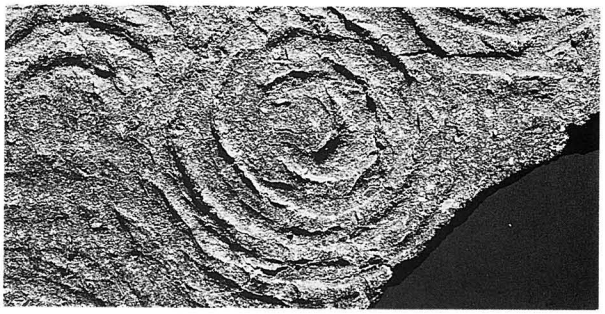

4

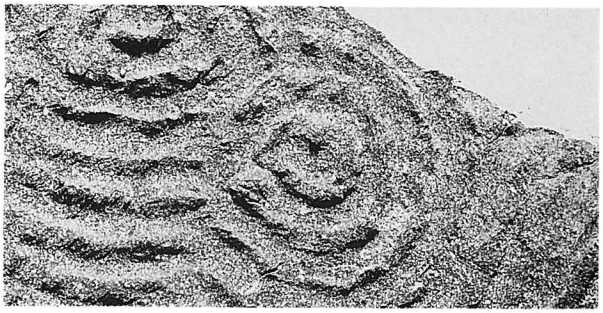
5


11

6


7


8


9

10

1　叩き目Ⅰ
2　叩き目Ⅱ
3　叩き目Ⅲ
4　叩き目Ⅳ
5　叩き目Ⅴ
6　当て具痕1
7　当て具痕3
8　当て具痕4
9　当て具痕5
10　当て具痕6
11　製品の痕跡
　　矢印の部分

図版111　土手内窯跡出土須恵器叩き痕跡

文化財課職員録

課長　早坂春一

管理係

係長	鴇田義幸
主事	白幡靖子
〃	佐藤正幸
〃	高橋三也
〃	庄司厚

調査第一係

係長	加藤正範
主任	熊谷幹男
教諭	佐藤好一
主任	篠原信彦
〃	木村浩二
主事	佐藤洋
〃	吉岡恭平
教諭	小川淳一
主事	主浜光朗
〃	長島榮一
教諭	神成浩志
〃	高倉祐一
〃	稲葉俊一
〃	菅原裕樹
主事	佐藤淳
〃	渡部紀
〃	大江美智代
教諭	熊谷裕行

調査第二係

係長	田中則和
教諭	太田昭夫
主事	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	渡部弘美
〃	工藤哲司
〃	斎野裕彦
〃	工藤信一郎
〃	荒井格
〃	中富洋
〃	平間亮輔
教諭	五十嵐康洋
〃	川名秀一

仙台市文化財調査報告書第165集

土　手　内

── 土手内遺跡・土手内窯跡・

土手内横穴Ｂ地点発掘調査報告書 ──

平成４年３月

発行　**仙台市教育委員会**

仙台市青葉区国分町３－７－１

仙台市教育委員会文化財課

印刷　**㈱東北プリント**

仙台市青葉区立町24－24　TEL263-1166